明治四十三年五月廿五日印刷納本
（毎月一回廿五日印刷納本）

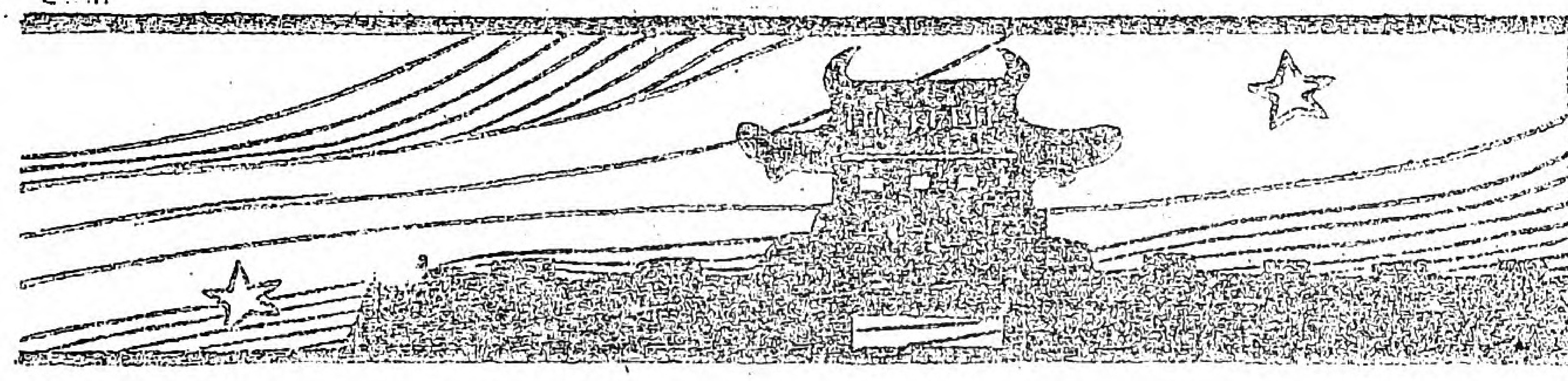
女子文壇

明治三十七年十二月十九日
第三種郵便物認可



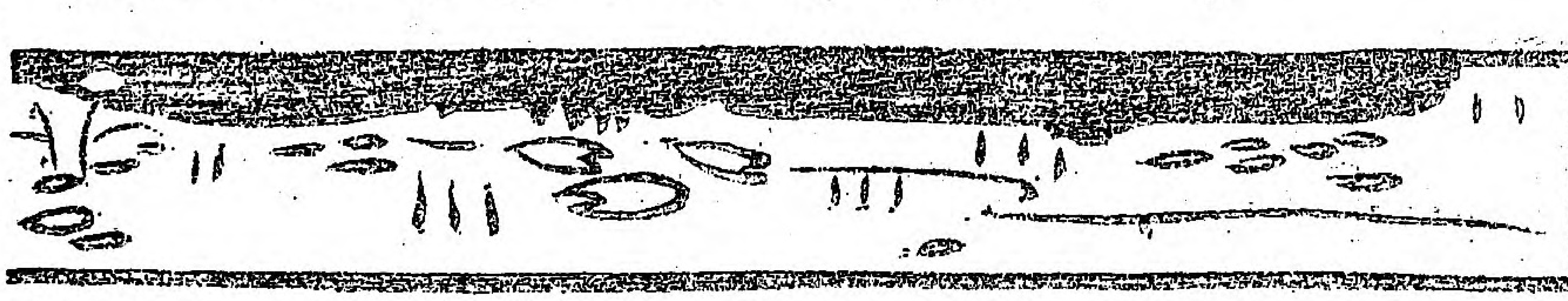
六月號

第六年
第八號



女子文壇六月號（六年八號）目次

【本欄】（一－四）



第五回内國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

壽美禮おしろい

五二會品評
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴアイオレツトパウダ（ヴワイオレツト煉製）

錫蓋附乳白硝子器入



ヴワイオレツト水製

ねり製　大壜二十錢　小壜十二錢

水製　大壜二十五錢　中壜十錢　小壜十錢

玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉

は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は溫湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

錄、藍、紅彩蝶番ひ鑵詰入　別製鑵詰五拾錢　大袋二錢　小袋一錢

登錄商標
西洋白色くなるあらひ劑
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらひ粉



製造本舖

東京東兩國元町（兩國橋際）

壽美禮堂謹製

（電話浪花二七六五番）

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ



武藏荒川の初夏　大下藤次郎筆

此社告を見落す勿れ

女子文壇 八月十日 第三増刊

地方の婦人

原稿募集の主意

既に『都會の婦人』ある以上は『地方の婦人』なかるべからず、『地方の婦人』編輯の要旨は、我が全國各地方に於ける婦人の生活狀態より、時代の變遷に伴うて起れる思想の變遷を審にせんと欲するものにて、此れが材料も亦全國各地の若き婦人に需めんとす、諸孃は此主意に基き、全國何れの地方にても宜しき故、現今の婦人の思想の方面と實際の方面とを記述して寄送されたし、思想の方面は諸孃自らの思想、感情の告白を有りの儘に書けば充分なり、實際の方面とは婦人の風俗、女學生の狀態、處女の日々の生活等を記するに在り。猶又併せて諸孃の見たる山の美、水の美など天然の印象記も大いに歡迎すべし、此の雜誌發行の當時は盛夏旅行の期節なれば、諸孃は其知れる處の山水美を描寫して、地方の婦人の手に成れる天然の印象記を天下に發表するも亦好個の興味なることを信ず。要するに山蒼く雲白き天然を背景とし、純潔無垢の地方の女子を中心として、一部『地方の婦人』を編輯せんとするものなれば、奮つて原稿を投寄あるべし。

▲原稿は一行二十四字詰、百行以上二百行以内とす、總振假名をつけ「地方の婦人」原稿と書添えること

▲**創作** 小品文と和歌に限り募集す、小品文は一行二十四字詰、二十行以內、天然を題材とすべし、和歌は題隨意、一人十首以內に限る、

▲**寫眞** 餘り世に發表されざる各地の好風景、及び各地方婦人の風俗、素封家の令孃、各地女學校の餘興等の寫眞を乞ふ(用濟次第返送す)

報酬

創作を除いて採用したる原稿には**全部報酬を呈す** 一等金十五圓、以下原稿の等級に應じ正金又は物品を以て贈與するものとす、創作は何れも一等金五圓二等以下數人に贈賞す、寫眞は掲載したるものには各一部宛「地方の婦人」を呈す、特に優勝のものあれば報酬す

▲**原稿締切** 六月廿五日

募集發行所 東京市京橋區大鋸町 **女子文壇社**


造花材料
もてば芍薬
すわれば牡丹
東京日本橋區横山町二丁目 天野卯兵衛商店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新輸入 美容肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體**純白色**に**變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき效果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏效なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を發ゆ眞に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服藥 サーサパリラ

價壹劑貳圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「パーゴイン」製**清血劑**にして頑强なる皮膚病、猛惡の「サーサパリラ」は峻烈なる慢性梅毒瘡毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり（注意）從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり（今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候）色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王なることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん**皮膚**を**潤澤軟密**にし**色**を**白**くし、**粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薰るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む）

以上三種**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

有效保險 前代未發 秘傳奇術

全壹冊正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

（目錄大要）神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰○の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治法●製法●髪の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髪必生法●臭汗治法●白髪を染る法●髪毛の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の皺婆を二八の娘に變ずる法●御氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に○れらるゝ藥法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女と○○す藥法●堅き女の氣を○○す藥法●陰○を長大にする藥法●そゝかす必治法●女を○○にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する法●閨中の秘藥●即座に男精を增す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を○せしむる法●記臆力を增進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黑字夜光の奇術●老人終身錢取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服劑新法●寶丹の藥法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●服膳を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを治する法●痳病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る最新法●頭髪を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髪豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡を治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齢により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●苺酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏明子洗濯新法●疊の汚染を落す新法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す合計壹百四十法あり着金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**



夏季を彩れる流行中形

氣が利いて振ひつき相な最新柄の陳列

弊店儀、例により

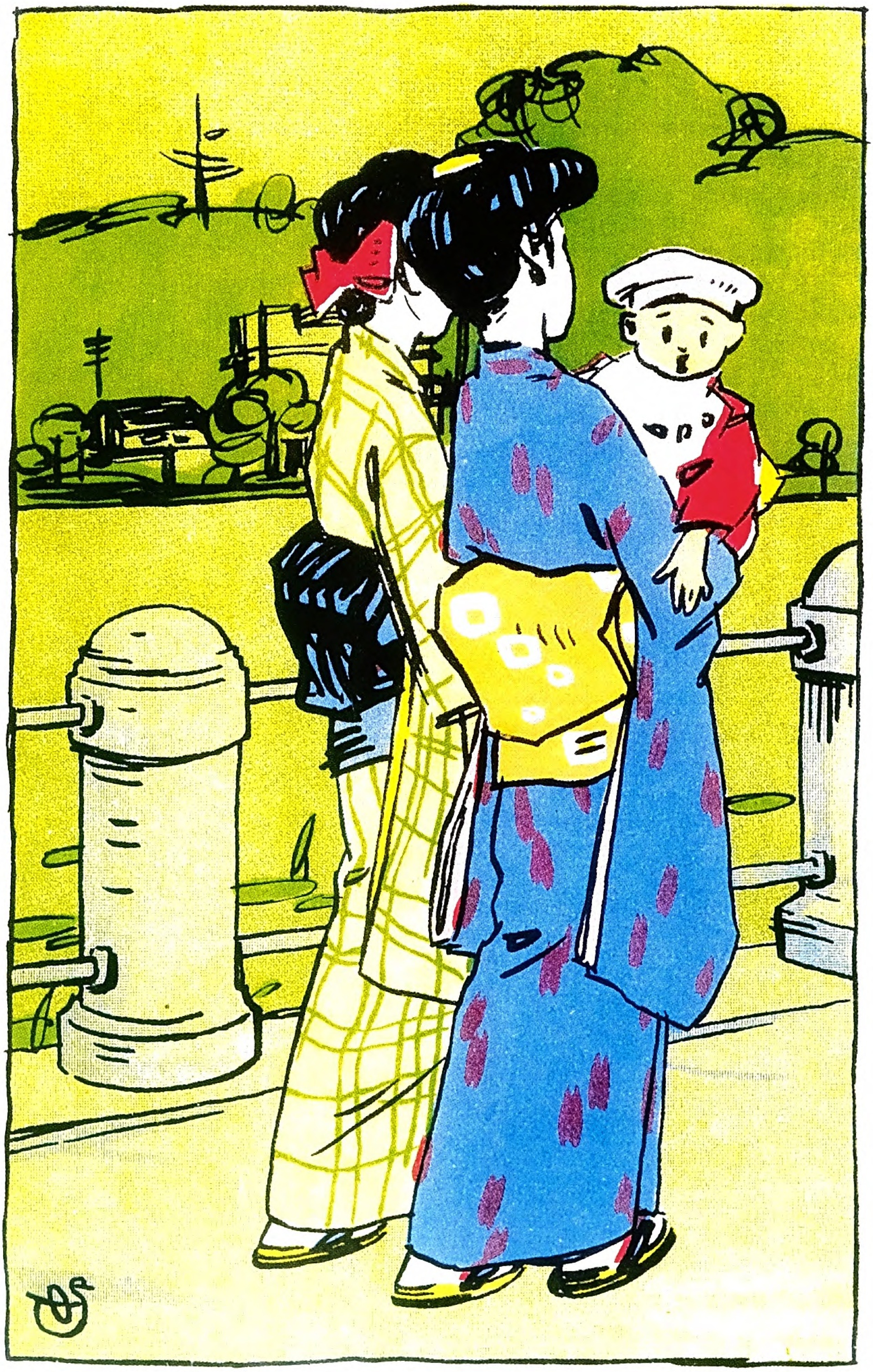
來る六月一日より中形浴衣地新柄陳列會
を相開き本年流行の中形を始め夏物一切を陳列致し候。尚ほ
懸賞募集により染上げたる浴衣地の陳列販賣
をも致し候間、御來觀被下度奉願上候。

地方より御注文の便法有之候御一報次第『注文の栞』進呈仕候

東京駿河町

三越呉服店

観月橋（上野不忍）



好機逸す可らず……特賣提供

大好評　紀念保存の價値あり　殘本僅少

女子文壇　紀念號　滿五週年

一月一日發行 ● 例號二倍三百廿頁 ● 定價金三拾錢 特賣提供 金 拾五錢 外に郵税二錢五厘

▲松葉の地……泉鏡花
▲敵……中村星湖
▲市街を散歩する人の心持……木下杢太郎
▲脚本 落潮……河井醉茗

◎額繪附録 溫室（石川寅治筆 石版極彩色）妙齡の一美人、溫室の戸を開いて草花を剪る所、其表情の嬌艶と色彩の鮮美とは一見して恍惚たらしむ、新春無類の粧飾。

◎光澤紙刷口繪 ◎名畫雪みち（原色版）外◎山階宮、東伏見宮兩妃殿下◎鷹司公爵松平伯爵兩夫人◎德川家達公三令孃◎一條實孝公夫人◎加藤弘之男家庭◎金子子爵令孃◎跡見玉枝女史と其門下◎仲小路遞信次官の室外和樂◎盛裝の六孃◎誌友面影◎鳥海山外二景の十四頁（寫眞）

● 釣……森鷗外
● 演劇の種類……坪内逍遙
● 女性の文藝……片上天弦
● T氏とK氏……眞山青果
● 月のたまもの……蒲原有明
● 響動……吉江孤鴈
● 三味線林……小島鳥水
● 赤色……兒玉花外
● 金ほうけ……與謝野晶子
● 落葉林……若山牧水
● 憂愁の庭……三木露風
● 薄暮の瞳……川路柳虹
● 黄落葉……前田夕暮
● 女學生と小説……柳川春葉
● 御題と御歌所……松原至文
● 弱者……溝口白羊
● 歐米の若き婦人……寺木定芳
● 婦人の寂淸生活……木下尙江

● 文士と家庭……佐野天聲
● 花束の用ゐ方……國木田治子
● 男性の爲に與へられたる刺戟……水野葉舟　五人女
● 露西亞婦人の過激なる活動……エリミヤ、バルト、バザン

● 名流婦人の日記 ○跡見花蹊○山脇房子○加藤照麿夫人○石川博士夫人○嘉悅孝子○羽仁もと子○佐々木雪子○長谷川千代子○北川美那子○加納園子○谷内せい子○木下艮子○吉田賢子○たけ子○千鳥○棚橋絢子

● 形式的の艶書……マックスオレール
● 表情體操……白井規矩郎
● 女性と色彩の觀念……澤村胡夷
● お琴の先生と其流派……き く
● 英文……星野久成

投稿傑作 百四十頁 滿載

東京京橋大鋸町　女子文壇社發行（振替口座東京壹七貳九）　賣捌 全國雜誌書店　若し品切の時は發行元へ速に御注文あれ

ケーバー石鹸

舶來石鹸界の覇王にして亦本邦製品の企て及ぶ能はざる特色を有する本品は江湖の高評に酬ふる爲め原料を精選し品質に一大改良を施したり

レツクス



實用浮石鹸

英國ホツソンエンドシンプソン會社特製品

會社の自慢本品特點

香氣の高きは本品の特點なり

價格の低きは本品の特點なり

實用に適するは本品の特點なり

上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也

論より證據實地御使用を乞ふ

ケーバー香水

◎全世界を通じて流行品

最も紳士貴婦人間に愛用せらるゝはケーバ香水



定價
- 小瓶 金廿五錢
- 中瓶 金一圓
- 大瓶 金二圓
- 特瓶 金五圓

東洋一手代理店

竹間商店

◎賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物店及び化粧品店に有り升

竹田宮恒久王妃昌子内親王殿下



梨本宮守正王妃伊都子殿下



名門の夫人



伯爵奥平昌恭氏夫人



男爵高橋是清氏令嗣夫人

姉　　妹



三井鑛山理事團琢磨氏令嬢喜美子（學習院在學）



三井鑛山理事團琢磨氏令嬢壽枝子（お茶水高女在學）



法學士高橋文五郎氏令妹ふみ子（[illegible]館高女在學）



法學士高橋文五郎氏令妹かつ子（仝　前）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

婦人界唯一の理想的講義　第三回新學期開始

女子大學講義

▲講義は最も平易に挿畫多く全部假名つき子女も難解の憂なきを確信す

▲講師は日本女子大學校教授にて親しく講話するが如く叮嚀に說き及ぼせり

▲會員には月刊婦人雜誌『家庭』を無代にて毎月進呈す

講義科目

實踐倫理	成瀨仁藏
教育學	石田新太郎
心理學	福來友吉
應用兒童研究	高島平三郎
家庭物理	後藤牧太
生物學	渡瀨庄三郎
生理學	大澤謙二
衛生學	三宅秀
經濟學	中隈敬藏
法制大要	奥田義人
應用社會學	浮田和民
文學研究	鹽井正男
農藝	佐々木祐太郎
和歌作法	三宅龍子
家事	櫻楓會家事研究部
料理	櫻楓會料理研究部
裁縫	櫻楓會裁縫研究部
日本童話傳說	芳賀矢一
社會意志	松本亦太郎
英文學の面影	松浦政泰

會員募集

見本進呈

編輯所　東京目白臺　日本女子大學校櫻楓會

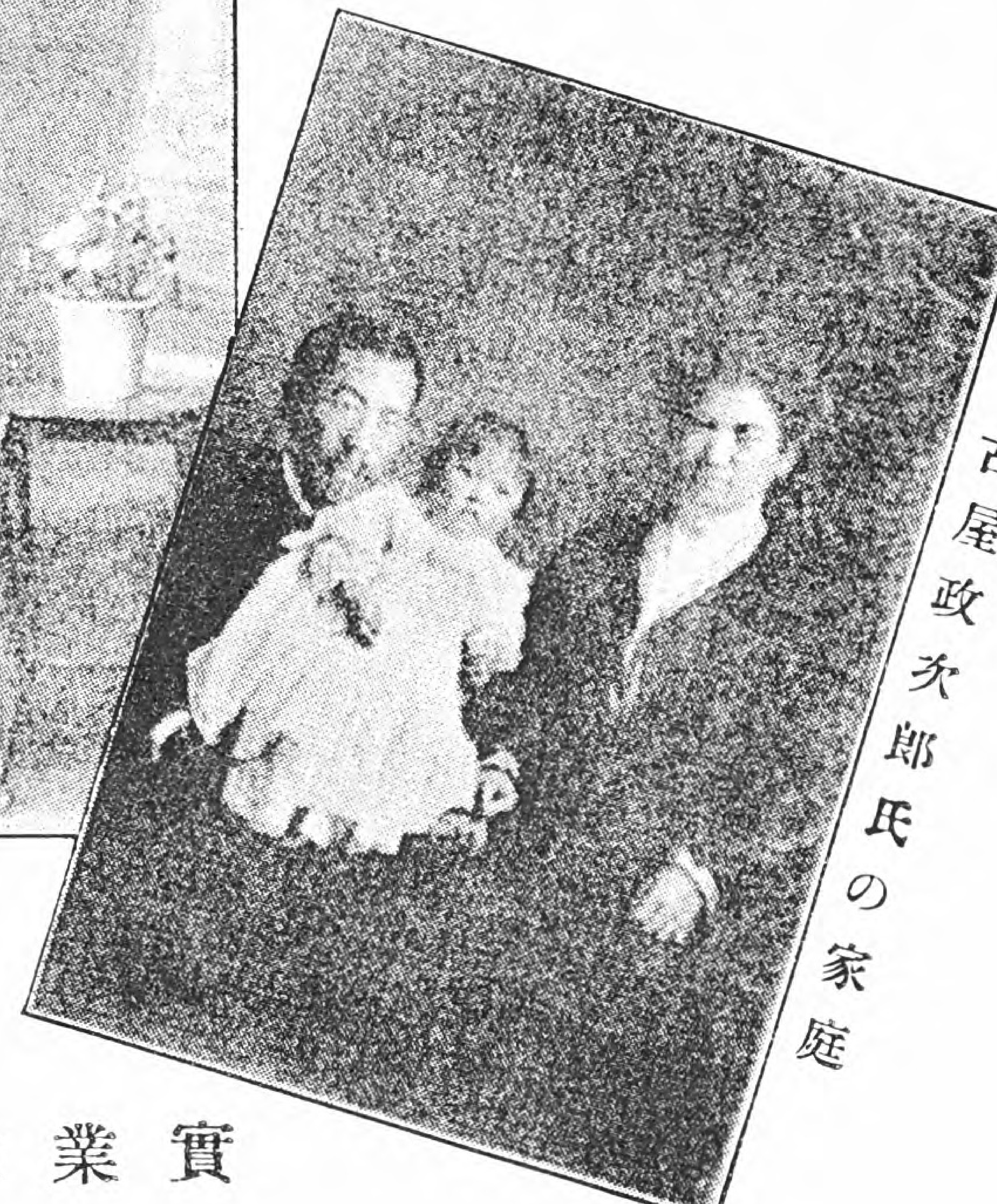
發行所　東京小石川　精美堂

(にノ三)

倉田繁太郎氏令息夫人



古屋政次郎氏の家庭





藤原俊雄氏夫人

實業家の夫人

女子の技藝



（和歌山縣有田郡藤並村堀裁縫所生徒）



（東京四谷愛住女學校茶の湯講習）

●るいれき患者に注意す

▲瘰癧は古來難症中の難症で本病の治術としては先づ局所切開するのが通例です併し根治の療法とはいへない假令一時は治しても十中の八九は必らず再發します加之頸部には最も醜態なる瘢痕を殘し之が爲め往々婦女子の婚嫁を妨ぐることあるは實に氣の毒千萬の次第であります此病毒は單に容貌を損ずるばかりでなく漸次進んで體内樞要の臟器を侵し終に生命まで奪はるるに至ることも亦往々見聞す事實で此病の恐るべきは申迄もないが今日迄確に治す藥がなかつたのであり升

▲發見の新藥　金線草丁幾は此病に對し不思議の効能あり即ち小なるグリ〳〵は内部より消散し大なるものは自開排膿して根切全治せしむるのみならず連續服用中全然體質改良健全ならしむる獨得の効力あり

▲本藥は石津藥學博士及内務省衞生試驗所の試驗を經たるものにして其効能の確實なるは實驗せる醫師竝に服用患者の證明に依り明かなる次第であります此實驗を掲げたる八十頁の説明書「金線草私言」は無代にて送呈す　東京日本橋本銀町四丁目東光堂　三田幸藏

▲本藥の價は四百五十瓦入參圓、二百廿五瓦入壹圓五十錢(送費拾貳錢)

毛ぬき液

本劑は極て有効なる脱毛成分を集成せるものにして主成分の化學的作用により皮膚に害なく根本より脱毛す毛深き人毛多くて困る人は速に本劑を用ひて其苦を忘れられよ着金即刻密封郵送す。代金引替送りは謝絶す

●●●●●●ヘールビン
一瓶　壹圓
特製　參圓
送費　拾五錢
清韓臺　卅五錢

東京市牛込區北山伏町一番地　百合園製藥所

美文作法

東宮侍講本居豐頴先生題詠　下田歌子先生題歌
文學博士小杉榲邨先生序文　國學院學士小森松風君編

美文の作り方最も明瞭に解説し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば、文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

全一冊大判　二百三十頁　特價貳拾錢　郵税四錢

實地精査 女子遊學便覽

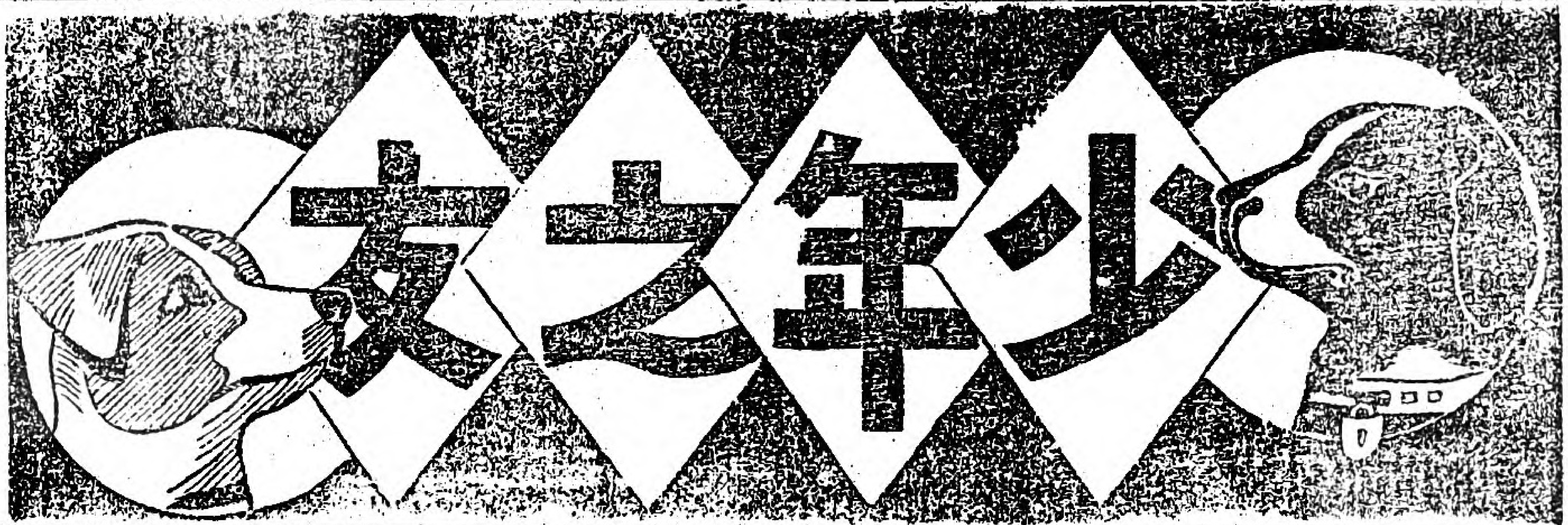
報知新聞記者中村木公君編著

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め、自ら學校の選擇に迷ふ諸嬢も之を讀め、一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

全一冊中形　校長寫眞入　特價拾五錢　郵税四錢

東京京橋區鎗町　女子文壇社出版　振替東京一七二九
▶賣捌全國書店◀

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



五巻六號 ▶六月號要目◀ 一日發行

◉病床の父を助けて一家五人を救ねし孝行少年……萬年小學校六年生 野口勘次郎

◉初夏の水族館便り……淺草水族館事 永井弘

◉少年小説 難破船……木村思水

◎おとぎばなし 木兎物語……雨の華

◉冒險實話 猛獸狩(三)……擲芳散史

◎お伽小説 寶物(下)……植松春樹

◉私が米國に滯在中感心した少年の話……早稻田大學講師 安部磯雄

◉冒險小説 怪蛇窟(一)(雨?風?妖雲益々深からんとす)……小林春湖

◉身を捨てて我國の爲に盡せし韓國少年……韓國平壤領事館にて 林崎國太郎

◎少年史談 宮さん宮さん……村田犀川

◉繪ばなし 日本男子 竹久夢二

◎剛勇少年 暗中の格鬪……太田秀峰

◉お伽噺 一羽の小鳥……萬代恒志

◉米國に設立された少年空中倶樂部 在米 秋元晃南

◉豐太閤を夢見て橋上に眠る乞食少年 少年之友記者

◀定價 一冊郵税共 拾壹錢 半年分郵税共 六拾參錢▶

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂 (振替口座九一五五五)

賣捌 東京堂○東海堂○北隆館○良明堂○上田屋○至誠堂

(ほノ五)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

婦人畫報

六月一日發行 六月の卷 一冊 廿五錢 郵税二錢 六冊税共一圓五十錢 十二冊税共二圓八十八錢

綠蔭 岡田三郎助筆▼幼稚園の踊り花と少女……

鳩山秀夫氏の結婚式▼藤と牡丹

朝香宮 富美宮 兩殿下御婚儀

三輪田高女鎌倉行▼母親と子供 跡見女校江島行▼荒川堤の一日

三女王殿下江島遠足

山脇高女稻毛行▼麹町高女遠足

老人祝賀會▼愛國婦人會總會……

畫報

諸名家の令孃鑑

尾崎氏結婚式▼紡績の女工

目出度三夫婦▼工夫寄宿舍

讀物

婦人と謬見……木場博士

美き目と言葉づかひ 藤岡學士

軍人と婦人 比志島中將◎苦學生悼しき三人 岸邊◎貴婦人と應接

婦人が自ら求むる不幸……吉田學士

女學生の小遺帖◎金子子爵臺所 いろ〳〵な癖のある召し使ひ……

大昔の精神を發揮せよ……下田歌子

紡績會社の女工◎食べ物色々… 和歌入門◎百姓の家◎眼の衛生…

男子に對する婦人の好み 三宅博士

皇族畫報

五月二十五日發行 定價三十八錢郵税二錢

皇室を始め奉り各皇族未曾有の御盛事を永遠に紀念せんとの微衷より曩に皇族畫報を發刊するや幸に國民諸士の歡迎する所となりて**七版**忽ち**盡**き原版亦消磨したれば或は尊嚴を汚すを懼れ暫し頒布を中止する已むなきに至りしも爾來茲に三年各皇族家に御移動ありたると且は切なる江湖の要求とに促され今回更に**最近御肖像**御貸下を奉願ると共に**御家庭**に於ける御有樣等をも親しく參候拜聽する光榮を得たるを以て全然**改版訂正**の上發行するもの也。敢て茲に我忠勇義烈なる國民諸君に對して此一書を捧ぐるを得るを喜ぶ

東京飯田町四の四 **東京社** 電話番町二三三九 振替口座一一八一八

夢二画集



花の巻 出づ

定價四拾錢 送料四錢

現實の醜惡と壓迫よりのがれて新しきローマンチシズムに入りたる青年が人知れず記したるスケッチ帖なり三五版の大きさにて、木版畫の外に彩畫數葉を挿入し、卷頭著者の肖像を添へ、ポケットに入るるにも、紅絹裏の袂に忍ばすにも、美しく可愛ゆき集なり。

春の巻 五版
夏の巻 四版

定價各五拾錢 送料各八錢

旅の巻 近刊
秋の巻 近刊
冬の巻 近刊

發行所 東京麹町二丁目二番地 振替口座東京二〇九一番 洛陽堂

効用

●月經時に使用すれば如何程強い月經も漏出する事なく又各種の生殖器病を豫防し往來、運動起居等婦人の動作を快活ならしむるを以て貴婦人令孃教員事務員女學生看護婦女藝人等には缺く可らざる品也

●赤白帶下の強き人、子宮病を惱める人等には最も妙也

●初めて月經になりし令孃に頗る適當す俗に冷え性と唱へる婦人常に用ゐて腰を温め子宮病を豫防するの効があります

●殊に月の帶は其製造の親切なるを以て極めて堅牢なれば長く使用し得らるべし

改正定價 特製品金一圓五拾錢、甲種金一圓（附屬品添）乙種金七十五錢送料各八錢

●一ダース以上は特に勉強すべし

▲送金は郵便爲替郵券代用は必ず一割增

發賣 醫療藥品器械勉強店 **資生堂藥房** 東京市神田猿樂町二丁目

最新式月經帶 月の帶

村井弦齋先生曰く有名の山田逸子が歐羅巴に行き幾多月經帶を調査し日本婦人に適する樣改良を施し新に製造したる『月の帶』は私共の家族が用て居ますが至極輕く腰の工合も自由で大層都合が良さうで云々

元大阪府立病院産科婦人科醫長**伊庭醫學士**は、本品の婦人衛生に適し且必要なることを婦人世界に汎く紹介され

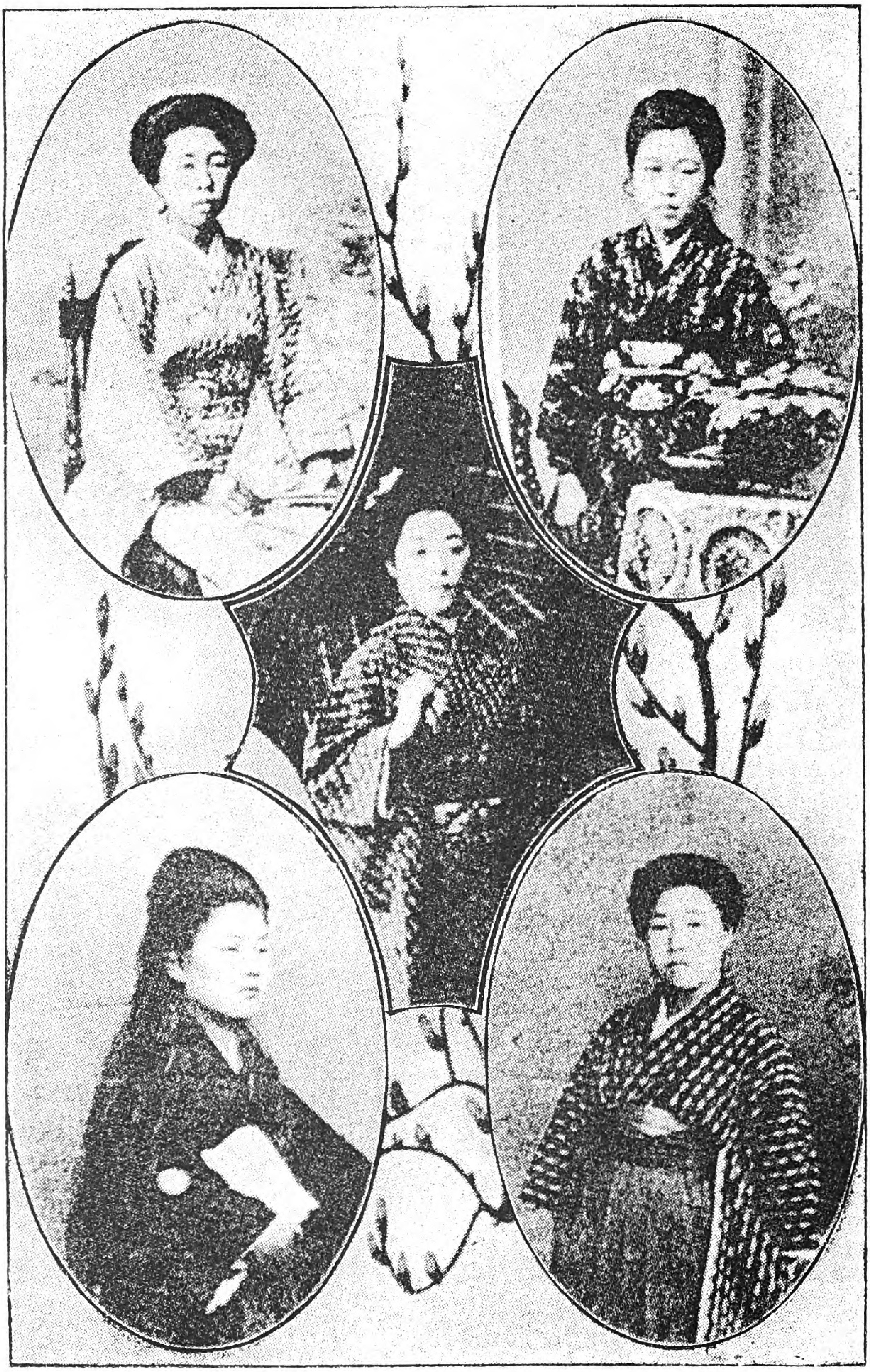
報知新聞曰く『月の帶』は産婆山田逸子が西洋婦人の用ゆる月經帶を我邦婦人に適する樣改良を施したる者にて日常之を用れば各種の生殖器病を豫防する故月經時の活動に最適當也

婦人世界雜報は殆んど毎號其記事欄婦人衛生問答欄及各通信欄内に於て本品の衛生經濟に大稗益あることを賞賛し汎く紹介せられたり

其他明治の家庭、女子文壇等に於て頗る好評を博し殊に近頃**宮中、御殿**各貴顯紳士の家庭は勿論**各女學校**に採用され多くの**御用命**を蒙るの**名譽**を得たり

誌友

記者申す續々お寫眞を送て下さい揭出後返却致します



（新潟）上原操子

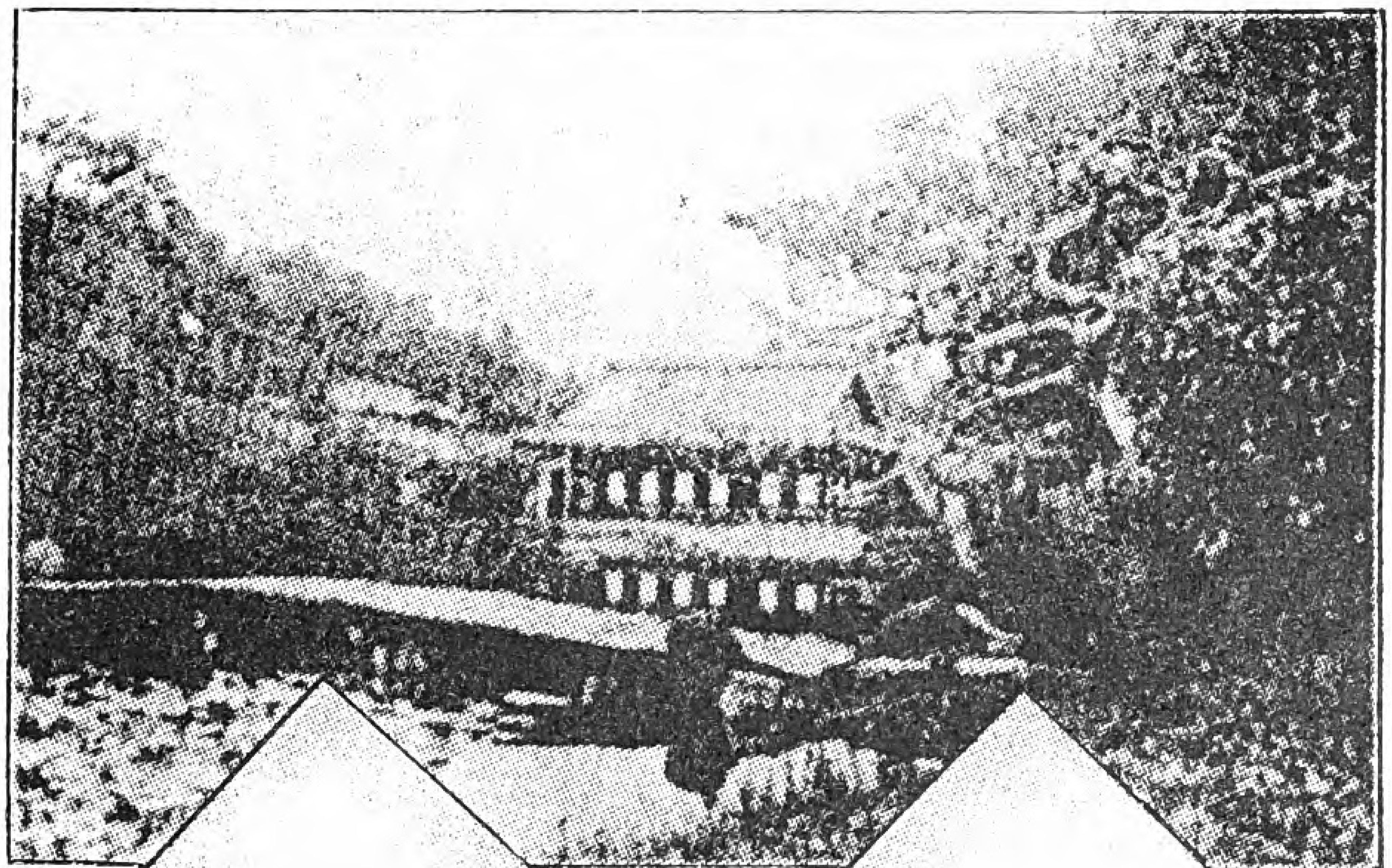
（長野）村木勝枝子

（熊本）西原こめ子

（廣島縣）磯部澄子

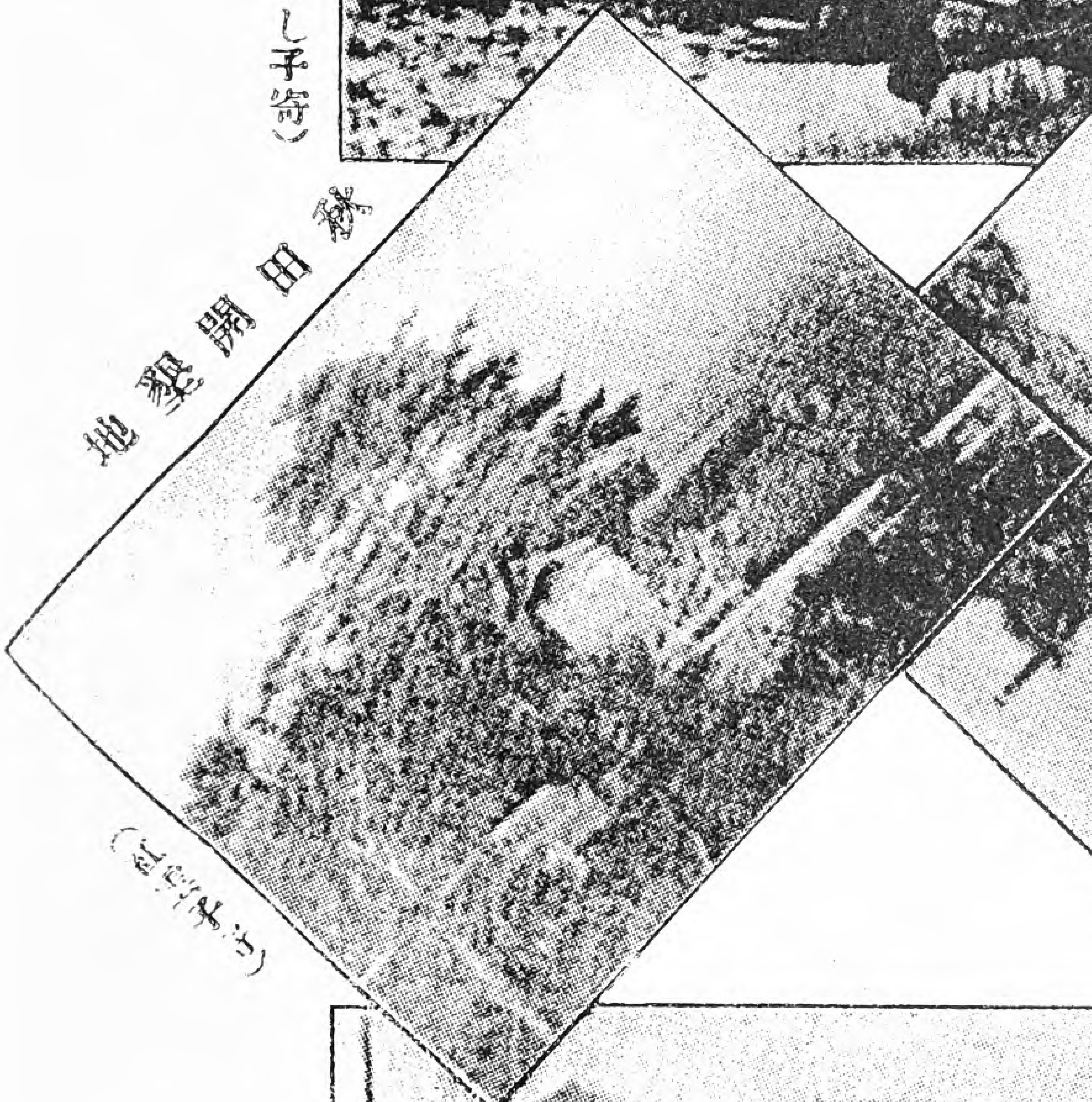
（名古屋）宮田和子

近江彥根城內樂々園



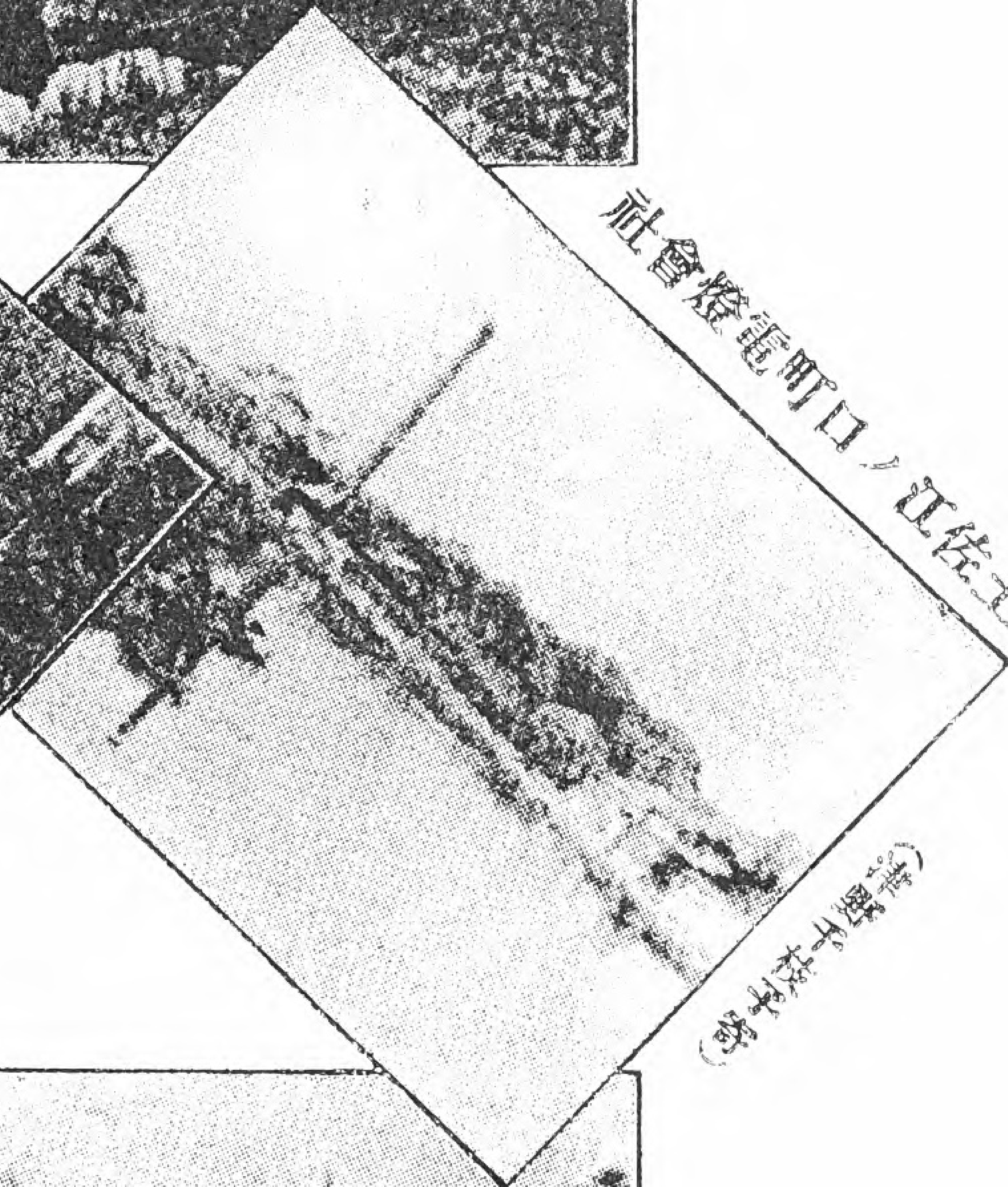
（佐和田よし子寄）

秋田開墾地

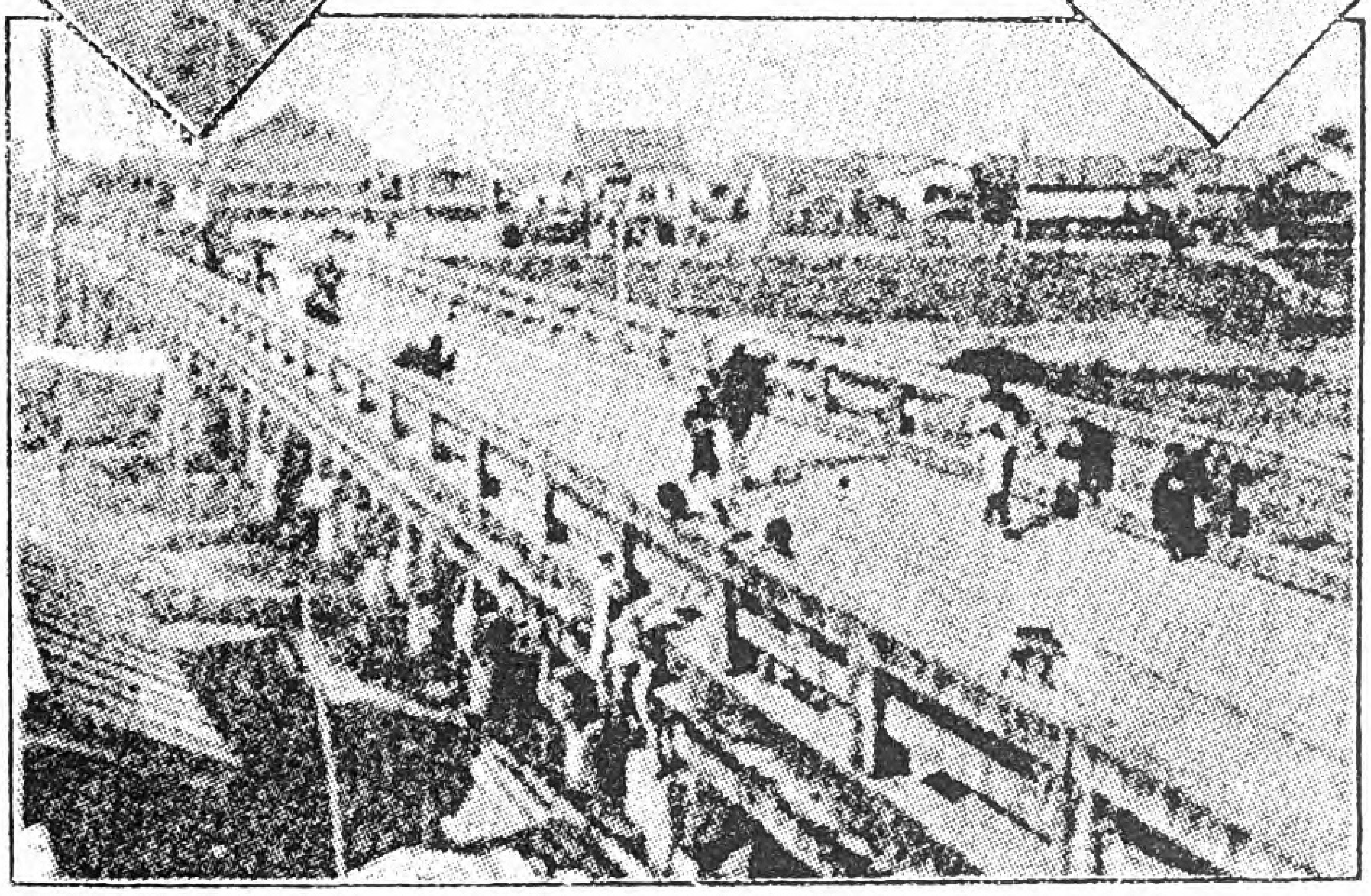


（紅[illegible]子寄）

土佐江ノ口町電燈會社



（平林千惠子寄）



（田村さよ子寄）

福井市九十九橋

新美文

全一冊二百三十頁 口繪數葉入美裝
定價貳拾錢
郵税壹錢五厘

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百樣の觀察は讀者をして送迎に遑なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學ばんとする者には無双の寳典たるべし

附錄

◎小寒日記……薄田泣菫
◎褻の家……吉江孤雁
◎憧懮……小川未明
◎一轉機……高須梅溪
◎女床屋……兒玉花外
◎拾て犬……岡田八千代
◎火藥……澤村胡夷

家庭日記

全一冊二百三十頁 口繪數葉入美裝
定價貳拾錢
郵税一錢五厘

本書內容

▲お七夜の赤飯と棟上の餅拾ひ
▲草生水日記
▲初めて丸髷に結ふ
▲大呉服店のバーゲンデー
▲憚る處なき女學生の境遇
▲開放したる心の扉
▲晴れの日が近くなる
▲同じ女と生れながら陰と日向
▲の違つた身上、
▲未來の博士達の爲に
▲舞臺に出づる迄と、出たる後
其他數項

——(附錄)——

最近の日記

三宅花圃
大塚楠緒子
與謝野晶子
岡田八千代子
長谷川時雨
國木田治子
尾島菊子
荒川澄子

短篇小說

全一冊二百三十頁 口繪數葉入美裝
定價貳拾錢
郵税一錢五厘

▲奉公人……島崎藤村作
▲水死……森田草平作

懸賞傑作

●破疊……秋葉清子
●女客……加藤貞子
●町の出水……赤崎愛子
●桃代……佐藤增子
●朝顏……吉田駒子

其他美文、書簡文、新體詩、日記文、和歌、俳句、論文、小說總評 豐富滿載



女子名文 新作家

全一冊二百卅頁 口繪數葉入美裝
定價貳拾錢
郵税壹錢五厘

若き女子が大懸賞に應募の美文、詩歌俳の文藝を與味ある新式編輯法にて統一せるもの別に日課表あり登載年齡家庭等作物と對照し人物を一目瞭然たらしむ

附錄

○闇の夜……服部貞子
○敗者……加藤菊子
○火事……永代美知代
○氣まぐれ者……太田樂子
○新粧……尾島菊子
○六月……山田くにえ
○姉……故田中久子

東京市京橋區銀町十二番地 女子文壇社出版 (振替口座東京第九貳七壹番) 賣捌全國書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大好評殘部僅少

女子文壇
二月十五日
第一增刊

若き婦人

紙數二百卅頁
美麗口繪數葉
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

東京京橋大鋸町
女子文壇社發行
（振替口座東京第壹七貳九六番）
賣捌 全國雜誌書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

發行部數激増賣切れざる内購入あれ

婦女界

一日發行 第一卷第四號 六月號 本日出來 定價 一冊十五錢 一ヶ年十二冊一圓七十五錢 郵稅共

▲春日局の傳

▲女子の爲に帝國大學の門戸を開放すべし……女子高等師範學校長 中川謙次郎

▼特志看護婦として働いたる實驗……日賀田夫人

▼渡清三年間の苦心と成功の實驗……鵜川光子

▼女子職業としての郵便局雇員……坂野局長

▼荷車の後押なして成業の經驗……吉田島子

●竹田宮妃昌子内親王殿下の御平生……

●佐久間海軍大尉の壯烈なる最後と我母の教訓 藤井中將

●至誠を欠ける日本婦人の交際 新渡戸博士

▲婦人は椽の下の力持でなければならぬ……高島平三郎

大附録 三代將軍家光公より春日局に贈られたる書狀

▲私が尼になりし動機と女子大學卒業までの經路……五十嵐敬山

●六人の子女を養育しながら事業を再興した寡婦

●中毒に對する手當は如何にすべきか

●入梅期に於ける衣服調度の手當法……

▲六月中に注意すべき婦人病 山本學士

▲お祭りと子供の受くる感化 姉崎博士

▼夏季の化粧は如何にすべきか……遠藤はつ子

▼夏季の衣服は如何にすべきか……久保田米齋

▼良人の病を慰めん爲め修養した……江木夫人

▼神棚や佛檀の無い家は駄目なり……下田次郎

▲女丈夫鶴女

東京神田表神保町 同文館 東京振替一三五番



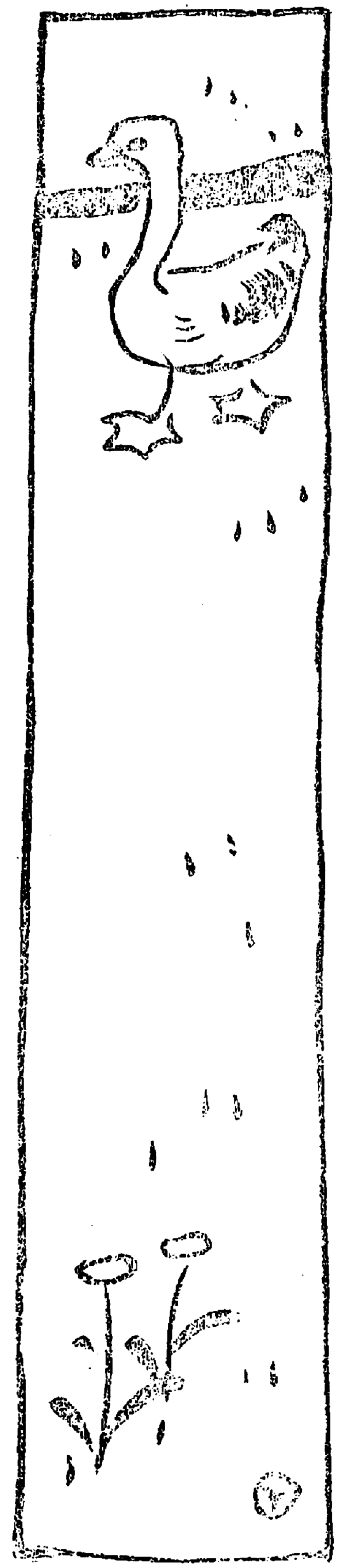
女子文壇

第六年第八號

明治四十三年六月一日發行

六月

夏が來た
水の上に花の咲く時
鬱金の花の咲く時
燃ゆる花の咲く時
眠る花の咲く時
醒むる花の咲く時
黴の花の咲く時
雨の多い時
夕の街に音樂の聞ゆる時
女の若くなる時
夕方に化粧する時
張板の忙しき時
小さな蟲の働く時
海の輝く時
多摩川の濁る時
富士山の青い時
大木の蘖が伸びる時



若き婦人と社交

山脇高等女學校長 山脇房子

日本の婦人の社交はまだ一向に進んで居りません、從つてそれに付ての特別なお話は致しかねます、私なども一度はどうかして若い男女の方々の交際を圓滿にする下心でためして見た事がありました、其時は西洋の婦人方が、日本の社交界の爲にいろ〳〵心配下さいましたが、やはりまだ〳〵日本はそこまで至つて居りませんので、その計畫をやめてしまひました。

今、若い婦人の方々の社交と云ふ樣なことをする機會は園遊會であるとか、結婚の披露であるとか云ふ外あまりない樣に思はれます。

婦人が社交に働くには、どうしても男子側の道德が進んでこなければなりません、只今の日本の樣に不道德な人が多い社會は誠に危險が多いのですから、特別に其態度を判然とさせて自分を守ることを嚴正に、少しも曖昧な態度をとらない樣に、意志を强固にしなくつてはいけません。

先日も朝日新聞か何かに載つて居つた惡書生の話に三度位は失敗しても、懲ずにやれば大抵の婦人は、動

ぐものだと言うてありました。之は誠になさけない事で、たとひ三度が十度でも、さう言ふ事には動かされないだけの意志と、嚴正なる態度を持つ勇氣とが必要です。

人は何と疑つても自分さへ聖ければ好いと言ふ事よりも、如何なる疑の目を以てしても侮られる隙がないと言ふ樣に、自らを潔くしてほしいのです。

世界おしなべてさう言ふ風は有りますが、特に日本は女と言ふものを甚しく輕蔑してゐますし、又女自身もそれに甘んじてゐます。よく道など通つても、實に女を侮辱したさまぐ\な言葉をかけられても、それを笑つて受けてゆく樣な事は普通の樣に成つてゐます。

彼の、卑しめらるゝと言ふ事に於ては優るとも劣らぬ支那の婦人でさへ、かう言ふ場合には引返して男の襟髪をとつて責めたと言ふ事を聞きました。日本の女に比して其勇氣を私は感心しました。

前に述ました樣に、日本の女の態度がはつきりしないので、會の席なども自然賤しい藝者などが持ち切りと言ふ有樣で、もしあれが例へば奥さんや令孃を連れて出たと致しましたら、今の所かへつて男の方の荷厄介と成るばかりで御座いませう。

それで私の考へますには之は女自らをも十分責むべき事で、是ではいつまでたつても、日本の婦人の社交と言ふ樣な事が發達する譯がありません。

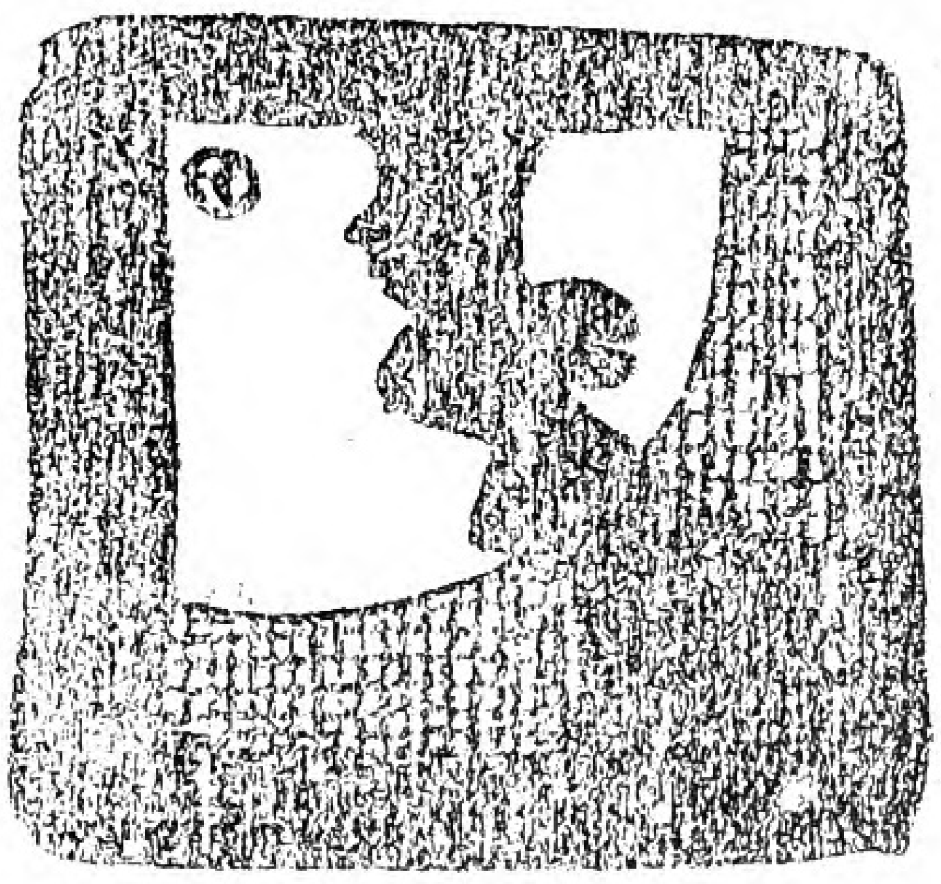
西洋の方ですと、會が高尚なればなるだけ婦人が多く出る、男ばかりの會はどうしても荒々しく成つてしまふが、其間に婦人が這入つて華やかに面白く、柔かく暖くにぎはせると言ふ樣な事は、全くうけいれるべき彼の長所と思ひます。

それが西洋では、男と女と言ふ區別を始めからあまり致しませんので、幼い時から成長しても、若い男女の交際を親や長者が之を干渉いたしませんから、却つて其交際が自由で、平和な心を以て親しまれます。若い男女が話をしてゐても、はたのものが第一それを疑ひませんし、亦當人同志もそんな疑がはしい話をしません、何事も正々として居りますが、之が日本の男女

ですと、はたのものが直ぐに疑の目を以て見ます、又當人同志でも、たとひどんな話をするにしても、はたからは何と疑れようかと言ふ樣な餘計な心配がある爲に却つてしまひには其方に陷ちてゆくと言ふ樣なかたむきすらあります。

彼の兄弟などでも、男と女のまじつて居る兄弟は、男も女も割合に人の中へ出て困らないが、男ばかりとか女ばかりで育つた人たちは、人の中へ出ても、交際が下手で、甚だしきは男が女に失禮な事をするのを、男の威嚴でもあるかのやうに心得て居る人すらあり、女も此を拒まないやうなのがあります。

之が一般の道德も進み、女の意志が鞏固になつて、會などの場合も藝者などにあづけないですむやうになつたら、そこに社交のさまぐな話が出來る事と思ひます。つまり日本の社交界は未だ話の問題になるほど進んで居らないのです。



都會と地方の優劣

與謝野晶子

○都會がよいか田舍がよいかと云ふ樣な事は誰も一概に答が出來ませんでせう。其れに今の東京は江戸と云つた時代とちがひ、大勢の田舍者が入込んで來て要所要所を占めて幅を利かして居ますから、只今の有樣では未だ立派な都會の形を成して居ないと云つてもよからうと存じます。建築は都會の外觀を飾る第一の物で奈良朝平安朝は勿論江戸時代に到るまで各時代の都會の特色を示した建築の樣式があるのですが、東京の建

築はどれも俄普請で、日本造にしても西洋造にしても粗雜を極めて居り、其の粗雜な建築が思ひ思ひに入混つて並んで居るのは不愉快です。燐寸箱を重ねた樣な日本橋通の怪しげな西洋造を見た目には地方の市街の統一ある建物の方がどれ丈氣持がよいかも知れません

○服裝にしても然うです。東京の市内を通る男女が勝手次第な風をしてだらしない事と云つたら無いぢやありませんか。其點になると私の郷里などでは、五月一日から袷、六月一日から單衣、七月一日から帷布、十月一日から袷、十一月一日から綿入小袖と云つた鹽梅に着物に季節が定つて居ますので氣持が宜しい。東京の女學生が浴衣の上に袴を穿いて學校へ行つたり。浴衣の上に羽織を着たりする樣な不體裁な風は地方で見受られない事ですね。どの樣な服裝をして居ても怪まれないと云ふのは東京の生活の難有い所で、私共の樣な貧しい階級の者に取つて太層氣樂に感ぜられる事ですけれど、初めて地方から上つた人の目にはさぞ見苦しく映る事でせう。私は此間女子文壇の會に出席させて頂いた時も、又二三日前、六年振に向島の花見に參つた時も然う感じました。東京人の服裝の混亂して居る有樣は見苦しいのを通り過ぎて滑稽に成つて居ると感じました。勿論自分も其見苦しい一人だと常々恥ぢて居るのですが。

○又東京人の言葉遣が然うです。純粹の江戸系統の少數な人は別として、多數の田舍者が集つて拵へ上げた只今の言語は、野鄙とも蕪雜とも輕佻とも申樣が無い程下等な言語だと思ひます。地方の言語には勿論妙な訛りや方言などがあつて一概に聞きよい物とも云はれませんが、貴賓には貴賓に對する言葉、目下には目下に對する言葉がちやんと定つて居ますから、相應に趣味と禮儀とを備へた選擇された言語を使用して居るので、聞き慣れると隨分感じが好いのです。併し東京の紳士とか學生とか云ふ多數の人々の言語は、どうも御座敷に出せない氣が致します。然う云ふ點にまで注意が行屆く樣にならねば、決して立派な都會とは云はれないでせう。

○其等は未だ表面の事だとも云へますが、東京の宜しく無い事をもつと深く考へますと、第一に生活の上の有らゆる競争が劇烈である爲に、多數の人が無暗に新しい事ばかりを追うて、靜かに反省し熟慮すると云ふ心の餘裕を持たず、目先の推移に處する應急の謀に忙しくて、遠大な理想に向つて著々と、礎を築いて行くと云ふ意力が鈍り、太抵皆その日暮しの奔命に疲勞して了ふ傾きがあります。東京の人は口先ばかり達者で案外實效が擧りません。女子敎育などを見ても解ります。永い歳月の間女子敎育に從事して居る敎育者なら、兎に角一定の敎育方針が有り相なものですけれど新聞雜誌に出る然う云ふ敎育者側の意見が始終ぐらぐらと動いても唯もう世間の人氣に投ずる樣な事ばかり考へて居る樣に見えます、地方の高等女學校などは保守的な所が多いでせうけれど、其の學校の方針が然う猫の目の樣に變りませんから、學生も父兄も餘り不安を感ずる事が少いかと思ひます。

○そんなら女學生を東京へ出すのは惡いかと云ふと、之も其の女學生の人格に由る事であつて一概には申されない事ですけれど、私の考では高等女學校程度の學校に入れるのなら地方の方が宜しからうと思ふのです。男でも女でも自己の價値と目的とを反省する事の出來る年頃までは、或る統一ある、規則だつた境遇に置いて、素樸な敎育を施した方が好いと私は思ふのです。それでは型に囚はれるなんて云ふ人があるでせうが、初な、白絲の樣に染み易い心の者を、此の不規律、不調和、がちやがちやと噪がしく混亂して居る東京へ出すと云ふ事は、心ある父兄の忍びない所であらうと思はれます。型は舊い物に違ひないのですが、古い物は決して皆が皆良くない物だとは云はれません。東京に出て居る文學書生の方などの間で近年流行の樣に舊い型を破ると云ふ言葉が發せられますけれど、型が皆惡いのでは無くて、型の中に不用な部分が出來て參つたから其部分丈を破ッて新しい型を造らうと云ふ意味に取らねば成りません。型の中にも永久に活きた作用をして捨てる譯に行かない物が澤山あるのですから、

玉と石と共に燒かうとするのは愚かな事です。例へばお互に幾許新代の人の積りで居ましても、横目縦鼻の此の顔の形は大昔かの舊い型から脱する譯に參らない。又脱する必要も感じないでは有りませんか。

〇地方の女子教育には隨分缺點を探せば不滿足な事があるでせう。併し兎に角地方の女學校には美點が澤山あるのです。教員と生徒との間に在來の師弟の關係と同じ温かい情味が殘ッて居て、從ッて教員の一言一行が生徒に感化を與ふる事の深い有樣などは、教師の位地や收入などが自分の父兄の足元にも及ばないのを知ッて頭から學校を馬鹿にして居る都會の女學生には到底見られない事です。女學生の言語にしても服裝にしても地方の女學校は大抵家庭と連絡がついて居て、其地方の生活と調和されて居ります。



斯う云ふ規律正しい空氣の中に一度入れて置くと云ふ事は終生どれ丈益があるかも知れないと考へます。

〇勿論型に許り入れて置くと云ふ事には弊がありますけれど、其弊は心配するにも及びません、今の女子には高等女學校卒業程度の教育さへ授けて置けば當然その弊を自覺する事が出來ます。教師は其積りで無くとも、教師の授けた學問が用立ッて自然生徒の目が明かずには居ないでせうか

う、何時までも學校の倫理などを型の如く守るものでも無く、又學校外の書籍をも讀み、直接人生の機微にも觸れて、敎師の敎へた倫理以上に自由な道德生活のある事に氣が附いて來るのです、然うなッた以上、卽ち高等女學校程度の敎育を地方で終ッた以上、本人なり家庭なりの希望がより高等な敎育を受けたいとか、或る專門の學問技藝を修めさせたいとか云ふ場合は勿論、然うで無くても、新しい諸種の見聞を得て知識と情操とを高く廣くする爲めに、出來る事なら是非一度東京へ上るのがよからうと思ひます。特に奬勵するまでも無く、東京へ出たいと云ふのは今の靑年男女の希望なのですから、高等女學校程度の敎育が地方で施してありさへすれば、父兄は娘の希望に反對しない方が思ひやりのある仕打でせう。田舍の敎育丈では如何にも土臭い女が出來上り、大抵の男子が都會の敎育を受けて來る今日に、妻たる者が土臭くては自然家庭も圓滿には行かないでせうし、又田舍ばかりの知識では小兒の敎育もうまく行かないかと思ひます。

○地方の父兄は田舍の學校敎師に脅されたり、新聞雜誌の記事に怖えたりして、東京へ娘を出せば直ぐに墮落するものの樣に考へてゐるらしいですが、東京には二十萬からの男女學生が居る中に、たとひ二百や三百の不良靑年と墮落女學生が交ッて居たからと云ッて物の例には成らないぢや有りませんか。大人からして收賄とか詐僞とかで隨分墮落する者の多い社會に、靑年ばかりは全く墮落しない者の樣に思ふのは馬鹿げて居ります。種々の誘惑があるのが世の中です、殊に都會に誘惑の多いのも事實です。併し其の誘惑に打勝つて乃至は其の誘惑に少しは觸れても見て、大きな過ちもせず、立派な生活を營んで行かれる樣に豫め土臺を堅めるのが普通敎育の本旨ですから、一通前の樣な敎育が地方の女學校で施してさへあれば安心して東京へ出せると思ふのです。自分の娘が墮落しはすまいかと危むのは、東京の實際生活に迂遠なのを示す許りでなく父兄が自分の娘や妹を信用しないのも甚しいと思ひます。親が猜疑の目で娘を見ると云ふ程苛酷な事はあ

りません。

○私は盛んに女學生を東京へ出す事を勸める一人です何もあながち高等な學校へ入れるにも及びません、見物旁々でも、中流以上の信用すべき家へ行儀見習にでも宜しいから、地方の高等女學校を出た上で一二年乃至半年でも東京に住めば、自由に高遠な學說を學者の口づから聽く事も出來、音樂にせよ繪畫にせよ、手藝にせよ、衣服裝具にせよ、其等の優れた趣味を知る丈でも、東京へ上らねば會得せられぬ點が多いのですもの、田舍の敎育ばかりで終る人は太層な不幸だと私は考へるのです。

○最も東京へ來る若い婦人の注意せねばならぬ事は、第一（之は何處の地に居ても然うですが）自己を尊重する事で、枕草紙などに見える平安朝の婦人が氣品を高く持ち、無學、無趣味、無實力の男子を目の外に置いた樣に、つまらぬ男子には指一つさゝせる事でないと云ふ自重の心さへ堅ければ、都會の輕薄男子の誘惑などに身を汚す事は無い譯です。其から誘惑と云へば、父兄は斯う云ふ點に案外冷淡ですけれど、東京にある或る種類の女學校は立派な誘惑物です。△△大學とか、△△美術學校とか、△△裁縫女學校とか、さう云ふ女學校は美名を以て地方の父兄や女子を誘惑しようとして居ると申して宜しいのです。贅澤な料理法を家政科で敎へたり、卑近な國文や敎育學を少しばかり講義したからと云つて大學だなどと云ふのは可笑しいぢやありませんか。一人として敎師に立派な新進知名の畫家の居ない美術學校はまやかし物です。

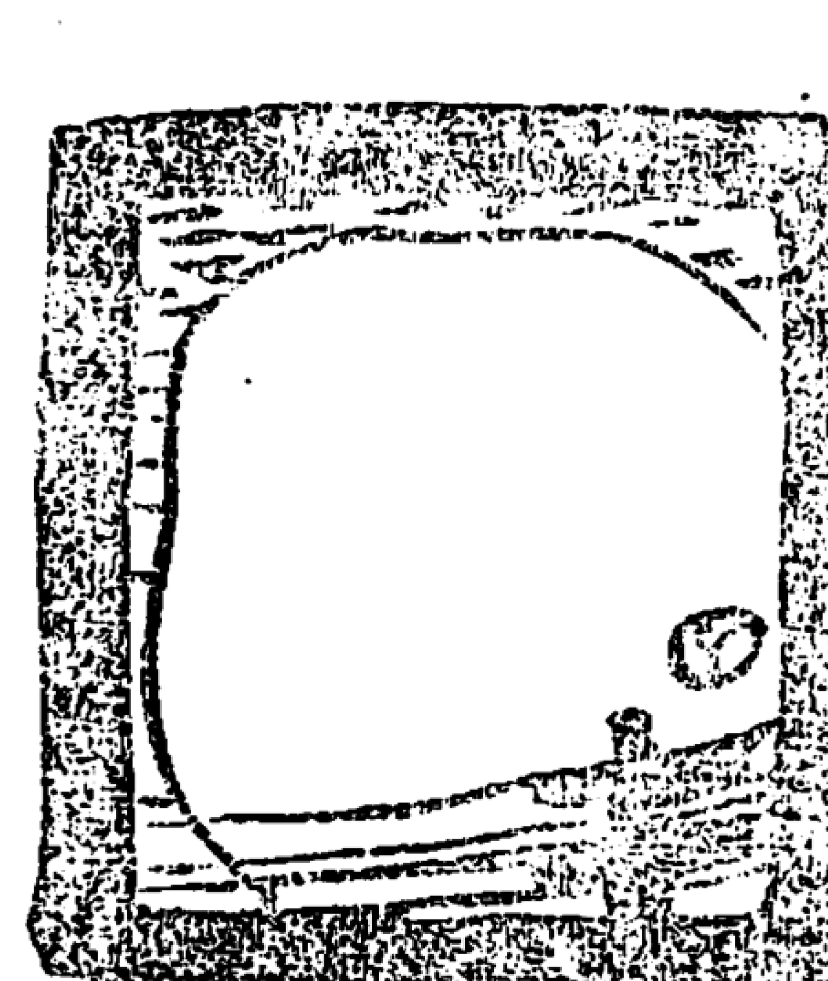
○東京には斯う云ふ事が少くないのですから、名よりも實を尊んで學校を選ぶこと、又師友をも選擇する事が大切です。服裝にしても、言葉遣にしても、少し耳や目を確にして注意すれば、東京の中で、趣味の高い少數の人々の間に行はれる物は、新しいと共に品の好い奥ゆかしい物があるのですから、其れを自分の參考にする樣に心掛けねば成りません。私の見ました所では、今の東京に來て居られる女學生の多數は、然う云ふ深い用意が疎かにせられて居はしないかと思ふので

す。半可通を振舞はず氣障な似非高襟女學生には多數の平凡な娘が成る。自分丈は其れ以上に超然として眞の都會婦人に倣はうと云ふ自尊心と嗜みとのある女子が澤山地方から出て來られる事を私は祈ります。

常夏より

晶子

金蓮花すきみゆるさじ葉にかくれあまたの君のうたたねするを
うすあやの帳の中にむらさきの藤浪つくるおん衣と髪と
いのち死なむ神のむすめは知らねども此世に永く契りてしかな
水無月の那智の奥より山の風三熊野川の川原菅吹く
あさましく涙ながれていそのかみ古りし若さの血はめぐりきぬ
白き花水にまじりぬ逢ひそめてしら痩しにけり日のかずばかり
麥の穂の上なる丘の一つ家くまなく戸あけ傘つくり居ぬ
かきつばたわか紫はなつかしきわが歌舞伎子の面影に咲く
人ひとりいのり出さむ術しらぬ侍どもをうとみたまひぬ
いつしかと二つ葉もえぬ心の芽きたなきもののあくたの中に



婦人の職分

貴族院議員
伊澤修二氏夫人

もし婦人が各自の定められた仕事を致します間に、自分の仕事が人の仕事に比べて非常につまらないものの様に思はれる場合がありました時、例へば一日家政の雜務に追廻されたり、小供の世話に追はるゝ人は、花々しく社交界の花となる人を羨むこともありましやう。小學校の教師、は大學の先生の職を羨むでありませう。或る時は、自分の仕事の効果の見はれざるに失望し、遂に自分の力の足らざることや、逆境に負けて自棄する人もありませう、どうせ益無き身といふが如き考へを起して自棄するならば、その人はその時を限りに亡びます。しかし、私は常にかゝる心の起る時、顧みて自分は與へられた場所と力を考へ、ありつ

たけの智慧と力を出して眞面目に働くといふことが肝要であつて、其職に高下はいさゝかないものであることを知らねばならぬと思ひます、女子ひとり職の高下があらう筈は更にないのです。

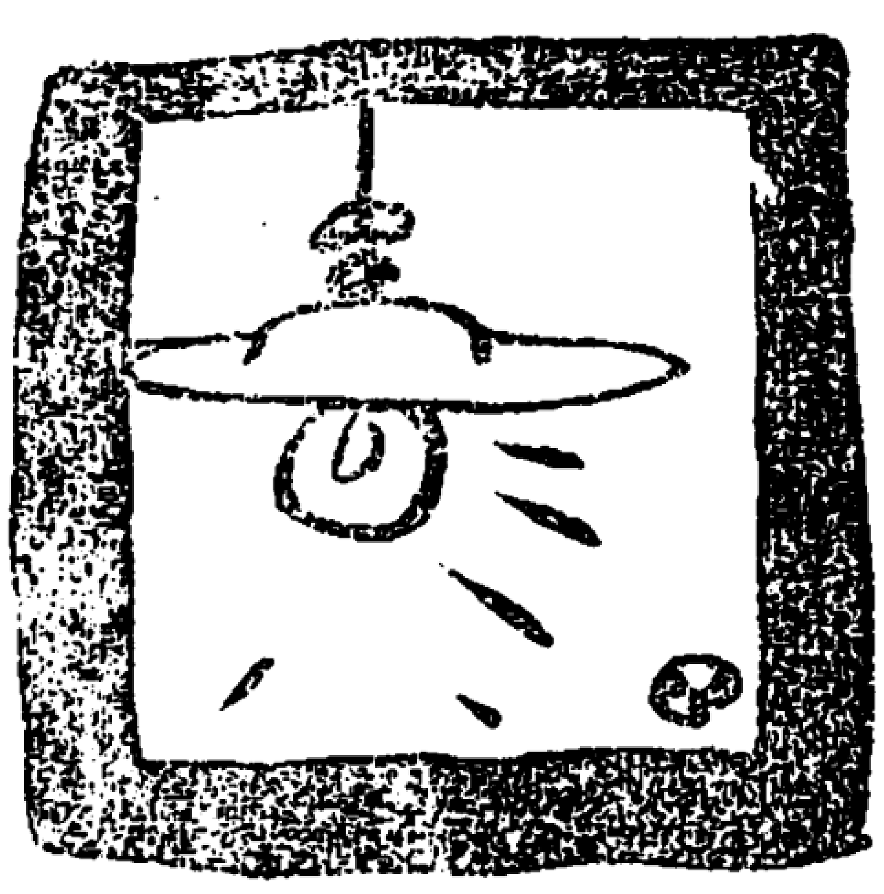
しかるに徒らに安樂の地位を求めんとして、女子がつねに金のある、姑のない家へ嫁きたいなどと、橫着極る考へをして、事行はれざるとき、失望の極、厭世家とやらになつてしまふのは、眞に氣の毒な次第と云はなければなりません。

なるほど安樂の位地は求めたいものである、その慾望はたれしもある事で、其慾望が必ずしも罪惡と云ふのではありませぬ、また苦痛の境をのがれて、安樂の境に入らうとするに至つては、極めて橫着なる仕打と云はねばなりませぬ、卽ちそれが罪惡であることは申すまでもありますまい。

皆さんは、安樂の境を求めるのでありませう、大にお求下さい、たゞしかし今申すやうな自己の職分をまですてて、その境を求めやうとするのは罪惡でありますから、他に更に安樂の境に入る順路を選ばねばなりませぬ。

其順路とは何か、大に苦痛を嘗め、正直にその苦境にゐて、其苦痛に服從なさい、さうしたら安樂の境に入るのはもうすぐです。

古人が云つた、若い時の苦勞は買つてもせよと云ふ言葉は、全く安樂境に入るべき順路を敎へたものであります。



東京の女が著しく眼に着く點

尾島菊子

田舍者の眼から東京婦人を見ると、下町と山の手とを問はず、一般に氣の利いた悧巧さうな女に思はれる第一に目の働きから言語動作、人との應對に至まで、凡ての調子が斯う輕く活々としてゐて、如何にも要領

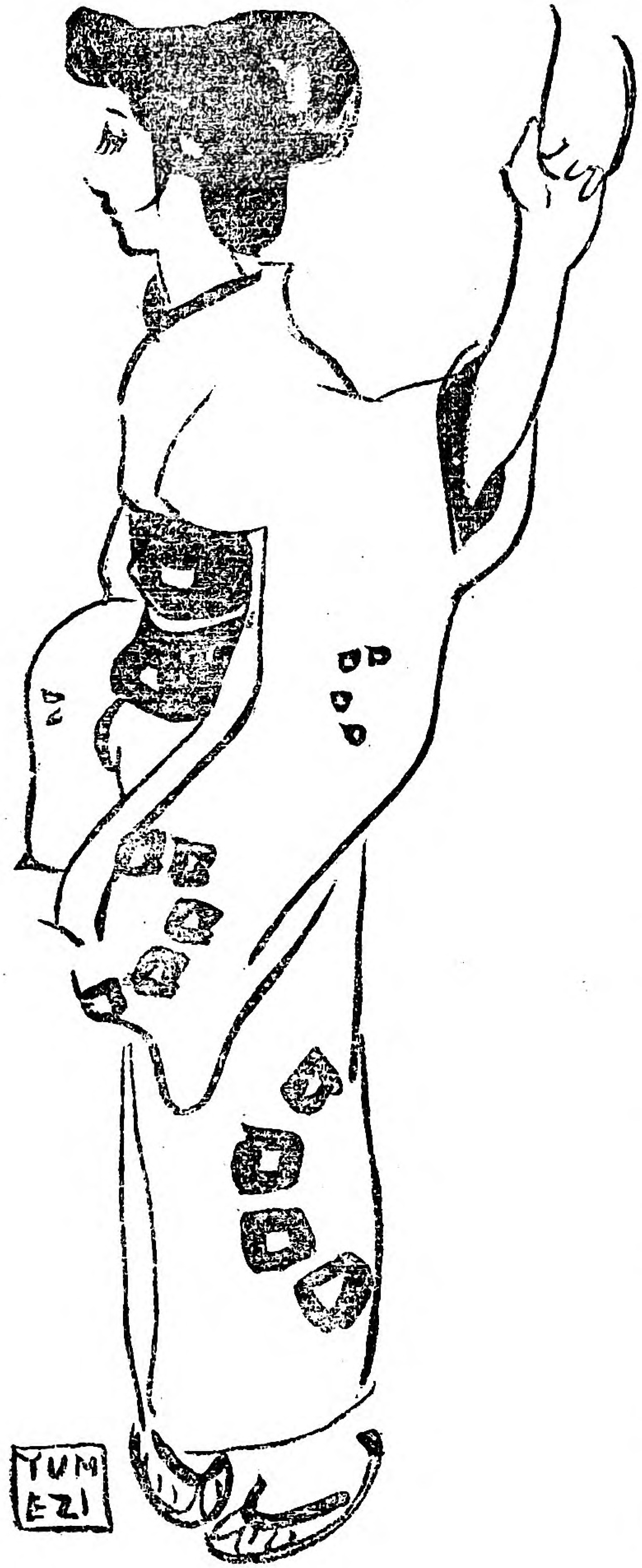
を得てゐる。半分云つて後を云はぬのが田舍者で、語尾を殊更に明瞭と云ひ切るのが、都會の人である。然しながら長く都に住んで、自分も矢張り東京婦人の一人となつて見ると、何の、東京の女にだつて色々な缺點はある。けれども唯外觀から見れば、京都の女は如何に色彩に富んでゐようが、大阪の女は洒脱であらうが、名古屋美人は有名であらうが、到底粹な東京女と比較されべきものではない。私は此頃大阪京都名古屋を歩いて見て、つくぐ然う思つた。京の着道樂、東京の食道樂なんて云ふのは恐らく僞のことであらう。尤も飛脚のやうな旅行をしたのであるから、極皮相の見に過ぎないだらうと思ふが、それでも夜晝市内を廻り歩いて、街の狀態から通る人の種類や風俗を油斷なく觀察した。所が何處へ行つても何たる田舍だらうと思ふばかりで、私の頭に深く印象されるやうな女などには些つとも出遇さなかつた。僅に大阪で一人と京都で一人、それも口を利いた譯でも何でもない、唯見たゞけ。それから名古屋へ來て見たら何のことはない共進會は田舍者で埋まりきつてゐた。其中に萬綠叢中の紅一點と云はうか、鷄群の一鶴と申さうか獨り超然として異彩を放つてゐたのは、矢張り東京婦人であつた。私は何故に東京の女は斯うも著るしく趣きを異にしてゐるかと、ぞろくつゞく人の跡から尾いて行くと、何うも首の廻りから頸附が違ふ。それから同じノロクサ歩いて居ても、都の女は腰が据つてゐる。前へ廻れば少々鳩胸でも、瞳に敏しい光りがあつて表情に富んでゐる。これを遠くで横から眺めると、彼垢拔けてすつきりとした瀟洒な容姿！　袂の振りを揃へて爪先上りにパラリくと細い袘を蹴つて行く曲線美は、抑も田舍者には何としても購はれない價である。東京にゐては夫程にも感じないが、旅へ出て見ると能く分る。東京の女は假令馬鹿でも、端書一枚讀めなくつても、服裝が氣が利いてゐる。少なくとも色の配合とか調和とかに心を用ゐてゐるから、よしんば贋ひ物を着てゐたにしてからが、何處か丁と納まりがついてゐる、殘念なことには田舍者には夫がない、切角厚板

を締めてゐても、舌をだらりと五寸も下げて見たり、幾ら刺繡の半襟だつて胸まで擴げたりしてゐて、顔ばかりか體の格好全體間が抜けてゐる。そして眼の働きと云ふものが全然ない、鈍いばかりか力も光りもありやしない。

然し美人と云ふ點、女らしいと云ふ所から押せば、無論京都が第一位を占むるであらう。水道の水で磨き上げたよりも、加茂川の水で晒した方が、染物からして上りが好いと云ふ。誠に京都は美人國である。けれども唯人工的に加へらるゝお化粧が餘りに濃艶に過ぎるので飽きが來る。一寸見が華美であるが能く〳〵見ると、耳の中や爪の先に垢も見出されよう。東京の女はそれに較べて淋しい、けれどもいつ何時旅館で着物を脱いだつて、半分違ひの帯なんか賴んでも見出されるものではない。京都の女は調子が緩かでおつとりとしてゐる。慾の皮が突張つてるか知れないが、眼の皮が弛んでゐる。道を歩くにもしやなり〳〵と嬌態を作つて行くが、東京の女は小跨でちよこ〳〵小走りをやつてる。だから氣忙しい。彼も爲ねばならぬ、是もやらねばならぬ、と毎日齷齪としてゐる。京阪地方になると、

『何やいな仰山たらしい、そない急々せんかて放ときなはれ、明日といふ日があるぢやおまへんか？』

と云つたやうな調子で、豆でも喰べて澁茶を啜つてゐようと云ふもの。それでゐて京都の街では祇園は別として、普通の街で音樂の音色は聴かなかつた。嵯峨で一軒琴を彈いてゐたのと、大阪で小間物屋の娘が義太夫の稽古をしてゐたのを聴いた丈であつた。所が東京へ歸つて見ると新橋から自分の家迄來る近い間に、幾軒琴や三味線の音がしたか知れぬ。のみならず電車に乘つて見ても忽ち見惚れるやうな美しい服装をした女が眼につく。大阪や京都や名古屋の電車中では決して見なかつたやうな盛裝した意氣な女が幾人となく乘つたり降りたりする。私は歸京ると直ぐ三越の兒童博覽會を見に行つた。其時南佐久間町から一緒に乘り合はした丸髷が二人と島田と束髪の四人連れが、ずらり



と私の前に腰を掛けた。風采を一見すれば何れも凝つたもので、紋織お召や鶉お召の半コートを着てゐて、各自にオペラパックを下げて、コートの下から見える着物は、お召に刺繍　裾模様だの、葡萄縮緬の袘だので、上にふわりと掛けるのは水色やクリーム色の呉羽ショール、其所へ指には紅白の寶石が燦爛として輝いてゐる。何の會へ御出席やらと思へば、何がさて、私と同じ所で降りて同じ三越へ入つた。矢張り見物人である。三越へ入つて見れば、それどころか、誰も彼も有りつたけ自分以上のお飾りをして、流行の魁を競つてゐる。京阪の高島やだの大丸では此樣人は極稀であつた。あゝ日本の首都！東京のことであると私はつくづく感心して了つた。と同時に身分の階級を問はず、斯うして贅澤を盡される人達が寧ろ不思議に思はれた。

黒百合

横瀬夜雨

一

嫁聟の里歸する日、と昔からいふ陰暦正月四日、自分は曉早く筑波の麓を立つた。野はまだ暗く沈んでゐて鳥すら飛ばねど、十二天の森の西に銀色の富士を仰いだ、朗かなる朝。

大寶を驅抜ける頃、あちこち萱家の軒に白い煙が見えて、小鮒橋の脇で米炊ぐ女の手がつめたさうであつた。

黒子の千妙寺の森は年々荒くなつて來る、髪の如き大道に十丈の影をおとすあまたの杉もだん〳〵に切られるのであらう。宅の菩提所だけれど死んだつて坊さんなどに用は無い。

寒さうな顔をしたふところ手の小學生が通る、一番あとから女が三人、埃だらけの頭をいてふ返に結て、やはり本包をかゝへて行く、通りすがりに白い眼を俥の上へ投げたが、すぐとそらして友達同志くす〳〵と笑ふ。女にならうとするころの女はにくいものだ。

野殿の橋にかゝる、田を隔てて東南にこんもりした森が見える、姉の家だ、森の家！森の館！『姉さんさよなら』と暇乞した。

月下に鳴る太鼓の音を散り來る空の華と聞いたのはおとゝしの祇園に醉茗が常陸に旅せる時の感じであつた。一年を隔つて自分は森のやかたの木がくれに更け行く月を仰ぎつゝ、邦子と共におなじ祇園のはやしを聽いた。蚊遣の煙ゆるく流れて人の膝なるうちは動くこともなかつた。泉水の水の音は寂かであつた。

シグナルも霞んで見えぬばかりの驛柵を越してぼんやりした筑波が東に立つてゐる、大寶からは一つとし

か見えぬ峰が、男體女體二神東西に岐れ立つて、木は密に影はいよ〳〵深い。………

あすこを切らなくちや駄目だ、足尾の背面から三國峠から沼田へかけて引けばうんと儲かる、あなた一つ袒を脱いぢやどうです、金は溜めるばかりが能ぢやないといふ髯、今では山はトンネルの方がわけなく掘れる、切通しは却て面倒ですといふ脚絆、さうすると現今馬の背中で駄け出す炭や何かもこちのものとなるわけだな、一つ後藤に話して見ようかなといふ山高、日本の鐵道院を三八で背負てるような話をしてゐる。伊勢崎から乘つた鳥打帽まで釣りこまれて妙なアクセントだつたが、何處かで兒供を連れたお婆さんの赤切符なのを見つけて車掌にいつけたことを話す、『だつてあなた其お婆さんはあゝ好かつた、三等ぢやあんなにこんでるのにと言つてるんですもの、青と白とを知らないのとは違ふ、あんまりずるいからね。』

頂上まで閃綠岩を積んだやうな小さな岩舟山を汽車の見える側から崩し採つてゐた。山といへば不二のやうに輪廓の正しいもの、筑波のやうに頂上まで木の茂つてるものと思つてた小さい信念は、大くなるにつれて破れて來たが、それと共に巖々たる巨石のかさなり合へる男らしさも初めて知つた。山を壞すといふことは筑波の北、蘆穗、樺の方でも行てゐる、強不埒だといふのではないが、あたら名山を切賣するのはひどい自分の村には萬葉集に歌はれたる騰波の海（大寶沼）がある、千年湛へ來し水を干して大方田にしたのは去年からで、當時或新聞に『騰波の淡海滅亡す矣』。又『その子はとばのあふみの讃美者、その父は大寶沼の破壞者』との諷刺が出た、自分の父は破壞にあづからぬけれど、名勝を保存せざりし罪は負はねばならぬはめにゐた。美しき毛野の山の、南より北より崩されつつあるを見て心娛しまず、休んぬるかな。

日光連山と秩父連山とは常陸からはくッついて見えるが、汽車は上毛野下毛野を橫斷して、西しつゝ、北しつゝ、武藏の山は南に、雪白き黑髪山を右北に見て轟々と利根を越えた。

何といつた村か知らないが、河沿の堤に旗など立てて眞黑になるほど人だかりがして、田の畦からも、畠の路からも、林からも藪からも、やい〳〵と寄つて行く、紅い旗、赤い毛布。あかい帶の女も多かつた。汽車は笛を鳴らした。

髯と靴との間に坐つて、初めから口をきかずきちんと澄してゐる若い奥樣があつた、髯から比べると靴の方が若さうだから無理に新婚旅行の相手に見立てておいたら、男はいつの間にか下りて、片方の髯も、一人の脚袢も消えてゐる。



前橋で蜜柑を買つた、見せて喰ふのもきまり惡いから二個だけ敬意を表したら、しとやかに受けてくれた。しばらくしてわきにおいた信玄袋を明けかけるから林檎でも出すのかと見てゐると、水引をかけた紙に半襟らしい紅いの青いのの透いて見えるのを出して、鉛筆で一つ一つのしと書きはじめた。くにどのへ。はなどのへ。里がへりの君なのであらう。

高崎から一人となる。名知らぬ山を見るともなしに

明け放した窓にもたれながら今夜着くTの家の構や細君の顔を想像した。

さらに一歩一歩近づき來る小諸の町と、弟をうしろ手に負ひて好んで小諸の城あとをあゆむと言ひしつかさ子をおもつた。Tはつかさ子を奪ひしわが十年の友である。

Tは醉茗と共にわが詩の道の師にして、やごとなき姫宮ずら齋宮となつては不犯に終るならひなれば、君も望みを捨てて孤獨の世を終へよと言つてくれた。君の病ひは治すべからず、人を迎へてやがて泣かしめんよりは、さびしくともひとり常陸の草にかくれよとまで言つた。

つかさ子が背いたのはTに脅かされたためであつた。

ピストルを懐にして淺間の山を下りながらおめくと信濃にかへるつかさ子を送るとて『立つは月波の山かへるは淺間の麓、若きはひとり君のみならぬ、夢の姿のはかなさよ。燃ゆらん花の地に落ちて、綠にさむる夏の天』と醉茗が嘆じたのも夢となつた。呪はれたるわが命はなほ有りて。

二

赤城も榛名も何時の間にか見落して、角に切つた氷塊を馬車から何臺ともなく降す磯部を寒い處だと思つた、ふりかへり見る西の方は雲閉ぢて桑畑には烏が啼いてゐる。右の窓に見た尖塔形の山は、車輪千轉、左に移つて碓氷は近づいて來た。雪が降出した。

碓氷の山は霜をおいたやうに皆白かつた、左なる遠き山は凍れる雲を額にして、輝ける日はそなたに落ちたのであらう、だん〳〵とくらくなつて、淺間は峰に這ふ煙の末も見えず、筋交にも横にも入り亂れて雪は降つてゐる。

磊塊たる山の石、葉無き山の木、灰色の山の雲、粉と飛ぶ山の雪！明暗いく度か心憂きトンネルを過ぎて汽車は遲々として信濃に入る。落葉松の林が黒くつゞいてゐる。

熊の平といふ停車場で大きな水盤のふちにつかまつて、髷の上、肩、背と雪でまつ白になりながら子供に水を呑ましてゐる上さんがあつた。水盤のわきには楊らしい木が植ゑられて、水は始終あふれてゐるらしかつた。

灯が點いたけれど、乘る人はやはり一人も無い、高崎から此方まつたくの獨になつて、たまに扉を開けるものがあるかと思ふと、それは湯タンポを入れかへる驛夫が、小さな草帚を持つて來て、有りもせぬゴミを拂ふ赤帽である。旅客掛りがどうか切符をと言ふたとき、そこにころがつてる帽子に挾んであるからとそつけなく言つて退けたが、捉へて話すればよいものを。

毛布を肩に纏からうとして不圖見ると、ガラスに吹きつかる雪はぴたとくつ着いて、着くそばから消える、あとから〳〵と白く吹きつけては消える。溶けるのだ。寂しい。

草の影も木の影もうつらずなつたガラスに、ちらと動く光を見る、おぼつかなくも山の峽に沈まんとする月だつた。雲はちぎれ〳〵草の上を飛ぶ。

嗚呼高原の月。雲多き佐久の平。つかさ子を生み、はゝき木を生み夢殿守を生みし國の冬の月よ。萬人みな背ける中にありて、死にいたるまでわが心を傷つけざりし百合子をまもれる信濃の月よ。

夢殿守は知らず。つかさ子は嫁してとほつあふみに有りといひ、はゝき木は桔梗ヶ原に病むと聞く。……

ひとり百合子は死んだのだ。

百合子が新體詩を初めて作つたからと見せたのが四十二年の一月である、どうせ嫁に行くまでのお弟子さんだらうとからかつたら、私は肺がいけないのですから嫁きはしません、いつまでも〳〵敎へていたゞくのだと言つた、間もなく七くさ正月に從姉の家でかるたをとつた晩、胸が切なくなつて咯血し、ハンケチを當てたまゝ足袋はだしで家へ戻つてから、どつと寢ついたと覺えてゐる。冬子さんが懇ろに看護して、あなたが亡くなれば誰れの手にも觸らせずに、わたしがきれいにして送つてやるからと、泣いて慰めたことも聞い

た。

が、他手にかけずに淨めてやると誓つた冬子さんは故ありて病める君をおいて遠く肥前に行き、それから歸れなくなつて亡くなられた。

後るゝこと三日、百合子の魂も眠つたのである、人を見れば叔母さんは?とよく聞く、今來る今來るとすかしてばかり居つたけれど、かなはなくなつて皆に永別の辭をのべ、昏睡に落ちようとしてまた冬子さんを尋ねたので、父君、叔母さんはお前を待つてるから、安心して行けと告げたけれど、もうわからなかつた、十八の子は童貞にして終つたのである。

百合子の遺書の自分の手に入つた時、山田邦子がそばに居た。

先生もう今日がおしまひ
でございます　これまで　いろ〳〵
わがまゝをいつてすみませんで
した　どーぞお許し下さい
ませ　一人で生れて　一人
で生きて　一人で逝く
私は一人でした　なぜ生れ
たでせう　をばもゐないし
今　私の臨終を見るべく
あつまつた人はありますけど
心つよく手をあつけて逝く人が
ないんですもの　あゝ今
先生　どうしてゐらつしやる
でせう　あひたいわ
先生　さよなら　御大事に
遊ばせ　今死なんとしてはさすがに
おなごりがをしまれます
長く〳〵生きてゐらつし
やいませ　死は決してのぞむ
べきものではありません
かたみとして　日記をさし上
たいと思つてゐます
私の最後など誰が先生に

おしらせするかと思ふと
ほんとにしにたくない
わけもなく涙
が出て
十八の身
今逝かん
として…

ノートに寫したのはその時の邦子である、覺束なき墨の跡をたづねて一字一句もとのままに、原書は遺族の人に贈つた。從妹から來た手紙も寫さした。

伯母に宛てたまひしお文拜見つかまつり候、ゆり子樣はまつたく亡くなられ候。私ことは生れ落しよりは



たとせ近く、時には諍ひつゝも、共に遊び共に學びたるいとこに候へば、おうはさは常々承り申候。

三十五日もすむすまずに伯母は須磨へ參り候ため御通知は忘れたりと覺え候、東京から廻りて常陸へ行つてお目にかゝると申越し候、その折くはしうお聞きあそばされたく候、彼の君は評判の美しきかたにて、うまれつきやさしかりしかど負けることはきらひに候ひし。

先生の事は非常に心を痛めて、とてもなほらぬもの

でせうかと醫師に問ひしことを幾度も耳にし申候。臨終の二三時間前にもおうはさをなされ、お寫眞を出して、たうとう私の方が先へ逝きますよとお暇乞なされて靜に眠られ候。

雄一様はやつと間に合ひ候。少しは泣くやうにて候ひしかど、やがて、しづかに、何の悶えもなく逝きたるはクリスチヤンなりしせいかとも存じ候。

日記は十五六のころよりのが半紙にて山と積むほどありしを、いつの間にか自分にてやきすて候よし。

先生のものはお寫眞など、花守も、二十八宿も、お手紙も、みな持つて逝き候、ながき旅路も寂しかるまじく存じ候。

涙こぼれ候。お許したまはるべく候

はる子。

ノートは幾度かひろげて膝の上においた。水戸で柱のかげから見た邦子の帯が描いてある。こはい兄さんと題した顔の人もある、蚊帳の吊手に風絶えて、夢も吾身もしづかなりと、邦子の手でらくがきがしてある。緣に塗つた金泥が指に着く。

許嫁の人が有つてすら、ひとりで生きて、ひとりで逝くと百合子は泣いた、「天地よまづ行くに路無きわが軀をかくせ」とペンシルを走らした、頁はいくらも殘つてない。

「小諸の灯は寂しかつた」と次いだ。

「しなのなるちくまのかはのさゞれ石も」と書いた。

「君が門今ぞすぎ行く出でて見よ」と書いた。

書いたけれど、消して、

「苦しきかな、わが記憶は鮮明なり」

と改めた。

「髪の多き」

「おもかげの寂しき。」

「指のかひづめなるを恥ぢたる」と數へて、

「衿に針刺すくせある女」

「あからめ過すべき姉の秘事を見て泣きたる女」

「湯上りの軀を鏡にうつして、明日は死ぬる命なるをなげきし女」

「嗚呼十七の寺の子」
「苦しきかなわが記憶は鮮明なり」
「彼れは BITCH にてはあらざりき」
「一たび賣りて足らず、二たび買ひ手を求めし玉のあたひいくばくぞ」

立つて窓をおろした。けたゝましき風の聲が耳に鳴つた。

（つゞく）

作業熱

佐野天聲

二月程遠州掛川在の親類へ行つて會心の作をこしらへ樣と思ひ立た時の日記

四月八日、快晴、起褥七時、就眠十一時。

（前略）お釋迦の誕生日に引越しなぞは振つたものだと考へながら起きる。いゝ天氣だ、すつかり春になつた。此分では上野も向島も雜沓するだらう、埃が立つだらう、花が泣くだらうなどと思ふ。一寸行つて見たい氣もする。矢張り仙人ぢやない、唯の人間だ、寂しいに飽きれば賑かが戀しくなるのはあたりまへだ（中略）子供の具合が昨夜から少し惡かつたが今日は甚くしよげて家内の背中からちつとも下りない。何をいつてもウンくだ。有田さん（小兒科醫の名）に診せに遣る。食ひ過ぎから胃に熱を持つて元氣が無いのださうだ。喜んで藥を服むから直に癒るだらうと思ふ。荷の形付けにかゝる。隨分大變だ。家内と一緒に皿小鉢を籾殼へ詰める。勝手道具を用心籠へ詰込む。夜具蒲團を風呂敷包にする。八行李の書籍類の繩を掛ける。四五日前から本を調べて十冊位宛叮嚀に紙包みにして下すつた阿母さんの疲勞を厭はずに手傳つて下さる。其内に姪が來る。大分助かる。晝過にはあらまし形付いて、もう車に積むばかりといふことになる。其處へ

隣家の穟子さんが來る。主人が來る。下女を手傳に寄越して呉れる。愈埒があく。車屋が來たから本所と駿河臺へこれだけの荷を運ぶに幾らかゝると聞いたら二圓五十錢かゝると言ふ。少し高いとは思つたが小切るも面倒だから、其事に極めて直ぐ兩方へ割振つて出して仕舞ふ。本所行は遠路ではあるし荷車で後押付だから先へ出たが駿河臺行は人偏のある俥だから一歩おくれる。皆威勢のいゝ若衆だ。何時頃歸るかと聞いたら駿河臺の方は直歸るが、本所の方は何うしても四時頃になるだらうと言ふ。俥が出て行つた後先一休と腰をおろす。阿母さんも家内もがつかりした樣な顏だ。姪だけは新手だけに一向疲れた風も見えぬ。さうかうするうちに前日頼んで置いた八百屋の金さんが商賣用の荷車を輓いて遣つて來た。此れは勝手道具を新宿の姉婿さんの家へ預けるための手傳だ。また一騷動はじめる。併し今度は大概用心籠へ詰めてあるから前程手張らずに二度ばかり往返すると埒があいた。金さんに禮をしようとすると取らない。何うしても取らない。今度又大久保へいらしつたら御贔負に願ひます。」と言つて逃げる樣にして行つて仕舞つた。一圓紙幣一枚姪に持たせて家へ届けさしたが女房と一緒に口を揃へて辭退して何うしても取らない。仕方がないから今度何かの機會があつたら相當の禮をしようと思ふ。

三河屋が殘りの勘定を貰ひに來た。十圓紙幣で差引かせようとすると剩錢が無いから剩錢を持つて出直して來ると言つて歸つた。もう五時過だ。駿河臺へ行つた俥も本所へ行つた車も既疾うに受領證を貰つて歸つて來た。此處の家に用は無い。阿母さんは隣家の第ちやん(從弟の名)處へ泊る積りだから間も無く合切嚢を提げて隣家へ行く。家内も子供も姪と一緒に新宿へ行く。あとは自分一人。隣家から借りた火鉢と茶道具とを控へて三河屋の來るのをつくねんと待つてゐる。妙に芝居氣が出て來る。舞臺で芝居をしてゐるやうな氣がする。聯想はゆくりなく大宮時代に飛ぶ。大きな舊い家を賣つた時の事を憶ふ。鐵鎚の音や、鋸のおとや、壁土を震ふ響などが聞える樣に思はれる。忌な氣持に

なる。其處へ三河屋が遣つて來た。十圓紙幣と引換へに四圓八十何錢かの剩錢がならぶ。「何うぞ又お歸りの節は御贔負に。」と言つて三河屋は歸る。

さて立退きの番が來た。

忘物は無いかとあちこちを見廻はす。戸棚をあける。昨夜飲みのこしの京燒の燗德利が置忘れてある。ぽつちり酒が殘つてゐる。飮んで仕舞ふ。袂へ入れる。鐵瓶の湯をあけて手に提げる。帽子を冠る。隣家の下女が來て火鉢と茶器を持つて行く雨戸を繰る。戸締りをする。



玄關へ出る。下駄を穿いてまさに地におり立たうとする途端ひよッこり春秋社主人が遣つて來た。引越しの日取りを聞いて何うしたかと思つて寄つて呉れたのだ。尤も態々では無いさうだ。つひ近所の水野葉舟君の處へ出版物の事で寄つて、此れから富久町の伯父さんの處へ無沙汰見舞に行くのださうだ。富久町は成女學校の近所ださうだから丁度姉婿さんの家の方角である。一緒に出掛ける。春秋社主人が鐵瓶を持つて呉れるといふから持つて貰つた。隣家の樋子さん（第ちやんは

富士前へ兄さんの見舞に行つて留守だつた）に挨拶して外へ出る。もう大分薄暗くなつてゐる。北隣の長田さんに挨拶しようと思つたけれど面倒臭いのと義理一偏のお世辭らしいのに氣がさしてやめた。仕合せと今日は一日上天氣で風も無く、溫かである。春秋社主人に折々家内を見舞つて呉れたまへと賴んで姉婿さんの家の前で別れる。門を入ると子供の泣く聲が聞こえる。又姉婿さんに恐がつて愚圖つてるなと思ふ。玄關を入ると案の定家内は子供をおぶつて座敷にゐる。皆は食卓を取卷いてるが食べたのは姉婿さんだけで、其他は自分を待つてゐて呉れたのだ。

一杯燗けて貰つて飮むと、姉婿さんは子供が自分を恐がつて夕飯を食べないのが可哀さうだといつて、四谷の喜よしへ落語を聞きに出掛けた。姉婿さんの跫音が消えると子供の泣聲も消えた。厄介な奴だ。

大分疲れたので間もなく失敬して先へ寢た。

同　九日、午前半晴、午後雨、起床七時、就眠十時。

姉婿さんが出勤したあとで起きる、甚だ勝手な弟ではある。顔を洗つて飯を食つて、十時頃から家内同伴坪内先生の處へ行く。先生は御多用であはれなかつたが奥さんにお目にかゝる。種々有益るお話を伺つた上、御面倒をお願ひして十一時頃お暇した。歸りは第ちやんの處へ寄る。お晝だから飯をたべて行けと穟子さんが言はれたけれど、大勢で厄介になるも氣の無い話故阿母さんを急き立てて間もなく辭して新宿へ歸る。午後駿河臺へ行く積りのところ、甚く疲れてはゐるし其うち雨が降つて來たので一日ごろ〳〵して仕舞つた。

同　十日、午前雨、午後曇、起床七時、就寢十時。

阿母さんの長唄勸進帳を久振で聞く（下略）

同　十一日、半晴、起床七時、就寢十一時。

本所行。（中略）小兒病氣全快。

同　十二日、曇、時々小雨、夜大雨。起床就寢前同斷。粕谷行。

九時頃から出掛けて途中で晝飯を食つて、田圃の小流で二時間程瞑想して、一時半頃粕谷へ行くと、主人は府中へ行かれて不在、奥さんは鶴子さんを伴れて靑

山行。新參の下女一人淋しさうに縫物をしてゐた。上へあがつて新聞など見てゐたが、なか〳〵歸つて來られぬ。下女を對手に眞山君の結婚問題などを話題にして時を潰す。雨が強く降つて來た。四邊が忌に暗くなつた。少し寒い。四時頃、いや四時半頃だつたらう、紺の法被を着た植木職らしい人と伴立つてやつと主人が歸られた。嬉しかつた。御無沙汰のお詫をして、サイダーと栗饅頭の御馳走になりながら、移轉の一條を告げ、今後の方針に就てくど〳〵と話してゐるうちに、もう六時になつて仕舞つた。主人は泊れといつて下すつたけれど、左樣して居ては遠州行がおそくなるからお暇すると、自分の外套無しの寒さうな姿を見て、惡い外套だが此れを着て行きたまへ、風邪を冒くと不可いからと言はれて外套を貸してくだすつた、お禮言つて傘をさして中足駄を踏みしめて外へ出た。出掛ける時高井戶の通りに新さんといふ俥屋があるから、其處へ行つて俥を傭つたらよからうと、主人が敎へて下すつたので、其通りにすると、新さんはまだ仕事から歸らないので、女房さんが知りあひの俥屋を二三軒聞いて吳れたけれど、どれも此れも泥濘脛を沒する田舍道へ雨の夜あるきを嫌つて行くといふ者が無い、荻窪へは何うかと聞いたが矢張り駄目だ。其處で下駄を脫いで草鞋を穿いた。拜借の外套の裾を着物の裾ぐるみ高く卷きあげて、新さんの女房さんに荒繩を貰つて腰にしつかと結び付けた。下駄は手に提げた。眞闇黑を盲滅法に歩き出した。而して新宿へ歸つた。隨分甚い活動だつた。併し些とも忌な氣がしなかつた。去年の暮の大阪行の前日の出來事を憶起して其れと此れとを結付けて快然として眠りに入つた。

同　十三日、快晴、起床、就寢前日に同じ。

昨日に引きかへすつかり霽れあがつたから、阿母さんを伴れ、家內をつれ、姪をつれ、子供を伴れて向島の花を觀に行つた。囊中頗る寂寞たるものだが大腹中を見せて普茶料理の雲水へ入つた。此れで阿母さんを花見時まで引つぱつて置いた責任の幾分が果たされた

（下略）

同　十四日、快晴、起床八時、就寝九時。
昨夜駿河臺へ泊つて朝寝をして、駿河臺のお姑さんは相變らず堅實だ(中略)諸家訪問。坪内先生へお禮に行く。新宿に歸る。
同　十五日、快晴、起床六時、就寝九時。
晴れたりモッシユーといふ某佛蘭西通の飜譯口調を思ひ出してをかしくなつた。八時、新宿發の汽車に乘り、遠州へ出掛ける。家内と子供は當分駿河臺に居る筈だ。阿母さんは十六日歌舞伎座を觀て四五軒親類廻りをして大阪へ歸られる筈だ。
子供は病氣全快後、却々元氣がいゝ。カアチヤンマンマだのワンワンネンネだのニヤイン〳〵(猫の事)だのと言つて、爹が出掛けるのを平氣で居る。按ずるに子供は男親の必要を感じないものと見えたり。
さて此平氣なる子供と、領巾も振りさうに見えぬ家内とを、阿母さんと姉さんとに頼んで、姪と甥が御機嫌ようと言ふ聲を後に新宿に駈付けた。丁度發車の時刻で、切符を買ひ荷物を預け手提を赤帽に持たせて列車に入つた。品川で魚津行の頗る舊式の甚だむさくろしい奴に乘りかへた。發車すると間もなく大山道者と肩をならべてこくり〳〵居ねむりはじめた。ぐつすり眠つてまたゝく間に遠州へ行く積りだつたが、何うもよく目が覺める、些ともまたゝく間が無い。隨分あきあきする。仕舞には尻こぶたが痛くなつた。
日の暮々掛川に着いた。俥を驅つて各和へ行つた。堂々たる大庄屋然たる萱葺の長屋門を入つて「やアよく來たな、さア此方へ來よ。」と言ふ叔父さんの溫かな聲を聞いた時、自分の直覺性は明かに作業熱の多望を祝した。

劇場のまぼろし

兒玉花外

青葉、五六月の鎌倉は實に目がさめる程に良い。杜鵑は血を吐いて死に啼かずも、初鰹が東京市中肴屋の板に青光りして上る頃から、夏へかけて追々鎌倉の風

景は濃厚の色彩を加へる。

私は武藏野の若芽若葉が萌えて火のやうに、空の雲に反映する初夏に成ると、鎌倉といふ感じが、綠の繪具の塊物か、笛の強い美しい音のやうなものが、奇體に私の頭腦の裡を充せる。

そこで、初袷を血のほとつた肌へ引掛けて、足は鎌倉の黒い歴史の土を踏まぬ譯にはゆかなくなる。

色の紫がゝつた、ピン／＼跳ねさうな初鰹を市に見ると、昔の江戸ッ兒、男の賣つた意氣抔といふ事が胸一パイに浮んで來る。——若狹の小鰈とか、淡路の鰺とか、鯔とかいふと、美しい柔婉しい女性の心象を聯想するがやうに——。

此間私は、神田三崎座の前を通つた。會ま源實朝と公曉との演劇の繪看板が眼に入つた。私の徂く春の恨に燃立つやうな心が、其の色彩の豐艷と悲壯とに手もなく惹附けられた。舊い女優の小芝居ながら、場中の粉臙交じる春のよどんだ波打つ空氣に、私は鼻と小耳とが擽つたい程に嬉しかつた。尤も鎌倉といふ心持が先づ刺戟したにも由らう。

恰度、小冠者公曉が、仇と覘ふ實朝卿を、鶴ヶ岡銀杏樹の片蔭から姿躍り出で、廊段に銀と閃めく匕首に刺し弑する場面である。

滿場、星紅ゐの花簪、美人の頰にふくらむ鬢髮と百千微かに顫へた。——自分は髮少しく蔽ふた額に冷汗が出てゐた。

私は、實朝卿の幻影—金槐集の一卷が、正に暴手の狂刀の切尖にパラ／＼に貫かれ、滾々縷々と貴公子が胴身から流れ迸る鮮血は、歌集を繙裝つた紅ゐの絲の紊れ解ぐれたのであるまいか？洵に旺ふ源家の滅亡ぶるよりも惜しい、勇ましい快調の詩歌が死絶えたと私は見た。

夕陽と西の海へ沈んだ、赤い平家の公達には、其の盛りの時にも春の歡樂極つた哀調はあり、幾多の風流風雅な殿上詩人を生んだがゐが。實朝卿は、白雲白旗を標表とした蠻的の源氏より出た實に金槐一粒種の詩人である。

彼の萬葉の幽韻佳調の餘響を受け傳へた金槐集の著者の靈！近代文明物質と無趣味の咀ふべき害刄!!

私は、劇場午後の濁つた空氣の中で、いゝ、ふと空想から覺めた。舞壇には扮裝した女優が動いてゐた。藝術の美が板の上に活躍して……。現代に赤い平氏の爛熟も、源氏の熾んな白熱も、我等は色の飽くまでも濃艶妖孽な詩歌藝術の爲に殉じたい。

若き男よ、女よ、我等に情熱の醒めたるを感ずる時！共に夏は住い鎌倉に走らう。――そして詩人が殪れた大樹の下、黄に燃ゆる銀杏の一葉をば頭髮に挿まう!!

ふるさと

うつぼ

藏の隅み親の誰れか書きにけむ反古さみしくにほひてありぬ
この槍よふるひて軍したりけむみ親の名だにわれら知らなく
ここにしてありける程の久しさも知らずとぞいふ家のかなしさ
茫として高草つゞく野の上に初めて家や造りけむかも
「故里のきよきともし火」遠く居てし夕となればかくしつぶやく
祓ひたまへきよめたまへと水無月を我が家にありて禰宜は請ふらしく
父母もつぎていまさずなりにける古里の家に鐘の聲を聞く

新しき歌集を讀む（二）

河井醉茗

今年に入つて自分は新しい歌集を多く手にした、與謝野君の『相聞』金子君の『覺めたる歌』、若山君の『別離』、前田君の『收穫』、土岐君の『ナキワラヒ』、十月會の『黎明』など隨分多い、隨つて其批評も方々に出てゐる、批評の多くは歌集一部の總てから得る纏つた評論である、然うでなければ新聞紙に現れる紹介風のもので、特に其歌集とは交渉の少いやうなものである。今急いで是等の歌集を批評し去らうとするには、勢い全冊に眼を通さずして、大づかみな評論になつて了ふ、歌集の生命は一年や二年で滅ぶべきものでない、隨つて其批評も然まで急いで爲さねばならぬ理由もない。其處で自分は一冊一冊讀むに隨つて其批評をしてみやうと思ふ、ゆつくり書くからと云つて必ずしも詳しいわけでない、矢張一向に纏りのない漠然としたものだが、只、例を其作物の多くから引いてみやうと思ふ、之れ一面は未讀の人に其歌風を示し、一面には一讀した人でも亦新しい注意を惹起させる手段にもならうと思ふからである、先づ前田夕暮君の『收穫』から始める。

『收穫』

多くの人が言ふやうに、夕暮君の作は理性が勝つてゐる、批評的の態度で作つた歌が多い、女性に對する燃えるやうな感情の閃いてゐる作が、甚だ多いに拘は

らず『收穫』の一卷から得る處は、夕暮君の女性觀と云つたやうなものが主となつてゐる。

理智の働きの鋭くなつて來たことは、近代人の特性とも云ふべく、之が詩歌の上に現れたからとて、何等の否定すべき譯はないが、詩歌として情調の乏しくなるのは已むを得ない。君の女性に對する衝動は、烈しい方で、其烈しい衝動を有りの儘に、男らしく表白してある、嚴しく、少しの隙もなく、ぴし〳〵と歌つてある、其結果、餘りにつきつめた作が多い、餘裕のない作が多い、其缺點が一面又『收穫』の長所で、然う云ふ「言ひ切つた」と云ふやうな歌は從來の歌人の作には餘り無かつた、其處を『收穫』が充たしてゐる。

『收穫』の歌の八九分までは女性を對象とした戀の歌であつて、多く讀んでゆくと、殆んど優劣を判じかねぬやうになる。作者は個性を重んじてゐるから、凡ての作に主觀的色調を帶びてゐるのは勿論だが、技巧に於ても、比較的文字の使ひ方が單調である、さびしとか、かなしとか、にくしとか、なつかしとか云ふやうな言葉が續けさまに出てくるのは、偶ま一卷の歌集とした場合に、少しづゝ發表された時よりも凡てを見劣りせしむる一つの原因ではなからうか。

一讀してゆくうちに、感動を與へられた歌を少し擧げてみよう、前に云ふ如く、戀愛又は女性を中心とした作が『收穫』の生命であるから、自分が拔く歌もそれが多い。

君ねむるあはれ女の魂のなげいだされしうつくしさかな
うつりゆく女の心しづやかにながめて秋を獨あるかな
またしてもわがまゝゆゑの嫉みごとほとんど君に困じはてける
あくびをばこらへてわれをつゝましう守れる君といかでおもはむ
くちづけを忘れし人はさびしげに一人しごとの針はこぶかな
木に花咲き君わが妻とならむ日の四月なか〳〵遠くもある哉
いくたびか君をあやまち傷けしそのはてにして別れむとする
わがまゝはすまじと昨日ちかひしを忘れし人の憎からぬかな
みづからをいたはることの愚さにおちなむとするあはれ女よ
やはらかき女の唇の印象のさりがたき日の心わづらひ
少女らは笑ひてあれば事足れるさまなりあはれ春の一日を
わが胸に其前髮をあてしまゝ妻となる子は泣きねいりする
去年よりは顏もかたちもわが思ふ姿に近く君なりにけり
いつはりの涙なりともにじみこよ命死ぬべく君の泣けるに
いかにしてかくはぐれたる心とはなりにけるかと君をながめぬ

君をはなれ窓にもたれてたそがれの街をみてあり歸らばやと思ふ
わかれきてほと息つきぬおのれたゞ一人となりし心安さに
わが電車今宵も君をおきざりに風吹く街を能く走るかな
なずまゝになりし此日の君おもふこの春雨の朝こゝちかな
みなほせど溺れし故にあらじかと思へど君は美くしかりき
とある夜のめさめしときにかたはらに添伏す君のなかれとぞ思ふ
かわゆさに餘りてなるや故もなく君を憎むに心つかれぬ
此二人つなげるものの涙にはあらじと知りし心さもしさ
飽足らぬ女なるかな熱ずるといふこと知らずたゞにやさしき
妹とすべきか妻となすべきか若き一人をえてまどひけり
若き子よ妻とよばれむ願ひの日まてるがよくも眼に見ゆるかな
山みれば山海みれば海をのみおもふごとくに君をのみ思ふ
はてしなくかゝるおもひの君にのみたくられをらば命死ぬべし
人戀ふる血汐はわかき男のみうけしや春の夜をひとりぬる
わが性に早くもうつる人をみて捨つる心のふときざしける

以上の作は、『收穫』の中でも、何處となく注意を惹くに足る作で、前に云つたやうな缺點もある代り、直情徑行の作もある、他の及ばない思ひ切つた露骨の感情が、却つて多大の刺戟を與へてゐる。

戀の歌、女性の歌が、『收穫』の大部分であることは勿論だが、外に『收穫』の中には、青年の生活と云ふやうなことが歌はれてある、生活の疲れ、疲れから起る嗟嘆の聲、蕩漾の叫びが、矢張作者一家の歌風に依て表はされてある、多くはないから、其中の佳作と覺しきものを數首拔いて見やう。

魂よいづくへ行くや見のこしゝうら若き日の夢に別れて
垢づける蒲團の上におほいなる蟲の如くもまろびねにけり
あたゝかき血汐のなかに流れたる命戀しき日となりにけり
おもふまゝなすべきことをなしはてし後の心のさびしくありけり
昨宵のまゝとりちらされし曉の座敷の隅に物をおもへり
ておひたる獸の如く夜ふかくさまよひ出づる男ありけり
あぶら浮きし手と手握りてわが友と別れぬほこり風吹く町に
來しかたも來しかたも亦美くしき僞りなりきうら若き日の
夜の街つめたき眼して電車まつあまたの人の背に立ちしかな

青春の生活に伴ふ哀愁は、痛切に響いてゐる、此外終に於て自分は『收穫』の中から天然を歌つた作を見出さうとしたけれど、殆んど一首も無いと云つて宜いくらゐで、假令自然を歌つても、其處に作者の主觀、戀とか、生活とかの想ひが必ず加はつてゐる、單に天然を天然として歌つた作は殆んど無い、作者の立脚地作者の傾向からいへば、然もあらうと思はれる。

其乏しき中から、比較的自然を題材とすることに重きを置いたやうに見える作を少しばかり擧げて見よう

此中にも作者の純なる人格の表はれたものがある。

卵一つありき恐怖に包まれて光冷たき小皿の中に
鳥は空にうたへりわれはふるさとにかへらむとする日の似たるかな
何となき心だのめや春の鳥來てはなくなり如月立つ日
馬といふ獸は悲し闇深き巷の路にうなだれてゐぬ
風秋となりて心は水涸れし沼へかよへる路をのみ思ふ
やゝ痛きこゝちをおぼゆつかれたる額にさしくる夏の日のかげ
海あかり渚のかたに砂山をくだりぬ心鉛のごとし
濠端の電柱にもたれ春の夜の空の下なる人となりけり
風暗き都會の冬は來りけり歸りて牛乳のつめたきを飲む
うら枯れし一面の野に降りそゝぐ日光を見る人々のかほ
受話器とるあまりに遠き海の音の君が言葉に交る心地し
マチすりて淋しき心なぐさめぬ慰めかねし秋のたそがれ
をりをりは別れ話も交る夜の氣まぐれ心こほろぎをきく
秋の朝卓の上なる令器らにうすら冷たき悲みぞ這ふ

右の中にもあるやうに、自然が其題材となつても、春とか、秋とか云ふ言葉だけあつて、殆んど自個の感傷が歌の全部を占めた作なら、猶澤山にあつた、けれども其は作者が自然を愛するといふことにならない。

要するに『收穫』一部は、青春の詩人が、戀の自傳を語る痛はしき紀念であつて、純粹なる若き日の藝術であると思ふ、而かも其れが理智の陶冶を經たるものがあるだけ、なほ現代人の表白として、新しい印象を與へるものであらう。

『黎明』

歌集『黎明』は十月會の歌を集めたものである、水野葉丹、窪田通治を初めとし、青年歌人約十四名の歌がある、青年諸君の中では、宗耕一君の作が情味があるやうに思ふ技巧の上手下手より眞誠の氣の溢れた作は心持が好い。それから女性の會員で石井貞子がある、此君の作も此うして男性の中へ交へてみると、はつきりと女らしい特色が際立つて目にみえる、岡田道一君の作は瀟洒にして邪氣がない、其外半田良平、松村英一、田中完治などの諸君の歌にも好い作があつた、左に少しばかり抜いて置く。

○

清白の青むそれよりうら若き心かへりぬともしびみれば　宗耕一

○

わが心絕えずさびしき方にのみ涙たれてはものをいふかな
二月のひる一葉の芽すら持たぬ木の立てるをみつゝ心はるけき　岡田道一

○

大江戸の晝の賑ひ賃金を使はむ人も戸まどひけり
われ誰ぞやわれそもたぞや日を夜を死に對ひゐて禱るともせぬ
隣にもいねぬ人あり雨つゞき一夜を姉と若菜集よむ　石井貞子

抒情詩

森川葵村

☆

四月夜の林間に、
海底のごと空氣は和み、
巣籠れる鶯の、
脈搏てる胸毛のぬくみ。

月光に
木々の葉は白う蒸されて、
落ちかゝる細かき影は
いと纖きレースもて
二人を包む。

君がかたへに、
わが魂は
小やかの「かなしみ」の
薄らなる模様に
包まれて、
半ば眼を瞑ぢてあり。

☆

別れきて、吾ひとり
譯知らず泣きくづをれぬ、
暮れかゝる水のほとりに。

君が前にて
華やかに裝ひしわが魂は、
とみに頽れつ、

心ゆるびし
河骨の花のごと、
泣きくづをれて
灰色の水の底へと沈み行く。

家

土岐哀果

五月の夜そのしろがねのごとき夜に何ごとも告げず死にたる少女

野おくりのゆうべの車われもまたそのひとつにし乘りてありけり

六月の青き白日の火葬場の石だたみには立ちてありけれ

廣廂しめりて暗き古家に生れて死にしひとりの少女

悲しきときその白髯の日光のごとくふるへてもの言はぬ父

あはれ母よ父がいまはの枕べに男といへばわれのみなりき

わが家の貧しきときに生れあひてよく病みきてふ兄も老いそめぬ

夏の夜にをさなき聲の唱ふうた涙さしぐみつ聞きてありけり

螢來よ螢來よわれにかへり來よかの幼き日をさなき心よ

このゆうべ甥のおもちやの狐面なみだ浮くまでなつかしきかな

あはれよく肖たまへるかな父君にといふを聞くも悲しかりけり

おだやかに上野の山の杜かげに妻と住へり蓮はなさく

ものをおもふふと心づけばかきならしかきならす灰のにほひの寂しさ

妹

水島尺草

お玉は今日も亦、妹のおすゑを大切さうに脊負つて稻苅の濟んだ淋しい畦路を、痛々しいやうないつもの調子で、子守唄を唄ひながら、遙な杜の梢を染めてゐる夕燒の空を、茫乎として眺めてゐた。

『坊や、お母さんのところへ行かうか。』

と脊に負ふおすゑに言つたが、おすゑはまだ返事の出來る年齡ではなく、姉のお玉の髮の毛を、無心に摑んでゐた。

『お墓へ行かうねえ、又お母さんの處へ行つて見よう。』

とかう獨言のやうに言つて、淋しい畦路を、二三丁離れた天然寺といふ墓地に、急ぎ歩で行くのであつた。

天然寺の墓地には母の墓がある。その墓の前にいつも夕方になると、必定妹のおすゑを脊負うて行くのが常であつた。

今日も亦、お玉はさうして母の墓の前に來たのである、高く盛つた土の上に、まだ新らしい墓標が、夕暮の薄暗い木の下に、はつきりと立つてゐる。きのふ手向けたばかりの藤袴や葉鶏頭などの、まだ活々としてゐるのを拔き取つて、傍の叢に投げ捨てて、菊の花を手向けた、そして叮嚀に頭を下げるのであつた。

『あゝお母さんは、この土の下にゐるのだ、何故人は死ぬのだらう、』

とふとお玉はかう思つた。

死ねば何うして土の中に埋めて了はなければならないのだらう。笑つてゐる人も、泣いてゐる人も、金持ちも貧乏人も、この世に生れた以上は、必定死んで了ふものだ、死ねば誰も皆土に埋められなければならない一體死んだ後は何うなるものだらうと、かう思ふと不思議で堪らなかつた。そしてお玉は、子供心にたゞ生きてゐるといふ事が、何んだか恐ろしいやうな氣になつて來た。

ふとお玉は、鎭守の祭禮で見たからくりの地獄極樂の有樣が眼に浮んだ、あゝいふ風なものが、死んだ後に有るとすれば、お母さんは何處へ行つたらう。私にもおすゑにも優しかつたお母さんだもの、必定あの蓮の花の綺麗に咲いてゐる靜かな極樂の方へ行つたに違ひない、そして何一つ不自由なく面白く樂しく暮らし

てゐる、しかし必定、極樂にゐても私やおすゑの事を思ひ出して、嘸ぞ淋しがつて、逢ひ度がつてゐるに違ひない、私もお母さんに逢ひ度い、お墓の中から、せめてお母さんのこゑだけでも聞えたら、何んなにか嬉しい事だらう。この下に、眠つてゐるやうなお母さんが埋つてゐるのだと思ふと、たゞもう戀しい情がむらむらと胸に込み上げて、われ知らず『お母さん、』と呼んだ。その聲が木精にかへして遠く幽に反響した。

お玉はふと耳を欹てた。かういふ場合によく起る疑惑木精が母の聲のやうな氣がして、一種の恐怖を感じたのであつた。お母さんの聲かしら、と思ふと俄かに氣味惡くなつて、戀しいと思ひ乍ら身慄ひをした。しかしお玉はその墓の前を立去らうとはしなかつた。

脊負つたおすゑは、むつかり出して、いくら搖つて賺さうとしても、泣きやまない。

『お乳が欲しくなつたのかえ、それぢやもう歸らう、』と言つたが、お玉は家へ歸らうといふ氣には何うしてもなれなかつた。何時までも何時までも、この淋しい母の墓の前に居たかつた。

お玉には新らしい母があつた。新らしい母、言ふまでもなく繼母である。しかし繼母はお玉に親切であつた。それにも拘らずお玉は、その新らしい母を何故か嫌つて、少しも親しまなかつた。

青い眉の印象 四



そんな風で、繼母に對して絶えず僻見根性を抱いて疑つてゐる。それに引替へておすゑの方は、よく繼母に馴染んでゐる。隨つて母の方も自分の子のやうに可愛がつてゐるのだが、それがお玉には何んとなく妬ましくてならないのだ。

繼母といふものが、一種の慘酷なものゝやうに思はれるお玉には、おすゑを可愛がつて自分の子のやうに取扱ふのが、不安で堪らないのである。表面ばかり可愛がるやうに見せかけて、かげでいぢめてゐるのではないかなぞといふ、妙にひねくれた心を持つてゐたから、おすゑが繼母の手に抱かれてゐて、たゞ泣いた時でさへ、何か繼母がひどい事をして泣かせたのぢやないかといふ猜疑心が直ぐ起る。そんな風でお玉は成可くおすゑを繼母の手に渡すのを好まなかつた。だから夕方になると、おすゑを繼母の手に渡して了ふのだと思ふと、何とも言へぬ心細い氣になつて、一刻も遲く自分の脊を下ろさうとして無暗に歩き廻る。そしてただ自分が守りさへしてゐればそれで安心してゐるのだ。だから朝から晩まで、妹のおすゑを脊負うて外にばかり出て遊んでゐた。

ねん〱よ、ねんねしな
私と坊やと、二人して
山で寢る時や、木の根が枕
落つる木の葉が、夜具となる
ねん〱よ、よい兒だよ

むつかる妹を搖り乍ら、淋しい聲してお玉は又子守唄をうたひ初めた。そして夕闇の畦路を、俯向きながら進まぬ歩取りで辿つて行つた。

夫婦喧嘩謹聽記

江湖生

さあ大分形勢不穩になつて來た。

斯くあらうとは、聊か思はないでもなかつたのだがあゝ今更致し方も御座いませぬ。今晩も亦謹んで拜聽しなければならぬ。決して人惡るに好んで聽かうとするのではない、實に餘儀なき破目なんで僕は其の二階に置いて貰つて居る爲めに、馬鹿〱しく下らない喧嘩を見せつけられる、イヤ見ると云ふよりも單に聞かさるゝのだ、初めの程は自分の樣な無精者も、驚きの餘り鞠躬如として仲裁を試みたが、案外他愛もなかつ

た、爾來その場合には屏息して敢て出ない事にした。若武者程あつて戰鬪はいつも猛烈だが、大抵迅雷のはためく如く、驟雨一過すると天氣はよくなつて了ふ。失敬な言分かも知らんが、さう云ふ時に自分は如何にも第三者の地位がハッキリ分つて來て純乎たる理性的の頭腦になつて來るのである。

時々戰のあとに下りて顔を見る事もある、蒼い顔の主人公は眉目の邊にピリピリと痙攣を起して居ることもある、細君の方は、なか〱にいゝ血色になつて、大きな目のところを變に滲ませてゐる、そして二人とも濟ました顔して居る。



この兩人の關係は、よくは知らぬが、或る私立大學に在學中の主人公と、某女學校寄宿の細君とが、自由戀愛の結果、エンゲージメントとなり、進んで結婚となつた、極めて新時代の理想に叶つた現實生活に外ならぬ、内容形式共に皆新らしい、主人公が權力を振り廻すと、ノライズムを奉ずる細君も亦堂々として其權利を主張し

て下らない。のみならず、どうやら此のホームを維持するに就いては、細君の方が與つて力あるものの樣だ。

主人は何處かの通信社に勤めて居る、いつも爭ひの起りは、主人公が夜遲く酒氣を帶びて歸ると云ふ點にある、それで無くば朝寢してるのを起す時にある、其れが牽連して夜の役となり、もりかへして朝の陣ともなるのである。

今夜も十二時をうつて、しばらくして歸つて來た、大分戶を叩いた。細君は起きて居ながら開けて遣らぬ。表では下駄で戶を蹴り出した、やつと冷たい返事をした、荒々しく開く音がした。プイと顏を反けて立つて居る細君の樣子が睹える樣だ。

『あゝ寒い、外は雨だよ』

『へエ、さうですか』

『あゝ〳〵』と欠伸『寒いねえ、湯は無いのか、オーヤ〳〵火もない、お前寢てたのか』

『もう夜半ぢやありませんか』

『夜半だつて歸つて來たら飯を喰はぬと決つて居はせん、飯を出せ』

『また醉つてらつしやるのね、何處へいらつしつたのです』

『何處へ？へ、何處と云つた處で、容子のわからない人にはお話しも出來んよ』マッチを擦つて居る。

此の邊まではまだよかつた、が、いかにも屹となつたらしい細君の金切聲が聞えて、

『あなたは那麼勝手ばかりして……家庭と云ふ事にもちと重きを置いて下さい』しかし主人公は猶ほ泰然たるものらしい。

『社會が俺を要するのだから仕方が無い、家庭なんてものは、さうして疲れて歸つた時の休息處なんだ、其の外に何等の意味も無い、それに何だ、火も無ければ湯も沸いて居らぬ、それで家庭に重きを置けもよく云へた』

『勝手な事を仰しやるなよ、其れなら其れで出かけに云つて置くとか、一旦歸るとかするのが、家庭の神聖を擁護する途ぢやありませんか』細君の聲はピリ〳〵振へて居る、かくて風雲は急になつて來る。

『小言を言ふなら云ふ丈けの事をしとけよ』

『……馬鹿〳〵しい』

『馬鹿〳〵しいたあ何です』ずは霹靂一聲……

『私は何でもかでもハイ〳〵と云つて居る樣な從順な眞似は出來ないの』

『何だと』と云つたが、何處となく倦怠を帶びた調子であつた、密雲不雨と云つた處。

『オイ火を起さないかよ』煙管を叩く音が荒々しい。

『炭だつて、ついでは絶やしついでは絶やし何遍しました、炭屋にだつてだん／＼多くなります、あなた此月の拂ひはい丶のでしようね、私もうそんなに頭下げて斷りなんか、ようしなくつてよ、豫めお斷り申しときます、其のおつもりで耽溺でも何でも遊ばせ』といかにも調子が毒々しい、

『貴樣は俺を侮辱するか、俺を誰だと思つて居る。。。。』山雨欲來……の概！

『あなたはあなたです』と分らぬことを冷かに云ふ。

『然り』と勢込んで云つて『我は汝のハスバンドである、ハスバンドと思ふなら何故に其の樣にして仕へないのか』

『イヽエ其の事ぢや無くつてよ、ホヽお氣の毒樣、あなたはあなた、アイ、アム、アイです』イヤ事は愈々難かしくなつた、あ丶禍ひなるかな、賢き現代の女性と、自分はよそながらはら／＼思つた。

『何を生意氣ぬかす』つき倒したやうな音。

『あなた××さんでしよう、××さんなら私にそんな事は出來ますまい』と急きながら憎さげに、而してしぼるやうな聲。『何を云ふか貴樣は』ドタン、バタン、と四壁を搖すつて酣なり白兵戰……吁落花狼藉。

『ヒーッ悔やしい惡魔のやうな人……初めから私は騙されたんだ……』と昂ぶつて言ふ事が聞えたり。聞えなかつたり。『女なら女らしくせよ平素からの心得がよくない、餘り口が過ぎる』……私はもう貴郎と同棲は出來ません、こんな壓制が……』と泣饒舌る。

『ガブリ／＼と湯を飲む音……私は眤と洋燈の下で胸に浮んで來る川柳を樂書した『あんにしろ鎌を放せと庄屋わけ』『をかしさは夫婦喧嘩を狆が吠え』『去狀のそばを轉がる火吹竹』などそしてア丶／＼と大きな欠伸をしてやつた。欷歔の聲はまだ外の雨垂と同じ調子でポツ／＼する、時々投出すやうに何か言ひ合つて居るがもうよく聞き取れぬ聲になつた、煙管を叩く音が高い、其うちひつそりと聲を收めて了つた、どうかして死んで了ひでもしたんではあるまいか、心配なやうにも思つて、ソーッと上り口から覗いて見るともう眞ッ暗何だ馬鹿／＼しい。

其れでもまア案外早く收まつて宜かつた、明朝搖りかへしが來ねば宜いが。――チンと一時が鳴つた。

he was going to do, he had shouldered the trunk, and was downstairs and striding out of the yard. Down the street he went, as fast as his long legs could carry him, she trotting behind, drying her eyes as she went.

They reached the station in time. Lincoln put her on the train, kissed her good-by, and told her to have a good time.

This was a little, but kind deed done by the great man, who became afterwards president the of United States.

少女がまだ能く其意を合點せぬ内に，はや革櫃を肩に擔ぎて階段を下り庭外に歩み出で，脚に任せて疾く疾く街路を進み行きければ，少女も眼を拭きつゝ其跡より伴ひ行けり．

かくて兩人は時刻に遲くれず停車場に着しければリンコルンは少女を汽車に乘せ，左樣なら御機嫌ようと別れを告げぬ．

是れ瑣細なれども親切なる行爲にして，之を爲したる偉人は後年合衆國の大統領と爲りし人なり．

HUMOURS.

Little Hana had just returned from the first party she had ever been allowed to attend. Anxious to know if she had maintained the family dignity, her mothir questioned her concerning her behavior: "I hope that you remembered to say, 'No, I thank you' and 'Yes, please,'" said the careful parent.

"I said, 'Yes, please'; but I didn't have to say, 'No, thank you,' because I took everything," was the artless reply.

滑　稽(二則)

花子が生れて初めて或宴會に招かれてから歸て來ると，一家の品格を落さない樣な擧動を爲したかどうか知りたいと思つて居た母は早速（お前は「イーエもう要りません」とか「ハイ戴きます」とか云ふ言葉を覺えて居たらうねー）と聞きました．

すると，「ハイ戴きます」とは言ひましたが「イーエもう要りません とは言ひませんでした，出る品は何でも皆食べたからです」と，飾り氣なく答へた．

DOCTOR AND PATIENT.

"You need exercise," said the doctor to a dyspeptic patient, "and particularly walking; now what is your occupation?" "I am a letter-carrier, sir" said the patient.

醫師—消化不良の患者に向ひ，「お前は運動が缺て居る，殊に步行しなければいかん，してお前の職業は何だ」
患者—「ヘイ私は郵便配達です」



英文

(第六年第五回)

星野久成

A KIND DEED.

The habit of doing a kind deed every time he had a chance to do it was early formed by Abraham Lincoln.

Once there was a little girl in Springfield, who was going with a little friend for her first trip alone on the railroad cars. It was an epoch in her life. She had planned for it and dreamed of it for weeks.

The day came, but, as the hour of departure approached, the hackman failed to call for her trunk. As the minutes passed she realized with grief that she should miss the train. She was standing at the gate with her hat and gloves on, sobbing as if her heart would break, when Lincoln came along.

"Why, what's the matter?" he asked.

"The hackman has not come to get my trunk," she replied.

"How big is the trunk?" he asked. "There's time enough if it is not too big"

He pushed through the gate, and her mother took him up to her room, where her little old-fashioned trunk was waiting.

"Oh, ho!" he cried, "wipe your eyes and ome on, quick." Before she knew what

親切なる行

アブラハム，リンコルンは若年の時より親切なる行を爲すべき機會ある毎に之を爲すを習慣としたり．

嘗てスプリングフイールドに一少女あり，只獨り年若き友と共に始めて汽車に乘りて旅行せんとしたり． そは此少女の生涯に於る一紀元にして，數週間此が爲めに工夫を凝らし,之を夢にも見たる程なりき．

愈々當日となり,出發の時刻近づきしも，貸馬車の馭者は少女の革櫃を取りに來らず，時間は刻一刻と移り行きければ，少女は汽車に乘り遲れんかと思ひ悲みに沈みぬ．少女は帽を被り手套をはめ門側に立ちて，胸も裂けんばかりに啜り泣きけるが，此時偶々リンコルン此處を通り掛り．

リンコルン「オヤどうしたのです」

少女「馭者がまだ革櫃を取りに來ないのです」

リンコルン「革櫃はどんなに大きいのです，若し大き過ぎなければまだ時間は充分あります」

斯くて彼は急ぎ門內に進み入りしに少女の母は彼を少女の小さき舊式革櫃の在る室に案內しぬ．

彼は「アヽ，ソラあなたの眼を拭いてこつちへいらつしやい，速く」と叫びながら，

日記より

醉茗

私は子供の時に人間が嫌ひであつた、文學は自然を讃美するものだと許り思つて、逐に文學に無上の權威あるかの如く思ひ、文學と手を握つた、併し時代は一轉した、人間が嫌ひだなど云ふものは舊時代の人として取扱はれるやうになつた、其の癖が脱けかねて、何うかすると人間を捨てゝ、自然に親みたくなる、淋しいことは知つてゐる。

私は澄ましてゐるのではない、飛躍し、絕倒することが出來ないのである。

停電したる電車の姿を見ると、此世に動く必要のない淋しき人の生活を想ふ。

人を訪問するのは雨の日が宜い。しめやかに話すのも雨の日が宜い。

所謂美人には劍難の相ありとは、吾豫ての持論であつたが、今に其持論を變更する機會に接しない。

何んなに烈しい官能的の詩を作る人があつても、それが藝術的に價値のあるものなら、其作者は讀者よりも性慾には動かない人であらう。

西洋花を日本の土で養ふことは、甚だむつかしい技倆がいる、飜譯のおもしろくないのは尤もだと思つた。

若い間は歌ふ時だ、若い間から詩より散文が好きだと云ふやうな人は、女性であつたら感情の乏しい人であらう。分つても、分らぬなくても、若い間は詩歌にチャームされなければならないのだ。

今年の夏は山に登りたい、今年の秋は野を歩きたい。

詩歌に於ける森林は神秘の象徵のやうになつたが、日本には眞に森林らしい森林が乏しい、詩人の爲に一つの不幸である。

雲の繪葉書をだいぶ集めたが、多くは寫眞版だから自然の形は表はれてゐても、色彩や光澤がないから、聯想で愛翫するに止まる、形に於て最も自然化してゐる日本の塔の・繪葉書を此次に集めてみようと思ふ。

『都會の婦人』に於て、若い女の美しいシーズンは春の終から夏へかけてだと云ふことに、殆ど一致してゐる、自分も此意見に一致する、如何にも肉體の美と衣服の美とが調和するからであらうと思ふ、自分には今一つ夏の女を美しいと思ふ點がある、それは着物の薄いことで、自分は八重の花が嫌ひで、一重の花が好きだ、其如く、冬に於て澤山衣服を着こんだ女を美しいと思はぬが、僅に一枚位着た姿が最も美しい衣服の地質、縞又は絣の技巧、帶の模樣や色彩との配合、それらを調和して、淸らに見えるやうに裝ふことは、若き婦人達の心得にあるだらう。



短篇小説

水野葉舟選

○第三者の男（天賞）

四谷區 大庭眞子

知らず〳〵の内に随分、御無沙汰してゐましたわね、勘忍して頂戴な、でもね、今日は明日はと朝に夜になる毎に思ひ出しては筆を執つて見たんですけれど、さて書かうとなると、種々の事が一緒に彼方からも此方からも筆の先に集まつて了つて、何から書出していゝのかさつぱり見當がつきませんでね、少時、じつとして考へてゐるの、さうやつてゐる間が長くて、何時もそれなりに流れ〳〵來たんですのよ。今日は朝から何うしたんだか是非、葉書にしろ一度は書いて、差上げねばならぬ様な氣がして筆をとりましたの。

元よりあなたからお手紙を戴かうとは夢々、思つてゐません、横須賀へ行つた先でもそして此處へ來てからも一度も私からお便りしなかつたんですから、住所もお分りにならなかつたでせうし、それに――もしや、あなたはおこつてゐらつしやりはしないかと、私、そればかり心配でなりませんわ、實は怖々書いてるんですのよ、女の弱い心を憐れんで下さいましな、ね、私もこれからは澤山書く心算なんですの、きつかけさへしておけば後は樂なんですもの、だからあなたも可成、奮發して頂戴よ、お厭でせうけれど――。

どうせあなた方とはこの先き短かくても二三年はお目にかゝれまいと思ふの、貴方の方から態々、來て下されば格別ですが迚も私から近い内に東京へ出るやうな時があるまいと斷念めてゐますわ、そちらから二十五哩

强、汽車で五時間もかゝらないで來られるの！

野田さんの下宿でお別れしてから、もう今日で丸七十日、横須賀には四十日ばかりゐました。商賣が思ふやうにゐかないとかで、姉が其處を引拂つて、此處へ落延るについて、私だけでも、も一度、東京へ出たいと切りに言つたんですけれど到頭、説伏せられて、こんな片田舎に引込んで了ひましたわ、何處へ行つたつて同じ事です、殊に商賣の爲なら横須賀の方が何んなにいゝでせう、私の口から云ふも變ですが彼處なら軍港のある處ですし、軍人の出入が多いんですもの、夏や冬になれば東京邊からも學生が出懸けて來ると思ひますわ、それを考へると何故、こんな處へ引込んだか姉の心が私には分りません。最も停車場の直ぐ近所ですけれども、こんな小宿場の客なんぞを相手にしてゐたんでは何時になつたら浮ばれるんだか末が見透されないわ、私も一生こゝで埋れて了ふんでせうか、私は今年、十九になつたばかりよ、厄年だわ、東京にゐたら何んなにいゝでせう。

四丁目の觀音さんや、一ッ木のお地藏さんが戀しくてもう一度あの縁日の活動寫眞に這入つて見たいわ――わづか二た月か其處等ですけれど隨分、青山の邊も變つたでせうね、美薫堂のお友さんは矢張、何時もの店にゐて？、あんまり彼處へ行かないで頂戴よ――よくつて、私の心が分つて？

二丁目の木下さんは此頃何うしてゐて？　あの方の浪花節は今も評判なの？　厭ね、學生の癖に浪花節なんて――あなたの琵琶を久し振できゝたい。

この節、溜池へ行つて？　何がかゝつてるの、矢張、壽美藏、權藏の手合でせう、私、あの、そら、何時かの壽美藏の敦盛ね、あれが何うしても忘れられないわ、あの時もさう云つて、あなたに笑はれたけれど本當にいゝと思つてよ、だけれど隨分、骨が折れるでせうね、あれだけにやるのは中々の事よ、もう一度あの芝居が見たい、あゝ、もう一度、東京の土を踏んで見たい。

（この手紙は誰にも見せては厭よ、野田さんには猶更ね、もう手紙でなら何も彼もお話して了ひますわ、だからこの手紙は貴方だけよ、よくつて、死んでも明すまいと決めてゐた事をお話するんですからね、もし他人の眼に這入つたら私、あなたを呪つてよ、呪ひ倒してよ、よくつて？）

家ではね、お客と云ふと、極つて、驛夫なの、それ

だつて、お客つて云ふお客ぢやないわ、まあ遊びに來るやうなものなの、此處は急行や直行列車の通過驛ですしそれに乘客だつて、一日、數へる程しかありやしないんですもの、本當よ、だから驛員なんか毎日、暇なんですの、ストーブを圍んで冗談話に倦んで來ると直に二三人ひと塊まりになつて、遊びに來るの、姉があゝ云ふ人だから愛想よく浮々して冗談の一つも云ふでせう、だもんだから餘計に蒼蠅いのよ、私だつて、傍にゐりや默つてもゐられないから矢



（天賞）仕事　　若松市　佐野貞子

張、話相手にもなると云つた風ですしね、それに姉が成可、さう云ふ樣にさせるんですもの。

田舍の人なんかを相手にしてゐたつて、始まらないわ、私、つくづくさう思つてよ。（私も此節は東京にゐた頃と大分、變つて來ました、何かにつけて、思ひ沈むやうな時がよくあるのよ。）

何とか彼とか云つてる間に、妻になり、母になりして、この土地で老い込んで了ふかも知れないわ、姉が動かなければ私もこゝから一歩も踏出す事が出來

ないんですもの、だけど今ぢやもう大概。あきらめてゐるわ。

　こんな狹臭い田舍でも、幾らかづゝ、目にたゝないで心を慰さめて吳るものもあつてよ、(無論、人とか何とかぢやないの)だけど風俗が惡いんでね、何處へ行つてもこれはあるものね、此處はまた此處の習俗が生んだ淫らしい事などをよく聞き出してよ、何うしても矢張、驛夫とか一寸した工場の職工とかがおもだわね、だのに姉なんか、そんな事には一向おかまひなしかへつて、私を客相手にさせる樣子があり〳〵と見えてるわ、何う云ふ氣でそんな事するんだか少しも私には分らない、だからもう何も彼も仕樣がないと思ひ決めて、姉のいゝ樣に、客のいゝ樣に自分の體を盲從させてゐるの、でなきやあ仕方がないんですもの。

　それでね、お話つて云ふのは大事な事なの、お賴みがあるのよ、きいて下さるでせう、私は顏を赤くして、心を冷笑しながら正直に書くわ、だから貴方も是非、その心算できいて下さい。そして、憐れんで下さいまし。

　但し誰にも內證の事よ、願ひます。

野田さんには猶更ね。

　この間の孝明天皇祭の日に今年の爲收だと云つて、野田さんの下宿で歌留多をとつたでせう、あなたも來てゐらしつたわね、(あの時は大變、失禮しました、お許し下さいね、つひあんな事も云つて了つたのよ)

　それにあの日、私、何うしたつて云ふ事なんでせう、無暗に浮れて了つて――感興と云ふものでせうか、獨りで騷いで皆樣、御迷惑でしたらうと思ひますわ、それはまあいゝの、であなた方は歸つて了つて、一緒に歸る約束をして、あとにお友さんと私とが殘つて了つたのよ、で歸らうとすると野田さんが切りに私をとめるの、片方ではお友さんが忙き立てるでせう、困つて了つてね、それに氣が大きくなつてゐるものだから到頭、お友さんに一と足先きへ歸つて貰つたの、あの方にはそれきり會はず了ひになつて了つたんですけれど、きつと、氣を惡く廻したに違ひないと思つてるわ――そして、室中取亂れた中に野田さんと二人切りになつて了つたの、それでも私、氣が付かなかつたのよ、餘程、あの時は何うかしてゐたわ、今、あの時の野田さんの顏を思ひ出すと身慄ひが出てよ。あの大きな眼の光りが何とも云へない輝きだつてよ。

野田と云ふあの人は本當に怖ろしい避けるべき人です、惡魔のやうな人です、饑ゑた猛獸です。けれど其頃は、東京にゐる間はさう大した悲しみもありませんでした。横須賀へ行つて、初めて、惡魔のやうな人、怖ろしい人だと云ふ事をしみ〴〵感得したんです。

あれから丁度、今日で二た月餘りです、今の内はまづいゝとしても、さて、何うなる事でせう？　何うなると云つて、萬一の時には迚も私一人で解決出來ないわ、と云つて、野田さんなんかを信賴してゐられないわ。

あの人は實に何と云ふ人でせう今になつて染々さう思ひますわ、愧かしくて、こんな事を貴方のお耳に入れたくはないんですけれど止むを得ませんもの、自分と云ふものに未練があつて、不安のない樣にしておきたいと思ひます。

あの人とは其歌留多の晩が永の別れになつて了ひました。それから四五日して、手紙で詳しく始末を書いて、是非今日か明日かの内にお目にかゝつて、お話したいと云ふ事や新橋を立つ時日まで書添へて、間違なく遇つて下さいと呉々も賴でおいたんですよ、それに遇つて呉る所ろが新橋を立つ時だつて、時間の迫つてゐる所ろを若しやと思つて、人込の中を彼方此方と探し歩いたんですけれど到頭、ゐませんでした。それで横須賀へ行つてから僅か四十日許りに長い手紙を何本書いたでせう、何と葉書一本の返事を貰つたでせうか、私はそれを考へると本當に口惜しくてたまりませんわ、それだけならまだいゝとして、實は昨日、お友さんから手紙が來たんですの、そして、かう云つて來たわ。

腹が立つてたまらないの、私――

（尤もお友さんはこの出來事を知らない樣です）

貴女のハス（ハスだつて、あんまりだわ）とは此の節ちつともお目にかゝりません事よ、けれどあの神山のお民さんの話では××の學生で吉永とか云ふ人と一緒に歩いてゐる所ろを度々見かけるさうよ、その方はね、髮はいつも島田なんですつて、それでちよつと見ると何處かのお孃さんには違ひありませんが華族のお姬樣のやうな服裝をしてゐるんですつて、家は霞ケ關の邊だとか云ふ事です、けれどこんな事は野田さんには默つてゐて頂戴ね、手紙なんかに書いちやあ厭よ――

かうなんです、何うしたもんでせう。その吉永とか

云ふ女の顔を一度、見てやりたい。顔へ唾でも引つかけてやりたい。私が自由の體なら直ぐ東京に飛んで行つて、かう云ふ手段で復讐してやりたいと、かう思ふわ。

あの人もあの人ぢやありませんか――だけどまあ何んな顔でそんな女を引張つて、便々と歩いてゐられるでせう、散々、弄んで揚句には泣かして、突離した自分の女が遠い山の中に日の目も見ずに苦しんでゐるぢやありませんか。何うしたつて云ふんでせう？ 男つてみんなさうしたもんでせうか、女はいつも負けるものでせうか、負けなければならぬものでせうか。

あゝ何う書いたら今のこの私の胸がさつぱりするでせう？ 唯、口惜しいんですわ、殘念でたまらないんですわ、――苦しいんですのよ。

東京にゐた頃、何故もつと肉迫してやらなかつたでせう、割合に平靜な、そして敢てあの畜生に憎みを感じなかつたのか不思議ですわ。

河田さん、私の心が分つて？

今まで書いて來たこの苦しい心を汲んで呉れて？

私は本當に悲しいんですよ、東京にゐた頃の私とは丸で變つてゐますよ、肉身の姉にさへ明せない私の一生の悲哀です。

どうか、私を憐れんで下さいましな、そして思召があつたらあの人に當り觸りなくあの人の心持をきいて下さいませんか、決して私からかう云ふ手紙を受たと云ふ事はお洩し下さいますな、猶この出來事に就ては丸で何も知らぬ風をしてゐて下さい。どうぞお頼みします。

悲しくつてなりません。店を閉めて、姉が寢んでから、こつそり起きて、隣室で物音に一々氣を配りながら書いて來ました。

字句の不明瞭な個所も尠なくないと考へます、どうぞ判讀を願ひます、そして、御返事を悲しい苦しい思ひで待つてをります。

勝手な事ばかり申上げて、誠に〳〵相濟みません、お許し下さいまし。かしこ。

大分無駄な處がある。その上、奥までツッコンで書いてない。弱い。しかし上手だ。ともかくも筆にしつかりした處がある。たゞ作者に言ふこの作は規定をあまり無視して居る、それで自分は取らうか如何しようかと迷つた、今回だけはとる事にした。規定は標準だからあまり無視したのは以後嚴格にとらぬ事にする(評)

○雨の夜（地賞）

茨城縣　流水女

昨日からの雨は、まだしと〱と降つてゐる。茫つと煙れる鬼怒川を横手に見た、停車場際の寂びた宿屋の店には、旦那らしいのとお神らしいどつちも四十近いのが話も無くつく〴〵然と座つてゐる、川島馬車がポーポーと倦怠相な聲、近付いてくる、今し鐵橋を渡つた汽車は、ガチヤン……と止まつた、旦那は五分刈の頭を一寸掻いて、さて軒に立つたが誰も來相もしない、忌々しげに舌打ちして「今日も又二人丈か」と言ひながらもとの座に歸る。

庭を隔てた古びた六疊の室には、風呂から出た許の澄子が、時色の細いメレンス帶をキリッと結んで、小さい角火鉢を中に清と座つて白い灰に何か目茶苦茶に字を書いてゐる

「明日は降つても行くんだな」戸口の方を向いて誰に云ふともつかず言ふ。

「ほんとに厭な雨ね」と目は灰に向いたなりに言ふ。

「致方が無い、天が我々を懲らすのかも知らないよ、親を捨てて逃げてきたんだもの」竊見する様に女を見



（地賞）大原女　水戸　玉川すま子

る。澄子の眉はピクリと動いた。
「貴郎つたらすぐ父母の事仰しやるのね、もう私等には親も家も無いんぢやありませんか、過去の事愚圖ぐづ言ふの大嫌！」と激しく言ひ限つたがさうは言ふものの澄子は明日の我身が情無い様な氣がして、つくづくと父母が戀しくなるのであつた。十三になる弟を相手に商賣から百姓から小さい子供の世話迄も一人でどん〳〵遣つてる勝氣な母を思つた、どうせちつとも氣が合はないんだ故、歸らうとは思はぬけど、時々おつと沈んで考ひ込んでる母の顏を思ひ出すと、可憐相な心が浮んできて慰めてやれば好かつたと澄子は心から思つた。
　なつかしい〳〵父にはもう三年餘會はない、寒い新潟縣でどんなに苦しんでゐらつしやるやら、今度の私の事聞いたら、甚麼に〳〵お怒りになるだらう、自分の道樂で俳優などになつて、年中外を漂浪つてなぞゐるが、正直で眞面目な、武士氣質の父だもの、甚麼に〳〵お怒りになるか、上野で別れた時の父の最後の言葉を思ひ出して繰返へした、――もう東京へきて仕舞つたのだから何も言はないが……蛙の子には蛙しか出來ないと國へ歸つてから笑はれん樣にしてくれ、それから喃、身體を大切にして」此れだけだつた、不孝な子！不孝な子！胸で泣いた澄子はもう決して〳〵父母の事なぞ思ふまいと、じつと男の顏を見上げた。
「何を其麼に鬱いでるの、水戶へ行けば二人が食べるに困る樣な事はないよ、駄目だつたら逃げて東京へ行く許りさ」女の物思はしげの顏を見て優しく言ふ。
「えゝ、どうにでも成るわ、成る樣に成るわよ、私もう東京飽きちやつてよ、成たけ水戶でね」莞爾笑つて可愛い眼をする。
「何か面白い話でも仕樣よ、食べる事は水戶へ行つてからでも考へられるから」云ひながら傍に置いてあつた雜誌を取り上げる。
「馬鹿だね、澄ちやんは、昨日一日泣いたんだね、それでも誠があるからだね」と女子文壇の淋しき日を見て笑つてる。
「だつて淸さんなんて浮氣なんですもの、その信さんならまだ宜いは、淸樣ならきつと置てき堀にして仕まふのよ、きつと」きつとに力を入れて無邪氣に笑ふ、スーウと障子が開いて女中がは入つてきた。
「お蒲團をとりませう」と云ひながら押入から唐草模樣のを出す。

まだ十九か廿だらうが、姿なんかかまはない、けどどことなく都を思はせる顔立の女だ、その動作なぞじつと見てゐた澄子は
「失禮ですがあなたお國どちらですの、當地ぢやないでせう」と尋ねる。
「えゝ東京なんですけど……でもねもう田舍の人と同になつて仕まつたんですよ、もう三年も前から居るんですもの」黒目勝の眼でじつと洋燈を見つめて言ふ。
「何だかさうらしいと想つてたの、どうしても違ふは、どうして這麼山中へ來たんですの」三年も前から來てゐるときいて澄子は變な感じがして斯うきく。
「如何してつて、別に何でも無いんですよ、それでもね初めは隨分皆に笑れたんですよ、言葉が違つててねひつて云ふのがどうしても出來なかつたんですよ」
「それでもよく出きる樣になつたね」と淸が云ふ。
「そりや三年も居りますからね、それはさうと明日お立ですか」しき終へて障子の傍へ座つて赤くなつた手を膝の上へのせて云ふ。
「ぶら〳〵して遊んでるんだからいつだつて宜いんだが明日ときめたから明朝立つよ」と淸が云ふ。
「ほんとにね、御兄妹で御旅行してらつしやるつて宜うで在ますね」としんみり言つて赤い帶を見せて靜に出て行く。
澄子は今の女が、何だか自分の運命に似てる樣な氣がして、もしや私もあんな者になつて仕まうんでないかと、床の中へは入つてから後も黒目勝の凉しい眼と赤い帶がどうしても頭から離れなかつた。
淋しい夜は雨垂の音に靜かに更けて行く。

この女の心持――まだすつかり自分を捨てきらぬ心持が感ずる、不安と心細さとは味はれる、が、もつと鋭く冷い心でその底を見てほしいと思つた。そこが不足して居る。(評)

○轉宿（地賞）

信濃　優梨子

此前の日曜に此處へ越しました。
「又春さんは……」と云はないで、何ぞ許して下さいまし。あ、朝から晩まで赤子に泣き立てられては、とても勉强が出來ないんですもの。
「春江さん、貴女は又轉宿なさいましたの」といふ貴女のお手紙を見るのが辛くて、今まで我慢はして居ましたもの、もう堪らなくなつて越したんですから……。
今度は屹度、落着いて居ます。

此處は靜かな好い家です。家族は六十近いお婆さんと義勝さんと云ふ銀行員の息子と、其嫁樣の三人です。下は二疊の取次に、六疊の茶の間と、小綺麗な八疊の座敷、それに南向の小さい勝手がついて居ます。けれども下はさう私に關係がありません。只朝晩御飯を食べに下りるだけです。

私の間は、二階の六疊、南向で明るいのに疊が新らしくて、大變居心地の好い部屋です。是だと綺麗にお掃除する張合もあります。

此家を獨りで掻き廻して居るらしいお婆さんは、一寸目の強いなか〳〵強固した、世話好きらしい人です。

銀行員の義勝さんは、三十を一つ二つ出た位ゐの、それは齒痒ゆい程の默りやです。家に居るのか居ないのか、二階に居ては一寸もわかりません。朝など私が出掛る時、もう出勤したのかと思つて見ると、茶の間の長火鉢の前につくねんと坐つて、默つてぽかり〳〵と煙草を飲んで居ます。

色の白い溫順しさうな嫁樣は、先月とか嫁た許りださうです。初々しい緋鹿の子の手柄を見て、私もさうと思ひました。

夕方、街の電燈がつく頃になると、

「お貞、柴田さんに御飯さう申しておいで」と云ふお婆さんの聲が茶の間でします。するとお貞さんは、とん〳〵と靜かに梯子段を上つて來て、そして皆まで上らないで、

「あの御飯を召し上つて」と優しく云つてすぐ、下りて行きます。

晩はもう、八時頃からそれはひつそりして終ひます。

須美樣！私は是からみつしり勉強します。

＊　＊　＊　＊　＊

今日職員會があつて、少し遲く歸ると、お婆さんは、火の無い長火鉢の前に、むづかしい顏をして居ました「只今、遲くなりました」と私が優しく云つても、何時もの樣に莞爾しませんでした。

私は、什麼したんだらうと思ひながら、其まゝすぐ二階へ上つて終ひました。さうすると、何かぐづ〳〵云ふお婆さんの聲がしました。私は二階から凝と聞かうとしました。と今度は

「どうも申譯御ざいません」と詫まるお貞さんの小さい聲が勝手でしました。後はよく聞えませんでした。暫くすると、お婆さんの聲は普通になりました。そして、

「お貞、柴田樣に御飯さう申しておいで」と何時もの樣に云ひ付けました。屹度、一寸した粗忽を、小言がましくぐづぐづ云つて



（入賞）子守唄　麻布　ゆめみる人

居たんでせう。どうも彼のお婆さんは、一寸した事を喧ましく云ひさうに見えます、私はお貞さんが氣の毒だと思ひまし

た。

＊　＊　＊　＊　＊

今夜は××寺にお說敎が有るつて、お婆さんが聞きに行つて留守です。

私はお婆さんが大嫌ひになまりした。此頃は無闇に、お貞さんに當るんですもの。今朝も何か大きな聲で云つて居ました。

先刻　生徒の作文を直して居ると、お貞さんがとんとんと上つて來て、

「あのお手紙が參りました」と淺黃の封筒を置いてすゞ下り樣としましたから。

「話して被在いなネ、お姑樣はお留守なんでせう」と私が心から優しく云ふと、

「ハア有難う御ざいます」と一寸躊躇つて居ましたがすぐ安心した樣な顏をして、

「ぢや少しお邪魔致しませう」と私から少し離れて坐りました。

話して見ると、沁々した眞實に好い人です。

「お姑樣が隨分お喧ましい樣ネ」と私が話の中程に低い調子で云ふと、

「いゝえ、皆私が屆かないからで御座います。度々あんな事を貴女のお耳に入れて、眞實に私お恥しう御ざいますわ」と俯向いたまゝ斯う云つて、もう淚ぐんで居るんですもの。

私はつく〴〵お貞さんが可哀想で溜らなくなりました

＊　＊　＊　＊　＊

壽美樣、私はもう貴女、何と云はれても、何うしたつて此家には居られません。甚麽お言葉でも甘じて受けませう。そして其苦痛から逃れたいんです。

恁麽性質に生れた私は、斯うした第三者としての小さい心の苦しみを受けては、みつしり勉强もし得ないで居るんです。何て意志の弱い人間でせう。

昨日の朝から、お婆さんはお貞さんに一言ものを云はないで、只獨でツン〳〵して居ます。

原因は何か、私にはわかりません。何でも一昨日の晩もう寢やうとする頃、何か突慳貪にがみ〳〵云つて居ました。

「あゝ喧ましい、もうネお前になど何でも賴みやしません。決して仕ても貰はないよ」なんて大きな聲で十時すぎまで云つて居ました。

恁麽時でも默りやの義勝さんは、それてそウンともスンとも云はないで矢張り默つて居るんです。私は其態

度がじり〱する程齒痒ゆくてなりません。一體義勝さんは、お貞さんを何と思つて居るんでせう。私はお貞さんが可哀想で〱溜りません。お婆さんががたぴしお膳立などするのを見て、はら〱して居るお貞さんを見ると、縋りついて、一緒に泣きたい様な氣がします。

此頃は毎日學校の門を出ると、ほつと嘆息をつく程家へ歸るのが嫌です。

壽美様、許して下さい。近い内に又何處へか越します。

この作は極めて缺點が多いと思ふが、何處か鋭い處がかゝれて居る。自分は或は作者の作つた外の點で女主人公の心を味つたかとも思ふが(評)

【秀逸】

○新世帶

名古屋　月靈子

お次は今日も一日勝手でまご〱して暮した。新しく家を持つてから、既う彼れ此れ一月近くにもなるのに、何となく落ち付きがなくて、何をするにも馴れにくかつた。お米を洗ふと云つては半分方水と一緒に流して了つたり、お魚を煮るのにお醤油を入れ過ぎて、辛くつて喰べられなくして了つたり、お豆を湯でなし煮たり、さうした失敗は流石に既う仕なくなつたけれど、又其れから其れへと新しい失敗が續いて、實際くさ〱して、思はず投げ出して了ひたくなるやうな事が多かつた。

『お隣りのお葉さんなぞ、什うしてあゝ暢氣なんだらう、お勝手はするし、洗濯もお裁縫もして、さうしてあゝ喋舌つて居る暇があるんだもの』

お次はよくさう思つた。お次には冬着の後始末が、痩せる程荷になつて居た。

彌三郎は亦近來のお次の憤ちりした大きな顏が氣に入らなかつた。

『おい、其那に二人ばかりの食ふ事が、苦になるんかえ』と、ともすれば喰つてかゝつた。

今日の日曜もお次はコマ〱した仕事に、居たり起つたりして、碌に彌三郎とは言葉も交さなかつた。でも夜になると机を中に、菓子などをつかみながら親しく話込んだ、話の半に思ひだしたやうに、

『先刻、八坂さんの所からお葉書があつたつて、何でしたの』、とお次が聞いて見た。

『うん、當地い來るだつさ、昨日朝發つたんだから多分明日の朝あたりは尋ねて〻るだらう』

『あらつ、來るんですつて、まあ困るわ、困るわ、私まだ髮も結つちやないんだもの、』

『馬鹿、何んだ知らない人ぢやなし……』

彌三郎は嫌な顏をして茶を啜つた。うす黑くなつたシヤツの袖が目に立つた。

『だつて……私這那姿して逢つたら、第一彌アさんの恥ぢやないの、』

『ふん、云つたね、お前は女の恥、女のたしなみと云ふ事を知らないか、』

『あら、よござんすよ、私お琴でも彈いてぶら〳〵して居る奥樣とはわけが違ひます』

其れなり二人は默つて了つた。『家』と云ふものに伴ふ、恁うした心配も苦勞もなかつた、自分の事は自分でして、自由に思ふ儘に暮した昔の事が、お互ひの胸に潮のやうに湧き返つた。そうして同じやうに多少な悔と云つたやうな感じを味はないわけにはいかなかつた。わけてお次は不滿で〳〵、何かぐつとした鋭い事が云つて見たかつた。

『おや、如何なすつたの』、燥いだ聲を先に立ててお葉が這入つて來た。

『あら』と急にお次は氣をかへて愛想よく。

『何時お返りでしたの！』

『昨夜遲う〳〵』と態と眼を丸くして、『日本國中で貴女の家だけお寢みなんでせう、こりア屹度遲いと思つて時計を見りア案の條九時前でさあね、で早速今朝上るべきだつたが、これもそれ餘り早くないときて居るんでせう、だもんだから恁うやつて態々晩の忙がしい、休んで被居る暇のない時にきました。』とたて續けに喋舌つて、

『どうも留守中は何かと……』と、改まつて叮嚀に頭を下げた。と、もう其の頭の先きに卵の盆に盛つたのがつき出してある。お次は如何して好いかわからなかつた。實は此の前、お葉が實家へ歸る時にも、心配されたなり默つて放棄してあつたので。

『貴郎、たび〳〵まあどうしませうね』、這ら彌三郎にきいてみた。

『何んですねえ奥さんのお堅い……ぢや……』、とお葉はお次の言葉を引きとるやうに云つて、風呂敷だけ手早くたゝむと、一寸輕いお辭儀をして、さつさと出て行つて了つた。

『困るわ、困るわ、たび〳〵這那にして貰つて、私はどうしていゝかわかりやしないわ』、あとを獨りでつ

ぶやく〳〵。お次は卵に手をふれやうともしなかつた。

『折角だ貰つといたつて向ふで呉れるんだから損はないさ。何なら今度足袋の二足も買つてやれ』、彌三郎は投げ出したやうな口吻だ氣の利かない若い妻の一言〳〵が煩らはしさに堪へなかつた。

『え〻、おやさう仕やう。……其れはさうと、ほんとに貴郎、明日此方から先に八坂さんのお宿を尋ねて下さいよ、ね彌アさん』、さう念を押し押し、まだお次は迷惑さうに遠くから卵の數を數へて居た。



稽古もどり　濱松　曾田きん子

斷片にすぎぬが、さすがにすてがたい。この作者はもつとしつかりしたものを覗ふ可きだ。（評）

○旅の空

みち子

辛と洗ひ上げた手桶の米を土鍋に移して水加減を見、といふ

其を七輪に載せた、そして、あ〻苦しかつた。

樣な溜息を肩でして、お龍は二つ三つ胸を叩いた、元より瘦せぎすなお龍が足かけ二月も病んだのだもの其こそ一寸衝いても倒れさうな細い姿をしてゐる。

「あゝ今日も亦無性して」、と獨言ながら青い手を頭にやつて、うるさく落ちかゝつて來る髮を兩手でくるくると卷いて止針をさした「あゝ寂しい、矢張りお藤さんに居て貰へばよかつた、」とお龍はしみ〴〵思つた、此間、お藤に歸つてくれと言ひ出した時、丁度來合してゐた美代子が、「何、妹は何にも內で構つてゐないのだからもう少し達者になるまで、置いて世話をさせなさい」、

と心から言つてくれるのを、無理に歸したのだ、其代り美代子は、每日の樣に大抵かゝさないで見舞に來てくれる、學校が日曜の日は朝と晩と二度も來る事がある、其度、旅の空で病むほど悲しいものはない」、と瘦せこけた頰にこぼすお龍の淚を、いつも貰ひ泣して、自分も眼のふちを赤くする程、友情に厚い、又感じの强い優しい性だ、だもんだからお龍も便りない身を、全でよりかけて親とも姉妹ともに賴みとしてゐる、又實際、美代子のあることを、どれ程心强く思つて居るかもしれぬ、けども別れて離れると、すぐ言ふに言へぬ淋しさが湧く、そして「旅だ、異鄕だ」、といふ思ひが心をとりまいてしまふ、すると立つても寢ても居られない樣になる、何處でもいゝ、何方でもいゝ、自分の氣の向く方へ飛び走つて見たいと思ふ、が其心を靜と無理に抑へて辛抱してゐると、今度は漸々と心が寂しい、何の音もせぬ、暗い深い〳〵穴の中へ、ずりこむ樣になつて來る、するとお龍は泣かずに居れなくなり泣きながら心の行くまゝに考へて見る。

今日も美代子が寄つてゐた其時、「陰氣で、淋しくて、考へてばかり居る」、といつたら、「どうしても、お寺だげに閑靜でいゝ、花は咲いてるし、日當りは好し、保養にはもつてこいの所だ」、とちつともお龍の心を解さなかつた、其なり別れた、お龍は堪らなくなつて、いきなり小箱を行李の中から攫み出した、そして古い人の寫眞を一枚づゝ膝の上に並べた、三枚とも硝子寫しで「明治廿三年四月寫之」と亡なつた父の筆で書いてある、斯して永久に逢れない所の父に會ひ、若い時の母を見、廿年前の坊主頭でちよこんとしてゐるお龍自身を骨ばかりの膝に載てるのを見ると、一種格別の感がしてならぬ、と共に、我故鄕——我母——妹——我前途——と心が一時に振へて來る、實際、日一日と我

かしづく日を時といふものに削られつゝある事にも氣付かず、か弱い妹に、母をまかせ、そして自分は儚ない前途に憧れて、國を飛び出し……目的の段階を一歩上らうとしては、ふり落され、はね付けられ、苦しい思ひで早二年あまり、其揚句が今此骨と皮との我身かと、お龍は膝の寫眞を兩手できゆつと握りしめた、今は只、旅の空を脱け出して、懷しい暖い、靜で氣樂な田舍の我家に歸りたいと思ふ心が身體中を動かした、嗚呼最早、何も望むまい、此で身體さえよくなつたら早速國へ歸つて母子三人、自分も同じ勤めづくなら、無邪氣な村童を相手に、氣樂に暮さう、いくら、思つたつて、どうしたつて、成る樣にしか成らぬのだ、儚ない誇り、淡い虛榮にのみ生きて居た自分は非常な誤だつたと、お龍は病み上りの窪んだ目を兩手でこすつた、けども、けども一つ無念なのは折角の苦勞を水の泡と流して、依然、元の身で何の得る處もなく、歸るのか！……と思ふと、勝氣なお龍には怎しても、旅が去れない、しがみついても、一旗上げなくちや、村の人にも母にも妹にも逢はれない樣な氣がする、でも旅は限りなく淋しい——便りない——悲しい——。

平生の作よりも、見勝がする、が此作者には少し、根本を養つて行く必要があらう（評）

○二十六

土佐　寂靜子

昨夜からの雨はまだシト／＼と地に泌み込む樣に降つて居る。雨の日曜日は佗びしい、藤代はまだ掃除をしてない机の前にグッタリ坐つた。漆の剝げた机の上の緣の缺けた硯の水には汚い塵が浮いてゐる、受持の生徒の作文や習字の見かけが積んである。藤代はそれを物憂想に見て一枚繰つてみたが顏をしかめて投げる樣に置いた。グッタリ腹を折つて置場無さうな兩手を投げ出す樣に膝に置いて倦怠だ樣な瞳を煤けた黑い障子に落して居る。思出した樣に長い太息を吐く。

五日程前であつた。人通の少い寂しい細工町を通つて居た時ふと理髮店の姿見に思もかけない程やつれた自分の影をみた。腰の強い赤ちやけた髮の毛は蓬々してゐた。顏の色は黃黑かつた。困憊きつた樣な容姿であつた。藤代は之が自分の影だとは知らなかつた、其儘通り過ぎ樣としてふいと電氣にでも引き付けられた樣に立止つた「アッ自分だ！」思はず叫んだ、其瞬間には驚ろきより他に、寂しみとか悲しみとか云ふ複雜な情

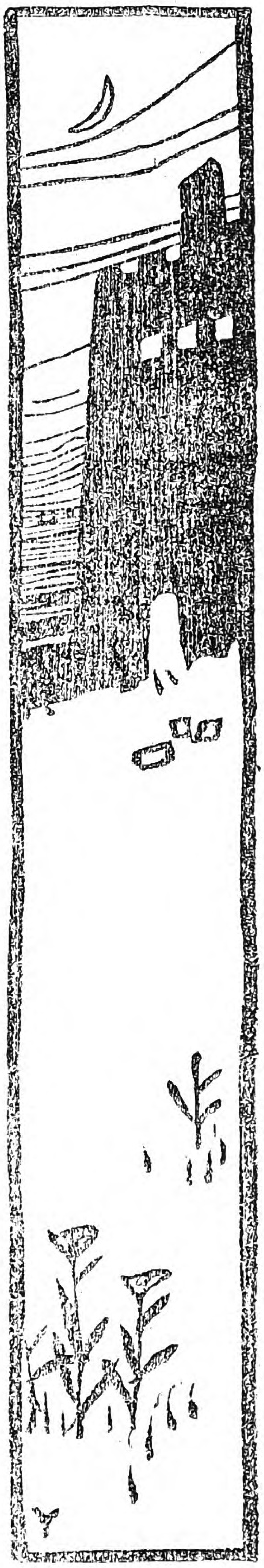
は一つも無かつた。暫く茫然して「自分は彼樣だらうか？」と藤代は餘りの事に疑つた、そして道側の時計屋や呉服屋の硝子戸や姿見に殊更寫してみた、けれど、寫る影は矢張りやつれてゐた、其度に胸は激しく震ふた。夢の樣な淡い悲しみと明瞭とは解らないが幽かな失望の影が胸の底に蟠かまつた。歸つてすぐ鏡を出してみた、ふいと初めて寫して見るとぶつくりした醜い顔では無いが泌み〴〵見てゐると、彈力の無い鈍い皮膚の色が我れながら悲しい、瞳には少の潤も持つて居ない、視れば視る程淋しい醜い乞食の樣な顔に變る、藤代の胸は掻きむしられる樣であつた。幾度か其鏡を投げたが、又仕方が無いでは無いか！」と自ら嘲笑つては拾ひ上げた、淚はひとりでに滲じみ出た。

其の翌日であつた。今年女學校を卒業した若い女教師の田村樣と賑はしい町を選つて歸つた、醉つてる樣に美しい田村樣は華やかな聲で宗教を説いて居る。藤代は唯無意識に「えゝ、はあ」と同じ答をしてゐた、田村樣の聲は耳の外で響くばかりであつた。腦神經は「道を行き交ふ人の兩瞳が自分に集まるか、田村樣に注がれるか？」それに鋭く働いてゐた。藤代は逢ふ人人の顔を射る樣に見詰めたが矢張り他人の瞳を田村樣の美しい頰から奪ふ事は出來なかつた。若い男が來た藤代は出來るだけ若い瞳をして其男を見た、男は田村樣から離した目をチラと此方に向けたがフンと冷やかな笑を浮べて過ぎた、藤代は非常な侮辱を感じた、情無い思は熱い淚になつて寂しい頰を流れた。

藤代は美しい生れであつた、何處へ行つても「まあ可愛らしい孃樣！」とよく皆に抱かれたものだ、此樣にして成長した藤代は、習慣的の意識とでも云ふのか、今迄他人に劣つた容姿であるとは思はなかつた、容貌に付いて、他の若い女が苦心する樣に少しも考へた事は無かつた。それで今、やつれ果た自分の姿を見ると誰かに欺かれて居た樣な感じがした、他人は「美しい」と口では云つて其間に硏いては先きへ行く。

「呀何時の間に此樣に成つたらう」今雨の音を聞きながら泌み〴〵思つた、「もう二十六だもの」無意識に云つてホッとしたが自分の聲に驚いた樣に「其樣だ早や二十六だ！」と心から悲しさうに云つた。此樣に成つたもの、高木樣が返事呉れないのも定雄樣が來て呉れないのも解つた。

これは藤代といふ一人のオールドミスを書いたのではない、廿六といふものを書いたのだ、間違はそこにある（評）



詩

河井醉茗選

○まばら木の原を　さまよひて（天賞）

夢殿の君に　はゝき木

こぼれちるな、この思ひ
われにしては最もふかき歡喜
うれしきかな
夕日あびたるまばら木の原
あかき、細長き幹よ
遠き木立の暗がりに
吸ひ誘はれん
のこれる心もろともに。
なつかしと人のよぶとも
いらへせぬ、現在のこゝろ

身はたゞ、かゝる枯野に立ちて
地平のかなた
白壁の立ち並べるを見る時
そびえ立てる尾の上の雪を仰ぐ時
遠くはしらむこゝろを
擁き護るものを思ふのみ。

家に入りかまどの守女とならんか
野に、海に、熱涙のまことそゝがん
か……踊り狂へり。
夕日よ!!
血を吐かんとする若きこゝろの
歐謳ふ女の上に強く射かへせ
影はながく木とともに長く
かなた、丘のふもとまでなげられぬ

こぼれ散るな、このおもひ。
すゝらむとすれど
いたづらに、またゝくまなて
ながれ出でぬ、泪の味ひ。

一歩は、一歩と
みゝ澄み、目ざめゆく、こゝろ
僵るゝな、……
あゝ落日
高嶺の雪にもかすれさりぬ。
あをきみそらに浮ける雲のかさなり
冷えてゆく――冷えてゆく――
この冷えてゆく。すべてのものの中

に孤立て
奮ひ發たむとする
新らしき歌謳ふ女のこゝろ。

理性の勝つた人格と、藝術に對する眞面目なる態度とは能く表はれてゐる(評)

○春の夜の歎き(地賞)

横濱　せゝらぎ

鏡に映る面よ——
白い腕も紅の頬も黒髪も
すべての有を捧げつくして
今は此衰を君にさゝげる、
少女は一人窓に凭つた
燦く星よ！星はなぜ謡はない？笑まない？
いゝえ少女の笑みが唇を絶えなかつた時は、
ほしも美しく耀いてゐました
冷たい露よ！沈丁花の蕊をこぼれてをとめの袖に灑いだのか、花と香と
靄につゝまれて
乳色に煙つた春の夜でした
おもひでは眸をかゞやかして
その夜の心のゆらぎを少女に語らうとするけれど
少女は悲しげに頭を振つた
その——夜その心——
いまは忘れてしまつたときめきよをどる胸よ——
たゞしづかなこゝろ、静かな深い歎き——あゝ
乳色に煙つた靄の床に
その夜の歡喜と幸福にとりまかれて
逢はずに——逢ふ前の夜に
花の香に溶けてしまひ度い。

純然たる抒情詩、此君今は詩中に活く(評)

○別るゝ夕うたへる(人賞)

東京　章子

しとやかに闇はせまりぬ、
心の上にも……
靜かにして冷やかの海氣に、つゝまれて、
今ぞわづらひを脱ぎし心は切にふるふ——
溫くしてかなしき情緒は流れ
冷やかの空氣はせまる
落日僅かにかゞやきぬれど
海水は吸ふ力なし。
かくて一色の海のはて、空のはて、
靜にかきくるゝ。
灰色の船と船、互に望なき暗に音なく向ふ
光も響もあゝつひにあらず。
何ものかの、ちからにつかれ、
互に遠ざかりゆく冷たき影よ。
孤獨の魂はひたになげかひ、
狂せる額をふせて靜かに世の果を、
いづくともなく旅立んと決せるを
海にして思たかぶる悲しき魂よ
あまりに若く
地にして嘆かひの淋しき魂よ

あまりによわし
たゞ若く唯悲しきこの海の譜をば、
きゝとれよ
旅立つ魂の哀別の
譜のいかに悲しき
きづつける砂道に
ちらぼへる石白く
荒める面はうるほ
ひも、つやもなし
旅立つ魂の貢にと
はて遠くかなしめ
る孤火のくゆり
――あゝ魂はまどへり――。

婦人の作物を見ると能く氣の着くことだが、一つのことなら一つのことに深く〳〵心を刻みつけると云ふことはしないで、あちらのことも一寸、こちらのことも一寸、といろ〳〵のことを云つてみる。まア慾が深いせいだらうと云へば悪口になつて了うが、つまり氣が散りやすいからだらう、何うも低個趣味は好いか知らぬが、永く生命のある、いつ見ても飽かぬ、いつ歌つても興味のある作を成さうとするには、一句々々わが生命を刻みつける覺悟でなければならぬ（評）

又曰く、右は此作に限つた評でもない、此作は寧ろ本月詩壇の上位を占めてゐる。



私の心の底の褐色の影が走り出る
あゝ月の光
あゝ私の心の奥から
不安の影を
誘ひ出す淋しい月の
光

朝顔うり　新潟　水澤筆子

コンクリートの門を
出て行く後から
「身も靈も天にかへれ」と送つてくれる
オルガンのひゞき
ゆるく――
靜かに――
私は何故樂に抱かれて
天にかへる事が出來ないのか
あせつても、あせつても
たゞ淋しい方へ淋しい方へと歩む
しかも祈を口にしつゝ――

【秀逸】

○教會からのかへり　播磨　千代子

今この瞬間許見えなかつた

氣味のわるい様な風の唇から
あたかゝみな頬につけられて
あゝまたふるふ
月よ
風よ
私を永久の不安に導く――

情調が暢やかにしかも充實した感じ（評）

○下駄

兵庫　笹舟

自分はじつと暖かい太陽に照らされて、待つて居る。
男の太い大きな下駄や女のやさしい細い下駄などが無雑作に、並んでゐる。
眞赤な本鷲絨の緒、
若い女の心があり〳〵と見える。
無心に引きつける力――
赤い緒
褐色の同じビロードの緒、
淋しい女、若い時の温かい血を戻さうとあせつてる女
何だかあの眞赤な緒が今にも此褐色に染められさうだ
さうだ、いつかはこんなに染められてしまふのだ。
地の震うてゐる上に赤い唇をふるはした様な
緒、白い笑ひの様な淋しい褐色の緒
たゞ〳〵圓いやさしい形を殘して――
太い革の緒
四角い下駄、
黒い大きな足形――
濃い藍色、鶯茶、牡丹色
共に冷めたい地の上に僅かの誇をもつて並んでゐる。
淋しい誇――
果敢ない虚榮――
沈默の中にかすかに此淋しい果敢ない誇と虚榮とを語つて居る、
日は白く照らして、

履物を歌つて見るのは確に興味があり相に思ふが、下駄と云ふ言葉が嫌でならぬ（評）

○冷たい森

茨城縣　流水女

淋しい高い木はみんなさゝやきかはしてゐる。
暗い色許りだ――もう彼等の胸には若芽は萌えない。
一番高い木はつぶやいた――早く行かう、あの雲の上へ――
一番低い木はつぶやいた――私はあの高い肩へ上らう――
と高い木を見上げた。
紅い、燃える様な花を兩手でしつかり抱いて、薄い白い衣きた少女はてへ迷ひ入つた。眞闇で道が分らぬ
「――助けて下さい――」少女の聲は顫ひをおびて遠く迄響いた。高い木と低い木は聲を合せて冷かに言つた
「汝の來る所では無いよ、寒い姿して來る所でないよ」

少女はとぼ〱と行く。闇の道に破れた鏡が立つてゐた、「おゝあそこに光明が――」走り出した、あゝ無殘……眞白い足からは血潮が迸しつた。胸の花はハラ〱散る……一ひらの花びらを抱いて冷い殘骸となつてる白い衣の乙女を見て、高い木も低い木も嘲笑つた。

神秘には違ひないが、こしらへすぎたやうで生き〱してゐない(評)

○猿廻し

麻布　葉がくれの花

「さあ!」と云ふかけ聲と一緒に、
猿が飛び出した、
飛び出したと思つたのは猿曳の脊中
から飛び降りたのだ
妾は思はずアッ!と叫んで
逃け出したら、
猿は呆けに取られて、立てゐる。
――でません、でません、歸て!
とやつと云ふ、
言たらじろつと、白眼を見せて、
何んだ、お多福!が、
さつさと紐を引ばつて、
背を向けた……
猿も同じ樣に眼をむいた。

まだ何か言殘してある(評)

○森

雲井の雁

同じ思ひを抱いて別々の空を仰いでゐるのが苦しい、二人の魂は接近しやうとしても、多くの冷たい目で遮ぎられるので、遂に淋しい夕暮の林に逃れた。

薄い光の落ちて行く瞬間、鮮明に自分の心は浮んできた、今まで青かつた頰には血の色がみなぎる。

初夏の森に、私と、彼の人との瞳がさゝやき合つて、夢のやうに溶けあふ、若葉の上の露はさら〱と散つた。

折角觸れたものを、又はなれるのかと思ふと、淋しくなつて來た、森は盡きるのであらう。

摸倣の中に一味の温情を見出すことが出來る(評)

○三月の夕野にて

ひさえ

限りなくひろごり行く哀愁の中に
さすらへる夕
我は迷ふ如く野に來れり。
遠く〱退きて沈み行きし夕日
寂しげに默せる空の下に
野は遠くひろごりて
其の果てに續ける村道、一條にほの
白み
小さくいと小さく吾が眼に入り來る
は行く人の後影
かの林に消え行きし赤き縞
夕陽の織りしは只一時
より處失ひて漂へる微熱よ
悲しくも失はれし戀を

我頰に嘆きよれど、あはれ
幽かに〳〵その息吹は細り行くを。
短き若草の根はおほはれず
黒き土いたましき追憶にふければ
いつしかに小鳥らはかの森の唼き
樹の胸へと。
初夏のうら淋しき夕なりき
遙々とつゞく苜蓿
君はかの遠く行く後影
悲しき葉の色に編まれたる
しなやかの草床に
立てるは唯我のみなるを
はら〳〵と熱き涙は頰を離れ行きぬ
あはれ今鐘鳴る鐘鳴る…………。
その重き音波の中に
遠く〳〵消え行くを
悲しみし後影
あゝ君……君……君……

詩歌の興味は持つてゐる方だと思ふ、只それだけではつまらないぢやありませんか（評）

○ひまはり

徳島縣　中村玉野

はつ夏のまひる―
町角の廣い空地に
くる〳〵まはつて
眩しい晝の日を正面に浴び乍ら
土色をした美しい
―花が咲いてゐる。
町角の青い草叢に咲いた
一輪のひまはり、
四邊の疲れ切た中に
眞晝の日を浴び乍ら
ひとり誇り顏に咲いたひまはり、
あゝ、私は心からお前の樣な、
勢のいゝ、歡喜にみちた、
樂しい希望も、
青春の血も身體中にみなぎつてゐる
樣な強い心が羨しい。

空には日が赫々と照り、
風は青葉を戰がせて吹く、フレッシユな、
六月頃の日に橫はる偉大なる夏の自然―
その眞晝の疲れ切つた地上に
ひとりひまはりのみは、
何も知らぬ顏に赤い息を吐いて、
矢張りくる〳〵廻つてゐる。

向日葵をこれだけ歌ひ得たのは、平凡の技倆ではない、殊に口語だから内容の貧弱なものなら迚もこれだけにはゆかない、只、男性の作ならざるやを疑ふ（評）

○晝の海

備中　篠原しげ子

靜かな〳〵眞晝
みどり色に透き通つた樣な潮が何處迄も何處迄も平に滿ちて居る、
じつと見て居たが、一ツの白い美しい玉を見出した海の底に―
搖れ出した、玉が一文字に、
尾をついて搖れる、
ふと空を仰いだ、まぶしい―
手影して又仰いで、

太陽に一面に光線が映いて居る、
うろこになつた白い雲が縮いて居る、
あゝ、馬鹿らしい——
あの太陽と雲が海に移つてぼけて居るのだもの
又海に向いた、あゝどうせう、厭な黄色い明い
影が、私の眼の前に、幾つも〳〵飛んで居る、
先刻の玉
も尾も黄
色い、
私の手も、
着物も、あ
ら島も、白
帆も、向ふ
の町の白壁
も、煙筒の
煙も皆黄色
い、
あゝどうせ
う厭だ〳〵
たまらない
眼をふさい
でつゝぷし
た。
くらい、く
らい、きい
ろい——



○ある夜

名古屋　岸　つぎ子

大通りの眞中を
烈しい運動と烈しい響と烈しい色と
其をたよりに歩いて見た。
けれどあゝ矢張り淋しい——
ふと勸工場の蒼い瓦斯が私の眼を引いた。
這入らうとすると入口の所に
顔のあかくふくらんだ娘が
物欲しさうに凝と箱の中を覗いて居る。
箱には『選りとり三錢』と書いて、
賤しい金屬の指輪が並べてあつた。
私は急に其所から足を返した。
怪しい自然の手は斯うして女の何者をも問はぬ
ではないか
淋しみ！其れはあゝつひに誰れもが味ふべき
必然の結果ではあるまいか、
私はさう思つて見た。
娘の着物にはまだ生々しい肩揚げの跡があつた。

○月の磯

和泉　金田代志子

眞砂地を靜かに歩む
俯首れし
我、沈默せ
る君、
月は潮路の
果より出で
て
靜かに照ら
しぬ——。
思ひつめた
る心を君は
張りつめる
思、我は
語り合はね
ど、
月の光りに
清く見えて
家に通ひぬ——心と心
金の花瓣散る如き
眞砂地を打つ波は
かゝる間も吾らが繼の
歡樂にほひさゞめく。

ポストまで　靜岡　枕の百合

新詩句

○知らないわつと心はよそを見てゐる　京都市　要司村福子

原作「頭をふつた我心我胸」とあつた

○てつちへ寄つてはいけない、あなたは嫌いだから　名古屋　胡てふ

これだけでよいのです

○地震！お媼さんは柱へ抱き付いた　遠江　鈴木若草女

○赤い花黄な花屹度染分の色壺があるのだ　東京　章子

○春の雨、女がないしよ話をしてゐるやうだ

少し句が長い、今少し緊縮すれば佳い

○火のやうな色をして冷い果もの　西多摩　葭子

○しゆうろの風、葉音程も吹いては居ぬ　和泉　金田代志子

二句とも佳

○夢だ、夢だ、やつぱり夢だ　沼津　渡邊とよを

こんなのも好い

○すべての意識が混沌と醗酵して、甘たるい胸　上毛　もと子

○此思ひ！燃えて〳〵紫の焔となつた　寂靜子

○私の好な方によく似た方を見た、今夜の夢は——　葛の葉

○あぶない、今にも落ちさうだあの蝸牛　福井　片山千里

○あの崖の花を取る工夫はないかしら　清國　小山天流子

○杉の樹立に名も知らぬ鳥が啼く　小樽　清田芳枝

○日は沈んだ、女は去らうともしない　佐渡　古藤英子

○君が棉花ふる國へ舞ひ去れな　羽後　三浦文江

技巧で持つてゐる

○桔梗の蕾咲く時の微かな響　淡路　菊子

原作「ポンと云ひさうな」はあまり大げさで桔梗の蕾らしくない

○霧の中、水晶の粉が降るやうだ　備中　篠原しげ子

印象が新しい

○上向いた花、下向いた花、風に揺れる　大阪　高山米子

原作「何方がいゝかしら」とあつた、どちらも好いぢやないか

○雨の中へ白熱瓦斯の灯をともした　兵庫　紅雀女

原作、螢が灯をともしたとあつたが、螢ではあまりに古い



散文

編輯局選

○國技館の聖日（天賞）

芝　末摘花

東京市内の、日曜學校生徒聯合大會は國技館で開かれた。私は今其所にゐる。

演壇のある破風形の建物は、神の宮殿の樣に儼として立つてゐる、多くの少年少女は、神の宮殿を守つてゐる、紅黄白紫の各校旗を翻へして、幼き者の顔には歡喜が充ち、その胸に咲く花、蝶と舞ふリボン、さざめいて時々搖れる人浪は、丁度春の野邊を悠かな溫かい春風が吹いてゐる樣だ。

やがてコーネット吹奏が始まる、會衆は起つて「あまつみ使よ、エスのみ名の――主とあがめよ」天に響けと許り高く合唱した、その讃美は、心の底に潜む何かに觸れて引き締められる樣だ。聖書朗讀、祈禱がある。

幼き聖徒は頭を垂れて、靜かに靜かに、汚れなき小さき心に救ひの慈惠、仁慈を願つてゐるのだらう………

祈禱は濟んだ、幼き者の顔には輝きがある。

不圖私は閃きを見た。天上の硝子窓から、何物にか壓せられて沈默してゐる空が見える、曇つた灰色の雲の幾重もの奥から白い閃きが流れて、かすかに地を照す、其閃き！古い物語が胸に浮ぶ………　地の者よ聽け爾曹この嬰兒の如くならずば天國に入る事を得じ、雲が動く、閃きは世の光りだ！主なる神が降つたのだ、多くの天軍の輕い跫音が聞える、讃美の聲歡喜の笑ひ聲が、囂々と響き渡る………。

空は沈默してゐる、閃きは依然だ、聲！幼き者のそれかも知れなかつた、が神の御旨が心に泌み込んで命の隨に觸る樣な氣がする、私の心は平安だ。

部會の讃美歌又響く、祝辭、噺がある、大會の歌が、慈惠と力に充ちた勇ましい聲で、大きな建物を搖るがす、總てを獻げて歌てゐる潔き心！汝は幸福である、そして私も亦幸福だ。

潔い集りを書くのにふさはしい潔い筆だと思ひました（評）

○漂泊の外國人（地賞）

越後　木村みしま女

雪解けのぬかるみを、氣にしながら、横町の角を曲らうとすると、後の方でがやく小供の聲がする、何だらう、振り返つて見ると、馬鹿に丈の高い外國人が一人、こちらへ向つて來る、數十人の小供は其人の後にあり、前にあり、口々にいろんな事を云つてる、私は態と悠つくり歩るいて、後になつた「異人ねみゑちやん」「妾いつかも異人見たわ」「何處へ行くんだらうねえ、」「宿る家が無いんだよきつと、」外國人は大股に歩るいて辻の眞中に立つて、あたりを見まはして居る、私は物好きにも傍の電信によつて、見て居た、彌生末つ方の夕暮である、都ではもう梅が、散りかゝると聞いたに、雪深い越路には寒い寒い北風が吹く、あたりの店はもう閉ぢられて居る、晝さへ人通りの少ない横町の、夕ぐれとあつては、猶更ら、さびしい、私はどうしてもこれが春の夕暮とは思へなかつた。

窮屈さうな薄い上着、裾の切れたズボン、重さうな靴、どれも、どれも垢に泥にまみれて、地色さへもみえぬ、赤ちやけた頰ひげは、顏を埋め、底光りのする小さな目は絕えず、動いて、何かを探して居た。

と、向ふから人が來た、インバネスを着た、會社員らしい若い人である、外國人の赤黑い顏にはうれしさがみなぎつた、傍へ來るを待ち兼ねて、づかくと進んで、そして二言三言何か云つた、然し若い人はちらと外國人をみたばかり、一寸眼鏡を直して行きすぎて終つた、外國人は、其後姿をいつまでもいつまでも、みて居たが、向き直つた目には、あゝ其の小さい目には淚があふれてゐた、私は頭がしびれた樣に感じた、あゝさすらひの人、これを聞たばかりでもさびしい氣になる、彼にも故鄉はあらう、妻もあらう、子も有らう、其目慣れた故鄉を想ひ、いとしき妻子を思ひ而して後に現在の周圍を見、自身を見たら………

今の一滴の淚、あの淚は六尺のからだに餘つた悲しみのほどばしりであらう、氣の毒だ、いたはしい、ならば其妻子にかはりて、慰さめもし、勵ましもして、せ

めて今宵一夜なりとも安らかに眠らせてやつたら、言葉は通じなくとも慰むる方はいくもある、勵ます方もたくさんある、まして人の誠は無形に通ずると聞くこんな事思ひながらいつの間にか、家の前に來た、薄暗い外から、急に電氣のパッと明るい、店に入ると今迄の想ひはすうと心の奥へ消える樣の氣がした店の若い者にあの汚ならしい、異人の事でせう、などと、けなされるが厭さに、なんにも話さなかつたが、四年經つた今でも、あの外國人の顔は忘れることが出來ぬ。

題材も珍しく、誠實な書きぶりも徹してゐます（評）



夕涼み　新潟　吉田榮子

○雪消え　（入賞）

羽前　あらゝき

すつかり寢てしまつたやうな心地に、ふつと目が開いた。

暗いなかに眞向ふの店の燈をうけて薄明るい高窓を見た。と、じーと佗しい音がして、果てもなくつゞく。軒高く積んだ雪に泌み込む雨の音である。晝から煙の籠る雨模様であつたが、降り出したのは夜

ともに知らない。

急に陽氣の緩んだのと、一日床に收まつてゐた暑苦しさに、冷めたい部屋の空氣にさまされようと思つてそつと布團の襟を折りかへした。

枕におしつけてある、もつれた髪のなかは、汗に蒸されて軟くしめつてゐる。

あゝして雪はだん〳〵に滅つて、直きに消えてしまふのである。春を待つ氣もない私は却つて佗しく感ぜられる。(三月十九日)

朝は堅雪であつた。下駄で渡つても、ちつとも、ぬからなかつたので妹とお靈屋までいつてみようとした。裏から雜木林の木の間を縱横にくゞり拔けて。

お靈屋のなかではピイ――、ピイ――、と寂びた聲で何鳥か鳴いてゐるのが聞えた。

柵に沿うて、子供をおぶつて、ねんねこに深靴を穿いた若い女の人が、椿の葉だかを持つて、墓地の方にゆくのを見て、急に何といふこともなしに、ひきかへした。

暖かい、ジツとしては居られないやうな日で、私は庭へ出て雪消しをした。(二十四日)

初めて俥の通る音が耳にとまつた。

あゝ暖かになつたといふ人の言葉は忽ち哀しく胸にひびいて、春めいてきた、空に、日光に、雪解の水の囁きに、―― 私ひとり、とりのこされてゐるやうな便ない思にときめく。(二十六日)

どんよりと、曇つたうすら寒い日はひとしく私の心も暗く佗しい明るみの隙も見出しえない心地に堪へられなかつた。頭痛がするからといつて、この頃餘り誰もよりつかなくなつた炬燵に寢て、眼がさめてみると、淡暗いのでもう夕刻かと思つたら、未だ四時を過ぎたばかりであつた。

昨日今日やつと乾いた表では、子供らの遊んでゐるのが、騷がしくきこえた。(二十九日)

文運普からぬ東北の地に、此才媛を得たのは本誌の誇です、例に依つて內容の充實してゐるのが何より嬉しい(評)

【秀逸】

○ある夕

東京　章子

未だ乾き切らぬ。船べりに輕く手をおいて磯に立つた。波はげきしてゐる、近頃の淡い哀しみを抱いてゐる吾心には、餘りに烈しい叫びである、けれど夕になつて變り易い自分の心は今波の叫びに同化しやうとし

てゐる。
空を仰いでみた怪しい雲のおてらんとする束のまは眞に靜かである。頭はうなだれた、たゞ未來のあてなき悲しみを待つ樣な、又賴りない愁の心でゐる。
折々黒い鳥が、まの邊りをくるりつとまふ。遠くへとぼうと云ふのでもないらしいが、ぢき見えなくなる淋しい、これが度かさなると何かの、謎ともとれ、前兆ともおもへる。キラッと或心がよみがへりさうになるが、矢張ぢきもとの、淋しいといふより、むしろ悲しい心になる、其心が何かなしたのもしかつた。
薄藍の空、暗色の海、海には、蒸汽船が黒く長く横たはつて、船室でゞもあらう、賴りない赤い火が、二つとも一つともみえる。
帆柱の幾つか突出た、輕さうな船が間をへだてて、絶えずゆれてゐる。たつた一つ燈火がない、暗い波をたゞよへる暗い船よ、光ない魂を抱いた悲しい人が、うづくまつてゐるのであらう。
紺色の遠い島、滑色のうしほにたゞれた岬。
暗い影から、一つの石がとんで海へおちる、ある男が切りに投げてゐるのであつた、おもしろい。
バット何かゞ心に宿つた、と思つて海ぞらを見た。

月が！月が！かう低く叫んだ。待つてゐたのぢやないが、まつてゐたと樣に自分は、月のでしほを見て、急に滿足を覺えて喜んだ。昨日も一昨日も實は雨だつた雨が晴れて月がでた。が月は三角形の紺雲の上へ一寸金色の光を表したぎり、まだ——でぬ、影が薄れて引込んで仕舞つたのである。
振返れば溫泉は密度の細かい煙を昇らせてゐる。牛乳の樣だ。再び海天を仰ぐと、片まゆの樣に、強い光が、光が流れる。パッと太い一線の光が流れると、反對に、空の色、海の色、束のまに暗く暗く沈んでゆく寄來る白い波は、二横線をきづいて悲しく叫ぶ。月は次第におぼろに、ふくらみを持てくる。
私はそろ〳〵と磯の一筋道をあゆみだした。

描寫に新しい文字が使つてある、のみならず新しく書かう〳〵とする努力が能く分つてゐる、海光月色、眼に鮮かに印象を映す（評）

○熨斗折のお稽古

徳島縣　吉田紫花

綠床しい青葉若葉に包まれた姉の家に起臥しして、花橘の香に醉うて夢の樣に暮してゐた暮春の或一日であつた、某村の富豪家の花の樣な娘樣が姉に熨斗の折

り方を稽古に來た、私は譯もなく嬉しかつた、姉は小笠原流の熨斗を入れた大きな箱を持つて二階の座敷へ花の君を案内した、私も縫物を持つて其のそばへ出かけていつて、滅多には見る事もない花の君とはじめて並んで坐つた、姉は澤山な熨斗、複雜な水引の結び方を、側の者でも嬉しい程親切に説明してゐる、花の君はそれを熱心に聞きつゝ折つたり結んだりしてゐる、折々しとやかに、ハイ、ハイと返事するそのやさしい聲をうつ向いて縫ひながらじつと聞いてゐると、丁度遠い谷間で鶯が啼いてゐるのをきく樣にうつとりとなつて桃？櫻？藤？牡丹の樣に世にも美しい花の姿を又しても見入るのである、君は十七といふけれど、三つ四つも上の私よりずつと〳〵丈夫な賴母しい體格で、柄のいゝ大島絣の袷にかつ色に緋牡丹の模樣の友仙の帶を〆て鹿の子絞りの伊達卷の端がふくやかな乳のあたりでかくれてゐる、開け放した窓のぐるりは楓の木がとり卷いてゐるので、可愛ゆい若葉の楓が畫いた樣に枝さし交してゐる、それに日が當ると、燃える樣な綠の色が窓からさし込んで、疊も姉も花の君も、散つてゐる熨斗も鋏も尺も、轉げた私の絲卷も皆綠にして仕舞つた、其の綠に浴してゐる花の君が其時どんなに美しかつたやら、妾は美人も澤山見たけれど、此の君の樣な丈夫な美しい體格の人はあまり見なかつた、京市松の樣な顏立ちに、澄み切つた湖水を二つ並べた樣な涼しい懷しい瞳、おとなしい結び方の束髮にさした花簪が、體を動かす度にチリ〳〵搖れてゐるのが殊によく似合つて、白い丸い美しい指先きで紅白の水引を結んでゐるのが膝先きでチヨイ〳〵と目に入るのが花の莚の上で蝶が狂つてゐる樣にさへ見えた、姉にも妾にも色々やさしい話許りして夕方君は歸つて行つた、妾は門まで送つて門の枳殼垣のそばで別れた、見渡す限り滴る樣な青葉若葉の木下道を奧へ〳〵君はゆるやかに歸つて行く、折々振り返つては叮嚀にお辭儀をする、矢張り簪がチリ〳〵搖れてゐるだらうと思ひつゝ私は門をはいつて今更らの樣に楓の若葉を眺めて花の君を思ひ浮かべると、一入暮春の夕の淋しさが胸に泌んだ。

描寫にうまい人と、告白にうまい人とは自ら違ひます、言ひ換れば敍事の文と、抒情の文との作家は、根本から違つた處があるやうです、上手下手は別として、此描寫の文章を新しい筆致で書く人は比較的本誌に少い、吉田さんは先づ其一人でせう、描寫はうまいが、餘りに情味に乏しいのを憾みとします(評)

○橇にゐて

赤坂　靜江

今橇は涯も知らず廣い平原の雪の道を走り續けてゐる、太陽は西ノトロ邊りで全くおちて終つて、澄み切つた空には九日の月が冷たく輝いて、數も知られぬ星といふ星が皆瞳を凝らして、此一つの橇を見守るかの樣に、紫とも思はるゝ光を雪の上に投げてゐる。

廣い野の中に左にも、右にも前にも後にも橇は見えない。只此の一つの橇が靜かな野の道を一線に走つて行く。

橇の馬は全身漆黑で只後の右足と眉間の流れ星が極めて鮮かな白色である。私は不斗黒馬物語にある黒美人（ブラックビューテー）は此麼馬でなかつたかと思ふた。胸に小さな鈴が二つ下げてあつて、靜かな美しい音をたてる。

晴れてはゐるが風は冷たい。露人やエスキモー人の繪によく見る樣な父樣の防寒外套を被つて居るけれど、寒いとよりは痛いやう。

眼を移すと遠く一二里をへだてて、一帶の連山が薄黒く野の果を隈どつて、白い道はいつ盡き樣とも見えない。



そのはなしもあれば　　福井　岸本てつ子

連日の旅行に平生健かならぬ身體は綿の樣に疲れて仕舞つた「少しお休み」と仰有つた母樣の肩に靜に凭つて、眠るともなしに眼をつむると、鈴の響が夢の樣に耳に入る。暖かい父樣母樣の愛に包まれて幽かな音をきゝながら、走り續けてゐる橇の行手が思はれてならなかつた。白い道を黑馬にひかれて橇は何處迄行くのだらう、佗しい旅の果てるのは何日だらうと悲しい想を抱いてゐる耳元に、突如美しい歌の聲が起つた。靜かに頭上げると御者の若い露人の歌ふのだつた。言葉は勿論分らないけれど確かに美しい聲に違ひない、俗謠らしいが靜かな節で讃美歌でもある樣に、美しく同じ樣なことを繰りかへし〳〵歌ふ。其の重々しい夜の大氣をゆるがして、果は何處ともなく消えて行く聲の末は幽かに戰へて、そゝる樣な哀愁が胸をついて來る。じッと耳すませてゐたがやがてはたと止めて終つた。

蒼白い月光の下、若い露人の淋しい歌、私の心にも悲しい詩があつたが遂にことばに成らなかつた。

私は默つて母樣の肩を堅くおさへてゐた。僅かの事にも動かされ易い幼い心は、堪へがたい辛らさに充たされて、暖かい母の守りから走り、樂しいペーチカのまどゐを離れて、漂泊の旅から旅へ疲れ果てた若者の、淋しい涙の歷史を思うてゐた。

走り續けた野はやがてつき樣として、はるかにラクマカの街の灯が見える。

文章は健實、周圍の光景が變つてゐるので旅情を惹きます。今一層筆に濕ひがあつたら一段と好いものが出來たでせう(評)

○私と云ふ女

清瀨　子

私は何のため、生れて來たのだらう。虛僞の生活をするためだらうか。又は泣くためだらうか。いえ、虛僞の生活をするためでもなく、又泣くためでも無いだらうと思ふ。しかし、何のため生れて來たのかはしらぬ。あゝ私は文學に囚へられたのだ。何の淚とも知らず、ハラ〳〵とこぼれる、私は淚にとらへられたのだ。人と云ふものは眼球をうるほす、より多くの淚は、出ないものなら、どんなにいゝだらう。今更淚を作つて下すつた神樣がうらめしい。あゝ私は何故、作文がすきなのだらう。何故、自然がすきなのだらう。何故、女には必要の裁縫がきらひなのだらう。あゝ人並の女になりたい。皆樣の樣に、學問が出來て見たい。文學に關する書籍や雜誌が欲しい、いゝ先生に習ひたい。闘

秀作家の樣に小說でも思ふやうに書いて見たい。自分の思ふ事を、自在に筆に表はせるやうになりたい。しかしやめやう！文學なんかやつたつて何にもなりやしないもの。私、是から文筆をなげすて田園生活をしやうかしら。蘆花の樣に………。

此れだけ自在に筆に表すことが出來たら澤山です。然うですから以後は何を言ひ表はすべきかと云ふことに就いて苦心なさい、つまり心を新しくなさい(評)

○友の物語

麻布　美耶

窓に居た二人りは、何時かおぼろにかすむ梅の香りにさそひ出されて、庭の內を歩いて居た「美子さん、話しませうか」「何に」、「私が思ひ切つて家を捨てた當時の決心を」「どうぞ」希望にみちてる樣な春の夜を、更け行くまゝにまかせて、秀樣は話す人私は聞く人。「一昨年の春、私の十七の時ですよ、どうしても志を捨てがたくつて、父の怒りも、母の淚もかへりみず、斷然無斷で上京いたしましたのは、今になつて考へて見るとよくもあんな大膽なまねが出來たと思ひますよ。ちやうど晩春の頃で、櫻の花も散りつくして若芽をふく、包まれてる胸の希望も、湧返る頃ですわね、私が一生に忘れがたき悲劇を演出したのは、それまでには幾度も出京遊學の事を父にもこひ、母にもたのみましたけれど、だめでしたの、古い人昔の人ですもの、女は女らしくの方なんですからね、其の內に私だつてやつぱり心には鐵石よりも、猶堅い自信があつても、希望があつても、理想があつても、表面は普通の女ですものそろ〳〵マリエイジの申込はありますし、其の頃の私の胸は何んと言つたらいゝでせう。狂に近かつたんでせうね。いよ〳〵今日を、まだ十七歲の少女が、決心を實行すべくわなゝく胸をおしかくして、多くの人目をぬすんで、立ちながら筆を走らず別離の文に落る淚は無量。其の淚の味。其の淚の色、辛かつたわ、障子のすきまから見ると、父も母も、今眼前に演ぜられつつある悲劇も何にも知らぬが佛。はるかに黃ろい菜の花の咲いてる畑けの方で、作男等と笑つたり話したりして居るんですもの。私は最も恐ろしい罪人だとつくゞ泣きました。もしかすれば是れが父母のお顏の見をさめ。永別の悲しみとなるのではあるまいかと思ふと、さすがに堅い決心も、幾度びほどけかゝつたのでせう。かたはらには其の時三ッになる妹が、無心の笑をたゝへて、遊んで居るでせう、私は凡ての人凡

てゝの物に惜まれる名殘を、其の妹一人りのあたゝかい血潮のみなぎつてる紅ゐの頬へ心限り、キッスして家を出た時、生家を捨た時、私の全身は涙にぬれて居たのです。重い苦みと前途の光明とにもまれ〳〵て勞れきつた心身を此の叔母の家にはこんだのは、夕月の若葉越にほの白い頃でしたが、其の夜の中に父母から「オマエノシユーニセヨ、ガクシオクル」と云ふ電報を受け取つた時は、嬉しいやら悲しいやら、すまないやらでよもすがらどのくらゐ泣たのでせう。ですから私は成功しない内は故郷の地をふまない決心なんですと、折から冴えた月にうそぶく友の顏には深い決心の意味が見えた。

三歳の愛兒に決別するあたりが最も情が迫つて居ます（評）

○山にのぼる

府下　三ヶ島葭子

この村のまんなかの、そして數あるこのあたりの山の中で一番高い山へ登るのだと思ふと、何だか大事業でもするやうな氣がする。いつも用がないので同じ村の中でもはじめて通る道であるばかりか、黄、紫の小花が綠の若草に咲き交つてゐて之を摘んだだけでも恨みないと思つた。太い丸太をえぐつて樋にしたのが黒く朽ちて、青苔でもう結び繩も要らぬやうに、次から次へ渡してある、下には石菖が青い噴水のやうに、上には淸らかな山の水が遠くの方から瀧をねかしたやうに傳はつてきて、僅づかばかりの人家の方へ流れて行く。知らぬまに自分は坂を登つてゐるので傍の澤川はだんだん深くなるとう〳〵羊腸たる山路に踏み込んだのであるけれど目的たる高明山の頂はすつかり霧に卷かれてどこだかわからなくなつた。粘土道が泥濘るので一層歩きにくい。蕗の臺の伸びたのや薊の葉の赤黒いのが目につくばかりで、珍らしい花など一つも見えない。芽のまだ出ない短い雜木の中に醜いあくだらといふ棒のやうな木と、菫とが目にとまりはじめた。しとしと脊が汗ばんでくる、後から幼い子が平氣な顏して登つてくる。知らぬ子でもほめたくなつた。その後から神樂師が五人と、太皷や大きな箱を擔いだ人だちがせつせと登つて來たから、義姉さんも私もわきに避けて先にやる、色の白い瘦せ形な藝人の一人が、後から苦しさうについて行くのを見たらいやな心地がした。何とあついのでせうといひながらやう〳〵華表の見える所まで來た。こゝからは東京灣も富士山もよく見えるさうだけれど今日はそれどころではない。蕨の澤山

出さうな芝生に形のよい松が三四本あるばかりの谷を隔てた向ひの山の半面だけが茫然と見える雪の夕暮のやうな景色は何といつたらよからう。しらぬ間に自分たちも靄の中に入つてゐるのである。危いやうな石段を上ると新らしい白木の拜殿が四方開け放たれて長い



學びの庭　本所　安藤エイ子

注連が冷やかな風に動いてゐる。と今までとは俄に變つて頭の中までしみ渡るやうな寒さを覺えた。二人は立枯の大きな杉の木に何をか避けるやうな趣に身を寄せた。これからあの拜殿でお神樂があげられて鎮守様の遷宮式が行はれるのである。

山の記や海の記を好んで讀みたい時節が來ました(評)

○玉の雫は七色に輝く

麻布　葉がくれの花

名なき小川の流れ、微に響く水の音にも戀しい懷しい我が往年を語るかの樣に—。思ひは遠く舊きことでとにかへる。心は暗くはた明るく誘はれて、流れに添うて、逆ぼつた昔が戀しい今も猶、忘れずに、いゝえ忘れることができずに。

我れのみなどて變りけむ、……今もかうして往年の態を思つて靜に立つた、小川の邊りは變らぬ自然の儘、變化なき天地！平和な狀態！靜かに流れる水の面にも長閑な光りが漂うてゐる—僅に飛だ一雫にも色種々に輝てゐる—玉の雫は七色に今も昔も變らぬ、日の光りは七色であるのに—私は安らかに行かむ、一生を、たくすべき安住の胸を失なつた。あゝ。

人のみ胸に巣くうてふ、鳥は—み胸には溫き血汐が通はぬ、僅かに縋り得た時は、空虛な胸で冷たきものであつた。冷たき愁を悲しみを、無形の物を與へちれた、せめてと願た情緒は、影も形ちも無い、無限の怨みを思うて泣いた時、ふと光明の一線を見出した、尋ね得たかの喜びに、森の小川を見出したのである。あゝ、思ひ惑へば云ひがたき不快、ぬぐふべくもあらぬ、處女の誇りを、美事に疵つけられた樣な感じを得た時なんだ。若き日なればこの愁ひ—思ひ出に泣くは純潔なんだ—一たび燃えた胸はもう燃えない、けれでもまた熱せよ、燃えよと叫んでゐる。半にして燒き殘された恨みの姿、消え殘された醜き姿は、果敢ない心にも態にも末路の樣が、浮び出て、もがいて泣いた。遠きを辿る心もいま、鳥の羽音に驚きて、刹那の夢を破られた、遠き追懷から現實の世に呼び歸された、呼び歸されるのである。

夢の國をさまよふ心は、神秘の流れを見られるやうに神秘の囁きを聞く耳には—現在の世の夢の囁きを聞かねばならぬ時なんだ、小川の流れよ、我れはまだ現實の世に歸らねば無らないのである、水よ、汝れのみ變らずに、淸淨の流のまゝに、幾年の後も猶、變らぬ光りを輝して、せめての誇りを抱たまゝ淸き流れよ安らけき流れのまゝに—。

一種の情緒は確に動いてゐるのですが、取りまとめて一篇の文章とするだけの技術が足りません。もう少し理性に返つて文章を作らないと、作る甲斐がない、昔風に評すれば支離滅裂と云ふことになります(評)

○對座せる異性の友に

伯耆　新田文子

あゝ、如何して妾らは、こう對座すると、話がと切れて、興がさめてお互に冷たい感がするのでせうか。手紙の上では、いろいろとあんなにゝかく癖に、……いつでも、あなたとこうして對座すると、苦しくて、嫌に全身がぶるぶる、ふるへて、氣ばかりあせつて、ゐるんですわ。そして、談話をそつと胸の中に、問うて見ると、それは〳〵、一杯あるんですが、何故か、出てこないんですわ。せめてあなたから、話しかけて下すつたらと思つて見ますが、あなたも、やつぱり氣まづさうに、深い〳〵、無言の態度でゐらつしやる。ほんとに妾は泣きたくなるんですわ。漸う〳〵、あせつて焦つて、一つの談話を求めても、何一つ戯言もなく眞摯に終結して、しまうんですもの、いつそ、恁麼な時こそ誰か來て、妾ら二人の對座を、さいて呉れるものが——とも、思ふんです。ほんとに。此の對座は妾ら二人を苦ましむる、慘酷な罪深いものですね。

あゝ、これが、手紙であん麼に迄、心の秘密を、打ちあけて居る、親しい（異性ではあるが、友との、對話、對座と云へるでせうか、刻、一刻と冷い空氣が、妾ら二人の前を流れて行く樣ですね、けれど二人の面に、僅かな淋しい笑ではあるが、浮かばれて居るので、まあまあ妾等二人の對座は、持續されて、冷えきつてもしまひませんね。そして、割合に、長いですわ、ですから、まあ、此の僅少な笑が、二人の對座持續の生命とも、又恩人とも、なるんですわ。

異性に對する壓迫の感じは初めの數行で能く表はれてゐます以でよけいな理窟はなくもがなです（評）

○髑髏

金澤市　むらさき女

私はたゞ譯もなく安全な住家に飽いて、野原にさまよひ出た。野には若草が青々と萌えて、しきりに陽炎が上つてゐた。見ると足下に蜀紅錦にくるんだものが、落ちてゐる。アラ美くしい事ねといつて取あげたが何だか後から、人がつけてくるやうに思つたので、フと後を振り返つて見た。誰れも居らぬ。けれど氣が氣でないやうに思はれてドキ〳〵する、胸に錦に包んだものをひしと抱いて、ばた〳〵とかけ出した。まア冷たい鐵か何かのやうに布を通して、私の胸へ泌みこんできた、たへ切れなくてばたり取落した。蜀紅錦の包み

はゴロ〳〵と轉げて中から白い髑髏が一つ――。あと云つたまゝ動かなくなつたが、心だけはスーッと家の方さして走つた。……そうだもとの住家だ……。

只これだけでは意味が少いぢやありませんか（評）

○トンネル

備中　篠原しげ子

スー〳〵と乘合の人々は皆窓を〆めた、刹那、地底に落ち入る樣な響きを立て汽車は暗闇に包まれ込んだ、暗い眞暗い、幾ら大きな眼を張つても駄目だ。ジリ〳〵と私の胸には恐怖が滿ちて來た、ヒシ〳〵と頭から熱い息を吹きかけられる樣な感が湧く、厭な臭氣が鼻をつく、あれ何やら冷やりと、手にさはつた樣だ、ゾッとする、恐ろしい、今にも私は何者かに捕へられて、これぎり遠い〳〵奈落の底とやらにつき落されるのではあるまいか。

あゝ私は何處にどうして居るやらサッパリわからない此暗闇に搖られつゝ胸を轟かせ息を殺して震へて居ると、パッと怪しな光がした、ハッと驚いて見ると、薄赤い色に人の指先が見える、線香のくよつた跡の樣な赤い線を殘して燃えて行き、今にも其指先につきさうになつた、途端、ぽつと消えた、圓い赤いぼそが殘つた、其ぼそが上に上つてジゝッとくゆる又下におりる又上に上つてくゆる又下に下りる、忽ち其も消えた、又元の暗闇にと返つて了つた、はあ、今のは人が、マッチを摺つて煙草を吸ふたのだなあと悟つた、聊か心が柔いで來た、がう〳〵と底響きのする音のみ、外に何一つの見聞がない。

パッと俄に明るくなつた、あな嬉し、私の心は躍り上つた人々は皆依然として腰を下して居る、ボーと霞んだ硝子窓をバタ〳〵と人は下す、ふと南側の窓を覗くと、今、海の潮は沖遙に干て、磯には手拭かぶつた尻からげの女が澤山何やら掘つて居る、忽ち此所も過ぎた、けはしい崖にはさまれたかと、思ふ間に又忽ち此度は廣い〳〵平野に出た、短い青い麥田に、パラリと振り蒔いた樣、黒い着物を着た農夫が暢氣さうに仕事して居る、向ふの街道を俥が行く、子供を抱いた女を乘せて一所のみ駈け足して居る、ふつとふき出したくなつた、ふと我に返つて見ると、先刻の恐怖は何れへにか去つて了つて元の平然とした安らかなる私に返つて居た。

燐寸の火の描寫はまづかつたが、始と終の方は宜しい（評）

○馬車

横須賀　つゝじ

コバルト色に處々胡粉でも流した樣な日であつた。私は、久しく逢はない友人を訪ねようと思つて家を出た。隣の垣根の側の梅は、最う皆咲揃つて、未だ來ぬ鶯を待ち顔であつた。私は其下道を拔けて、何時も通りつけてる道路をぶら〳〵と、馬車の立場に出た。客待して居る空馬車は、二臺道端に列んで居る。前の馬は、頭を垂れて、靜かにして居るが、後のは、今客を下した許りらしく、眞白い息をフー〳〵吐いて、其茶色の汚れた毛の間から、汗の流れるのさへ見えた馭者は、二人共腰に赤毛布を卷いて緣の取れた淺い大きな火鉢の傍で喧嘩でもして居る樣な聲で話し合つて居る。小屋の奥から「馬車の馬丁が人間ならば――」、と歌ひながら十七八の顔の醜い馬丁が、兩手を頭の後に組んだまゝ出て來た。

「オイ源公何をしてるんだい――」、一人が云ふ。

「客を呼べ――」、と他の一人が叉喚鳴つた。源公は澁々



渚　青森　松尾千代子

に走り出す。

「出ますよ――、馬車が出ますよ――」、と一町許り先方でお役目的に呼んでる源公の聲が幽かに聞えた。其時は最う私は、前にあつた空馬車に乘つて「早く出せば好いに――」と思つて居たのである。

上手です（評）

○時

麹町　とこよ草

このまゝ別れたならもう此度逢ふ時は十九の恒さん、十七の私ではない。そして別れてゐた間に積んだ經驗だけは心がふけるのだ。何年かを待ちぬいて逢ふ其時は、もうほとぼりが覺めてるかも知れない。それは自分の罪ではない、時がつくつた罪なんだ。

血のわく樣な話を、胸を躍らせながら仕合つたのは最も樂しかつた時――春の盛――だつたと今に思つた。それもほんの僅の間だつた（何年かの後には又）とは思ふが其時はもう私は自由のならぬ身になるかも知れない。けれど今の心はそんな酷な悲しい事は思ふのも辛い。只（何年かの後には……）と夫許りを樂しみに私は何年でも暮さう。女はあはれな弱いもの。

始めて逢つた時云ひ知れぬ淡い〱淋しさを感じた。其次制帽が鳥打に變つた時は（もうDをつけた恒さんは見られないのだ）と思つて悲しくなつた。それが此度は袴も取り、絣をぬいで縞の着物になるのだといふ。私はそれを見るのがどんなにか辛い!!。

神秘的な溫い詩の人を、氷の險山へ旅立たすのに皆は立身の基と喜んで送る。天才の發揮を妨げるのも、人を氷の樣にさせ樣〱とする惡魔がゐるのも、知らないで皆な喜んでゐる。私もいつそ、そんな人達になりたかつた。

はき〱してゐますが、十分に思想が伸びて居ない、追々頭腦を善くなさい、（評）

○魚におどされた記

野の百合

「あの妙子、お前一寸お魚作て來てお呉れとこう茶の間から母樣のお聲がかゝつたので、早速お返事はしたが、丁度いま文壇の面白い處を讀でるんですもの、ほんとに立のはつらいわ。けどこういふ時克くしなきやと思ひ切て襷前掛かひ〱しく臺處へ出る。まづ鉢から魚のしりつぽつまんで爼の上へ載せ出刄を取る。おや何て綺麗なお魚でせう、全身は赤くて黃くて、は少し可笑しいけれどあか味へ黃味をまぜる色で、そこへ濃黃の斑が處々現れて口の先と鰭の先と丈淡紅い鯛にそつくりな形だけどそれよりかも少し長めなそれはきれいで花のやう。私こんなお魚初めて見る。何だか餘り美しいんで料理するのが厭に成り何うにも手が下せ

ないの。と今まで傍で見てた、うたやが「孃さまお切りなさいませんの」つて「何今きるのよ、餘り綺麗だから見惚れてるんだわ！」歌やは未だ私のお手なみ知らないもんであんな！さも出來ないのかてな事、憎らしいわ、なにこんなもの位切れてよ、お前なんかに笑はれちや心外だわ。妙な處できばつちやつて、切る氣に成る、でも何うも氣持は良くないの「かんにんしてね」心で詫して思ひ切つてサッと鱗を逆に引いた、と淡色のがはら／＼落花と亂れて、隨分きれい、けど思へばむごたらしいわ。お腹を裂のは尙更氣持が惡い。目をねむつといてグット刄を入れて左手で中のもの摑んだ。と其手へ妙にもざく／＼障るものが有る、變だと思つて見ると、アッ氣味のわるい！わたし思はず飛上つてやつと、其儘茶の間へかけ込だ。「おゝいやだつた「慄えてると「何がつて仰しやる、「だつてね母樣お魚のお腹から何だか毛の生えたものがもぐ／＼と這出したんですものオヽいやつ！」「そんな事有もんかね」と本統になさらないの。じやつて御一處に來て見るとうたが後してて吳れてる。見たら丸い少さな毛の生たものは有るけど、少とも動いてやしないの！をかしいわ、先きは慥に動いてたのに！ぢや今死んだのか知ら。「お前も臆病だね」母樣お笑ひになるあら母樣御笑ひ遊ばすな、貴女だつて何時か鰈にはねられた時、お逃げに成つたことお有りぢやなくて！と申上たかつたけど、私も「だつて！」と笑つて居たわ。

遂に其正體が分りませんね（評）

○形見分けの日

小枝子

ぢつとレースの日覆ひを見つめて居ると、いくらか目が痛くなつて來る矢張日が當つてるとみえる隅の方に黑い物が動く、フワリ／＼煤だ、ア、伯父樣もお弱り遊したなと思ふ白蓮を生け終つて靜に眺めて居ると流の蕾がポット、恰も羞恥を覺えた刹那の少女の頰の樣にポッとゆるんだ此大きい花瓣の中に氣力の神樣が入つていらしつて我々に何かの暗示を御與へになつてるのでは御座いますまいか、マ、淋しい今日の團欒、是が御誕生とか、日外の樣な俳句の會なら何樣に嬉しいでせうけれど、否え私だつてもつと華かな御花を選んだに違ひ御座いません、燃ゆる樣な牡丹、夫が崩れ易いとならば眞紅の躑躅、あつぱれ人の瞳孔溶かす樣に生けませうけれど、嫌な御遺物わけの日、四郞樣嬉んで入らつしやるでせうか、まさかねえ、いくら洗出し船板の火鉢が頂けるつたつて伯父樣の御身體を刻んで分けるのですもの、伯父樣もどんなにか御心が結ぼれるでせう、今日の御顏の暗い事、人の生ある內決して形見分けなんてするものぢや御座いません、若し私に御父上樣があつたら、無理にも御願して此樣慘酷な思はさして頂きますまい、御歿後遺產爭ひするものと今日の團欒開くのと、何れが不幸で御座いませう、死後法廷に立つ樣な事でもあつてはならんからと强ひて從兄樣を納得させて、此間からの御整理花瓶は本町へ、軸は赤坂の家へ參るのだ相で御座います、すれば白蓮は最早伯父樣への生納め名殘りの御花、マア鶴縋々々松はどうしたので御座いませう、伯父樣御許し遊しても此れが今日果てぬ內一ひらでも散たらどうせう、肺臓から出る人の息で、若し散たら元祿の昔十二月十四日の吉良家の茶席の柝の樣にぽたつと落ちたら、さぞ不吉と思召ませう開けば足音にも氣遣はれますもの、何卒今日の終るまで固い蕾の儘なれ

どひそかに念じだ。

○天の橋立遊覧記（一）

さゞん花

頃は彌生の半ば、かねて行かう〳〵と思つてゐた橋立見物にと、母樣と共に出立しました。朝まだき家を出てから、知らぬ村々を通つて、夕方橋立の傍に住んで居らつしやる叔母樣の許についた。十三里の餘も車上にゆられ〳〵て、大へん〳〵たびれたので、其夜は早く臥戸にはいつた。つとめて起きれば、一點の雲もない好天氣、勇んで支度整へて外に出れば、春の海の波も靜かに、よせては返す金波銀波、遙に浮ぶ眞帆片帆の美しい景色に、まづ驚かれて、思はずも白砂ふみにじつて止まつた。早く〳〵と促されて、心も空に進んで行くと、やがて目に入る好景、これぞ日本三景の一とめではやされる天の橋立である。

六里の翠色遠く萬頃の波光にうつた有樣、とても筆舌の及ぶ所ではないたゞ茫然と見つめるばかり。聞けば先つ年、東宮殿下の行啓あらせられてから、一入美くしさをましたとか、こゝから一こゑ塚を右にして進むかの、岩見重太郎の仇討を助た所も此あたりと聞いたけれど、松吹く風も、磯打つ波も、共に其昔を云はずそれから　東宮殿下便殿を拜觀した四方御簾かけ渡され、玉垣ゆひ繞されていとも畏く。前には御手植の松緑したゝるばかりである。其隣りに供奉員憩所がある。此所に暫時腰おろして殿下行啓の折の盛大であつた有樣等を想像しながらなほあきない景色を眺めた。彼方に童の三々五々、竹籠片手に落葉かき集める樣子の愛らしさ、此方に漁夫の夫婦共稼ぎの貝ほりの長閑さ、あゝ波靜かに風の清い此邊に塵の浮世をよそな彼れ等の有樣そゞろに羨しく思ひながら磯清水明神へ詣でた。祠は小さいけれど、名におふ清い御社である。

○新入生

岡山縣　紅　薔　薇

私の級には妙に下級の方を可愛ゆがる人が多い。Aさんの操さんに於ける、Sさんの君さんに於ける親しさはとても想像につかぬ程だ。私は冷淡なと云はうか未だ懷しい面影は認めなかつた。皆が手を取つて睦ましさうに校庭を彷徨つてるのを見て羨やましと思はなかつたでもない。が自分から求めてさうしたくもない。ところが今度ばかりは私も胸を騷がさずにはゐられなかつた。それは新入生の或る一人を見てからである。細面の色の稍青味を帶びた睫の長い何んだか淋しさうな顏してる人だ。きつと締つた唇は滅多に開かないでいつも俯いて、他の方のやうに快活さうな樣はないが私は妙にひきつけられてしまつた。絕えず涼しい眼がちらついて時によつては授業時間でさへ思ひ出して先生のお話がちつとも耳に入らない。と云つてAさんのやうにまさか必親展として手紙出す程の勇氣もない。只一人胸に秘めて決して口には出さぬ。もし、あの方が好きだなんて云はうものなら、それこそ皆からどんなに冷やかされるかも知れやしない。或る夕方であつた。私は一人音樂室の裏手をぶらついて、いつもの梧桐に凭つて乳色した空を眺めて居ると、誰かざく〳〵と砂を踏んで來るやうだ。見れば懷かしい人がいつものやうに俯いて。噫あの方も私のやうに獨りが好きか知ら？私が居るに驚いたであらう、あわてて禮をして行き過ぎやうとした。こんないゝ時が又とあらうかと思つて私は聲をかけやうとしたが、ふと見るとあの長い睫には露が宿つてた。ハツと思ふと堪らなくなつて胸の動氣が靜まらぬ。其内に行きすぎてしまつた。房々したお下髮の後姿を見て私は限りない哀愁を覺えたあゝあの涙は何の涙であつたらう？そして私は何時あの方と互に手を取つて慰め合ふ時が來るだらう？

○獨

安木春子

痛む胸をおさへて、私は椽の柱によつた、どんよりと低くたれた雲の間に星が二つ三つ臨終の人の息の如く靑くまたゝいてゐる他、家も木も地も黑い。意味のない冷い涙は止度もなう頰に流れた。

「天津風　雲の――」「ホイ和つた」「あら！いや私だのに兄樣は」妹の黃色い聲や兄の太い聲が階下からもれた、母を圍んで美しい頰を紅くしながら、はなやかな電燈の下にかるた取る、兄妹の樣を思ひ浮べて暗い氣

もちがした「同じ父母の血を受けながら、私ばかりはなぜかう暗い所で泣くのが好だらう——何時か妹が云つた「ほんとに姉樣は冷いわ、血も涙もない丸で蛇のやうね」と、あゝ蛇のやうな處女、何と云ふ悲しい言だらうと、その時も此所に立つて泣いたが——私とても處女、人生の高潮と云ふ青春時代にゐるんだもの胸に高なる紅の血もあれば、逝く春の夕蝶をあはれむ涙ももつてゐる——けど！けど!!神樣は暗い所で泣けよとお命じになつた頸をうなだれて暗い道を行くべく、運命をおさだめなすつたもの、暖い父母の愛にそむきやさしい兄妹の睦みからはなれては暗い所で泣く。

ものゝ憂に色あらば青きぞ我の憂なる

もの憂よ夜の青葉　暗き歎きよ夜の青葉

信濃の高原に人となつて海を戀ふる君が眞の叫び

あゝ暗きなげきよ夜の青葉——更け行く夜半を燈かゝげて熱した思を筆にうつしなすつてか？　それとも御庭の白椿のかげに、海を戀いて瞑想に沈んでおらしつてか？　荒波すさぶ日本海の岸にお作を口ずさんで暗い歎に沈む吾ある事は、夢にも御存じあるまい！　なつかしいは其詩！したはしきはその人!!

何が可笑しくてか階下ではまた、どつと笑ふ聲……



あゝ暗い思になく私は一人法師だ。一人！一人！——心よわき吾は涙の愛子——泣くべく許された夜の床の中に今宵心ゆくばかり泣かう。

二階の窓より　ゆめみる人

○或日

小倉　その子

ガラ〳〵〳〵「ヤツトコサ御免なさい」と、いつもの藤田のおばあ樣の聲がしたと、思つてると、もうすぐ上つて來られた。お母樣お留守故、例のお好きなお國話のお相手も出來ねば、昨日來た女子文壇や、文學世界お目にかけたりして居たけれど、それも見つくしたので「かきもち」とあつい御茶を入れて、さし上る、白髮まじりの慈姑然たる切り下げ頭を、ひよこ〳〵さ

して、召し上る。

其内母様がかへつて來られたので私は髪を桃われに結うて頂く。「お前の首は、いつも左へかたむいて居るよ。お直し。」と母様がおつしやるので「私の首は、直しても、ぢき又さうなりますの。くせですわね」と云ふと、おばあ様そばから「今の女學校へ行く女は皆母に口答へするのし。片意地で内の房江(嫁の名)と同じじや。學校風でのし。」とおつしやる。私それが何より腹が立つた。學校風なんてあんまりだ、私たゞ何の氣なしに申し上げたのが、そんなにわるいんかしら。私一人の爲め學校まで、ひきあひに出されておたまりこぼしがあるものか。

一日胸がむしやくしやしたので、まり子様のお家へ上る。同じクラスの柏木さんが此春休の中に工學士の所へお嫁入りのお話を伺ふ。「まあ、十七や八で、よくこはかないことね」と云つて笑はれる。「だつて女學校の二年生頃からあんまり早いわ」と人事ながら氣になる。色の白いハイカラな、あの矢がすりのお召がよくお似合だつたがどんなマダム振りだらう。

夕方まで遊んで雨が降り出したので、傘を借りて家へ歸つた。

○ヤコブの夢

仙臺　シヲン女

家出せし胸の騷ぎもやゝうすらぎて思は旅のあなたの伯父の宿へといそぐ送り迎ふる野の花の色香をのこして鹿の子のやうにいそぐ。いつの間にか我と共に來し蝶は花の宿に歸りしか、暮れゆく今日のなごりとて一時にそむる夕榮の空からずはねぐらにいそぐ。やがて暗は此の野道と我心にせまりくるオーなつかしい故郷の母上よ。

父をあざむきし恐怖兄の權の掠奪者。疲れし身。空腹。身にしむ冷氣。胸の重み。石に腰を下ろすこととしばし目の前に天から足元まで何ものか動くやうに見える面白きもの。

じつと見つむるまにしづかに夕霧はれ行きて明に表はれしは高き梯子足元から雲の上までそして數百の白衣の天使は讃美を歌ひつゝいとしとやかに或は上りつ或は下りつ。我をながめて居る、あゝうれしい御使達よ。どうぞいつまでも歌ひつゞけて下さい疲れもなやみも消えました。あゝ御使達を使はした神様に有難うと云うて下さい。

○梅花

芝　菊子

空は灰色にドンヨリして今にも雪が降りそう。

何となく不安な淋しい日である。

妾は此のごろ急に何物にも無趣味になつて了つた。

女子の命と思ふ髪が解けても、それすら掻き上げてつくろふ事すら厭でたまらない。

妾は催眠術でもかゝつた様に失心して了ふ。

家に入れば暗い、淋しい、唯理由もなく厭な感がする。

此の頃のやうにこうふらり／＼しては實に仕方がない。

火鉢の前に坐つて、考へるともなく無意識に考へる。

チン／＼と鐵瓶がさかんに沸騰つてゐる。

部屋は相變らず暗い、机の片隅にある梅の花が目に入る。花だつて盛を過ぎれば萎れる、散る。

花の一生も短い、人の一生も短い、花は何様花でも盛りが來れば人から愛される、が人は左様は行かぬ。

愛されても、其の愛を知らずに萎れ、而して散つて了ふものも澤山にある。

此の様な人は實に不幸の極だと私は自信します。

妾も盛りはあつた、がもう過ぎてしまつた、是から萎れるばかりであるそして散り果て了ふのである。

人世は總て此の小さい梅の花のやうな、はかないもゝだと思ふ、何だか悲しい、不安な。

微かに氣笛がボアー――と餘韻ながく響く………。



和歌

与謝野晶子選

○（天賞）　能登　柳周子

わが胸はさびしき戀にふれてより涙もろくも事ごとに泣く

○（地賞）　三河　天野清子

さく花をいつしかと待つ樂しさはつれなき人を待つにまされり

○（人賞）　茨城　直井はる子

ひと枝の桃の花をば折りぬれば誰ともわかず人の戀しき

【秀逸】

○　府下　霞子

籠に啼く蟲ならねども我こゝろ狹きなげきに歌ひ出でにき

○　北海道　安達けい子

わが總身ふるふをおぼえ君が目とわが目とあひし束の間のこと

○　麻布　美耶子

いとけなき心失せつゝ世なれゆく少女ごゝろを哀れとぞ思ふ

○　信濃　古畑よしみ

山里に一人殘れるこゝちして五月雨の夜は物のさびしき

○　長野　淺田千代子

世をしばしはなれて我を思はんとのどけき春の海邊にはきぬ

○　京都　要司村福子

心ゆく文を待ち得しうれしさはまた憂きことの始めなるらむ

○　　麻布　佐藤かよ子
うつくしく花をうかべて水ぞ行く涙かわきて労れたる眼に

○　　常陸　鈴木花香
焚く香も夢のごとくに悲しかりけぶりなびきぬ御柩の前

○　　茨城　岡田きよ子
五月雨や風を病む身は煎薬のかをれる中にうたゝ寝ぞする

○　　能登　柳牡丹子
霞む野の天つ少女の遊ぶかと見ゆるけしきにれんげ草さく

○　　能登　勝田清瀬子
ほとゝぎすわが見る今日の美くしきわかきはたちの夢なさましそ

○　　越中　村井きよ子
あは雪の朝のひかりに消ゆるにも心みだれてなつかしき君

○　　上毛　もと子
百合の花そよ風ふけばしづくしぬわが悲しみの時にあるごと

○　　伊豆　土屋みき子
暖き心の國を逐はれきてあをきなみだの海に漂ふ

○　　福岡　良久子
うらぶれし身は何處ともさだめなく失せし心をたづねてぞゆく

○　　大阪　向井白露
この燃ゆる心みだれて狂ほしと牡丹は散りぬ火の色をして

○　　三島豊村
二十とせのわが見る世こそ樂しけれ黒髪を梳くよき香をたく

○　　京城　中尾艶子
大空もものを疑ふまなざしに戀する我を眺めぬるかな

○　　越後　細流女史
わが戀よ咀はれけりな眼には今磔刑の木のまぼろしを見る

○　　金澤　むらさき女
繪日傘に町の日影をよけてきぬ前髪にほふ小さき文使ひ

○　　和歌山　小瀬田富美子
散る花にわが薄青きこころさへまじれる如き春のゆふ

ぐれ

○　大阪　草村君子

夕ぐれの濱邊にうずく黄ばみたりわが世に似たる月見草かな

○　大和　中富よしみ

わが悔は珠數の如くにつながりぬ心は暗き灰色をして

○　陸前　浮草子

ほのしろき少女の額を夕ぐれにふと見る如き木がくれの空

○　豐後　吉良靜子

うら悲し命わすれて思ふべき戀しき人を七日みざれば

○　長野　加藤二葉子

友はみな白き眼をして吾をみぬ世にすぐれたる君を得しより

○　府下　隅川あや子

新しき御代の手振は知らねどもわれらの歌は心より出づ

○　失名

荒波の上を行く舟われもまたはつべき方を未だ思はず

○　羽前　あらゝぎ

わが名をば母の呼べるにおどろきて我にかへりぬ夢の國より

○おもひでの疼が弱き神經を捕へて語る若き日のこと　長野縣　石上照子

○誰となく戀しき時は紫の菫を摘みてかざしにぞする　横濱　百合枝

○あかずして君と別れし春の夜も今宵の如く月ぞくもりし　麴町　靜子

○戀かけのかげにかくれて戯れにわが泣く聲を聞きたまふ君　飛驒　悅子

○戀すてふ君が御胸のときめきを知らでありけりいくとせかわれ　大阪　高山米子

○くちづけしそのひと時にわが罪をおどろかすべく鐘のひゞきぬ　靜岡市　原田綠水子

○散りがたの梅のあはれをよそにして櫻のもとに人つどふかな　大阪市　山内溪子

○君が家の柳のもとをたもとほり月のぼるまで待ちし夕ぐれ　大阪市　石橋うめ子

○夢のごと長閑けき野べにあこがれぬ戀する我は蝶のたぐひか　直方　みつ子

○言葉もて云ひがたければたゞひとり心もだえぬ戀にはあらずや　臺北府　毛利久江

○わがせこのもとに來かよふ敎へ子の少女を見てもさわぐ我胸　和泉　金田文子

○花に吹く風の心のつれなさを思へばさびし春の夕暮　熊本縣　蘇月

○あさみどり若葉のかをり袖を吹く皐月の風に燃ゆるわが胸　肥前　山田やゑ

○咲き匂ふ花の木蔭をふみ行けば夢のなかなる心地こそすれ　佐賀縣　とし子

○瀨の音を聞きつゝ夢に入る如く優しき人のみ言葉をきく　東濃　桃花亭

なばゝをば花にかざらぬ心こそまことの人のにほひなりけれ
○　栃木　丸山房子

大空もわが心をや知りぬらん君を思へば小雨降りきぬ
○　滋賀　鈴謡

おぼろ月君がたまひしいく歌をそらんじながらそゞろありきぬ
○　鳥取縣　松浦月桂子

春の風みどりの髮をなびかせて行く少女子に櫻花散る
○　栃木　しのぶ子

天つ神君が思ひとわが胸とくらべ給はばいづれまさらん
○　東京　三好富久子

美くしき尼姿さへ忍ばるれ西の都の山寺の鐘
○　横山椿木まき

つれなくも過ぎ行く春を惜むらん青蝶がくれに鶯のなく
○　大阪　植松艶子

痛む身にはいと哀れにもきこゆなり花の木間の入相の鐘
○　セレベス島　鯉登子

わが住めるセレベス島は春くれどちゝろ／＼と蟲のみぞ啼く
○　山形縣　島貫孶子

すみれ摘む町の少女の振袖にもつれて立ちぬ野邊のかげらふ
○　淡路　加藤菊子

君見れば笑まゝほしかり然れども少女ごゝろは世に二つなし
○　秋田　櫻井了子

何となく悲しき事のある如く暮れ行く空を仰ぎ見るかな
○　秋田縣　野宮みさほ

春の朝霞の間より鐘なりぬさくらのなかの樓に上れば
○　秋田縣　萩原とよ子

つく鐘の響につれてさくら花もろくも散りぬ人のこゝちに
○　千葉縣　吉井光子

くれなゐの櫻さく日となりぬればひと重の霞とばりをば引く
○　丹後　竹田やゑ

わが彈ける琴の音にも花ちりぬ彌生の末の木のもとにして
○　福岡縣　荒川たか子

少女子のちひさき胸に大ふねのごとく賴むは君ひとりのみ
○　飛驒　知代子

碎きなばうら安からむ小暗くも中にきづきし疑がひの壁
○　飛驒　眞砂子

悲しかる事を重ねて黑髮の日ごと落ちゆくわれのおとろへ
○　京都市　松原きぬ子

いつはりの聲とは知れどなほ甘き君が言葉にすがらんとする
○　伯耆　足立春子

我が戀よ彼のすさまじき龍卷の空に卷かれて消えよとぞ思ふ
○　富山縣　山本紫薹

只ひと夜降りし小雨に紫の芽をばもたぐる若き草かな
○　名古屋　宮田和子

わが上にまたも嵐は吹き出でぬさくらに似たる心ならねど
○　下關市　長岡あさ子

むなしくも語らで年をすごしけり君を戀しと思ふ一ごと
○　下關　松山瀧子

身にあまるこの悲しさを誰れにかもあはれを知れる人に語らん
○　千葉縣　松ヶ枝浪江

この日頃君と向へばなつかしき事あるごとく胸のゆらぎぬ
○　上總　松ヶ枝ゆき子

ざれ歌をよくずる若きひとむれの男の上にさくら花ちる
○　直方春子

淀みたる水の如くにわがこゝろ疲れて物の悲しき夕
○　直方秀子

ゆくりなく得し戀なれば捨てんとも思へどよわき我が心かな
○　金澤市　藤永靜子

ともし火も我をばあざけるけしきして君待つ夜半にまたゝけるかな
○　本郷　小山田翠子

あはれなる我は小羊はてしらぬたそがれの野をさまよひて行く
○　宮城縣　小山田貞子

おぼろ夜の大路を行けば戀ずるも戀せぬ人も美くしきかな
○　越後　文枝
別れつる日よりやうやくやつれつゝ身は細れども逢ふよしもなし
○　常陸　喜悳子
うぐひずの花ふみちらし鳴く蔭にしのびて聞ける小きいもうと
○　常陸　一少女
青き野の果に白帆のほの見えて海にのぞめる松の村立
○　和歌山　木澤てる子
しら梅の水にのぞめるにほひにもまさりて清し君のみなさけ
○　三河　淺井浪越子
花見んと契りし明日やいかならむこゝろにかゝる夜半の春雨
○　備中　篠原しげ子
のどかにも紫なびく藤の花わが袂かとあやまたれつゝ
○　枯尾ばな
探り得しこのしら玉を人は皆すてよと云ひぬあはれしら玉
○　麴町　常世草
一しきり燃えつゝ沈む日の色よ戀しき人のおもひ出に似る
○　横濱　藤田たね子
かなしさに筆をばとれば消息の上に先だつわが涙かな
○　茨城縣　古島花子
花さけば若き少女のおぼろなる夢のごとくに春雨のふる
○　東京　花風子
紫の袂なびける箏の前春かぜのごと絃の鳴るかな
○　千葉縣　岩澤周子
ひと度はかなしき胸に親もなく世をも人をも捨てんとぞせし
○　神戸　春子
少女てふはなやぐ名をば思ふ時泣かじとぞする目はうるめども
○　信州　山本操
さびしみを愛づる心は秋の野の蓼の花にも口づけて見ぬ
○　姫路市　菅原靜野
かたぶきて物おもふ父うちもだしうすく笑ひる母のさびしさ
○　秀峯

見かへれば家はかくれぬ桃の花あかく霞むや母居ます里
○　淺草　初子
おぼろ夜の渡し舟より上り來る花見がへりの美しき人
○　失名
さくら花吹雪の如くちる中にかすかに聞ゆ犬の遠吠
○　月しま　京子
さくら花咲く日ちかづくなつかしき君がかたへにある日ちかづく
○　伊勢　田中みね子
二年の昔となりし君なれどその別れこそ今も痛けれ
○　常州　齋藤いち子
うるはしき都少女を見送りて涙ながれぬ物思ふわれ
○　天津　須磨子
春雨や米搗く家の軒ちかき杉の木になく鶯の聲
○　天津　小夜子
紅梅のちりて流るゝさゝ川に衣を洗ふ里少女かな
○　磐城　倉田ふみ子
いろ〳〵の繪皿にならびひと鉢の罌粟の花さく文机の上
○　磐城　兒玉春子
こと更に笑みをつくりてひやゝかに別れしのちの胸のくるしさ
○　愛媛縣　石川喜代子
行末を神に祈れる身ならねど明日と云ふ日のたのもしきかな
○　秋田　園子
山かげの檜原の道をたゞ一人しづくにぬれて行けばさびしき
○　上毛　高柳靜子
少女等が水田に立てる菅笠にましろく降りぬ夕立の雨
○　長崎市　茂榮
春の夜の月と花とにあこがれて思はず君が門ちかくきぬ
○　東京　杉山仲子
病みませる母にかはりて砧打ちわが手をてらす秋の夜の月
○　大阪　日高とよ

朝つゆに野菊ぬれたる森蔭を踏みつゝゆけば心しづけし
○　島根　森　千代子

よろこびな盛るうつはものいともろく砕けて更に盛るよしのなき
○　廣島縣　谷川まつ枝

たさの音やさしき笛の唄まじり垣根靜かに桃の花散る
○　府下　島田琴子

美しき花毛氈の上にちるさくらを追ひて舞ふ胡蝶かな
○　越後　金塚美代子

のたまひし君が言葉を歌とせん心ひとつに秘めがたくして
○　千葉縣　佐久間和子

君いざや戀しきまゝに手を取りて花さく春の野邊に遊ばん
○　千葉縣　芳枝子

春の野に花をつみつゝ君とわが語りしことをゆめな洩せそ
○　長野縣　津金壽枝子

かにかくに思ひまどへる世の人のいと見苦しき泣き笑ひかな
○　香川縣　大平マサノ

世の果ての冷たき國に只一人殘る思ひす君と別れて
○　大連　柿本千枝子

あさはかに怨みし我を悔ゆるかな君がうるみし目を仰ぐ時
○　島根　時雨女

櫻貝遊ぶみぎはをなつかしみ磯に旅寢す春のくれがた
○　横須賀　鈴木辰子

花にふる春の小雨を眺めつゝ靜けき窓にもの思ふ人
○　山梨　いば藤

春の雨靜かにふれる野をゆきてわが黒髪のぬれにけるかな
○　高知　秦頂女

狂ほしきわれの心も青空のかすむを見れば少し靜まる
○　岩手　幽峰子

たそがれの春の野邊をばさまよへる胡蝶も似るか我のなげきに
○　若松市　宮原一枝

夢のごと友は眠れり春の野の若草生ふるおくつきのもと
○　信濃　丸山峰子

わが庭に遊べる鳩も見えぬまで今一しきり花吹雪する
○　三島　村瀬常月

かたち　や衰へそめて忍びかね泣く人のごと秋の雨ふる
○　千葉縣　高橋美也子

何ごとか告げまほしげにくちびるを我に向けたる紅椿かな
○　大阪　みどり

朧ろ夜の花かげづたひ我が知らぬみやび男ありて夢に入りきぬ
○　小樽　濟田芳枝

くれなゐの春のともし火なつかしき君が御文の上をてらしぬ
○　陸前　阿山としえ

わが戀はいとも危しかの君のひと言により亡びんとする
○　大阪市　山内富子

鶯の音に眼ざめたる妹の頰の如くにも紅椿咲く
○　濱松　淺倉君江

君みれば長き三とせの我胸に黒く描きし影はあとなし
○　四谷　榊崎佐喜子

清らなる神にまじらんにごりたる人の群には入らじとぞ思ふ
○　羽前　野口菊子

夕露の光に逢はでいたづらに枯るゝ小草をあはれとも見よ
○　横須賀　つゝじ

山川にちりゆく花をうらやみぬ世のしがらみを越えかねし我
○　本郷　布川糸子

かへります君が姿を春がすみしばしつゝむなたゝずみて見ん
○　筑前　四手紫流

嬉しさの身に餘るをも忘れつゝ君を怨めばおもしろきかな
○　琴子

胸の血のかわくことをも知らざりきかのやさしさに欺かれつゝ
○　新潟市　吉田ひな子

喜びにたへざる如き紅き花少女の頰にも似たる雛罌粟
○　徳島縣　西本しげる

玉川の堤に立ちてたゞ一人春行く空をながめつる哉

○　丹後　壺内八重櫻

ましろなるひと重の瓔珞のあはれなり小雨にぬれて我庭に咲く

○　京都市　島本久惠

いとあまき心一つを捧げんと我手をとりて泣きたまふ君

○　靜岡縣　高田元子

ちる花に月のかげさすこゝちしぬうるみし君の悲しき瞳

○　白山御殿　うずゆき

なになればかの君にしもわしるらん母のみ膝を今日は離れて

○　伊勢　露木雅子

うれしきは木かげを行きてなつかしき君がみ歌を口ずさむ時

○　德島縣　山内千代子

我が心たえずさびしも暗き夜のあらしの海を見るこゝちして

○　常陸　しげ子

そことなき笛の遠音も人ごゝろも物思はしき夕なるかな

○　越後　岩本芳子

岡にきぬ君とわかれしかの濵はしらく〳〵として夕浪ぞ立つ

○　筑前　河原龜野

春の雨ゆきて濡らせよ紫の菫の花はうなだれて待つ

○　札幌　迷子

人はみないとをかしげに物言へど春にそむきてひとり泣くなり

○　德島縣　中村玉野

かゞやかにこがねの臺のともし火の燕ゆるが如くひまはりの咲く

○　福岡　小林ぜん子

菜の花の畑を見わたす川岸に舟を待つ日の長閑なるかな

○　宮城縣　二木綠子

夕見しは東の間の夢かなしくも永久に消えざる美しき夢

○　京都市　町田てる

風無きにさくらは散りぬ花すらもいかにさびしと世を思ふらん

○　岐阜市　蔦の葉

父母は子なる我にも心おき空を見るなと目かくしをする

○　淺草　藤波

おぼしまに二人ながめしおぼろ夜はかへれど君のおとづれもなし

○　熊本　波の花

まく渦の中に流れて砕け行く花にも似たるわがすくせかも

○　茨城縣　流水女

畑中に高く積みたる新藁のかげにかくれて物云ひしかな

○　赤坂　福島美代子

天地に只君ひとり賴みつゝ生きんと思ふ我となりにき

○　岩代　大竹ちきの

鶯も花にかくれて音を鳴きぬ病の床に泣くわれのごと

○　越後　芝武子

我戀はおどろの中の山つゝじ燃ゆとばかりも知る人のなし

○　京都市　齋藤かの子

村はづれ別るゝ人に悲しくも花散りかゝり春の風ふく

○　沼津　渡邊とよを

おぼろ月軒端の花にけぶりたり美くしきかな春雨ののち

○　富山市　横山あや枝子

水盤の冷たき音に似たるかなこの堪へやらぬ白き悲しみ

○　神奈川縣　千代子

物たらぬ日にもあるかなかゝること久しかりなば我は死ぬらむ

○　三重縣　後藤たい子

かなしくもふくるへる少女かな青き木立に倚りて笑ひぬ

○　兵庫　杉山斧翠

久しくも鏡をとらず髪かたちつくろはぬ身となりにけるかな

○　山口縣　都志子

都より歸り給はん水無月を戀ひて淚す春の夕ぐれ

○　直江津　失名子

少女らが落葉を踏みて歌ひつゝ過ぎつるあとに暮るゝ山里

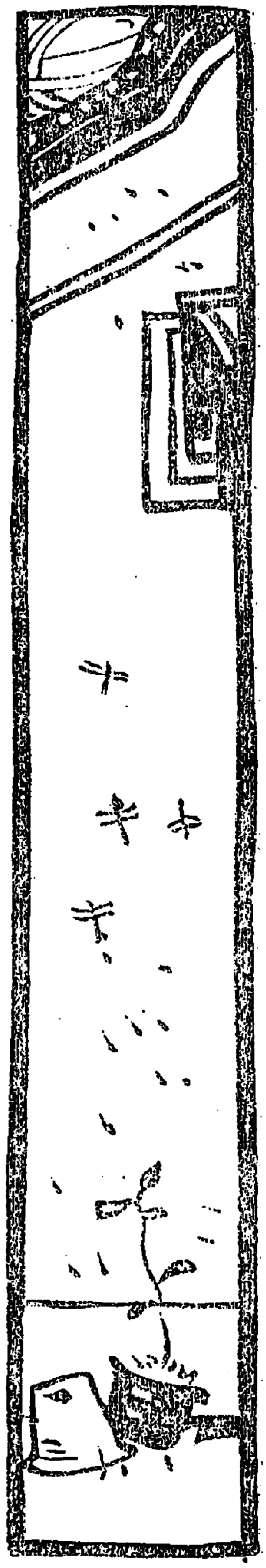
○　大阪　愛子

つめたかるなさけもつ身にあらねども君が心にそむかんとする

○　西多摩　霞子

ひとむきに思ひつゞくる性もちて君を戀しと念じはじめぬ
○　備中　馬越昌子
錦織る上京ゆけばあはれなり梭の音しぬ唄にまじりて
○　出雲　しらぎく
菜の花の咲く野を越えて初瀨河原につめば鶯のなく
○　廣島縣　後藤壽美枝
ひと畑の赤き芽ふける芍藥に煙のごとく春雨ぞふる
○　和泉　孤舟子
今日よりはよしやをろちに巻かるとも魔のいざなひに逢はんともよし
○　安房　伊丹友子
水の上の柳の影は春かぜにみどりの網を打つてゝちする
○　加賀　勝崎きく子
或時は君をかなしみ或時は憎しとさへも思ひけるかな
○　尾張　佐分華影
斜めにも赤き入日の光さしいたましきかな灰色の空
○　福井　北利子
父母とむつがたりする夢さめてさびしき闇に涙こぼれぬ
○　靜岡縣　壽賀子
何となく人のまたるゝ心地してほそめに明けぬ夕ぐれの窓
○　遠江　富永雪子
影淡き二十日の月は山の端に沈まんとしてなく時鳥
○　長野縣　天神さくへ子
春の野にいでて花つむ少女づれ大方は皆花に似るかな
○　土佐　嶺女
春雨に心地よげなる草見ればわれさへ出でてぬれんとぞ思ふ
○　麻布　石井壽美江
思ふ君わがやぶれたるかなしみは君ならずして誰か救はん
○　麴町　牧野嵐水
老びとの泣きくづれたるさまに似て雨に亂るゝ刈萱の露
○　尾張　加藤蝶子
さわやかに朝の風吹く丘に立ち青き木の間の君が家見る

○　麻布　藤村雪子
行く春やさくらちる夜のつれ〲にわが黒髪を灯に照し見る
○　三重　うた子
いつしかと待ちにしものを我が庭の梅さきそめて鶯のなく
○　三重縣　文子
さくらちる夕に君も遠く去るたへがたきまで心かなしも
○　信濃　古畑正枝
あかずして君と別れて夕暮の窓に淋しくけぶる春雨
○　信濃　淺田いと子
わが庭の梅は咲けどもうら山にまたとゝのはぬ鶯のこゑ
○　下谷　林久榮子
月白く照りたる窓に物思ふ心を知るや啼くほとゝぎす
○　京橋　西藤萩香
僞りの涙と知れどあこがるゝ弱き心をいかにすべけん
○　牛込　平塚白百合
わが胸の罪のゆるしを乞はむとて神にはしるを引きとむる戀
○　三島　幽喜
鎌倉の丹塗の宮のおばしまに若葉にほひて青あらし吹く
○　千葉縣　鶴岡一枝子
一つ杉空に向へる懸崖の上にほのてる星を見てある
○　羽後　三浦ふみえ
くれなゐの鬱伏す水を白き鳥一つ飛ぶなり夕暮にして
○
はなしやる鳩の行方を眺めつゝ天のあなたの花をおもひぬ
○　和歌山縣　宮崎光子
夕燒の雲はかなたの海そめて白良の濱に秋風ぞ吹く
○　常陸　山本保子
秋の夜の川しろ〲と月影を受けてながれぬ草野の中を
○　下總　小出保花子
かにかくに我れ女なりされぱこそ心弱かることもらしけれ



日記

横瀬夜雨選

○或る日（天賞）

赤坂静江

心重いぬか雨が宵の中からしと〱降つて居る。
起きると直ぐ四五日お悪い母様のお居間に伺ふと、「雨かえ」と佗しげに仰有る。此麼日は何御出張の父様のお歸りが待たれる。食前の水藥の苦いのを上げるのが私迄辛らかつた。今朝廣島の幸様にお返事出す。
艶と里に解き物を渡して、自分も縫ひかけの羽織を始める。障子明けて置いたが飛沫が入るので閉めた。
默つて一人で針を動しながら去年の今日は稲毛に滯つて居た等と思出した。やはり小雨が降つて遠い房州の山等淡く夢の様に霞んでゐたつけ、養生館の庭の間をぬけて素足にわら草履はいて細い砂をふんで坂道を走り下りた事や、洋刀によく似た貝を見付けた事や、海女の子に貝買うて呉れと責められて逃げ出した事や、僅か一年前だけれどあの頃は身も心も自由だつた、如何にも樂しく華やかな方が見えた。畑の道に生えた草の葉を柴笛として「月光」を吹いた健一さんは、もう立派な候補生になつて遠洋航海の途に上つた。
初めてサザンクロスを見たと便りがあつて一ケ月、秋頃はどんなに成つて歸るだらう。
お午には半熟の玉子を差し上げたら喜んで上つた。
暫くして「退屈しのぎに何かよみませうか」と伺ひにいつたら、お休みと見えて御返事がない。靜かに下つて又お裁縫に掛らうとすると、「杉野の小母様と美枝様がいらした」と里が取次いで來る。お目に懸つたら「松屋で友禪ものの陳列會があるから一所にお誘ひに」と仰有る。美枝様が「是非」と御奬め下さつたが、母様の事が氣がかりでお斷りした何やら今日は氣がめいつて仕方がない縫ひ上げた羽織の押しをして何するともなく机の前に坐つて居たら、花屋が白つゝじを持つて來た。

直ぐと勝手に活けて母樣のお居間にもつて行つたら、「もう咲いたね」と淋しい聲で仰有つた。
夕方父樣から甲府の繪端書に、明後日歸るとあつた。
今夜は久しぶりに母樣の仰せで琴をさらふ。其中おやすみなさつたので「櫻狩」と「たま川」で止める。
氣の故かおやせなさつた樣、ゆるく閉ぢたお眼がおちて宵の灯かげにいた〳〵しい、小さな聲で「お母樣――」とよんだが聞えなかつた。
琴柱はたてたなり爪も疊にころげた儘、ソッと窓を明けると、暮近くなつて上つた空に四日の月が淡くかゝつて、庭には雨と一處に流れた櫻の散りひぢが其儘、一條の花の川を作つて居る。
一しきり柔かい風があやしうぬれた頰を吹いて、一重櫻がまた散つた。

「又も一重櫻がハラ〳〵散つた」とあつた、くゞりは平凡、全體もどちらかといへば平凡だが、琴柱も立てたまゝ爪もほつたらかしたまゝ立つて花やかなる四日月を見るあたり、背には病ある母君がしづかに眠つてゐる、この筆たやすくならふべからず。

○春の日記（地賞）

大分　いと子

春雨が五日目に漸う晴れたぬれた若葉に旭がさし一段とあざやかに見ゆる、わたしの胸も久し振りに霽れ晴れとした、何だか絶えず耳許で甘い私語を聞かされてる樣で笑ひたくてならぬ。豐後から籠賣りが來た、青だとか、赤だとか、でく幼稚な着色をした若菜籠をぐつずり荷つて……二十五六の、どこか間の拔けた顏をした男だつた每年菜の花の咲く頃になると、きまつた樣に豐後から籠賣りに來た、山越をして七里、其商人の姿が見ゆると町の子は爭うて買つた。豐後の……溫泉町に近い邊りでは一年中竹細工で生活してゐる色々なものを工夫しては別府の町に出す、別府に來てゐる諸國の溫泉客は必ず其を土產に買つてゆく、といふ樣な事を嘗て行商人から聞いた事のあるを思ひ出した。竹細工を商ふ店と溫泉宿ばかりだといふ別府の町……その春の宵に樣々な他國の人が一樣に繁劇なライフから脫して、自己の存在さへ忘れてふら〳〵と當もなく步いてる樣を思ひ浮べて限りなく羨ましかつた。午後髮を洗ふ、はらりと捌いた黑髮は、うねりをうつて腰に亂るゝ、暖い日が肩に集つて、てすりに腰かけたのが、はつきりと前の壁にうつる。絲の樣な水氣が髮より立ち登るのさへ認められた。袂の觸るゝ所には澤山椿が血の付いた唇をかつと開いた樣に、少しくうつ向き勝ちに幾つも〳〵咲いてゐる、此の間からの雨にぽつたり、ぽつたり落ちてゐたのが、まだ取り拾られずに其まゝ雨に濡れ泥にまみれて一面に重なり合つてゐる。榮華と凋落……わたしは夢から覺めた樣に深刻なる春の悲哀を知つた、耐へられなくなつて急に居室に入つてぴつしやりと障子を閉めた。

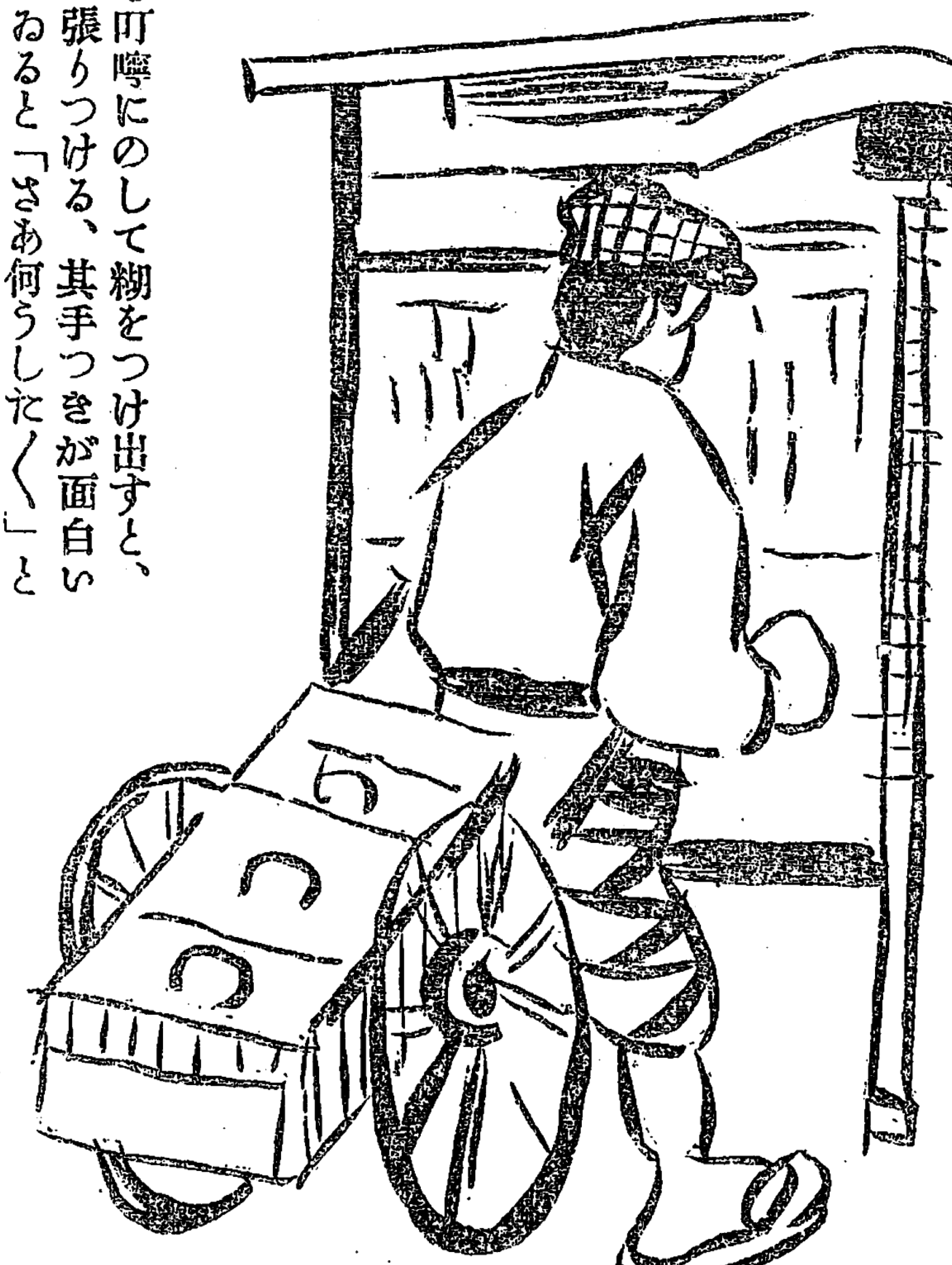
豐後から來るといふ籠賣もよし、春の夜をいで湯の町をさゝめきある

く旅の人もよし、はらりと解ける髪もよし、壁にうつろふ影もよし。しやとしめた障子もよし、女ならばさらによし。

○糊つけ（入賞）

下館　木村那賀子

三月十二日、珍らしい上天氣、お仕事が隙なので、お父樣がざるを張ると仰言る。で私は糊かきをする糊を作らへてる間にお父樣は棚から反古紙を澤山出した、糊を皿にいゝ加減にのべて下さる、裏の日當りのいゝ所へ薄べりを敷いて裁板を持ち出して、其上で糊をつける、餘程古い紙と見えてへりが皆茶色に成つてる叮嚀にのして糊をつけ出すと、お父樣が巧みにざるへ張りつける、其手つきが面白いので張つて了ふ迄見てゐると「さあ何うした〳〵」と云はれ、吃驚して大急ぎでつけると「隅の方が少つとおつかないよ」とお叱言を頂く、だん〳〵紙が減つて來る内に極く小形の赤や青や白の封筒の手紙が何本も出た、見ると皆木村清作樣へ輕部直民拜と記してある、おやへは亡父が生存中今のお父樣の許へ、と思ふと急に懷しくなつて一本出して讀まうと思ふと「そら何して居るんだ、早くつけないか」致方がないので、今度は一生懸命に十枚も八枚も一度につけて置いて手紙を見る。お役所へ勤めてゐる頃出張先から寄越したのだと見えて、留守中はお世話樣に成ると云ふ禮狀、別に母へあてたのがある「雪子（姉樣）は毎日學校へ行くか廉坊（今は亡き兄）は蟲氣がないか、火の元は用心せよ、年老いた婆やをあまり使ふな、自分は幸ひ無事だ」等とある、大久保彦左衛門が戰場から送つた「おさん泣かすな、馬肥



新聞社の前　茨城　小堀とし子

せ」と云ふ手紙を思ひ出して可笑しく成つた。でも「直民よりお恒殿へ」とあるのを見ると、何だか嬉しいやうな恥しいやうな、何とも云はれぬ懐しい感じがした、後々の思ひ出の種、又亡父の遺筆と思つて十六本有つたのを一束にまとめて、お晝のご飯に立つた時、自分の簞笥の小引出しへ奥深く藏つた。夜、あまり亡父が戀しく成つたので、此家へ來る時にお母樣に頂いた寫眞を出して見た。同僚の方十二人と寫つてゐる、何誰も洋服で絹帽子を持つて被居る。

お父樣は後列の右のはじ、今見ると随分ハイカラで被居つた。お髪を綺麗に撫で分けて、格子縞のネクタイを付けて、グッとそり身に成つて被居る。

此寫眞を見る度びに思ひ出す、私がまだ實家に居る頃たしか八ッの時だつた、妹が五ッの時、お母樣が此寫眞を出して二人に「何れがお父樣だかわかるかえ」と見せた時、二人とも一緒に「之が」とお父樣を指したずると母は「よくおぼえて居ましたね、忘れてはいけませんよ」と仰言つて、ぼろ〱涙をお流しなすつた。

此麼事を考へてゐると、お隣りの幸ちやんが「吁夢なれや夢なれや」と云ふやうな譜で、手風琴をやり出した、何より好きなので凝つと聞いてゐると、堪らなく淋しく悲しくなつて、自然に涙がぼろ〱出た。

是一篇の小説、巧まずして人の涙をひくを見よ。文中謂ふ所の輕部氏は下妻の人、母君は下館より嫁入て君を御屋敷（井上子爵の藩邸）に生みしことゝて。十八年を下館に育ちしわが母を知るのみならず、豐加美の叔母とも友としよく。誘はれてわが家に來りしこともありき。聞くあゝ春々の夢と過ぎて人悉く老いたり。人老いたれど君の命は若し。たゞ疑ふ、砂沼の水の靜なるところ月はふたゝび君が袂に照るや否や。

【秀　逸】

○紙屋とおむすび

葛の葉

五錢の半紙を一帖下さいといつたら、小僧さんが墨つきの悪るさうなぱん〱の半紙を呉れた、二十枚の量しかない。これぢや小僧さん一折しきやないぢやないかと、尋ねたらいえ一帖ですといふの、そこへ主人が來て、それで一帖だといはれて、降參した。だつて美濃紙は四十八枚一帖、半紙は四十枚一帖だものを、私はどうしても半帖を一帖といはれたつて、心には降參しないつもりだ、東京つてへんな所だ。今日は花曇りの好天氣、向島へ行く約束でおすしをこしらへる、餘つたご飯を、おむすびにして折へしのばせといた、處が百花園でお晝を頂くとき、お菓子の包を出して、四人のお辨當の中に何か變つた物があるからよく氣をつけてお開きなさい、當つた方には、屹度此お菓子をさし上げますといつたら、靜子さんが、まつかになつて、私いやだわつて、袂に顔をふせてしまふ。可愛らしい顔するの。さあ〱このお菓子をあげてよ、久子さんも笑ふの、重ちやんが靜ちやん、ぢやこのお菓子私にも一ついたゞかせて下さいよなんて、からかふ、皆がお腹を抱へて笑ひ出した、お茶番の女中に譯をきかれ

てもいへもせず、家へ歸つてもだまつて居る約束で、おむすびは私が頂いた。

「東京はへんな所」御挨拶なり、別嬪さん達がきつとおこらうと僕はおもふ、だからおむすびなどを花見に持つて行つてひとりで背負こむのだ。

○留守居日記

かすみ子

兎角曇りがちだつた空が今日は珍らしい晴れ〴〵としたのでタマと私を留守番に殘して皆朝から向島へ出かけて終つた、二階へ上つて見ると方々にボヤッとした櫻が見える花もかう咲ききつて終まふと面白味がない。

鏑木さんから女中が手紙をもつて來た義さんの手紙なんかあてになれあしない、いつも用でもなくくだらない事を書いてよこすのだもの……其度に足をはこぶ女中こそ氣の毒だと思つた、つと封を切つて見ると半紙一枚に習字でもする氣になつて「本日只今より潮干に繰り出し候間御同行なされ度候」と書いてある、相變らず頓狂な人だと思つた、早速斷狀を書いて女中をかへす、杉田のうちから櫻二枝持たせてよこす、此麼咲き過ぎたもの活けたつて仕方がないと思つたが折角の好意を無にするも惡るいと相馬の花びんになげざしにしておく。

上野が近いので午後からいれかはり立かはり花見がへりの客がよるので忙がしくて仕方がない其くせ友達は一人も來ない、夕刻鏑木さんから潮干のお土產だと云つて籠に蛤を入れて持つて來られた早速水につけて置く、向島へ出掛けた一群はどうしたのかまだ歸つて來ない、颯と風が吹いてひら〳〵と櫻が緣に散つたどこで見て居たのかタマが勢よくかけて來て花にぢやれて見たがつまらないと云つたやうにけろんとして此方を見て居る。

無性とけなしつけるので間違つてきんぴらさんだらうと思つたら、雨のふる日だつた、日暮里驛のプラットホームでどの箱に乘らうかと濡れながら困つて立つてた顏を自分は美しいと見た。

○そのまゝ

兵庫　紅雀女

四月四日、晴、大石良雄を祭る大石神社の祭禮で、町は竹や松で飾つて、大變賑やかだが、町はづれの我家では少しも平生と變らない。

昨日開催された四十七士遺物展覽會に、發起人の父樣は早くから、患者を看護婦、書生等に託して兄樣と會場の花岳寺へいらつしやる。其後へ私の家は、昔義士の原惣右衞門の屋敷であつたとかで、其の子孫の平戶さんつて方が、可受いお孃さんをつれて被入つしやる母樣は今殘つて居ますのは、表門とお稻荷樣と天井が一室ぎりで御座いますと話される、そして裏に祭つてあるお稻荷樣へ御案內なさる。

花岳寺の小僧さんが、誠に申兼ねますが何卒是をすぐ

はつて下さい、と何か風呂敷包みを置いて走つて歸る、私は之も展覽會のお手傳ひと喜んで承知して、開けて見ると、繪葉書の袋にする白、赤、紫、茶、青の綺麗な紙が五百枚程あつた、緣で編物をして居た妹にも手傳はさせて、やつと晝までに袋にして、早速彌助に持つて行かした。

晝飯後、例の窓に倚つて、今日の花岳寺の繪葉書、乘等の賣役の藤枝さん、辰子さんを想像してぼんやりほほ笑みかけた彼岸櫻を眺めて居ると、カラ／＼ッと俥の音がしたので母樣に促されて、玄關へ出ると、桜村の伯父樣と、もう一人は知らない方。

其の方には目禮したのみで、何處か見た事がある樣に思はれて、よく／＼考へて見ると、目元に愛嬌のある、凛としたお顏、どうしても文雄さんだ、忘れて居たのも無理はない、もう五年もお目にかゝらなかつたのだもの。

五年前の暑中休暇にいらしつた時には、未だ短い筒袖を召してらしたのに、僅か五年の間にかうお變りになるとは、夢にも思つてなかつた。

かう思つて見れば見る程文雄さんだといふ事がはつきりとわかる、然し今から挨拶するのも可笑しいし、如何しやう…………。

なにわけは無い「あなた文雄さんでせう、お嫁さんがほしくて私を見に來たのね」と言ふさ、文雄君君まさか義士の遺物を見に來たとばかりは逃げもしまい。

○母樣の御名代で

神戸　春子

三月二十五日、いつになく早く目が覺めた。オヽいゝお天氣！　庭の緋桃がよほどふくらんだ。髮を結んで居ると、母樣が春さん孝子の卒業式にお前往つておくれでないかえ、つて仰有る。さうね、でも私恥かしいわ、何を意氣地のない事許り、小林の雪さん御覽、母樣の代りに何處へでも被入るぢやないかね、つて、おつしやる、私も雪さんにひけを取つちや口惜しいからでも……えゝ參りませう、お母樣に孝行だと、思つて――、おや／＼飛だ孝行だね、と御笑ひなさる。時計を見ると、もう八時すぎ、ぢやあと大急ぎで出掛ける、門を出ると凄まじい西風が吹きつける、何か知ら想ひながら校門をくゞつた。と、赤い蝶、白い蝶が四方から飛んで來る。そして黑い目の視線が一度に自分に集まつた。私は顏がホテッて仕方がない。玄關脇の、灌木の蔭に立つて居ると、大きなリボン――孝子さんの姉樣？ハイカラーなんて語が耳に入る。私は、歸つて終はうか知らとも思つた。ベルが鳴つて大波の寄せる樣に皆講堂へ集まつて行く。いやに氣取つた、先生がこちらへとキサバッイて居る講堂へ導かる。

五百否一千の眼はするどくてちらへむいた。私はギョッとした。けども、今日は、母樣の御名代だと思つて濟ませる丈、すまして見る。

いつか私は、女學校生活との離愁、三十の同窓と別れ難かつた去年の春の悲しい想が胸一パイに廣がつて。思はず知らず熱い涙が滲んだ。

汝あはれなる人の子等よ、目を見はりて美しきわがおもてを見よ、王者もわが前に立てば其力を用ゐるによしなし、況んや汝五百の童男童女。

○顔剃り

愛知　佐分華影

卯月七日、晴天花曇り時の暖かい光は肩から袖膝をつき通して心地がよい、美くしい友禪の前垂の色が褪せはせぬかと手で掩つたのも、其中手がどこかへ行つて了つてる、「鬼さん此處よ手の鳴る方よ」と隣の大きい尼寺の廣庭に毎日遊ぶ子供の聲がする、「鬼さん鐘撞き堂の腐るまで貸しとしよう」「僕は此のお寺の破ける迄貸しませう」「私は何？兄ちやん、え銀杏の實る迄よ、美智ちやんはね」「あたし……ふ人形の光ちやんの大きくなるまでだわ」大きい、可愛らしい聲がまち〳〵騷いで居たがしんとした、眉の所を剃刀スーと走る、目を閉る、母さまの手は柔いけれどつめたい。いつか頸へきたので俯むくと前髪が見える六分位は見える丸い大きい櫛が前へ落ちかけて立つて居るので影では月の形の物をのせて居る櫻月姫ならよいが、まだ髪を結はないので結ぼつて毛が下つて居るのが引張つたら其數五六本拔けた痛い。さあよしとおつしやつたので、石鹼剃刀など一まとめにして化粧室へは入つた冷たい空氣、暗くつて何も見えない、手さぐりで行くと柔かい房とした物が顏を、はつとして見るとかもじが二ッ三ッ新聞紙に卷き込まれてかけてあるのだと解つた。

顏を剃つて貰ひながら、土筆摘みに行つた事が夢ともつかず幻ともわかずに書いてあつた、鬼ごとする兒の唄をきいて無我の境に遊んだとすれば筆が足りないし、第一うとく〳〵して、まちがへば眉毛など剃りかけられぬともかぎらない。

○乙女つばき

麻布　美耶

朝から灰色にぼやけた樣な日、さかりに咲いてる白丁子の香りに、一そう刺戟されるやうな日、机にもたれてぼんやり、樂しかつた、誌友會の日の事など考へて一人り懷かしがつてるところへ、立子樣が入らしつてどうしたの大變おとなしいわね、意氣銷沈は青春の大禁物よ、こんな淋しい日には何時の樣に、詩でもぎんじておあばれなさいなと活々した顏を、つきつけられると、淋しいのも、悲しいのも逐ひ忘れて、ニッコリ色々の話を始める、其話は重に誌友會の日の事（お作をはい見して居ると若杉樣は、恐ろしい樣な方だと思つてましたわねところがお目にかゝつて見れば、大ちがひ、そりや溫たゝかさうなお美しいのよ）と話したら、立子樣も目を見はつて、意外と言ふ樣なお顏をなすつた、お茶も、のみつくし、お菓子も食べつくして

二人は庭へ下りた、半開の乙女つばきを一花づゝ髪に押した。歸へると仰しやるので、門外まで送る、ついでに、郵便函を開けたら、こんどの誌友會で、お友達になつたK樣からの葉書、「どうなすつて、會以來、ちつとも御たよりがないのね」と一番始めに書いてある、だつて未だ四日と、たゝないんだものと、ほゝ笑まれる「美しい櫻の花はもう散りかけてね、晩春の夕べ、散り行く花と、諸共に、地の下の國へ行きたいわ、甘い春の夢にあこがれてる人を、哀れだと思ふ樣になつてはだめよ」と筆を投げてある。

「私の過去は、樂しかつたのです、美しかつたのです、現在も又樂しい夢を、美しい夢を、結びつゝあるんですけれど、春は長しへに花の咲く時、なんでせうか、春は長しへに美しい時なんでせうか、春は長しへに、夢見る樣な時なんでせうか、行く末遠き未來を考へると、何んだか、はかなくつて、ほんとうに、いさぎよく散りかゝる、櫻の花のやうに、地の下の國へ、華やかなるバージンの夢を此のまゝ長しへにはうむりたい」と走り書してポストへ入れた。

夜風が冷たいので、捨てた、はおりを又ひつかけた。

字の下手なもの必しも文が下手とは限らないが、花やかな人の集りにつんつるてんの袴を穿いて花もかざさず白いものも施さずにやつて來るだけあつて、この君の原稿は活版小僧が泣きさうな書き方である。きれいに書くのは、太田、長曾我部、鈴木、木村(ゐ、章子)きたないのは山田、高橋(もとの菊池)若杉、木村(なか子)といふ顔ぶれで、一番ひどいのがこの人。佐分菲影さんにもよわらせられる。

○誌友會を思うて

信濃　優梨子

四月十日、ふつくりと暖かい日、昨日は一日乾ききつた空は風が白い砂を卷き上げて居たが、今日は梅の花を散らす程の風も無い。

あゝ今日は忘れられない誌友會の日、星ヶ岡の茶寮！私は其會場から氣に入つた。

あゝ東京の人が羨しい。もうお晝近いから、幹事の皆樣はさぞお準備にお忙がしくてでせう。何誰も皆日頃其美しきお筆をお慕ひ申して居る方許り。お目にかゝりたい!!!　醉茗先生はもとより、夜雨先生、葉舟先生も御臨席、名ある夫人方の御講話もあるとの事、皆樣はどんなに〳〵嬉しいでせう。

あゝ去年だと私も末席に連らなる事が出來たのに……澄さんと叔母樣に伴れられて、彼の茶寮へ行つて見たのも恁麼日、山王社畔の櫻が眞盛りの時だつた。綺麗に掃除の出來た中を一廻りして、蘭麝の薫りゆるく漂よう茶室を見た時、「一服所望しませうか」と私が冗談に云ふと、澄さんは眞に受けて「え、なさいな、私もお相伴してよ」なんて云ふのだもの。私は困つて「あら冗談よ、恁麼田舍者がそれこそ好い恥曝しですわ」と今度は私の方がむきになつて避ければ「あんな事云つて、家元の許狀まで持つて被在るくせに」と澄さんは是非所望しませうと、本氣になつて云ひだす、

氣の小さい私はもう一生懸命「冗談ですよ、よして頂戴」と澄さんの長い袂を押へて、そこ〳〵に逃げ出した、あの星ヶ岡の茶寮！今日はお懐しい皆樣の美しい會合の場所となつて、晴やかな瞳が輝きあつてでせう。まア其間を漂うて居る空氣は、どんなに懐しさ、慕しさがこもつて居る事でせう。

今日は針の手も思ふ樣に運ばれず、一日誌友會の事を思つて暮した。夜春雨がしめやかに降り出した。

萬人の心、萬人の情（評）

○學生生活の終の日

土佐　寂靜子

三月二十四日、教科書を此洗朱の風呂敷に包んで我門をくゞるのも今日一日である、もう一生、一生學生生活は來ない、來ないのだ、たゞ今日一日!!と思ふと私はたゞもう耐らなくなつた。靜かな穩かな邊りが私のイラ〳〵した心には、はがゆくてジッとして居られなくなつた。いつもより一時間程早く家を出た、まだ日の出ない東の空には美しいばら色の雲が靉靆いて、フワ〳〵と浮いてる雲は、金色に光つてゐた。遠い山には柔い靄の中に沈んでゐる、美樣を誘つたらまだ御飯も濟まないと云ふ、私はだまつて待つた、一時間待つても今日限りである、もう今日を過ぎたら待たして呉れと願つても待つて共に我門をくゞる事は無い、あゝ



涼風　新潟　水澤蝶子

無いのだ！てう思ふと何にも勝ち得ない弱い淡い思ひにしんみりとなつてしまふ、四年の間門を通つても好かない、と云ては誘つた事も無いM樣やD樣をも誘ふた。「もう今日限りね」としんみりとなつた心にはたゞもう誰も〳〵なつかしかつた、四年間の罪ない甘い思出を語るには多くの友が欲しかつた。學校へ行つたら教室の隅の花瓶には長い青柳をなよやかに活けてあつた。誰だらう？なつかしい優しい若い女の心!!。白桃の咲き初めた下のベンチに美樣と二人は腰を下した。胸の中には云ひたい事は滿ちてゐるが其何處に絲口をたてていゝか解らない、美樣は「たゞ夢の樣ね」と涙ぐんでゐる、私はうなづいたまゝひとり涙がにじみ出た。せめての思出にと一同でダンスをした。室内でと云ふ人もあつたけれど此青い空の下で集ふのも思へば今日限りであると外に出た。空に響くピアノの音、風にひるがへる紅の振、短い海老茶袴、あゝ一生の思出である。四時の鐘の淋しく響く迄、何といふ事はなく語り合つた。我門を振り返つて握り合つて美樣の熱い手を云はず放つて涙の瞳を交はした。あゝ夢の如き別れ、學生生活の終りの日。

學生生活の終りに淡い悲みの伴ふは無理もない、が女の方はそれよりもなほおそれつゝ待たねばならぬ悲みがある、曰く處女の終り。

○山車

△ステーションですぐ自働電話を事務所へかけた、一日聞かなかつたお聲が懐しく傳はつた(うす雪)

「仰いで鳥の飛ぶを見よ、大小必雙翔す」うらやむべきかな。

△三時頃迎へが來た、天を仰いで泣いた、惜き別れをつげのくし賤が伏屋を立出ぬ(雪曙)

言文一致、いつの間にか詩になつてゐる。

△おや十日間のお別れだねと仰つてお出ましになるもがいてもあがいても寂しさはひし〳〵と迫つて來る(ちか子)

これまた新婚の人。

△名も日の出の森の櫻花、あゝ我大日本國民の精神(しげ子)

何事ぞ花見る人の長刀。

△いつそ代つてやりたい、ポチはもう口もきけないんだもの、枕元へねかして自分も床につく、十一時(ふく子)

君姓は里見、名は伏姫とまをさずや。

△クラス一の意地惡だつた靜子さんがいつの間にてしらへたか目のくり〳〵した坊ちやんを抱いてゐる(春子)

「蜀山兀として、阿房出づ」暑からざるに何の汗ぞ、女よわれ汝の爲にかなしむ。

△自分のことよりも他鄉に學ぶ弟の方が大事、着物も縫てやらなきやならないし手紙もやりたし、ほんとに二つ三つや體があつたつて、まして一つ體(きくの)

そんなこと仰しやつて、もしからだが三つ有つて御覽なさい、嫁に行けません。

△夜分伺ひますからどうか宜しくと電話を田村さんへかける、それがうまく行かないで半泣で二十分かゝつた(國子)

交換手と喧嘩でもしたせいで半泣になつたのですか。

△踊を見る、花やかな笑ひ聲、なまめいた香よ、中には手つきまつきしてまねる親がある、皆囚はれた女だ。けれど私は時代の女だ。(末摘花)

何ゆゑに?

△一時間かゝつた、でも日本髪に結ぶのだものむりはないわ、ひとにやつて貰へば八錢はとられる(しづ子)

七八錢と一時間との價はいづれが尊きや。

△一橋の一郎様に送るべき蒲團を縫てゐたら、理想ののでせうと言はれた、あつくなるまいと思つたけれど。からかはれるはしみ〴〵いやだ(靜香)

摽つる梅有り、其子七……こんなことを言つてもわかる人は尠なからう、惜い文句だけれど。

△山本の美津代さんが廢業した、部屋で一人で泣いた。なぜ私はこんな生業をせねばならない身に生れたらう、こううんと酒でものんで醉たふれて見たい。夜新内の稽古に行く。(てる子)

長野權堂町 MIFUNE YA 内とある、藝者かどうかは保證しない。

△海、海の底はどんなに遠いだらう、遠い〳〵底にはやはり火が燃えてゐやう。地球は生物である、人間に似てゐる、地中の火は即人の血液で、火山は皮膚病だ、ふきで物だ。(篠子)

海の底に火が燃えてゐるとおもふのも滑稽だが、火山を腫物にたとへたにはびつくりが通り越してしまつた。奇想海底より湧くの文といふべし。

△何を笑つていやよ。敏さんのマダムぶりを思つてあらと輕く打つた。白い顔には紅が。あゝ何て美しい、夫君が見たらどんなに恍惚としやう(水子)

「女のわたしでさへ……」にくいでせう。

△何度も蓋とつて考へてゐらしたけ、いきなり側にあつた鰹節を入れさうになさるから、兄様のお國は琉球なの、鰈煮るのにかつをを入れるなんてと言つたら止めになつたけど、できて見ると、弟がこれや贔負分にも喰へないとこぼす、本當にお上手ね辛くて味淋くさくてと私。だつて秋刀へ鹽をふつたのよりか甘からうとまた去年の事を。(吉子)

がうぎと兄さんをいぢめるが、不倶戴天の怨みでもあるのだらう。

△○○誌上で私の名を見たとて芝の星子とある、下手な金釘をむりになよやかにした様な、烏は烏、かくせばとて現はるゝ假面男子、歯の浮くやうな文句なので、屑籠へ。(ちつ子)

痛快。

△袂に手を入れると何やらがサリと音がする、見ると美しい桃色封筒だ、表は細い女文字で懐しき諒さまへとある、裏を反すとたんはたと落ちた一點紅、もゆると見たのは薔薇の一片であつた、小野流のやさしい手でつゝましう文子より。まあ兄さまてば油斷のならない、不斷私をいぢめてばかりゐるくせに、これが姿

だからいゝけれど……（まさ子）

母さまに見つかつたら大事だといふのでせう。けれど女子文壇でこの通りすつぱぬいてはもう作文をなほしてやらないと言はなけりやよいけれど。

△、、、さんが來るまでに治らなけりやいけないぞと言て伯父さんは出て行つた。これが肺病だつたら浪さんのやうね、私の武夫さんは軍人でなくて會社員だけど。（ましを）

不如歸の武夫さんは濃情の人として書いてあるけれど、事實は信子さんを追出して其死にもせぬうちに今の子爵夫人を迎へたつめたい人である、理想の夫と思つたら失望しませう。

△「これですかこれは固木ばかりでいゝ薪でさ」「良い木だがいくらか」「え孃さん品を見て下さい束も大きくて」「まあそれでいゝがいくらなの」「これ皆で十二束です」「十二束でいくらかつて言へばぢれつたいね」「え四十六錢で」とやつといふ。五年この方母亡き後を八かましやの父について、お芋の皮さへ捨てずに乾してだんだんに粉にしておいて、私ばかりの時のお汁の實にするまでに家事を考へてゐる、通りがゝりの薪賣を捉へてぢれつたがるやうな事があらうとは夢にも思はなかつた。（さい子）

自然と滑稽にできてるけれど、女としては意味有る生活にはいつて行くのである、戀ずることも滑稽なれば結婚だつて滑稽である、たゞ人は生きんが爲めに生くるのみ。

△私を一人おいて行くつもりだらうか、どんなに寂しからう、ねらしてさへ淋しいのに、またお留守にするなんて、あゝけどたゞ二人しかない兄妹だもの、もう二三年は悲しいのも寂しいのも兄さまの爲にこらへよう（ずが子）

僕かつて歌ひき「家妻めかずふるまひの、異なる人とも見ぬからに、弱き吾子を哀みて、母は妹をのこしけむ」なつかしきかな、今にしてこゝに詩中の人を見る。

わが荒廢せる心は春。されど再びよみがへらず、兄はあれど妹なく望みはあれど明日無し。君は青春の人。何の涙か胸に溢ふる。

○或る日　　小枝子

御天氣が好いので襦袢を一枚脱いだらぞく〳〵する。御被風を出して裁つ昨日先生の處でみよ樣が歸りに電車で歸りませうと仰しやるからマア車歸して？エ、一人ぢや遊べないんですものね!!!御姉や姉樣もすつかり氣取つて御しまひ遊してねえ妾詰らないわつて仰しやつた事が妙に耳に付いてる妾が四年でみよ樣が二年の時濃紫地の銘仙が初めて出來た御揃ひに着て櫻草摘みに參りませうねつて作へて頂いた彼の矢絣さへ色があせたもの靜心無い花が散つて空想に滿ちた青葉に血が流れて衰へ果てた野に山に遠い〳〵西比利亞から銀の鱗を降らす鳥が渡つて來て更に又陽春を迎へた妾斯う遊せよなんて乘換切符を細く刻んで兩國橋の眞中へ來た時窓から雪と散らした時分から見れば屹度甚だしく變化して居るに相違ない、衿方あけ樣としたら少し染むらがあるので前へまはす、あの時分は何でも母樣任せ着物は簞笥に在る物位に思つて居たが今では人に縫はせるにしてもみんな自分で始末しなければならない六疊で豐が解き物を始める母樣に此紫のだけは何卒取つて置いて頂戴と御願したらもう華美だしするから乳母の處へでも御遣りと仰しやる着る毎肩上げの跡懷しと見た袷もいよ〳〵今日解かれてしまへばもう母樣に縫つて戴いたものは一枚もなくなるのだ。

午後房州からまきが來た泊つて御出でと云へば宿が困りませうからと返る近宿を幾度か繰り返して遂に歸つてしまふ人も良人の事を平氣で云ふ

様になつては御仕舞だと思ふ。

夜千香子ちやんが試験が済んだから明日から鎌倉へ行くと云つて來た歸る時上げたリンゴを女中が包んで結ばうとしたら御風呂敷の隅がのびると惡いと云ふ都の少女はよく氣がつく電氣を消して久々の月に御寢みなさいと云つてゐた。

ちとてんぐらかつてるけれど、全體は女らしくよく書けてある、お月さまお休みなさいといつた外に、おやすみなさいと言ふ人はまだいらつしやらないのですか。

○手藝の日　直江津　磯巾着

四月一日　朝雪　手藝の日

隨分早いと思つて來て見たらもうお三人――お早うと云ひ合ふ顔もいつもに變るうるはしさ早や先生がお見廻り下すつたと見えて皆の前に型紙が切られてある。

「皆様は現金者だ手藝の日はきつと早い」と被仰る相でしよう私で分るわ毎朝やる仕事もおべんちやらの二ツ三ツで振りまいていつもなら下駄に塵でもかゝつて居れば怒り付けるのだけれど此日許はお天氣が良いと塵が見えてねえホヽ」位の事でヒツ掛けて出るのだもの全く現金だ今日は兎の巾着ツクイねる音でクチヤ〳〵惡口の里子様が磯巾着様が兎巾着習ふのですかなんて皆を笑はせて被居るいよ〳〵仕事にかゝると默り出した時々「一寸耳が出來て』『耳が駄目ねえ返しにくゝて」「あなたの綿良く這入つてねえ「あら私よく入れ直すわ」なんて話がもち上るが叉ぢきにしづむ胴の下に手を綴ぢ付けて縫ひ頭の裏に耳をくけ付け胴にまつり付けると教はつた通り順々にしてやつと出來上つたモミヌカを入れて封じ〆た可愛い事長い白い耳に緋の裏が燃えて美しいけれど七人のくらべて見ると私のが一番見榮がない人の花がよく見えると云つた様な物だらう先生に見て頂いたら可成だと被仰つて下すつたあゝ嬉しい早く製作品を山の様にためて見たい十日前から樂しんで居たのがもう過ぎた後の十日が遠いやうな氣がしてならん此次はおかめ巾着白羽二重買つて待つて居よう

磯巾着から兎巾着おかめ巾着と大分巾着がお得意と見えるけれどしのぶさんお母さんの腰巾着にはあなたなるでせう大きななりで。

○病床日記　淡路　加藤菊子

三月二十四日、今日はどうぢや異つた事がないか、とお父様のお聲、驚いて起やうとすると寒いから寢てる方がよからうと被仰る、餘り淋しいので側臥になつて晶子先生の佐保姫を見る、死ぬと云ひ眞白の床にねるときもかばかり人や戀しかるべき、あゝ私の事ぢやないしから「姉さん」聲と同時に障子を開けてヌツと顔つき出したから驚いた「愛さんがお見舞に來てるよあのお菓子を持つて」でもこんな處へ來て頂くのもと思つて居る内、早嫂さんの案内でお客様が見えた、お久しうござい升とお互にあいさつする、何だか苦しさうだ、と見るとお腹が大きい、七月位になるだらうと思つた、引かけ〳〵色々の世間話をして下さる、姑御様が六ケ敷ので姙娠中でも米も搗かされるし野へ出て鍬も持たねばならぬしと泣言も被仰る、二時間ばかりの後お歸りになる「姉さんこーれ」箒に手拭で頰冠りさせたのを見せる、なぜと聞く、嫂さんが又長話して熱でも出たらお父様へ申譯がないと被仰つたので是を立てゝ一生懸命うちはであをつてたのだと云ふ餘りをかしかつたので思はず吹出した。

午後、先生が來診して下さつた、流動物の外何も食べるなと被仰る、相變らず滑稽で病人を笑はせてお歸になつた。

夕方、母様の里から草餅が來た、おいしさうだつた、掛花活の菜の花が黄金の色を誇つて居る。

室溫、華氏五十七度。

「手にむすぶ水に宿れる月かげのあるか無きかの世にこそありけれ」若き君よ、多幸なれ。

○私の日記　木造　とよ子

何時になく、寢坊した

昨夜寢てゐると熱が出て熱が出て寢衣があせでびつしよりぬれて心地の惡い事

そうかと思ふと又ぶるぶると震ふ程寒くなる。僻に氣をおく位、止めどなく咳嗽がつゞく

一寸とも眠むられなかつた

曉方からやゝ好い心地してとろ〱とくると此う寢坊した。苦しいまだ起き樣と思うて床の上に立つとよろ〱とよろついてすぐ倒れる。身體の内が烈しく寒いが手や顏は燒石の樣にあつい――あゝ私はかぜをひいた

顏を洗つたが胸が「にごつて」何しても御飯は食べられない。机にもたれて新聞に目を通したが、物を見詰めると頭痛が強くなる

然し私は醫師に診て戴いて藥を飲むのはいやだ、苦しくなつて來た、じれつたい何と時間が長くて、仕方なく又床を取つて寢る

目をつぶつてゐると目の前に美しい色々な色が玉の如に圓くなつたのや草色の萬縞の樣な物が現れて來るかと思と暗黑になつたりして、あゝ大きく見ゆる事あの襖の字が又熱が出て來るやうだ

○待つ間

伊豫　よしゑ

玄關の押鈴を押すと、小刻みに走つて來る足音が一二町も向ふからのやうに聞える、三度程障子を開ける音がして、いつものふくよかな小間使ひが出て來た「何卒お上りなさいまし」と導れたのは十二疊のお部屋、お床には一對の軸が懸つて、中央に滿開の緋桃が活けてある、違ひ棚は料紙と上品な置物、その他何もない後の襖を開けて「私待ちくたびれて居ましたのよ、ゐらしやらないのかと思ひましたわ、一寸仕度しますから待つて頂戴」と槇さんが退くと、小間使ひがお座蒲團火鉢、お茶と持つて來る「何卒おかまひなく……」と云ふと頭を下げて後の襖をピタと閉て行つてしまつた椽側の方の障子に麗かな春の日が射して、はめ硝子から庭の色々の木の梢が見える、向うの隅に何か知ら、大きい眞白い花が枝が曲る程咲き揃つて居る、ウツトリして見て居ると、カラ〱と大きい下駄で敷石の上を引きずる音、つゞいて「あゝ汽車が參りました、これから道後へ參りませう」と云ふ子供の聲がする、膝頭をついて高くなつてガラスを覗くと、ねずみの尾程のお下げと、お河童さんが人形と洋傘を持つて木の下に立つて居る。一人は槇さんの妹さんだいろんな面白いはなしをつゞけて居る「子供でもさう云ふことを申しますから油斷がなりません」もうをかしくなつてどちらが云つたのだらうと、又覗くと木の下にかゞんで背を向けて居る方が「とかく子供はうるさい者でございます」「ハーイ」と中々アクセントが面白くて上手だ、誰にあんなことを敎へて貰つたのだらう、それにしてもあの對話の巧なこと、あれなら大きくなつても、私のやうに一寸したあいさつ位ゐに凹みはしないだらふと一人笑つて居ると「どうも、お待遠樣でございました竹やお玄關へ下駄を廻しておくれ」振り向くと小紋に紫の被布を重ねた槇さんがスラツと立つて、まるで繪から拔け出したのかと思つた。

○帳場へ座た二十分間

越後　曉花

不景氣の聲は田舍町まで流れて來た、日から一日飛び廻つてお世辭をふりまいたり安くない頭を下げたりして漸々〇〇〇圓だけあつめて來たけれど昨日の小拂に五十圓も出て終つたやうなわけ、まだどうしてたらぬまたパチ〱と算盤をはじいて見る、矢張り二百三十八圓五十錢（仕入元の拂ひ）店をずうと見渡したところ實際立派でもなんでもない、ぶらりと切ふの釣されたあたりは淋しい吾町を代表するにたるものである、棚のにしんも程なく仕入れなければならぬ、それにしてもお金比例的にすぐ頭へよせて來る、黑砂糖の樽ばかりは私に同情するやうな態度で居る、私のお友達また同じ位の年配の方で此感せちがらい世に關係して居る人があらう、多く人の品格は其境遇によつて支配されるものであるとか感情も然りであると思ふ、五年前迄は哀れんで居た女に今はなつて了つたんだもの、あゝ――昨日「イヨ姐さん」と横町の角できいたのも若しや私を嘲笑したんだ憤然として大福帳をまくる、（五錢鹽鱈の切身五つ）と筆太に書かゝれたのがチラツと眼につくと嘲笑に反抗した感情は忽ち口惜し涙と化つて眼に充滿てくる、强い事云うて女の身、云ふやうない寂しさが胸にしみる、何の生活難もしらないで着物や茶の湯にうき身をやつすお繁ちやんや時子さんが羨ましい、十四の年迄は加賀やのお孃さんと

呼ばれた身が——明日にと延ばして貰つた伊勢やから掛とりに來た、私は赤くなつて半金丈け拂ふ、まだ五軒程も來るんだに、私はどう云うて言譯をしやう、あゝ父樣母樣何故私ばつかり殘してお逝き遊ばしました………（三月一日）

○二日

東京　若紫

昨日から落もない春雨が靜に降りつゞけて居る、東の空にポーツと明るみを持ちながら中々止まない。

午前中の方がすいて居るだらうと思つて十一時頃柳湯に行く。湯ぶねにつかつて夢の樣に立ち登る湯氣を見ながら冥想にふけつて居ると得ならぬローズの香がプーンとたゞよつて來る。ハツとふり返ると視線がばつたり落ち合ふ。ふくよかなる乳色の胸艷々しい黑髮を下の方に巻髪にして高く出した前髪を白のリボンでゆるく結んである。音樂學校のピアノ科を優等で、卒業した才媛！　其れさえ口惜しく妬ましいのに、十數人の目が一樣に集まつて居る。何のフエースなんか人格に於て何れ程の價があるものかと心では思つても高等女學校を四年限りで止めた此の身が情なくなつてポロリ一滴。よくも洗はずに急いで上がつてしまつた。

午後戸田先生の處に行く。お天氣が惡るいので皆樣お休み、園さんと佐々木さんと私と女は三人限り。「女は張子ばつかりだなあ」つて繪の具をすりながら中村さんが仰しやる、口惜しかつた。



拭き掃除　靜岡　原田文子

＊　＊　＊　＊　＊

昨夜床に入つてから午前中に先生の處へ行つて一時から二時迄にお部屋の大掃除二時から四時迄が編物と豫算をたてて居たら輝一さんが「若枝さんが時間表通りやつたのは見た事も聞いた事も未だ曾つてあらずだ」つてまぜ返して憎らしいから今日こそは斷行して目に物見せてと思つて居たのに朝早くから靜江さんがハスと二人でやつて來た。母樣が三郎さん（靜江さんのハス）に初對面の御挨拶をして居る間に二人を見競べたら一人が眞白で片方が海坊主の樣に黑い「いゝコントラストね」と歸つてから輝一さんに云つたら「何が？」つて變な顔して居る「丁度私と貴方と竝んだ樣に」白と黑で「ハヽヽ、白惚てる」と自分の顔を撫で廻して居た。

折角晴れた空が夕方から急に曇つて又降り出した、バサと芭蕉の葉に當たる雨の音がだん／＼強くなつて來る。

○わびしき一夜

德島縣　中村加津子

しと〳〵と春雨がわびしう降つてゐます。

硝子戸越しに楓の葉の若綠したのが雨にしよぼ濡れて、青々と輝やいてゐます。黄昏かけた春の空には重々しい灰色の雲が低う垂れ下つてゐる。さめ〴〵と衰弱しきつた病人の泣き悲しむ樣な心細い雨の音……。

軒に吊した籠の中の金絲雀は細い可愛ゆい聲で降り頻る雨の中に懷し氣に啼いてゐる。生暖い夜風が折々襲ふやうに吹くと、雨戸に觸れる雨の音が物淋しう胸に沁みます。春雨降り頻る三月下旬の夜。

硝子窓の中の一室には明るい臺ランプが一つ點されて、今年十八になる少女が一人、物思はし氣に時々硝子戸越しに降る雨を氣にし乍ら、机の上で新刊の雜誌を讀んでゐます。少女の髮は亂れかゝつて、白い手が時々油の光る其髮を掻き上げてゐる。室は六疊一室で臺所との間を障子で閉めきつてある。白い障子には少女の黑い影法師が搖れて、折々美しい瞳が其方を怯えたやうに見返る。向ふの臺所のあたりでは何かポタポタと屋根を傳うて落る雨滴の音がさびしい。

此家は二階のない座敷三室の酷くせまい家で、次の室の三疊ではこの少女の母親がもう一人の女と一緒に寢つてゐて、折々すや〳〵といふ幽かな寢息が障子越しにうかがはれます。それ位、今この家の中には靜寂の氣が滿ちてゐるのです。母親は今年四十一、頭にはもう白髮がチラホラ見える位。もう一人の女はこの少女の妹で、今年漸う十の春を迎へたばかり。

少女の父は四年前東京に出てある商館に暫らく務めてゐたんですが、運惡く其頃の烈しい流行病に倒れて今はもう親子三人尋の佗住居。絶えて音づれる人とてもない淋しい生活を、この靜かな家に送つてゐるんです。お父さんが病院で死んだのは矢張り今夜の樣にこんなに雨のしよぼしよぼ降る夜です、少女は今そんなことでも思ひ出したんでせう。折々身を搖らしてすゝりなく聲さへ漏れて聞えます。

戸外はもう暗くなつたと見えて、雨にしめつた楓の葉も見えず、金絲雀も啼音をひそめた。大方もう深い寢の底に墜つたんでせう、雨は未だ止みなしにしと〳〵降つてゐます。折々硝子戸にさら〳〵觸れる音が一層さびしさを增します、少女は讀み耽つた雜誌を伏せてふと向ふの柱を見ると時計の針はもう八時の所を指してゐる。隣室から漏れる靜かな寢息につれて、雨の音が又一しほ胸に沁みます。少女の頰は室内の暖氣でほんのり上氣した樣に、明るい春の灯に映えて美しう光つてゐます。少女はふと暗い戸外の方を見渡しました、外は一面に濃い闇で包まれて四五町向ふにK町の春の夜の灯が雨の中を淋し氣にチラ〳〵瞬いてゐる。少女はふと昨日母親からきいた雨の怪を思ひ浮べて、「ふとしたらこんな夜に迷うてゐるお父さんの魂が赤い火の玉になつて私を迎へに來るんぢやないかしら……」と思つてぞつと身震ひした。

暗い雨の中を向ふの町の灯にうつゝた稻荷の森の松並木がうすく浮いたやうに見えてゐる。まるで巨人のやうにこんもり茂つた松の大木――それを見てもう恐ろしさが身に迫るのを覺えます。降り頻る雨の中をけぶつた樣にホンノリ燈つてゐる町の灯が何かひそかに囁やいてゐるやうにも氣の性か見られてたまらなく恐ろしさが込みあげて來ます。

少女はもう恐ろしさ淋しさに堪えられなくて、机の上にうつぷしたまゝ、暫らくじつと四邊から迫つて來る雨夜の物淋しさに身を搖つて泣きました。

もう泣いて〳〵泣き疲れた頃、ふと四邊の闇中に耳を澄せてゐますと隣室からは相變らず幽かな寢息が漏れて、雨垂の音が、ポタ、ポ…タ…ポ…タ。と止みなしに夜の寂寥を破つて響いて來ます。少女の美しい瞳には此時涙が一杯に溢れ出て、それがランプの仄暗い灯影にキラ〳〵輝やいて見えました。

（人もないに頰がほてつて、室内の暖氣で蒸されるやうに身體が暑くて息苦しくなつて來ました。もう間もなく青田に喧しく雨蛙のなく時節が來るのです。）

外はもう雨も上つたと見えて、空はやゝ薄明う、ほんのり明らんで、チラ〳〵瞬いてゐた町の灯が又一層鮮かに雨上りの遠にきらめき、其周圍は一面に濃い闇が押し被さつた樣に包んでゐます。――ふと向ふの堤の上を小さな提灯の灯が一つ現れて、暫らく堤の上を傳うてゐたが、それも次第に濃い闇の中に紛れ込んで了つて、ゴーン〳〵と遠くの山寺か

らは鐘の音が物哀れに靜かな春の夜に響き渡りました。室内のランプの灯はジヽと幽かに瞬いて段々薄暗うなつて行きます。もう大方油がつきたんでせう。少女は何時の間にか幽かな寢息をたてて無心に寢入つて了ひました。四邊から漏れる寢息につれてだん〳〵春の夜は更けて行きます。少女は今、大方なき父の懷しい膝に抱かれてゐる夢でも見てるんでせう。縮髮の亂れかゝつたのや、無心に結んだ口元が動く度に幽かな寢息が漏れて聞えます。がそれも四邊の靜寂に吸ひ込まれる樣に………。

軒にはポタ、ポタ、とわびしい雨垂の音………

これは三年前に死んだなき姉の古い日記から此頃出て來たものです。終の方に未だ何か書き添へてあつた樣子でしたが、どうしたのか後から筆で太々と抹殺されてありますんで、其後の樣子はちつとも分りません(三月二十一日　雪子書添)

○前垂

長野縣　宮坂あき子

日曜日の午後二時頃、妹と隣の松さんとは前の芝原に行つて、芽生への匂ひの滿ちてる空氣を吸ひ乍ら、菫や、蒲公英の花を摘んでる。私は二人の姿を見ると引き寄せられる樣に三人のゐる芝原に行つた。松さんも私のことを姉さんと日頃呼んでるので、二人は「姉さん來た。」と云ひ乍ら私の傍に寄つて來た。

「これを縛つて。」「これを縛つて。」「姉さん。」「姉さん。」

二人は摑んでゐた花を一緒に私に寄越した、私は袂から絲を出して其花を束ねてると、二人は私の着物に摑まつて甘へる樣な笑を浮べて私の顏を見てゐた。私が花を束ねて二人に遣ると、其花束を左の手に持ちて溶ける樣な顏をして、小さい聲で唱歌を歌ひ乍ら、西へ東へと彷徨うてる私は二人の無邪氣の可愛らしい姿を見て、私にも這麼無邪氣な可愛らしい時もあつたのか………と、何とも言ひ知れぬ懷しさを滲み〴〵と感じた。そして妹や松さんの樣な無邪氣の人間に最う一度なつて見たい樣な氣が、さわ〳〵と渚の寄せて來る樣に私の胸に湧いて來た。

陽炎は夢の樣に搖れてそよとの風も吹かない、鶯は何處で囀するのか朗かな聲が聞えて來る。小川の水は緩かな音を立てて靜かに流れてる。其水には岸の若草が映つて綠の水が流れてる樣だ。

私は其水の流れに見惚れて恍惚としてゐた。

「蝶……蝶　蝶よ、菜の葉に止まれ。」

二人は此頃先生から教そはつたと云ふ唱歌を歌つてる。私も遂其歌に誘はれて。

「蝶……蝶……蝶よ。」と吾知らず歌つてた。

「おや、姉さんも歌つてる。」

二人は笑ひ乍ら悠う言つて私の方に近寄つて來る。

「松さん達が歌ふもんだから、遂姉さんまでも……。」

と言ひは言つたものゝ、自分乍ら可笑くなつて微笑んだ。風もないのに石崖に蜻蛉の止まつた樣に刺した二人のリボンが搖れる。二人は私の傍まで來ると、言ひ合した樣に。

「姉さんづく〳〵ぼうし。」

と、言つて、土筆を私の顏の方に指し出して、五ツ六ツの子供に饅頭でもやつた時に、友達に見せびらかす樣に、動かして笑つてる。私は七八年前に初野さん達と、猶且這麼ことをして遊んだことを追懷した。そして二人を暫時見詰めた、二人は凝乎と私の顏を見てる。

「夫れはづく〳〵ぼうしと云ふのではないよ、土筆と云ふので、づく〳〵ぼうしと云ふのは此邊の俗言葉だよ。」

「だつてお母さんはづく〳〵ぼうしだと教へましたよ。」

妹は物化な顏をして、反抗する樣な眸で私を見た。

「夫れはお母さんが知らないのだよ、今にね先生が教へて下さるが…。」

「あれ、お母さんが手招きしてるよ……何か持つて。」

妹は頓狂な聲を出して、驅け出した。私と松さんは後から靜に歩いた。日は靜かに照つてる。松さんの持つてる花束に白蝶が止まらうと爲ては、思ひ直した樣に舞ひ返しする。土藏の蔭から玉(猫の名)があまへる樣に啼き乍ら出て來て私の足に擦り附く。私は非常に可愛くなつて抱き上げた。玉は球を轉ばす樣にごろ〳〵と咽喉を鳴らした。

「兄さんが前垂を……。」

妹は莞爾々々し乍ら旣に前垂を持つてる。其顏は大黒樣の顏のやうだつた。

「まあ、兄さんが前垂を………よかつたこと………。」



論文　編輯局選

○通人（地賞）

妙子

前號醉茗さんの「日記より」の一節に「文學者も一歩を誤ると所謂通人と選ぶ處なきに至る神經の過敏と新知識の要求とは偶ま通人を造り出す恐れはなからうか云々」。私は此の一節を三度び誦じました。「通人でも普通の人間より結構だ」と思ひました。多くの人の沒常識無神經には實に愛憎が盡きる位に感じて居ります。語を換へれば覇氣がない。せゝこましいてんでお話にならない。少なくも通人に成るには犧牲を要します、勇氣が要ります、つまり俠氣も一つの條件でございます、自己の精神が他に及ばなくては出來ない仕事でございます、根本問題ですよ。異性の顏を見て動作の變る樣な人間には到底なれません。一月號の無名通信に葭町の或るお神さんの話に「葭町ではお客を差し置いてゴム輪の車に乘つたりする妓は一人もございません」とあつたがこゝらが通の粹と申すもので無學の人に漢語や英語を使つて見たり出來ない人に金ビラを下げたりする手合とはちと違ひませうね。せめて貴夫人の間に在つても小さくならず、赤い顏もせずに氣品高く社交ができる位の通になりたい、縮緬の着物を着た時は其やうに木綿を着ても其やうの態度が――嫌味なく通つてゆく――良いぢやございませんか表面の通人は單にお茶屋のお神位にも澤山あります。眸の動きに涙を催し、笑ひの裏に悲哀を感ずる位の心持を持たねばなりませんが………此に一點の聖火と理智の崇嚴を合せて超越した方を文學者と申すのではございますまいか。

通の通がらざる所謂大通、之を稱して文學者といふことに、何の異論がありませう（評）

○徴兵檢査前の親心（人賞）

磨　志　緒

平生は御無沙汰勝であつた神樣に我子が適齡に成たからとて俄にそれ日參よ、お供物よと騷ぎたて、何卒神樣のお情によりまして徴兵をのがれさせて下さいます樣と、とんだ御願ひ神樣もさぞ御迷惑、否御立腹で御ざいませう。そりや親の身になれば例令一人息子でなくとも、其子を出して商買にどうこうはなくとも、新兵時代に操行惡き一兵が受ける罰を聞きかじつて、入營すれば皆こうと思ひつめて、いらぬ心配し殊に戰爭當時であれば猶更色々と案じ、案じた末最早神樣の御力を借るより外にないので此樣な御願をするのでせうが、少し考へても分りさうなもの、國をお守り下さる神樣が愚かな願をお聞入遊ばして、誰も彼も皆兵士には成らぬ樣遊ばしたら、我國はどうなるでせう、言はずもがなです。

神樣にお縋り申して願ふのは、檢査後の事、我子は立派に一人前の男子として、お天子樣の御役にたつべく入營すると定つた時にこそ、何卒首尾よく御奉公を了へ無事に歸りますず樣と願ふ事です。

皆が皆迄かうとは申ませねど、中にはある樣です、そりや辛い思をする事も時にはありませう、務めですもの、一の小さな事でも之が務とならば、なか／＼のもの、況や一國の大なる任務を一身に背負て居るのですもの、面白をかしく浮た調子に日を過して何としませう。

規律ある兵營內の生活をしてきた人は、どことなく違ふものです、それだけ位がついて居るのでせう、折角男子と生れて銃劍さげた嚴めしい軍人姿をなし得ずに果つるのは殘念ぢや御ざいますまいか、………と申す私も男であらば今頃は喇叭の音に步調合せて、隊長の號令のもとに、隊の作り方や其他の事ども敎はつて居るでせうに、然し、いつかは子を持つ母となり、やがて徴兵檢査を受くべき者の親となるでせうが、當時先に言つた樣な神樣に矛盾な御願事は決してすまいと、今から思つてます。

論文として隨分難い題ですけれど、地方では此論文でも讀んで聞かさねば、わけの分らぬ人が未だ澤山あるのでせう（評）

【秀逸】

○狂奔と覺醒

金澤市　むらさき女

私は詩でも歌でも其瞬間の興が最も必要だと思ひます、考へながら一句／＼かきますと、文法や其他に飛んでもない間違のないかはり、いくら讀んで見ても興にのりません。それに反して刹那の感じをすぐ筆にうつしますと、あとになつてよみますに感情が透徹してゐて誠に氣持がいゝかはりに、云はれない事を云つたり文

法の間違をしたりしてゐます。近頃よく現代人といふことを聞ますが、その現代人の一資格として狂奔の次の瞬間に於て直に覺醒して、その言動を第三者として見る、即ち客觀が是非必要であると思ひます。例へば戀をするにしても其興に乘つてゐる……ともうあゝ今自分はこう仕樣と思つたけれどやめた、あの人の手を興に乘つた振りをして取つたんだな……と云ふやうにその場から、靜にのがれ出て冷靜な眼で自分の行爲を一々批判する。その態度でさへ居ればどんな大きな間違を起しても大丈夫だと思ひます。小說などを書かうとするには最も此態度が必要で一度此世の渦中に捲こまれて了つて、血眼になつてあがき初めたら駄目です。そりや誰れにしても此場合冷靜にかまへる事は一寸むつかしいが失敗は失敗としてそう氣をいら〳〵させなくて、よく其筋道を明にすることです。只今は、生活＝文藝、現實＝文藝の世でありますから私共の日常の生活を文藝より離して見ることは、不可能ですから、いづれより見ても狂奔の後には覺醒の眼が開きたいものです。まあつまらない事を云つて御免下さいまし。

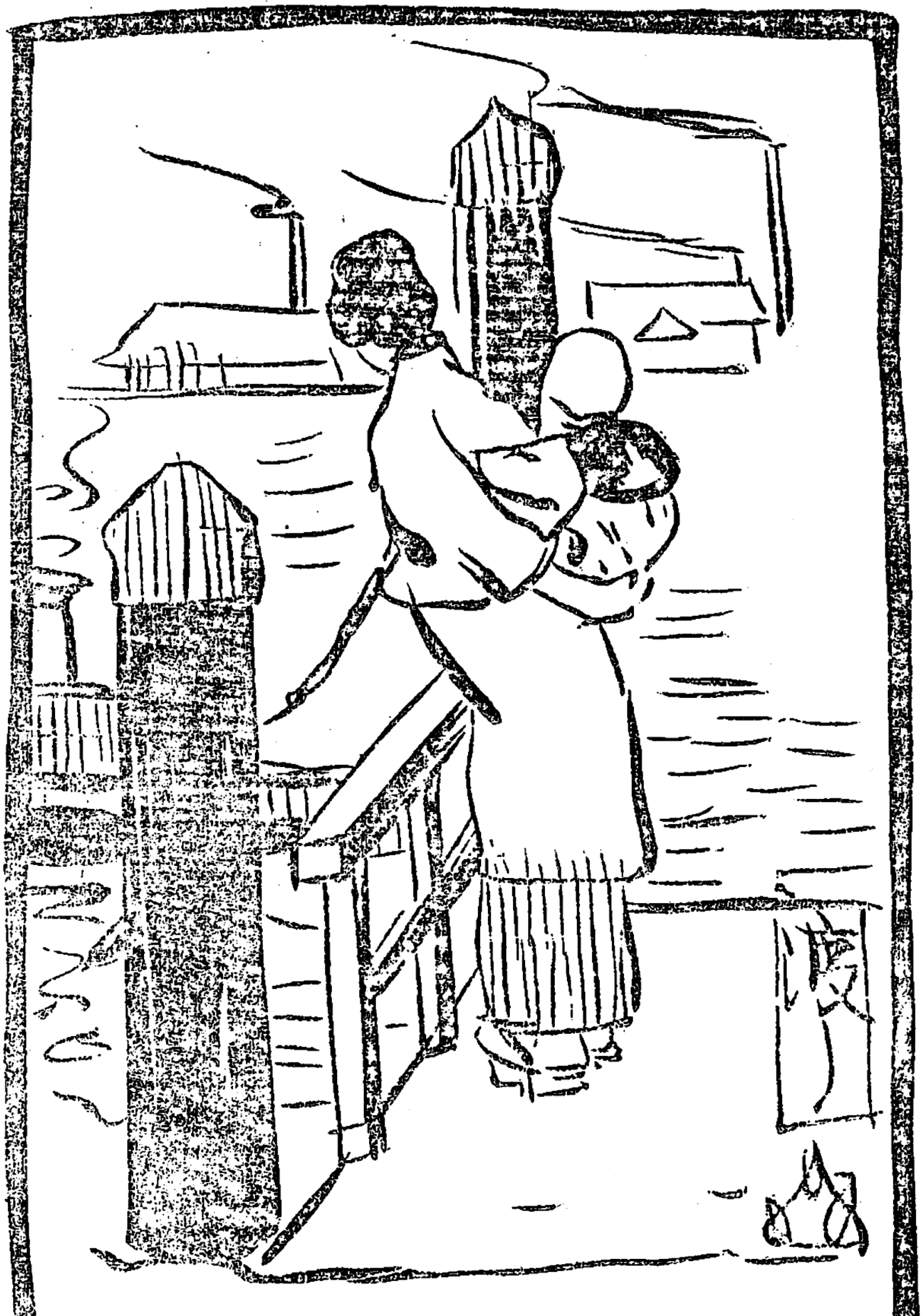
論旨は勿論分つてゐます、併し言葉に隙間が多くていけません、もつと文字の使ひやうに氣をつけないと間違ひのない論文は書けません（評）

○らしくすべし

下の關　花子

世の中でらしくすべしといふ事が一番むづかしいと思ひます。たやすい樣でも中々實行しがたいものです。老人は老人らしく。若いものは若い者らしく。先生は先生らしく。生徒は生徒らしく。兵卒は兵卒らしく。平民は平民らしく。一々あぐれば限ないものです。でこのらしくといふ事は。あまり身分不相應な風をなさぬ樣にするのが即ち、らしくする事でございます。例へば老人が白粉を眞白く髮の格好でも若々しく、着物の柄でもはでなものをきていたら如何でせう、きつとあの人は狂人に違ひない、心が狂るつてるだらう、あの着物の柄は如何かあの髮は……あのかみはあの顏は…………後ろ指さゝれるでせう。きつとさうです。然らば如何したらいゝでせう？いひかへれば即ち身分相應にするのです。何でもこの身分相應といふ事が一番大事で人が皆この身分相應から遠ざかる時は大切なる一身をあやまるもとです。身分不相應なぜいたくをしてごらんなさい。彼の小野小町は如何です？いゝ加減に緣付いて居れば死ぬ時にあんなあはれな、みじめな姿をしなくてもよかつたでせう。が自分の地位、自分の身分を思はなかつたからでせう。いたづらに己れの才を誇つて我を顧なかつたからでせう。その作「花の色はうつりにけりないたづらに我みよにふるながめせしまに」。はよく我を語つてはいませんかよく己れをうがつてるではありませんか。わたし共のよい御をしへです。末代迄もそのみすぼらしき死の恥

をさらさなかつてもよかつたでせうに……。あゝこれ身分相應にしなかつたからでせう。卽ちらしくすべしです。ごく卑近の例をあげますと、わたくし共が假に御父樣御母樣からおしかりを受る時は如何でせう。大きな顔して口答をしてご覽なさい。是が子の子たるものゝふむべき道でせうか。例令御父樣御母樣のお言が非なる共、子は子らしく謹んでうけてゐるのです。そして他日折を見て、御父樣、御母樣に意見をするが子の子たるふむべき道ではないでせうか。



渡し　麻布　津川ふみ子

で子は子らしく、つねに人々皆このらしくする事が最も大切なるつとめでせう。いひかへれば身分相應なれといふ事です。

いさゝか陳套に屬するを遺憾とす（評）

○内輪話

伯耆　かほよ子

『口は禍の本』とは古い金言で御座いまして誰樣方でも心懸けてゐられることでありますが、これが只外面だけに重んぜられまして、よく内輪話と云つて家内の間には全く輕んぜられてゐるやうで御座います、素より親しい身内丈けの間で、他樣の事々を彼れ是れ

噂いたしますのは、何處でもあることで御座いまして別段咎ることもないやうですけれども、私はこの邊まで も人間の德義上彼れ是れと申すものではない、內輪話だといつて輕んずる譯のものでないかと存じます、ましてこれもよくあることですが、小供方のあるお內で、大人の方々が彼れ是れと外樣の噂をしてゐながら子供方に、外で云つてはいけませんぞ、などと子供の口止めをなさるのがありますが、これは第一家庭敎育の上から見ましても、子供の心理に非常な惡影響を及ぼすものであらうと思はれます、子供には先づ大人の方から好手本を示さねばなりません。それから第二に如何に口止めいたしましても、子供のことで御座いますから、何心なく外で話します、これもよくあることですが、子供が外へ出て、お母さんが話すなと云はれましたから外の人へ話してはいけませんと云ふやうな前提をしまして、內輪で話した事々を皆お饒舌してしまひます、それが此所彼所と廣まりまして、遂に『ロが禍の本』を爲すことがあります。ですから、子供方のあるお內では。內輪話だとて、その前でするのは素よりよくありません、尙一步進んでは、外樣の惡評は內輪話にでもすることを禁じたいと思ひます。

議論の文章は確實ですが、內容がもう當り前のことで大抵の人は知つてゐるから一向榮えませんでした（評）

○言葉遣ひ

大阪市　渡瀨淳子

凡そ人の意志を他人に傳へるものは文章と言語とであるから、此二つは重要なる意味を有つてゐる、然るに文章に大層注意をしながら言葉にはさして注意を拂はない人がある。同じ言葉でも演說辯論には氣をつけるか言葉の大部分なる日常家內朋友間の對話は一般に甚しく等閑にせられ、而も近來辭令が巧になり交際術が進步し修辭が發達するに逆比例して此弊が激しくなる樣に思はれる。表面いかにも平和らしい家庭にも尙ほ波瀾が屢々起る、其原因は多く感情の衝突からで、其感情の衝突の原因は言葉の行き違ひに歸する事が多い朋友の間は勿論親子兄弟の間にも自ら謹しみがありたいものである、言葉遣ひの餘り露骨なる又は出すぎたるは卑しいものである、わけて婦人は優美に且控へ目勝ちなるを尊しとする。優しければこそ野邊の名無し草の貴人の庭に移し植ゑらるゝ事もあり、雲間に鳴けばこそ杜鵑の一聲腸を斷つ事もある。始めより庭に生ふれば下僕に拔き取らるべく、日中青空に鳴けば鶯に笑はるべし。但し優美も控へ目勝ちも自なるをよしとす、所謂巧言令色はあくまで斥けなければならぬ。賣り言葉に買ひ言葉といふ事がある、此が日々幾多の悲劇慘事を人間に供給してゐる事であらう。自制心なき人は僅かの事にすぐ角立つた言葉を使ふ、相手は又此

に負けまいとして更に激しい言葉を使ひ又自分に違ひがあつて其の叶はぬ時はふくれる。不興顔をする事此に至れば勢ひ破裂せざるを得ない。されば聊でも平和を欲する者殊に一家の平和を司る若い婦人は強い言葉に柔かな言葉を報いる心掛けが大切である。

○感じたまゝ

紀伊　紫陽花

こんな事はもう幾度か人の口に上つた論でありませう。けれども私の感じたまゝを厚がましく申して見ます。今の世の男子の方はなぜ彼様に生優しいのでせう髪つたらつる〱光らして、身にまとふは綾羅錦繡、衣肝にいたり、袖腕に到るの英風今いづこ。眞に嘆かはしいではありませんか。着物はまあ如何でもですが、嫌らしい戀歌など口吟んで青白い顏してる人私は大嫌ひです。千丈の岩を破つて、雄々しくも不屈の姿、凛然たる松にこそ、優しき蔦かつらはまつはれ、小事に拘泥せず、粗豪、快活なる健兒にこそ、貞淑從順なる婦人の溫き誠は、灑がれるではありますまいか。世の男子の方よ！徒らに貴重なる時間を優柔なる遊戲などに費さずして、剛毅にして、高尚なる氣品を有する夫となり給はば女子たる者も爭で春風の如く溫かくよく內を治め、夫に仕ふる、貞淑の妻とならずに居られませうか。

○愛讀の書に就て

廣島縣　谷川松枝

天地間のありとあらゆる動植物の理と說き明せし理科書よりも、世界の國々を殘る隅まなく載せし地理書よりも、文士の物せし鬼神をも泣かしむる小說よりも、すぐれて妾が愛讀するは偉人傑士の傳記なり、み空の星の數にも增して光り放てる偉人傑士傳の多き中に、日頃妾の愛するは北米の偉人、ガーフィルド氏の傳記なり。淋しき原野に貧しき暮しをして、杖と賴み杜と縋りし、父を失ひ良人を失ひし、其妻の心、思ひやるさへ憐れなり、只管天父の加護を祈りつゝ頑是なき四人の愛兒を、婦人の手一つにて貧苦の中に養ひ育てつつ斷食に笑顏を作りて其の子を勵ませしなど天性の女丈夫ならずや、丸太小屋の一貧兒より身を起して、後年ほまれある大統領とまでなりし人も、此母の賜ならずや、あはれ彼が母文明の女丈夫！。失望の淵に沈みし時、妾は此書を繙けば忽ちにして、希望湧き不平去る。

○朱に交はれば赤くなる

四谷　桝崎佐喜子

諺に朱に交はれば赤く成ると、誠に其通りです。人は交はる友によつては善になり惡しくも成る者ですから友は實に大切な者です。先年荒木町へ軍人の未亡人が七歲になる文子と云ふ娘を伴れて移轉して參りまし

た。何しろ近所が藝者屋待合ばかりで從つてそれらの小供が多く、友子もいつしか皆と遊ぶ樣になりました。毎日藝者の眞似をして、前掛で髪を結んだり鏡臺に向つてお白粉をつける眞似をして居ると「何々さんお座敷よ貴女の好な人お目出度う」なんて云つて出て行く。やがて藝者になつた者は左褄を取つて出ると云ふ風です。之を見た夫人は之は大變だと思つて、娘に說諭して早速移轉したさうです。こういふ母に育てられた娘は屹度女の鏡ともなるのでせう。之はほんの一例ですが本統に其友によつては如何にもなる者で、大きくいへば社會の罪人とならないとも限りませんから、よくよく注意せねばなりません。

論文に就て

選者

本誌の論文に就いて、餘白を借りて一言いたしたいと思ひます、他の諸欄に比較して、此の新論文欄はいつも振ひません、且投稿も少いやうです、で、これは何う云ふわけかと考へてみるに、第一論文といふ名に囚はれて、むつかしいものであるかのやうに思はれるのではないでせうか、これが第一の疑問です。

論文は少しもむつかしくないのです、皆さんの考へを書けば宜いのです、只一つ注意することは、感情を主としたものより、やはり理性で判斷した言說でなければならぬといふことです、感情を主としたものなら散文欄に收めます、此方は勿論若い婦人達の文章の生命ですから、盛んにお作りになつて宜しいが、論文、卽ち理性の勝つた文章もお稽古なさいませんと、將來の爲になりません。

見聞も狹し、頭腦も練れてゐませんから、皆さんに堂々たる大論文をお書きなさいとは勸めませんけれども、皆さんの境遇相應に、題材を捉へて來て、やさしい新論文が作れさうに思ひます。

例へば、友達から斯う云ふことを言つて、いぢめられたが此れは道理に違つてゐはしないかとか。こんなことを雜誌で讀んだが、私なら斯う云ふ風に考へるとか。あゝいふ服裝は美とは思はない、寧ろ斯うした方が女らしくないかとか。あゝいふうか〳〵した人の考はいけない、斯ういふ風に修養をしたいとか。眼前目睫の間に起つてゐる事を題とし、材料として書いたなら、皆さん達にだつて、それ相應の新しい論文は書ける筈です。

あんまり大げさなことや、大人ぶつたことを言はうとするから書けないのです、選者はもつと若々しい、お嬢樣らしい論文が見たいのです、書物まるぬきのものや、ありふれたお說法などは、ありがたくないと思ひます。

書簡文

編輯局選



○故鄕の姉君に（地賞）

伊豫　躑躅

姉樣今日も亦風が强く吹きますのね……先日は御手紙有がたう、何から何迄の御敎訓、それに姉樣の御身の上つひ淚が落ちましたので、宿の奧樣に怪れました、けれども御身御壯健との御事、何より嬉しゆう存じます。母樣の御機嫌がむづかしいてね、嘸御苦みで御座いませう、姉樣には繼母私には實母、それに此私を賴みに告げて下さるかと思ふと、眞實に嬉しう存じますの、御着物等少しは出來ましたか御年頃ですにそれを思ふとじつとして居られませんけれど、致し方がありませんのよ、そして母樣に云つてくれるなつて何故私が告口致しませう、えゝ姉樣……姉樣！御喜び下さい、此度私は月給が五圓上りましたのよ、それで御祝に姉樣にもと存じまして同じなの二反求めました、模樣など御氣に召しますまいけれど、私と思うて着て下さいませ。そして是から御小使も少しは御送り致す事が出來ませう、と、それを樂んで居ります。反物はすぐ御送り致します、中にリボンが二つ入つて居ますから、小夜子にかけてやつて下さい、小夜が姉樣の事母樣に何か告げは致しませんかしら、別封どうぞ妹に御渡し下されませ。近所に長寶寺と云ふ寺がありますの、櫻の名所で今頃は澤山な人出です、姉樣御遊びにいらつして下さいな、姉妹して櫻の下で細々御物語り致しませう、先づは御機嫌よう

かしこ

よく行屆いた手紙です、姉さんもキツト喜んで讀むでせう。態とらしい虛飾もなく、誇張した氣分もない、其穩當なところを採ります（評）

○別れし友に（入賞）

徳島縣　野　菫

去年の新學期には、お宮の庭におそ咲きの紅梅をどんなに樂しく眺めましたか、噫、其花がやがて風に散された如に二人は別れて了ひました。今日、四月一日私は又校門をくゞりました。そして急いで彼の紅梅を見ました、矢張貴方が用事か何かで見えない、今に背を敲いて驚かされるのだと待つてゐました。と十三里風の離々たる彼の里に……と矢を射る如く胸を打たれた寂しさと云つたら、何うか察して下さいませ、涙が一ぱいで紅梅も美しくは見えませんでした。

切めてもの慰めと殘された敎へ子の側に行きました、其時お好きだつた松村樣が戯れにとられた櫛を何うしてもさしませんの、で「德原先生お好きでせう、さあ私が先生にかはつてさして上げませう……先生と思つてねえ解つたでせう」と櫛をさして垂れ髪の小さい頭をなでますと、うなづいておとなしく……眼には涙がたまつてゐました。私は堪らなくなつて其所をにげました。何だつて思ひ出の種許り――又お泣き遊ばすか存じませんけれど、筆をとらずにはゐられません。

何うか氣をつけて……お風邪を召さぬやう、祈ります

しんみりとした文章。女らしい文章、氣取らない文章。（評）

【秀逸】

○都に學べる京樣に

土佐　寂　靜　子

京樣、今日も亦手紙を書きました、變つた事が起きたでも何でもありませんから御安心下さい、今日も矢張り雨ですよ細い雨蛙の聲風の音たゞもう身の置所も無い樣に淋しうござります、貴女は御勉强でせうね、私は相變らず縫物を前に置いてぼんやり考へてゐます、だつてどうしても此田舍に機織つたり裁縫したりして田吾作連の御相手をする事は私にはどう思つても出來ませんもの、もういつそ家を出てやれるだけやつて見やうかとも思ひます、けれど悲しい事にはたゞそれが漠然と浮ぶだけで、第一歩を何處に立てていゝか解らないのです。だからいつ迄立つても、もがくのみで一つも遂行ができませんのよ、始終もう十八の日が幾日ある其間にせねばならない事はこれ〳〵ある、等と思つては獨り心がいら〳〵致します、京樣、どうすればいゝでせうね、そりや裁縫でも上手ならばですけど一枚の袷に五日もかゝるんですもの、それもね、もうやけになつて此樣に惰けて居たら、若し母の方が根をつかして裁縫い方に望をたつてしまつて、私の希望が入れられる曉が來やしないかといたづら書きの狂言です

わ、どうか御願ですから東京を大變よく書いた御手紙下さいね母の心を動かすやうな、どうかお願ひですから、今日は用事はこれだけ、さやうなら。

あゝ都にゆかんとあせる子よ、我も曾ては斯かる思に泣きたることありきされど……されど……都は……寂靜子よ、あまりに母をなかせたまふな（評）

○都の友へ

大分縣　いと子

露子樣!!!春雨がしと〱と今日も降り暮して仕舞ひました、ふだんから淋しい此の場末の町では今漸く九時過だと云ふに死んだ樣に靜で御座います。貴方も御存知の四疊の部屋、柳の絲のすれ〱に觸るゝ窓際の小机に倚り乍ら、華やかな行手に醉ふた二人の內、一人取り殘された自分の身を寂しく泣いてゐるので御座います。誰も解いてくれる人の無い此頃の心の縺れ、……露子樣私の胸は絶えず一種の渇きを覺えるので御座います。裏の木戶に桃が咲いても美しい小鳥が四月の歌を唱ても、其れが何の慰めになるでせう？若い女の誇といふ事も知らずに同じ樣に食べて寢て、生き甲斐のない生を續けてる田舍の生活！私は其れを想ふ度每に限りない寂しさとせつなさを感ずるので御座います。走馬燈の樣に私の頭を走せ環るは美しく粧ふた都の女！自由の道を步いてる都の女……新しい時代にはゞかりもなく呼吸してゐる都の女！。同じ花といふ名の許に生れるとしたなれば培れて咲く牡丹の花と屋根瓦の間に咲く名も無き小さい白い花とはどちらを人は望ましく思ふでせう？その白い花の私は？あゝ私は……何だか淚ばかりこぼれて書けません、失禮いたします。

終り——

名無草の白き小さき花と、牡丹の花と共に散るべき運命を想へ、悲しきも夢なり、うれしきも夢なり、笑ふべきクレアチユール、厭ふべきクレアチユール、おんみは先づ生物其ものを研究せざるべからず（評）

○熊谷なる友に

西多摩　葭子

兒玉河原でお別れした四月がまた來ましたね！波津子樣御無沙汰致しましたが御變りはありませんか？山の中とは申しましてもこれでも東京府下ですから、この地ばかりこんなに寒いのではないでせうが、昨日の風はたゞごとでないと氣遣つてをりましたら思つた通り落花の！ではなくてほんとの白雪とはあきれるではありませんか、それでも今朝の景色は憎くもありませんでした、降つても降つても麥は青いし土は赤黑いし、鶯も平氣で聲高く歌ひますし、時々こと〱と蛙が鳴くのですもの、雪とも思へませんでした、そのうち雨

になつでさつきから落ちやんでゐます、やつぱり四月に違ひないのですね！、數日前あの下谷にいらつしやるもと子樣から上野の花は未だ熟睡中だとのお使を下さいましたので、急に御地のことも伺ひたくなりましたの、お住居からはお近いかどうかわかりませんが、熊谷といへば、私たしか十歲の時でした、もう花の散つた頃叔父とそこを通りました時、汽車の中から見えた堤の綠を忘れきらずにをりましたのに、去年あなた樣がそちらへお移りなされたものですから、花咲く頃はどんなにお忙がしくとも、一筆書いて戴きたいと思つてをりましたのです。いつも御手紙下さるのにわざとこんな事申しては失禮ですが、花が咲きましたらせひお知らせ下さいまし。御約束の寫眞近日中に出來るはずですから、よく〱の不出來でない限りは御送り申します、昔を知つてゐらつしやる方になら恥づかしくありませんから、いづれまたその節にもと。さよなら。

敍景を以て勝る、情趣に何等の他奇はないが、何となく人を惹つけるところがある（評）

○事務室より

神戸　百合香

其後首切騷は如何で御座いますか。當社の方は男子側は隨分やられました。女子はどうかかうか今迄は落ないで居りますが、なか〱危險です。東京も京都も大分あつたやうです。大阪は七人もありました。昨日の電話で京都と大阪へ名前と人數を聞きましたら、京都はどこまでも京都式に、名前どころか人數さへ仰つて下さいませんでした。大阪も人數だけは敎へて下さいましたが、名前はどうも申上かねますとの御返事でした。十分御同情して居りましても、名前が聞きたくつてね。然しおかくし遊ばすのを見れば、なんだか嬉しいやうな心地も致します、と申す此の首があやういのですから、常から恐ろしい掛長の顏が、此の頃は一入恐しう御座います。のんき者の山本樣なんか、男子側をどし〱首切つて、殘た者には臨時昇給でもありますよ、と仰つて樂しんで居らつしやいます。定期昇給はありましたか、こちらはありました。何にせよ昇給が一番樂みですから、少しでもあれば結構結構……しかし人間も、ことに女子が昇給を樂むやうではもう人間の末ですね。

まあまあ女子は首切になつても、親のある人は親にすがりつきお互いに親の無い者は伯父なり伯母になきつけばどうにかかうにか餓死だけはのがれるでせうよ、淸崎樣なんか首切になれば、こし辨當に鐵のわらじでお嫁入口でもさがすつて仰つてます。

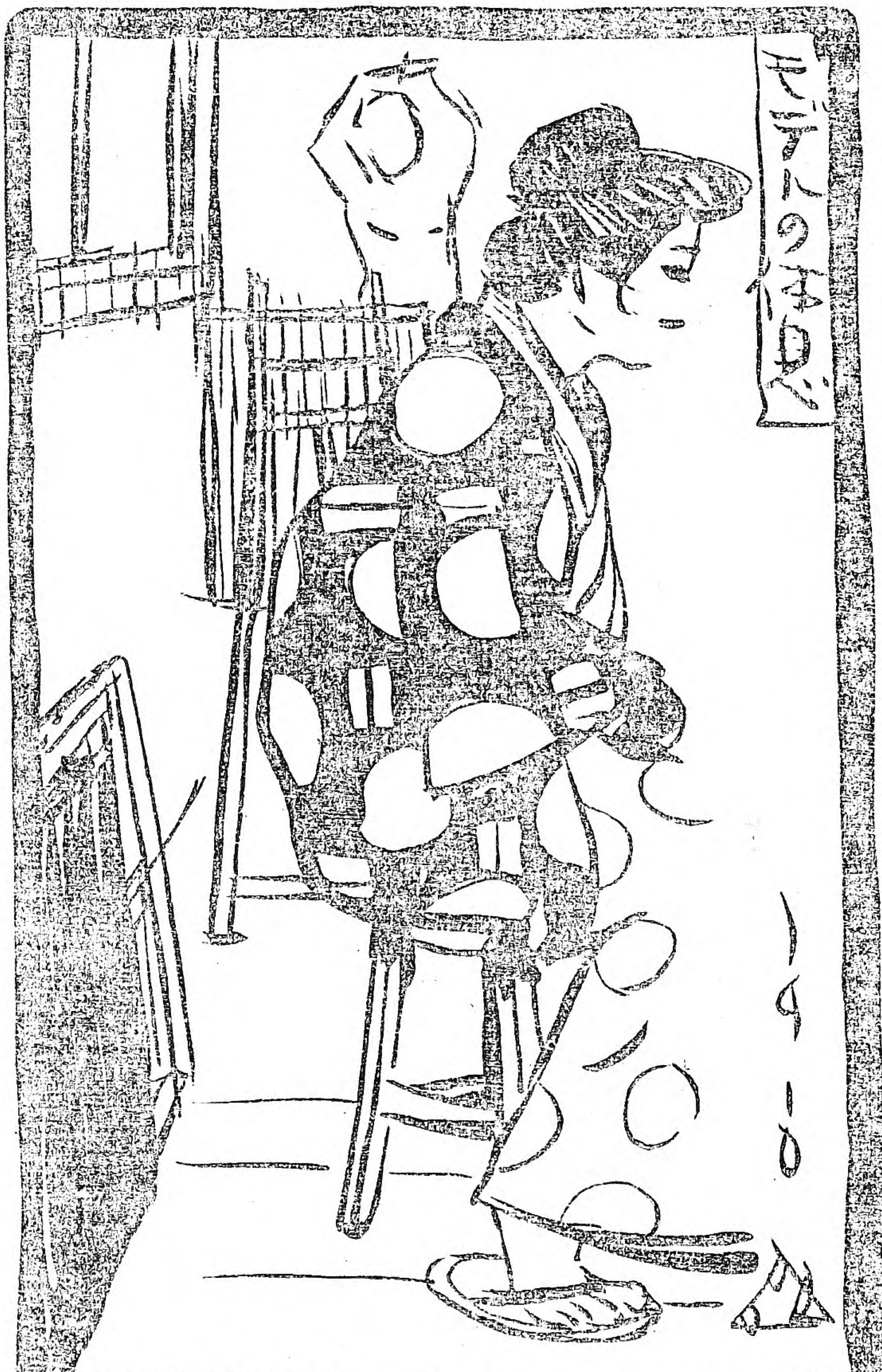
さうなれば男子は可哀さうですね。妻に子供の二三人

も抱へて居れば、實にみじめなものですよ。ことになり上りと來たら今ひとしほですよ。いづれわるいところがあればこそ首切りにもなるのでせうが、しかし男子はともかく女子は(ぎりやう)よりか(きりやう)かも知れません……まあまあ御心配遊ばすな、首切りになれば又其の時の風がふきますよ、しかし御用心遊ばせ。皆樣へ宜しく左樣なら

洒脱の中、自づから悲痛の韻あり……

おとろへや齒に食當てし海苔の砂　芭蕉

ぬれ緣や薺こぼるゝ土ながら　嵐雪



モデルの休息　麻布　津川ふみ子

昔の人は云へらく「脆弱よ汝の名は女なり」と、現代生活の苦痛は、骨を刻み、肉を醢にせずんば止まざらんとす、併して婦人勞働問題は益々其囂々を增し來るあゝ弱き者のあはれさよ。脆きもののみぢめさよ(評)

○化粧部屋より

長野　池田てる子

信樣！私の樣な詰らぬものの書いた此手紙でも見て下さるでせうか。

私は何故か此頃悲しくてなりませんの、何故悲しいか自分でも解らないんです。只獨りでに涙が流れて出ますの、だけれども私は好んで泣きたいんです、悲しくなる樣な歌を思ひ出して唱つては、泣いて居るの。

そして私は此頃淋しい處が好きで仕方ありません。何時も、十二時過ぎになつて町をぶらついてあるいてるの。

此間も遂あの大橋邊まで行つてしまつたの、そして橋の袂にしやがんで泣いて居りました。

何故なんでせうか。

貴方は來年御卒業なさるんですね、あゝもう世の中が厭になつて仕舞ふ。

泣いて泣いて泣き死んで仕舞ひ度い樣な氣がしてならないの。

面白くもない歌を唱つて、甘くもない酒を呑んで、人の御機嫌をとらなければならない、此んな生業をする身に何故生れたんでせう。矢張り運命なんでせうか。

今日も私は、二階の部屋で泣いて居ります。

われ曾て楊柳の巷に人を観る、人は悲しげに涙の眼を泣き腫して居た、賑やかな春の町の寂しい思、といふことが其時深く〱胸を刺した、あゝ悲しい水の色、空の白い雲……（評）

○近々來遊せんとする友に

大阪市　渡瀬淳子

山は春野は春水は春、花が咲いて鳥が歌つて妙ちやんが近い中においで遊ばす。確かな日は何日、汽車は何時、きまつたらすぐ知らせて頂戴、まだなら早くきめて頂戴、なるべく早くねそしてなるべくゆつくり……、必ず〱當地直行の事、名古屋共進會を見て京見物をしてなどと月並(つき)な事をおつしやいますな、それより私幾日でも御交際致しますから二人で今樣女彌次喜多をやらうぢやありませんか、詩的(ポエチカル)で且畫的(ピクチユアレスク)な近畿の山河は若い女詩人を待ちこがれて居ます。

先づ彌次喜多の發端はみをづくし浪速の煙の都、東へ去つて奈良京都、賣る者なれば舞妓か大原女の美しいのを一人二人お土産に買ひ込み、古き兩都の黴びた香りは妙さんの詩嚢に收めて都大路の葉櫻蔭浮るゝ少女の六吋のリボンを吹かせて見たい私の心願、さてこれも亦お土産話の種なれば共進會も一巡して金の鯱に打つたまげたを合圖にあなたは東に私は西に袂を分たうではありませんか。右御案内旁吉野の櫻、落花を集め

て送られたるをさし遣します、花に光あるは南朝忠臣の熱血と靜女の紅涙とにみづかはれたからと思し召せ

大阪の人に似合はない面白いことを云ふ人だ、併しお土產話の種に共進會を一巡するなんてやつぱり月並ですね（評）

○從妹の許に

京都市　三宅壽賀子

美樣ありがたう、只今御寫眞が着きました。まあよく御寫りですね家中引張こして拜見しましたのほら例の惡口の兄樣も今日は何と思つてか「美樣はうつくしい美樣はよい」と云うて寫眞をはなさないのよそしてね、私に「美樣はこんなにうつくしいのに御前は從妹と云うても絲程も似て居ない、なぜ御前はいつも〱黑い〱顏して目ばかりむいてゐるのだ」なんて、又例の惡口がはじまつたかと思つて「知らないわ、私は知らないから產んで下すつた親に聞いて頂戴」つて云うてやつたのよそして私のも寫つて來ましたのこれからすぐ御送りしますよ。

兄樣の云ふのも無理はないんだもの美樣のとくらべるとまるで山出の下女のやうだわでも御送りしますよ併し餘り面白くて顋がはづれては大變ですからきつと御手拭の一筋づゝ御用意しておいて頂戴よ御手拭のつかひやうは御承知でせうね何とぞ十分御用心を皆樣へよろしく　左樣なら。

輕妙。洒脫、しまひの方がふるつて居る。併し手拭のつかひやうは僕に分らないから敎へて貰ひたいものだ、京都では妙なことが流行りますね（評）

○病床より友へ

前橋　みどり

いつもながら、秋樣のやさしき、御なぐさめのお手紙には只々泣き申候、此頃はお暖かにて、のどかなるせいか、私もよほど快方に向ひ、毎日、雜誌を友に暮し居り候、されど若き血潮のもゆる如き希望にかゞやく人々の筆のあとを見るにつけ、この胸は、はりさくばかりに候よ、あゝ好める文の道をもたどる事かなはぬ身。

昨夜は思ひがけなく、文樣お出で下され候、人なつかしがりの私、病みて後は一層と相成り候、餘りの嬉しさに母が止むるをもきかで、椽先のらんかんにより、朧の半月を櫻の影に眺めて語り申し候、文樣は來月ある方にお嫁入りの由、例の快活に、色々お話し承り候先方は御兩親お揃ひとか、それについて、大分おこぼし、私は御兩親ともなくてそんな身分の方とは、餘りによすぎて恐ろし、それに、二人きりでは、きまりのわるい事もあるだらうし、どちらかあつた方がいゝと申し候ひしに、みいさんはよわい方だと笑はれ申候

げに私は、心よわき者に候
あき様は如何思ひなされ候や
口惜しき事には、手先ふるひて筆もつにたへず、これにて止め申候お手紙何より御まち申上候

文體も敢て新らしくはないが、何處となく器用に出來て居るスッキリした調子がうれしい（評）

○繪端書にて

岐阜市　葛の葉

今日は十三日ともう女子文壇社が今に締切りになりますから、何か書かなきやなりませぬ、それでよき種もがなとこれから夜の上野を見に出かけます處、おばさんが羽織をとりにお二階へいらしつたから、夫を待つ間で、繪葉書一本、差し上げます、誌友會の有樣など申上げたいけど、花時はそんな暢氣な暇がありませぬから、いづれ御目にかゝつた時委敷申上ませう。

如何にも蒼忙の態が見えて、繪はがきへの走りがきに適して居る（評）

○切なき思を

京橋　西藤萩香

義兄樣！この頃はどうしてゐらつしやいます？
胸にあふるゝばかりの希望を抱きながら、何事も運命とあきらめて、田舍の子等を對手に暮してゆかれる義兄樣、私は出來るならば變つて勉强させてあげたいと思つてゐます。
義兄樣！義兄樣はさぞ萩香はなさけもなにもしらぬ、情のない人間だと思召してゐらつしやるでせう？
ほんとにさう思召すのも御無理だとは思ひません、萩香は、あんな〳〵手紙書いたのですもの。
けれども義兄樣、萩も若い小女、この胸には燃えるやうな血しほが流れて居ります。
どうしてあんな御返事書いたか、義兄樣、萩のあれを書いた時のこと胸の苦しさ察して下さいませ。
名譽、義理、萩香はそれにしばられてゐるのです。
戀のためには名譽もなに、義理もなにと思つてもやつぱりだめ。
萩は戀するにはあまりに理性が勝ちすぎて居るのです義兄樣、ほんとに許して下さいまし、もう何も申しません。御身體お大事に御勉强遊ばして下さい。
萩香は蔭ながら義兄樣の世にお出になる日の一日も早かれと祈つて居ります。
さらば義兄上さきく在せ。（四月十一日夜）

然り、君の文亦理性の傲れるを見る、切ない思でなく冷たい白い思が出て居る、だからよし自分では深刻な大きい問題にぶつかつて、悲しくて〳〵堪らない切ない情を書いて居るツモリでも、筆がサラ〳〵として、まるで氷の上をスケートするやうに悲痛が外皮の上をすべつて居る　（評）

〇病院より

東京　若紫

まあ此の厭なお天氣が幾日續くつもりなのでしよう。毎日〳〵やみ間もなくボタリ〳〵と樋から落ちる雨垂の音も最うすつかり聞きあきてしまひました。晴天であつてさへ陰氣な病院！まして此のお天氣なのですものくさくさして仕樣がありませんのよ。でもね今日からおかげ樣で體を動かしても良いと云ふお許るしが出ましたので嬉しくて堪らず早速手紙を書き始めましたの。これを書き終へたら一葉全集でも讀むつもりなのよ。この三週間と云ふもの全く何の樂しみも無く只皆樣から頂くお手紙だけ中でも貴君からのが何よりも嬉しくて三日お便りが無いと何だか心細くてね泣き出したい樣な、よくジレて看護婦や婆やを困らしましたわ。皆が困るとは知りつゝも音無しくしては居られないのですもの。



つみ草　水戸　玉川すま子

何しろ始めの一週間は只遊んで居るのも同じですから却て氣樂でしたけれども手術後と云ふものは右も左も向けず天井とにらめつくらと云ふ始末。節穴ばかり一日の中に十幾度も數へて其もすぐ飽きてしまつてジロジロと横目で方々見廻すのよ。處が皆目に映るものが壁もカアーテンも毛布も看護婦の帽子も着物も同じ色の白ばかり變つた色と云ふのは看護婦の赤い頬と婆やの黒つぽい着物限り。本當に何て單調な生活だらうとつく〴〵淋しくなつてしまひましたわ。

然し最う今日からは體も自由だし、まあ云はゞ縄でしばられて居たのも同樣ですものねえ。自分では此の分なら一週間も過ぎたら退院し出來るつもりなのよ。院長さんは何共仰しやらないのですけれども。

熱も三日目程前から平常に復し痛みもすつかり取れてしまひましたから最う安心。今朝は牛乳とスープの外にお粥を一つ頂きました。明日からは散歩が出來るのよ嬉しくて今夜はきつと寢られやしないわ。

三週間も貯めて置いたので書き度い事が未だ〳〵あるのですけれど少し疲れて來ましたから又看護婦に叱られない中に止めませう。ふるへ字でお讀み惡いでせうけれど何卒お判じ讀み下さいまし。

暗い室の中の暗い空氣と心とがよくあらはされて居る。併しムダな文句が多いので、案外同情を惹かない（評）

○歸郷して友へ

信濃國　小林ゆわの子

芳枝さん、要は昨夜穴山へ歸りました。七時の終列車で、スワへ這入た時、私は窓の戸を開けて、久しく會はなかつた、諏訪の平を眺めました、其の時、窓から吹き込む風は、非常に懷かしく、悲しく、肌にさはりました。

私共を大きくして呉れた、女子補習科の西の窓からは、あはい灯がもれ出て居ました、其の灯を見た時、ふと數年前の友の事から、現在を思うて、泌々と泣きました。

久しい間關西を流れ歩いた私し、結局は儚ない、敗北――バカボント――。

是非〳〵鳥の塒につく頃、一泊の心得で御遊びに御出掛けください、待てゐます。さやうなら。

もつと纏まつて居なければダメだ、何等か感情をあらはさうとした蹟はあるが、泣いても、悲しんでも、一向物足りない（評）

○旅行中の兄樣に

東京　香野子

淋しがり坊とお笑ひ遊ばすか存じませんが堪されず兄樣が戀しう成ました故ねむい目をこすりつゝ筆取りま

した、兄様は最早おねむり遊ばして、私淋しくて一寸とも夜など眠られませんの兄様は知らぬ土地に一人でお淋くはなくて早く歸つて頂戴ね私待ち遠いのよ、義姉様もお待ちかねらしいの、ね兄様毎日いつしよに居るとあんなに喧嘩してゝも少しでも離てると實に戀しいものですわね。

私此頃淋くて大好なあのお菓子もさうたべとうないしいつもの樣に駄々もこねて見る勇氣もから出ませんわ。ほんとうに近頃はおとなしいのよ。

兄樣先日お蒔になつた草花ね芽が二分位出ましてよ、私もしデクにかきまされて仕舞ふとお歸の後、兄樣にお目玉頂くのこはいから毎日花壇の番人を務て居りまず。それからお池の金魚ね兄樣一番大きいの野村さん所の猫に食られました。兄樣憎らしいのね。私直ぐ捕へて頭を目玉の飛び出る位打つてやりました。何だか胸がセイ〱してよだつて金魚のかたき討したのですもの。

兄樣今夜は遲くなりましたからこれでごめん下さい。くれ〴〵も早く歸つて頂戴然しあまり急で大切なく〱お土產の京人形忘てはいやよ。忘れると私大聲出して泣くわいゝこと、左樣なら。

可愛い文章が紛れ込んで來ました、かういふのも時には面白いでせう(評)

○昔のむすまで廻狀へ

茨城 川和田初子

お慕はしい、皆々樣、泣いて校門を後に、悲しいお別れをいたしましてから、最う二年になりますのね。今更月日の立つのの早いのを、申しますも愚らしいですが、實に早いものですね。今日は二年振りでなつかしい皆々樣の御消息を拜して、喜しさの餘り、晝飯も忘れて、拜見いたしました。何時も皆さんお達者ね。つや子さんお太りなすつたてね。うれしいでせう、お望みが通つて富子さんあなた相變らず、お口もお手もお達者ね敬服いたしますよ。秋子樣變らぬ滑稽談、お腹の皮がよつて仕舞ひましたよ。よし子さん、あなたほんとうに、澄ましてゐらしやるのね。房子さんあなたの大丸髷の、マダム振拜見いたしたうでございますよ光子樣僞らざる自炊生活の告白、全然活動寫眞でも、見て居る樣な心地で、面白く拜見いたしました。是れは皆樣、色々と皮肉な批評ばかり……お宥し下さい。何、私ですか別に變つた事も有りませんの。相變らず單調なライフを送つて居ますの。然し二つ年を取つただけは變つてますね。御承知の通り、何時も私は我儘者で、騷いでばかり居りますの。殊に先月より、兄弟が皆集まつたものですから、其れは〱賑やかなもの

です。兄がしやべる所へ私が引つ切りなしに騒ぐとき
て居ます、からね。……何時もむつかしいお顔で笑ひ
顔一つなさらぬ、お父様まで、眼を細くなさつて、い
らつしやるのよ。寂寥に泣いてるとか、申された澄子
様よ、ちとお出かけなさいな。幸、二本木の櫻が見頃
ですよ。どーぞいらつしやいな。皆さんもよ。屹度ね
喜んで御案内いたしますよ。もつと書きたいことは、
有るのですが殊に、クラスメートのあの〇〇さんね。
ほら、御存じでせう、あの方。實にドラマチックな事
が有りますのよ。御存じ？後は此の次にね、其れでは
これで。さよなら

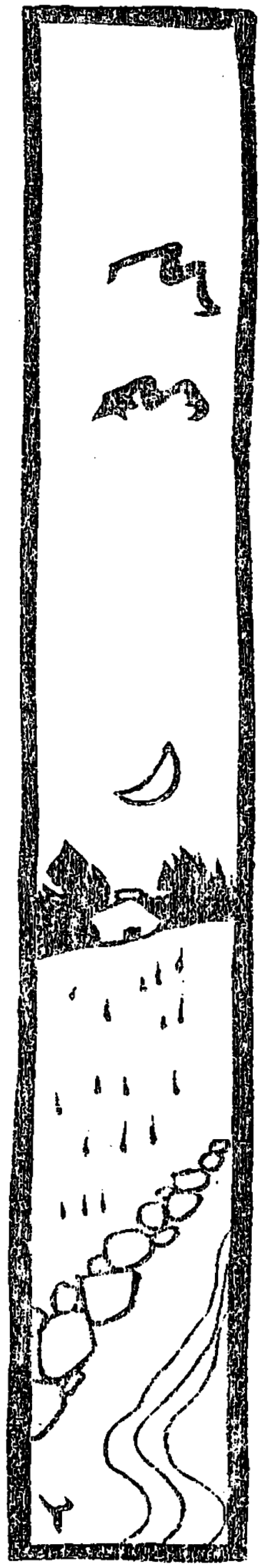
何となく氣が利いて居る(評)

○寫眞を添へて國の母に

山形縣　島貫琴子

お母様誠に御無沙汰致しました何卒許して下さいませ
やう／＼暖かに成りましたネ、皆様お變りも御座いま
せんか、お尋ね致します、當方でも皆丈夫ですから御
安心下さい、幸に開業以來門前のにぎはひは大へん、
それに一二年の間は書生も下女も遣はないつもりです
から、中々忙しい事たら、いつでも朝など髪を結ふ閑
も無いのですよ、坊やにも朝にお乳をやりますきり二
時すぎに成らなければ飲せられぬことが度々毎晩の樣
に起こされて之では體が續かないつて時々こぼします
けど又患者が一人も無いよりよからうつて云ひますの
しかた無しに、度々御所望の仁の寫眞やう／＼撮りま
したからお送り致します、寫眞屋を山形から呼び寄せ
て撮らせましたのですけれどそれは／＼大さわぎでし
たよ、よく御覽下さい割合に好く撮れましたらう、傍に
お行儀好く坐つて居るのは坊やと仲好のペス「犬の名」
で御座います坊がおとなしくして居ればペスが歩き出
すペスがよいと思へば坊がおいたする中々骨が折まし
たのよ寫眞やがネしかた無くベルを鳴らしましたの、
するとペスさんが吠え出して中々止まない、それで
も一同ほと／＼困りました仁も丸々太て可愛いゝでせ
う、二三日前からやう／＼手放しで立つたする樣にな
りましたの。
母ァ様御心配下さいましたがもうすつかり馴れました
から御安心下さいませ、時折國言葉の面白いのをつか
うて自分ながら可笑のですよ、末筆ですが皆様に宜ろ
しく御願ひいたします、御申越の藥は寫眞と米澤名物
のかりん漬と一所に昨日御送り致しました、此方でも
父様も母様も御きげんは宜しう御座いますから御安心
下さいませ。
母ァ様くれ／＼もお體をお大切に忙しいから又次便で
さよなら。

如何にも忙しさうなお醫者さんの奥さんが、手紙の上に躍動して居る。お母様も嘸滿足でせう(評)



短文　　編輯局選

○夕の水（地賞）

西多摩　葭子

お歳暮にもらつた鹽引の鮭が、あまり固くなつて切れないから、一日裏の小川へ浸して置いたのを、出しに行つて、ぬるんだ春の水に手を入れると、載せて置いた石が輕く動いた立ちあがるとあたりを蔽うてゐる竹の葉の細かに入り亂れてゐる間からほの赤い夕暮の空が見えて雉子が近くで鳴いた。傍の水車は止めてある

評　薹立ちし菜、伸びたる麥

○麗かな日（人賞）

長野縣　宮坂明子

私は障子を開け廣げて外を凝乎と眺めてゐた。白く乾いた土の上に、弟の下駄が一足干してある。其下駄が土動く樣だ。尙凝視すると其下駄が土の中に引き込まれる樣だ。尙凝視すると大地と下駄と一緒に深い底に自然と落ちて行く樣だ。

評　エーテルの光波漾々としてつきず

【秀逸】

○春雨

伊藤よしゑ

今まで作文を書たい帳面を一枚〳〵破つてお湯を沸して琴の袋を洗濯した、バチャ〳〵音をさせ乍ら井戸端から見て居ると絹絲のやうな細い雨が中庭の蘭や椿の葉をシットリとぬらして居る、後で釜の下に堆くなつた燒がらを、火箸でかき出すとヒラヒラ顫へ乍ら、下に落ちる、光澤のあるやうな無いやうな變な色だ。

評　尙ほつれ〴〵なり

○狂人

麻布　藤村ゆき子

馬場の櫻の樹の根方に何時も踞んで行人を見てはニヤ〳〵と笑ふ狂人の男が居た何時か雪の樣に散る花の下に彼を見出した時、私は少からず感

興を惹いた。緑になつた今日彼所を通つたら彼が見えない私は何となく物足りなく思ふた。

評　沈紅駭緑、要するに總べてのもの皆逝く也

○七色の縞　羽前　あらゝぎ

葩のやうな形に燃えてるランプの焔を目を細くして見てゐると、七色の筋がいりまじつて縞をした光が出て、ずつと離れてゐる私の眼先に美しくひろがる。――よく幼さかつた頃の冬の夜など炬燵に寢ながらこの光の縞のやうな絹を織つて、衣服にしたらと始終思つてゐました。

評　いかにも女らしい觀察

○春の朝　三島　幽喜

人間は生くる爲に働くのだと父と弟は言つた、私は働く爲に生きるのでせうと主張した、此論戰が一時間餘も續いて春雨の夜を眠りに就いた。今朝は好天氣である、然し何故か日

課の搾乳が厭でならない、私は既昨夜の議論を忘れて居た。

評　死せる議論、活きた人間!?

○春の日　丹後　高田　香菫

私は學校を退くと何日も前の廣々とした桑園續きの小路をうつむきながら可成生徒に逢ぬ樣にして歸る先生!と謂はれると何だか寂しい悲しい感じが溢れて來るからである。小學校時代にKと謂ふ先生は三十歳で獨身であつた、そして春が來ると常に寂しいと謂はれたのが未だ忘れられぬ印象である。

評　紅櫻漸く褪せ、梅は實となる

○さうしやう　札幌　安達けい子

秀子さんは今度上京なさる。小學校を卒業する時男が六人女は秀子さんと私きり、私は悲しくつて〳〵堪らず泣いたあげく金を盜んで上京しやうと思つたが考へて見るとつまらない、私はハイカラになるまい、さうしやう……。

評　千人の哀心一人の喉音よりひゞく

○花盜人　伏見　草花

柳に髪を撫でられて、はと吾に返つた。おやいつの間にか庭がしつぽりぬれて終つた。下駄の音が塀外で止んだと思ふと、やがてあふれてゐた櫻の枝がすうと引つぱられた。暫しして其枝がはね返されると、下駄音は再び起つてあわたゞ敷遠ざかつて行く。私は獨りほゝ笑んだ。

評　何ぞ捕へて歌に詠まざる?

○探し物　妙香

『オイ知らんか、彼を……ホラ僕の財布』『ホ、誰が知るものですか、又兄樣が始まつた、』ガタ〳〵ピチヤン『チエッ!急ぐのになあオイッ……誰か知らんかッ……』と青筋立て本箱や机をガタ付かせてたが急に靜になつた、そッと覗くと恥し氣に財布

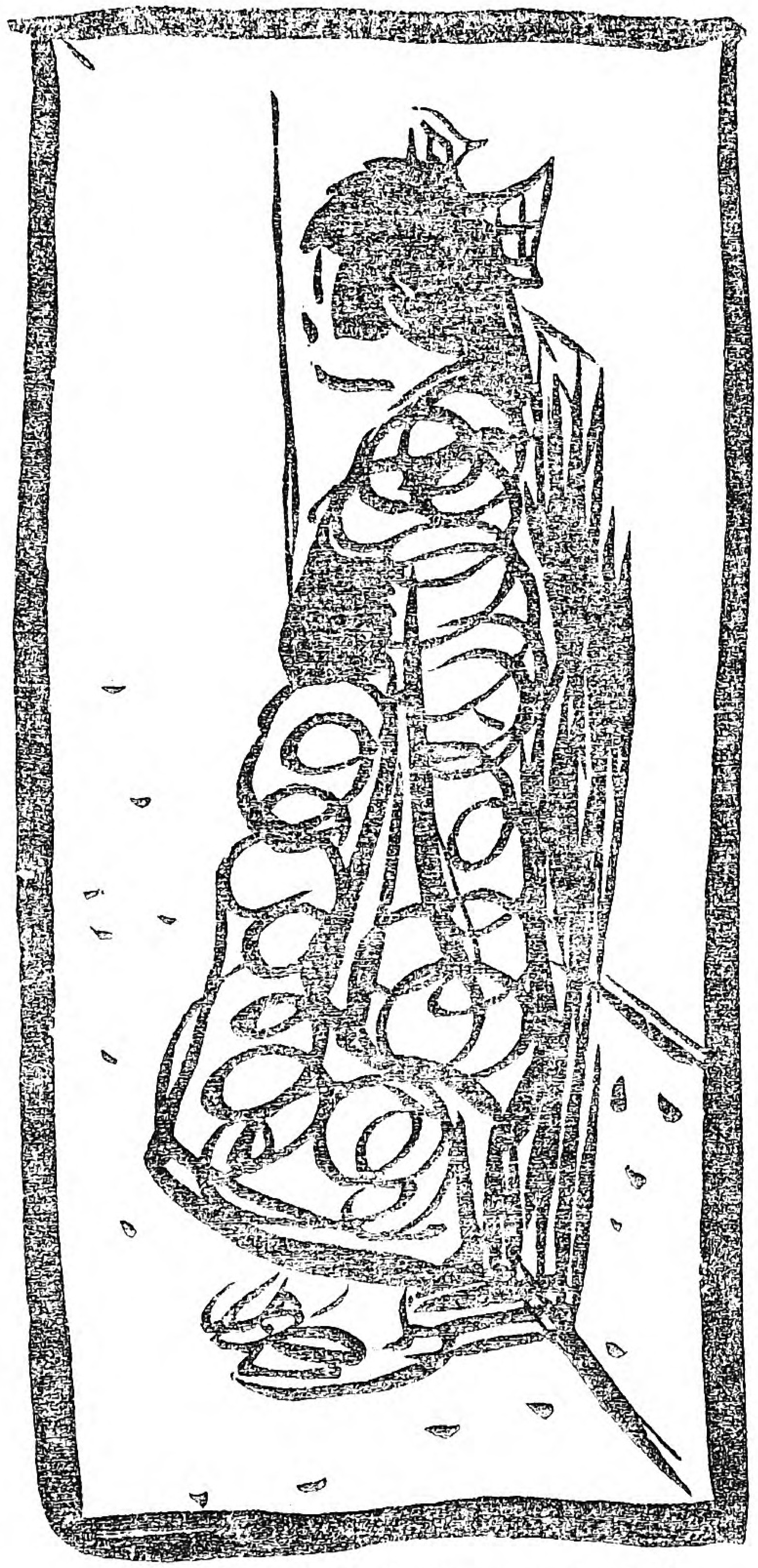
を懷中し傍目もふらずスタ〱と外へ。

評「耻かし氣に」は振つてる

○覺醒　麻布　葉がくれの花

迷ひも極度に達した時には覺醒る涙も乾く、そして覺醒の早かつた方が驚て遁げる、――遁すまいつてあせる、只遁れる工夫ばかり考へても、考へ詰めた時にはさしも血の跳つた胸も寂寥の身に迫つて泣くより外に見出さない、涙は初めに泣いて終りに泣くものだと、友は言つた。

評　それで止まれば一生の不幸



花子ちやん　新潟縣　村田スミレ

○ちやるめらの笛　神田　蔦の葉

昨夜遲くまで話しつゞけてねむい處へ、御飯を澤山頂いたものだから一層ねむつくて仕樣ありません、お机の前へ坐つて、暫しの旅ながら古鄉を思ひ母を思ひ友を思つて、瞑目沈思の折、調のいゝちやるめらの音が遠くから……喇叭の音も……。

評　庭には灼々たる緋桃の花

○春の光　赤坂　横笛

ポン〱と長く眠たい樣なテニスの音を聞きながら軟かい芝の上へ腰を下してゐた。暖かい春の光はあたりを繞つて其中に居る私はうつとりと氣が遠くなる樣だつた。噫呼此の運動場に居るのもあと僅か一年と思ふと一種の悲しさが強く〱胸を打つた

評　苜蓿白く忘れな草紫なり

○姉さま　靜岡　野の百合

兄様のお家へ入嫁しつた當時はどんなに急な御用でも側まで入らしつて「アノ……」とモじくしてらしつた姉様一年經てのお正月伺つたら「所天」つてやさしく呼んでゐらしつた。美佐ちやんも四ッに成つた今日此頃「一寸父さまー」なんて大きな聲で呼んでゐらつしやる。

評　其の次は「これぢいさんや!?

○庭球日和　水口　鈴蘭

一點の微雲すら無い—庭球日和、誰も彼も羽織ぬいでの大元氣中には袷を着たいと云ふ人さへ有るボールの音はポン〳〵と冴え〳〵てまろばす様な雲雀の聲は中空に——美しい合唱を聞くが如。

評　もう唯得意の絶頂

○緋桃　大分　笑雪子

庭の緋桃が眞盛になつて、妾のお嫁に行く日も近付きました。アヽもう暫くは見られないと思つて妾は、毎日御仕事の暇々に眺めます。だつて此緋桃は妾の生れた春、お母さんが植ゑられたさうですもの。氣のせいか咲亂れた花迄恥かしさうに見えます

評　御もつとも〳〵

○墓場　岩代　植村喜奈子

四里程もある先きの素馬山に落る太陽の黄色つぽい光線が黒い杉の林に閃めく〳〵と、じめ〳〵した暗がりの墓場がポッカリと紅らむ。格別大きい石碑の前の八重櫻がパッと呼吸く。鳥渡の間黒い鳥が枝移りをした。

評　骸骨の欠伸もやう〳〵止む

○日和　福井　岸本芳子

今朝吹く風が寒いので、婆は炬燵を開けといふ。空は碧く凪いで、障子に映る梅の木の影が、クッキリと墨で描いた様。向家の車屋のお神さんが、糊付板を借りに來て、例の大聲で愛想を振舞はす。外を通つた檜笠に春日影がはえて、家内をパッと明るくする。

評　春淺き趣味十分

○恐怖　金澤市　むらさき女

暗い室に灯もつけずにゐると、周圍の壁が動き出して私の身に迫つて來る。いつでも馬鹿な氣のせいだと思つてゐるが、もし手を出して手先に當つたらどうしやうと云ふ氣が先に立つて、身動きもしないでゐる。

評　神經衰弱がまだよくないと見える

○モデル　金澤市　藤永靜子

從兄さんをモデルとして小説を書いたら、それこそ天賞が當るわ、だけれど從兄さんに見つかつたら大變とそして筆が達者でないのとで、書かれぬ、惜しい事には目の前のたからをむざ〳〵と逃がしてしまうのか。私は——。

評　あゝ近代人は禍なる哉

○春ちやん　下關市　山田美枝

春ちやんのお父さまは毎朝新聞がくると寢てお

讀になりますが、いつも春ちやんはそれをじつと見て、ゐましてお父さまが會社にお出になるとそこでねころんで新聞を見ます。

評　お父さんたるもの宜しく注意すべし

○初雷　島根　時雨女

菜の花續きの眞白な山陰街道を鈴の音しやらん〳〵と鼻唄に行く春の靜さを破つて馬子が通る板橋を渡れば鬱蒼して薹草に蟹の泡吹いた樣な白い小さな花が木の音にゆら〳〵と搖動いてゐる。途端にごろ〳〵と初雷の音。山の雲が急に動き出した。

評　桃林の紅霞は崖の一角に

○暖國の人の知らぬ骨折り　越後　木村みしま女

今が雪割りの最中である、軟らかい所は、コイスキで割り、かたい所は、鍬で缺く、其大きな固まりに、鳶口を突き立てゝずる〳〵と引つ張つて行つて、ドブンドブンと、川へ投ふる、男は割り手、女は其の引つ張り手、かうしてやうやう、山と積もつた雪を消すのです越後は今。

評　一種の壯觀

○祖母の寢室　丹後　松本品子

祖母さんは毎日精出して機を織つてゐる祖母さんの寢間は機場の二階で汚穢ない疊が四枚敷いてある、そして枕元には三ツ折の破れかゝつた屛風が立ててあつて室内一面に反物の切端、管巻、糸屑杯が散らばつてゐる祖母さんは夜になると何日も敷放しの蒲團の中へ潛り込むのである。年老ると此座に自墮落になるのであらうか

評　只鼠公の暴るゝに任す

○乙女　徳島縣　吉田紫花

造花の講習所で一所になつた勝江さんがお辨當持つてゐるのに何故か默つて遠方午食に歸つた事があつた後で聞いたらお箸を持つて居なかつたからだつたと笑ひ乍ら眞赤になつて小聲で話した、女とはそんな小い事にでも苦勞を厭はぬ者で、乙女とはそれ程の事さへ恥しい者である

評　面白けれど說明的なるは慊らず

○春の日　備中　篠原しげ子

雨上りの好天氣、私は一人裏座敷に日向ボッコしながら、井戸側に爺が漆喰をしてるのを眺めて居る爺はよつて居ても未だ力は強い、鉢巻がけに鼻唄でポン〳〵よい音さして叩く、と裏の蜜柑畑で三平が例の浪花節とやら、えぐり聲になつて居るのが聞えて來る、じつと聞いてゐると其聲も、叩く音も、か第〳〵に遠く、微かにユラ〳〵夢の樣になつた。

評　目をふさいで又目を開けて、あゝ永い日だ！

○雨　下谷　林久榮子

シト〳〵と淋しい音を立てて廂を打つ雨に只何となく泣きたい樣な氣がする。大好な〳〵唯一人の兄樣が亡くなつたのが夢であつてくれゝば宜いと思ふと夢ぎらひの妾のほゝにつめたい涙が流れる。雨はいよ〳〵はげしく、かすれ〳〵て上野の鐘がひゞく。

評　現實卽夢

○お姉樣　京都　靜月

本當のお姉樣ではないのですが御無理にもお姉樣になつて頂いた美佐尾樣！雨の降る今宵などは如何して居なさるでせう。やさしい、懷かしいお姉樣、御年は二十一歲ときいて居りました此頃御たより下さらない、雨が降ると氣にかゝりますわ。

評　蛙の性ででもありませう

○雪にのつて　札幌　ゆき子

面白いのよ、どんな奥でも隅でも底でもすつかり見えますのよ、廣い野原は綠に河は白く鳥も飛んでゐます、一つ雪でも降らしてやらうかしら。けど只ぢやあ惜しいあつさり「下界にて人生觀を論ずる者すべからく此所に來るべし」と書いて。

評　御伽にむつかしい雪だ

○今は故人　横濱市　小田切錦子

「一寸お伺しますが、此處から彼方へ、脫る道ありませんでしやうか。」「エ、あの線路の處へですか？、ぢや此庭から、お通りなさいませ、出られますわ。」失敬ッ疾風の樣に見えなくなつた夜行汽車が非常の勢で、進んで來る。ハッと思ふと同時に憐れ、ピ、、、、、私は夢中で駈出した。

評　いさゝか際どい處なれ共

○春愁　常陸　鈴木花香

パッと夕日が、斜に庭の植込みに射し込んで、たゞさへ靜かな逝く春の庭が一層ひつそりとな

つた。こと〴〵く散り盡くした櫻の木に、色褪せた花瓣が未だ一片二片殘つて居たが、柔らかさうな若葉の際からハラ〳〵と散るのを眺めてゐると、私は云ひ知れぬ悲しさが胸にせまつて……、熱い〳〵涙がホロリ……着物の銘仙の縞をかすめて樣に印した。

○向日葵と朝顔　徳島縣　中村たまの

藹々した梅雨の期が過ると、森や林の木々は皆甦つた樣に綠の色に包まれた。野には草が靑くはびこつて、葉末に宿つた露の玉が朝日を受てキラ〳〵光つてゐる。向の堤下の窪地には美しい向日葵が一面に咲てそれが勢の好い午前の太陽を正面に浴び乍らくる〳〵眩いてゐる。其横に咲た朝顔はもう力なう萎れ掛つてゐた。

○藻の花　名古屋　胡蝶

流れに足ごと水につけて根の白いふさ〳〵とした芹を洗うて居ると、小さい魚が石の下からツーと出た、チャポツと手を入れるとツーと又石の下へかくれる、白い藻の花が風にゆられて小さい波を立て居る。やはらかい水が足や手をさら〳〵とくゞつて行く。

○春の夕　兵庫　壽賀子

一里程山手へ移宅してから心淋しく何だか陰氣である。夕方何氣なく門を出ると靜に風が吹いて居る。元居た村のあたりには白い煙が布を引いた樣に靉靆いて居る。姉さんの樣に思うて居た春子さんは今頃夕飯後の散歩をしながら何思うて居られるだらう。私も行たくなつた。

○初夏の曉　兵庫　紅雀女

五つ六つの星が淡く池に映つて、若葉の床しい香がする。冷やりした風が池の上をスーと渡ると、弟の拵らへた笹舟が靜かに小波と共に、ユラ〳〵と彼方の岸へ行き此方の岩に漂うて居る卯の花がチラ〳〵と散つて水に浮んだ、と緋鯉が大きな口を開けてパツと飲んで暫くして又吐出した。もう星影は見えない。

○どの方もなつかしい　牛込　平塚白百合

誌友小集の事で靑山の醉茗先生のお宅へ伺ふ時であつた。外濠線をすてて赤坂見付の廣場に立つた。老人も若い人も男も女も澤山待つてゐるもしやこの中に今日やつぱり醉茗先生のお宅へ呼ばれてゐらつしやる方がゐらつしやりはしないかしら。こう私は思つて何の人の顔も若い方のはなつかしくつて後姿迄もシミ〴〵と見入つた。

○お師匠樣の宅　山口　都志子

鐵瓶の音滾る四疊半に眉毛の長い福相のお師匠樣は金平糖をつまんでは煎茶をスーと召上る、私は緋桃に鋏の音パチッ――とどこやらで鶯がしきりと鳴くあら又梭の音がかすかにしだした

○未亡人　秋田市　清瀨子

千草がつめたい霜にまけて枯れてしまつても、唯菊ばかりが美しく咲いて居る。其の、何となく、氣高い處は恰度、未亡人が、夫のあとをたてて子供を教育し、操を守つて一生を、寂しく送るのに似て居る樣だ。

○古井戸　伊豫　躑躅

木一本ない野原の中央にある此古井戸何方向から吹く風も圍がないので靑葉枯葉を吹き込んでくる。自然に作られた小路を今日も亦病院守が古釣瓶さげてとぼ〳〵と……ふと井戸を覗くと靑黑色をした雜草がのび〳〵して僅に水面が見える中に髮亂した少女が。私は首ちゞめた、病院守は後にニヤリとした。

○菜畠　香川縣　大平マサノ

うら〳〵と照る日の中を今年九つになる妹は赤いリボンの附いた麥稈帽子を被つて私の前に立つてさつさと歩く靑い麥畠の中に霜除けの赤い一筋の要繩が立つてゐるだら〳〵坂を下ると一面の菜畠で春風がスーと大波を漲らせたとたんに一羽の白い蝶が後になり先になり飛んで行く何處からかピーと麥笛が聞こえる。

○うそのやうな　栃木　しのぶ子

『花』とか『人』とか『母』とか云ふやうな言をくり返し〳〵考へるのが私の癖。いつも、花なら花、といふ一つの言を口の中でくり返し乍らジーッと考へてゐると、なんだか、うそのやうな妙な氣がして、こんな事もあつたのかしら。とさう思ひます。

○妙な癖　在納　むらさめ子

私には妙な癖があつて困りますの、過日も父様が紬を一反買つていらしつて、あんまり高かつたから直切つてきたと仰言る。私は直切る直切る、と何の氣もなく口中で繰返してゐる中に、不圖此語はもとから私の知つてゐた語かしらと思つたり、他人にこんな語云つても通じるかしらと思つたりしましたの。時々こうなんですよ。

○何故か知ら　筑前　四手紫流

道子樣とのお話中には、きつと敏樣のおうはさが出ます。と私の胸の血は湧きかへり顔は熱して友と瞳を合はすに忍びません。道子樣がおほめ遊ばすと、何とも知れぬ不安を覺えて敏樣の缺點ばかり並べるのが、私の常でございます。何故でせう。

○梟　伊豆　鈴木矢壽子

乳を吸ひ乍ら母に抱かれて裏山で鳴く梟の聞を聞いた時私はさびしくてなりませんでした。（あれなあに）ときくと（あれはね、目の丸い、泣く子を食ふ鳥）と母が言ふ。天狗樣に羽をつけたのだらうと想像して私はすゝり泣きさえやめて寢につくのでした。

○春の日　備中　馬越昌子

鐙鐙だと云ふ小山は朝からの好天氣で人山を築いた、私は人の少ない小高い見晴しに腰を下した陽炎が燃て花曇した暖い日、菜の花徑をうねり〱と人浪打つて見物人が續く。若者の掛聲ずる處には黄色の焔が立つ遠山の峡に白く南海が見えて床しき日。

○動搖　常陸　木村那賀子

逢雄樣の所へ紅葉全集を借りにやつたら、恒子樣に貸してあつたと云ふのを態々取つて來て貸して下すつた。頁を繰ると中からひら〱と紙切が舞ひ出た、見ると紫インキで「君思へば庭の白菊しぼむぞよ」と書いてある。文は確に恒子樣だが筆は逢雄樣に違ひない、私の心の波は急に騷ぎ出した。

○草摘みやめて　茨城　岡田きよ子

蒼い芝生に身を横たへて、ふわり〱と流れてゆく白い浮雲を眺めてゐたが、塵埃ひとつ見えぬ青い空のずつとの奥の方に白い少さな鳥が二つ飛んでゆくのを見つけた。だん〱よく見つめてゐるとその奥の奥のずつとの奥の方には天女が居るやうに思はれた。

○女の雜誌と女の髮　下谷　花一輪

多くある女の雜誌の二三を、人にたとへて見ようなら、婦人世界は赤いてがらの、丸まげに結つた若奥樣、女學世界は、文金の高島田で、やさしい御孃樣、そして女子文壇は、夢二の畫にある樣なひさし髮の女學生式、私はこれが一番好き！

○夜　神戸　花舟

床にはいつてうつ〱してると十一時が打つたふと文壇社とはどんな所かしら……日本建か……西洋建か……どつちにしても美しい所だろう其處で先生が忙がしさうに集まつた原稿を知らべてお出なさる……等と考へてると遠くで……「うどーん」と消え入る樣な細い聲が。

○拔髮　秋田　園子

束髮を解いてパールをつけ、丁度腫物に手を掛ける思ひでそろ〱梳き始ると、オヤ又此髮の拔ること〱。今更喫驚して掘つて見る、最う去年の半分しかなくなつた樣。まだ子供も產ない内私の春は行つて仕舞ふのかと、拔髮の上に涙がはら〱と……。

○私のスケッチ　小石川　田村波津子

池の汀にある、柳が青々と芽をふき出して風になびいて居る、私は一つやさしい風情をスケッチして見やうと、鉛筆取れば又も春風吹いてきて、どうしても書き初められぬ。

○春の宵　横濱　みどり子

兄樣はお室で書ものに餘念がない、姉樣下は町へ買物に行つた、ひとり火鉢に肘突いて障子のさんを數へて居ると何だか目が自然とついていい氣持になつてきた、頭上の柱計が九時を報じた、横丁の角のお師匠樣の所から賑やかな三味線の音が聞える、お隣で何か話ながらハ〻〻と賑やかな笑聲。陽氣な春らしい宵である。



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）

蕃人の鰐射る弓や青嵐　伊豆 鈴木矢壽子

○（地賞）

麥踏のよそめに遠し凧　島根 長崎君子

○（人賞）

一騎落ちて一騎追ひゆく霞かな　伯耆 かほよ子

【秀逸】

鐘撞けば京洛中の花の雨　麴町 牧野峽川

朝不二の寒からぬ頃や櫻花　上野 富澤きく子

ゆく春や想出多き古鏡　伯耆 足立春子

春雨や晝もおぼろの人の夢　沼津 島田若綠

猫ありて鼠追ひ出す寒さかな　麻布 石井爵美江

繪日傘を伊達にさしけり花のかげ　岐阜市 蔦の葉

春風にあほつ配所の灯かな　伊賀 平岡きん子

城跡に散る花惜む人も無き　京都市 町田てる

春雨や素足の人の美しき　淺草 藤波

明け放つ峠の茶屋や夏の月　遠江 富永雪子

春の空君が晴着の袖に似て　能登 勝田清瀬子

蝶二ツもつれて高し春の風　京都府 草花

春の月春の水皆朧なり　福岡縣 仲道靜江

琴の會すみての茶事や春日影　長野市 早田とよ子

旭のもれて谷間に紅きつゝじ哉　北海道 安達けい子

皷うつ名妓二人や花吹雪　霞子

蟹行の石碑も古りて春の草　三島 幽喜

耳搔けばねむくなりける春日哉　京都市 要司村福子

雨にぬれて花の名所をめぐりけり　下關市 山田美枝

奉納の髮ゆらぐなり朧月　下關市 早野清子

江の島や榮螺の殼に春の雨　千葉縣 松ヶ枝浪江

磯くさき人のもどるや春の月　大阪 春の日

搦手の櫻追手の柳かな　小石川 加藤つる子

名月や川床にさす潮がしら　筑前 榎松子

春長閑欠伸三つ四つ五つ哉　加賀 田中白百合

海棠の花の曇りや海の音　大分縣 安東笑雪子

炎天や干からびて落つ蝸牛　新潟市 水澤榮子

蓮の葉に水おもしろく動きける　新潟市　水澤黒き蝶
夜人の渡る淺瀨や朧月　和泉　金田文子
燒き捨てし反古も戀しき日永哉　丹後　高田よし枝
韓の野に日本の村や初櫻　奈良縣　中富よしみ
朧夜の港に唄を賣る子哉　府下　隅川あや子
山吹や鳥浮く池の水淺し　兵庫　紅雀女
鶯がなくや谷間の松の木に　信濃　下枝よし子
破れ垣のすきまに赤し桃の花　東濃　桃花
舟唄の消えゆく方や月おぼろ　大阪　日高とよ
春の日の絹を練るなる竈かな　島根縣　森千代子
順禮の聲の長さよ春日和　讚岐　綠葉子
牛小屋に女も立て夏の月　越後　金塚美代子
菫つむ少女愛らし蝶々髷　千葉縣　藤多まさ子
春月や門なる松の間より　千葉縣　佐久間和子
五戶の村十戶の村やうす霞　常陸　喜惠子
春の雨花屋の庭の花散りぬ　三河　淺井浪越子
落る日や蝶迷ふ野の露しげき　麴町　常世草
さみだれや繪を書き添ふる古日記　東京　花風子
月涼し潮來もどりのかゝり舟　千葉縣　岩澤周子
朝露や草の中なる忘れ鎌　三島　豐村
君と共に渡る流れや春寒し　三島　村瀨常月
曉の雨に蜆を賣りにけり　和歌山縣　木澤てる子
棧橋の荷揚げ埃や春の風　長野縣　石上照子
藍匂ふ傘をさしけり春の雨　長崎市　茂枝
綠蔭に螢追ふ子の顏白し　佐渡郡　古藤英子
顧りつ顧りつ見る櫻哉　德島縣　堤芳野
春雨に傘の中なる小唄かな　京城　中尾艷子
曳舟も夕べとなりぬかへる雁　羽後　三浦ふみ子
渡し場の舟ゆれて浪の上り鮎　土佐　保楮
石きざむ音に春日のくれんとす　京都市　三宅壽賀子
はるがすみ伯母の許まで一走り　廣島縣　梢月

蘇鐵やゝ黑みかゝりてほとゝぎす　高知縣　奏頂女
散る櫻雨手に受けし少女哉　栃木　はるよ
雛の灯や話す竹取物語　越後　藤原鍋女
つゝじ咲くや御所の跡なる丘一つ　同　藤原竹子
小燕の見えつかくれつ柳かな　神田　竹橋新子
花嫁を見る人垣や春の宵　神田　中島長子
八重櫻今日も散りしく御園かな　丹後　壺內八重櫻
花に意を得て踊りけり髭奴　德島縣　山內千代子
若葉せる神路の山や犬の聲　大阪　みどり
戞然と錫杖ひゞく春の里　大阪市　向井白露女
夏の日を橇で運べる氷かな　米澤市　相田とみ子
四條行く舞子姿や春の月　飯田町　菜の花
夕ばれに小鮎飛ぶなる流れ哉　越後　芝武子
病める身の思出もなし朧月　大阪　金田代志子
麥の風牧の小雨をさそひけり　備中　馬越昌子
榾火にも馴れて懶し五月雨　伊豆　土屋みき子
眺望のよき頂や春の草　三重縣　後藤たい子
春近く大野の日足煙りけり　山口縣　椰頁みな子
嫁く姉と別れを惜むおぼろ哉　大阪　愛花
日長く牛追ふ川の柳かな　土佐　嶺女
我が嘗て挿しゝ柳や窓の月　福井　片山里
笛吹いて歸る戶口や夏の月　麴町　牧野はん子
蝶の飛ふ方を春日の行方哉　同　銀杏庵
朝露をかいくゞりゆく燕かな　同　嵐水
若葉陰牛ひく女の小唄して　秋田縣　秋葉たつた
峠來て見ゆる我家の幟かな　同　大越のぶ子
風薰る寺や木魚の音遠し　同　小原せき
鎧を鑄るほのほの上や山櫻　四谷　味方てい子
詩に瘠せて春の寒さを寢たりけり　千葉縣　小川浪子
落椿寂光院の古井哉　福井縣　貞子
雛つれて鷄も渡りぬ春の川　千葉縣　藤田芳枝子

愛誦錄

（餘興）

○新らしき詩歌（天賞）

鳥取　安木春子

遂に新しき詩歌の時は來りぬ。そは美しき曙の如くなりき。或者は古の豫言者の如く叫び、或者は西の詩人の如くによばはり、いづれも明光の新聲と空想とに醉へるが如くなりき。うら若き想像は永き眠りより覺めて民俗の言葉を飾れり。傳説は再びよみがへれり、自然は再び新しき色をおびぬ。明光はまのあたりなる生と死とを照せり。過去の壯大と衰頽とを照せり。新しきうた人の群の多くは穆實たる青年なりき。その藝術は幼稚なりき。不完全なりき。されどまた僞りも飾りもなかりき。青春の命は彼等の口唇にあふれ、感激の涙は彼等の頰をつたひしなり。（『藤村詩集』序文）

○憎きもの（地賞）

福井縣　片山里

急ぐ事ある折に長言するまらうど、あなづらはしき人ならば「後に」など言ひても追ひやりつべけれども、さすがに心恥づかしき人、いと憎し。硯に髪の入りて磨られたる、又、墨の中に石籠りてきしきしときしみたる、俄に煩ふ人のあるに、驗者求むるに、例ある所には在らで、外に在る、尋ねありく程に、待遠に久しきを、辛うじて待ちつけて悦びながら加持せさするに、此の頃、物のけに、こうじけるにや、居るまゝに、即ちねぶり聲になりたる、いと憎し。なんでう事なき人の、すずろに、えがちに、物いたういひたる。（清少納言『枕の草紙』より）

○七本櫻（人賞）

葛の葉

私は新體詩が好きですから、愛誦錄となら矢張りそちらでなくちやないのです、とりわけ夜雨先生の七本櫻が大好です、「筑波に來れ紫は袂にしぼる色のみか」、あの邊が好でく勝手ながら琴にものせました程で、叱れたりした時あれを唄ふとすーつと消えてしまひまして、悲しい夜など唄ふと涙が出ます、手帳の

はしに七本櫻を書いといちや、誰にでも好いだらうくと見せます、如何なときにでもこれを出しては唄ひますと心も晴れますし、ほんとに私の精神を慰めるのです。

【秀逸】

○相模灘の落日

羽前　あらゝぎ

かゝる風の夕に、落日を見るの身は、恰も大聖の臨終に侍するの感あり、壯嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて、肉融け靈獨り端然として永遠の涙に汶む。喜といはむは過ぎ、哀といはむは未だ及ばず。

已にして日愈々落ちて、伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちにして、印度藍色に變ず。唯富士の嶺のみ獨によつて紫上更に、金光を帶ぶのみ。伊豆の山已に落日を銜み初めぬ。日一分を落つれば海に浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば顧み勝に悠々として落ちゆく。已にして殘一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり線瘠せて點となり、――忽ちにして無し。

眼を上ぐれば、世界に日なし。光消えて海も山も蒼然として褪ふ。日は入りぬ、然も餘光の忽ち箭の如く上射し、西空金よりも黄なるを見ずや。（德富蘆花『自然と人生』より）

○紀の路

大阪　辻本つゆ

由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ舟の梶をたへ、浦の濱ゆふ幾重とも、しらぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌、吹上を外に見て、月にみがける玉津島、光りも今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習ひなるに、雨をふくめる漁村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王寺に着きたまふ（『太平記』紀の路之一節より）

○山中の森

岡山縣　柴田溪泉

次第くに分け登れば、力なき日はいつしか光り薄れて時雨空の雲の往來定めなく、後山晴るゝ歟と見れば前山忽ちに曇り、嵐に馳られ霧に遮へられて、九折なる岨を傳ひ、過ぎ來し方さへ失ふ頃、前途の路もおぼつかなきまで黑みわたれる森に入るに、樅栢の大樹は枝を交はし葉を重ねて、杖持てる我が手首をも青むるばかり茂り合ひ、梢に懸れる松蘿は鬖々として靜かに垂れ、雨降るとしはなけれども空翠滴つて葉末より滴る露の冷やかに、衣の袖も立ち迷へる水氣に濕りて濡れたる如し。（幸田露伴『二日物語』より）

○道行

月島　京子

信濃　とし子

此の世の名殘り夜も名殘り、死に行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそあはれなれ、あれ數ふれば曉の、七ツの時が六ツなりて、殘る一ツが今生の、鐘の響きの聞き納め、寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見上ぐれば、雲心なき水の音、北斗は冴えて影映る、星の妹背の天の川、梅田の橋を鵲の、橋と契りて何時までも、我と和女は夫婦星、必ず添ふと縋り寄り、二人が中に降る涙、河の水嵩も増るべし。（近松『曾根崎心中』より）

○落花の雪

越後　木村うた子

落花の雪に踏みまよふ、片野の春の櫻がり、紅葉の錦着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも、旅寢となれば物憂きに、恩愛のちぎり淺からぬ、我が故鄕の妻子をば、行くへも知らずおもひおき、年久しくも住み慣れし、けふ九重の帝都をば、今を限りとかへりみて、思はぬ旅に出で給ふ、心のうちぞあはれなる、うきをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路をうちでの濱、沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮きしづみ、駒もとゞろとふみ鳴らす、勢多の長橋うち渡り、行き交ふ人にあふみ路や、世をうねの野になくたづも、子を思ふかとあはれなり。（『太平記』俊基朝臣東下り）

○汐汲

三河　淺井浪越子

面白や、馴れても須磨の夕まぐれ、海人の呼聲かすかにて、沖に小さき漁りの舟の、影かすかなる月の顔、假りの姿や友千鳥、野分汐風いづれもげに、かかるところの秋なりけり、あら心すごの夜すがらやな、いざ〳〵汐を汲まんとて、汀に滿干の汐衣の、袖を結んで肩にかけ、汐汲むためとは思へども、よしそれとても女車、よせてはかへる潟をみな、蘆邊の田鶴こそは立ちさわげ、四方の嵐も音添へて、夜寒に向へどすごさん、更けゆく月こそさやかなれ、汲むは影なれや、燒く鹽煙こゝろせよ、さのみなど海人の憂き秋のみを過さん、松島や小島の海士の月にだに影を汲むこそ心あれ（謠曲『松風』より）

○アヌンチヤタの遺書

伊勢　露木雅子

文して戀しき懷かしきアントニオの君に申上らし。今宵はゆくりなくも、おん目に掛り候ひぬ、再びおん目にかゝり候ひぬ。こは久しき程の願にて又此の願の叶はん折をいと恐ろしくおもひしも、久しき程の事にて候ふ。譬へば死をば幸を齎すものぞと知りつゝも、死の到來すべき瞬間をば、限なく恐ろしく思ふが如くなるべく候。（鷗外『即興詩人』下巻より）

○苦痛と休息

水口鈴蘭

嗚呼如何なれば萬象は、なやみをすてて休息を、たのしむ頃ゝ我等のみ、重き苦みのがれ得で、たえぬ悶に身も消ゆる、あらゆるものに休息あり、など靈長の我等のみ、鬱々として苦みつゝ、永久のなげきをするやらん、一つの憂愁去り行けば、又新なる憂愁に、やむときもなくしづみつゝ、翼たゝまず永久に、さまよひめぐりやまざれば、聖きうまゐの慰安の、尊く靈しき妙香に、額をひたすこともなく「世にこゝろゆくものとては、たゞ靜安のほかぞなき」かくと心の奥深く、うたふ聲さへ耳にせず、嗚萬物の靈長と、神が創造りし我等のみ、如何なればかく苦みの、つらきなやみはするやらん」（天弦譯『テニソンの詩』唱和の二より）

○忠度

佐渡　古藤英子

年來申し承り候ひし後は疎にも思ひまゐらすことは候はねどもこの兩三年は京都のさわぎ國々の亂偏に當家の身の上にて候ふ間疎略を存ぜずとは申しながら常にはまゐりよることも候はず抑々勅撰のあるべき由承り候ひしに世のみだれ出で來候ひてその沙汰なく候ふ一身のなげきと存ずるに候ふ君既に都を出でさせ給ふ上は今は野邊に屍を晒さむずるより外は候はずもし世鎭りて後勅撰の沙汰候はゞこの中にさりぬべきもの候はゞ一首なりとも御恩を蒙り草の蔭にても嬉しと思ひ奉り候はゞ遠き御守とこそなり參らせ候はむずれ（『高等女子讀本』の巻七の二、一、平忠度と藤原俊成と云ふ所より）

○老漁夫

大阪　上岡清子

私は取る年ぢや。これが永のお別れになるかも知んねえ。と岩の如き身を泣崩しける哀れさに、押して再會を約しけるが、汽車既に發するに彼なほ去らず、走り來りて、旦那樣よまめで御座れよう。と其聲今あるが如し、櫓聲微かに聞くに堪へず。急に船を漕戻さして宿に歸る。老漁なほ念頭を去らず、酒を飮んで愁を消すに愁更に長し。あゝ彼一介の舟師ながら、深き所縁もなき我を動かす事斯の如き、一片の衷情或時菩薩の如きものあつて存せりき。原頭人日に墳墓を築く。彼なほ健かなりや。去年沼津に赴きける時は事多くして行くを果さず、今度こそは彼が家を叩きて、笑ふ時は赤兒の如く、奮ふ時は野牛の如き彼に再び遇はんかな。と盃を捨てて眠る、夢は我を彼の浦に載せざりき（眉山『ふところ日記』第四より）

○浦島

大阪　みどり

月晴れ渡る夜々に、不思議や千尋と隔てたる、八千重の波の彼方より、微かに聞ゆる海人の歌。聽く波に咽びては、怨咽として怨むが如く、遠のく波を潛りては、悠々として憧狂るゝ、凄慘たる肉の聲、斷えぐなりや腸も。今ぞ始めて哀れさを、身にしる雨の故山邊、頻りに戀し近親人、いや懷しき父母を偲ぶに餘る…………。是非もなや、今更に、留めんことも中々に、長き別れとなるとても、蓬萊の契り永久に、我が影忘れ給ふなよ。げに恩愛は人の世を、維ぐ玉

の緒よればうみ、合はねばくるし、かにかくに、結ぼれ解けぬ亂れ絲、そも何時の日か絕つべき。（逍遙『浦島』より）

○信　乃　名古屋　和　子

さる程に信乃は臥房に入りしかど曉るを待てばいもねられず獨りつくぐ久後を思ふものから身ひとつを誰はとがめねど父母の墳墓に今ぞ遠離る里の名殘のいと惜しき心は同じ眞砂路の濱路は臥房を脫出て竭ぬ恨みをいふ由も納戶の𨶒は兩親の目さめぬ程にと心のみせかれて逢ぬかたにさえ猶憚りの閾の戶の音たてさせじと閾踏む膝は戰へて定めなき浮世と思へば形なく悲しくつらく恨めしき濱路は何等の所要ありて更闌たるに臥もせてこゝへは迷ひ來給ひし瓜田には沓を容ず李下に冠を正さずといふ諺あるを知らずやと咎むれば恨しげに淚を拂うて頭を擧何しに來つると外々しくいはるゝまでに形なき日來はともかくもあれ今宵限の別れぞと告げ知らせ給ふともおん身の恥にはなるまじきに出て行く迄も知ず貌に只一と言の捨言葉かけ給はぬは情なし（『八犬傳』より）

○詹々錄　千葉縣　藤田　かつ

年はなかばを過ぎて野に秋風わたる。あせべき色は漸くあせて、常綠樹の色のみ黑くなりまさり、零つべき葉は漸く零ちて、檐打つ雨の音悲し。あはれ何處の蝶ぞ、やがては來べき身の果てを、寄すべき花は無しと知らずや。寂しき哉、秋の色や。澄み渡れる大空に、鳥は翼を收めて高く翔らず。蕭殺の氣は天地に充ちて、萬づのもの、其の呼吸に痛みあるを覺えぬ。是れ詩人の泣くべき時、哲學者の考ふべき時、宗教家の悟るべき時、志士の義憤を漏らすべき時、凡ての人が自己の濁情を洗ぎて。自然の洗禮を受くべき時。秋は悲みあり、されどもまた大いなる慰藉と敎訓とあり。（『樗牛全集』第五卷より）

○俥　長野縣　宮坂　明子

「お母さん、今行くのは私のお葬？」

幌の中より不意に問ふ聲せり。

母は忌はしとやうに眉を蹙めて、

「何だよ！宮さん、緣起でも無い。あれは餘所の人のお葬ですよ」

「でも……私は何處に行くの？」

「是れから貫一さんの家に行くのぢゃ無いかね。」

「然う嬉しい！貫一さん、貫一さん！」

「僕は此處にゐるよ。車屋、さ、行って與れ。」

貫一は車夫を促して、徐ろ又俥を進めて。心狂へる宮の獨り仍呟く聲は幌を洩れつゝ。（『金色夜叉』終篇第十章の二より）

○二　種　しのぶ子

浪子を思ふごとに宛ながら遠き野末の悲歌を聞く如く、一種なつかしき哀を覺えしなり。（『不如歸』より）

しのぶの浦の蜑のみるめも所せく、くらふの山もまもる人しげからんに、わりなく通はん心の色こそ、淺からず、あはれと思ふふしぐの、忘れがたきこともおほからめ、（『徒然草』―二百四十段）

○熱　情　松山　よし　ゑ

天が下に慕へる人は君一人なり、君ひとりの爲めに死ぬるわれを憐れと思へ、陽炎燃ゆる黑髮の長き亂れの土となるとも、胸に彫るランスラットの名は星變る後の世迄も消えじ、愛の炎に染めたる文字の土水の因果を受くる理なしと思へば睫に宿る露の珠に、寫ると見れば碎けたる、君の面影の脆くもあるかな。わが命もしかく脆きを淚あらば濺げ。基督も知る死ぬる迄淸きて女なり。（エレーン）

息絕えて身の暖かなるうち、右の手に此の文を握らせ給へ。手も足も冷え盡したる後、ありとある美しき衣にわれを着飾り給へ、隙間なく黑き布しきつめたる小舟の中にわれを載せ給へ。山に野に白き薔薇、白き百合を採り盡して舟に投げ入れ給へ――舟は流し給へ。（本箱の底の小形の手帖には只これだけ書いてあるばかりです。）

○岸　本　長野　青木みち子

幾度か岸本は橋の上を往つたり來たりした。最後に村の方へ半町ばかり步いて行つて、急にそこで踵を返した。彼の足は浪の音のする方へ向いた。橋の畔から竹籔の樣なところを通り拔けて、小高い砂山のあるところへ出ると、一筋の細道が枯草の中に在つた。所謂濱道だ。それを辿つて海の方へ行く前に、彼は先づ四邊を眺𢌞した。右に墓がある。花など供へた新らしい壇がある。死人に手向けた、水もある。彼はその茶碗を取つて、渴いた咽喉を潤した。それから古い石塔の倒れたのを見付けて、その上に腰をかけて。考へた。（藤村『春』四十一回より）



誌友倶樂部

交際を望む

○公爵邸にて　我が敬愛する諸孃よ。私は此邸内に見習として務むる身です、なにとぞ御交りの程御願ひ致します當邸のヱハガキ若しくは大磯名所ヱハガキにて御禮致しますどうぞねそして御來磯の節は御尋ね下さい御案内致します（神奈川縣大磯、公爵伊藤家内、高橋山子）

○大阪の誌友に相談　當地誌友の諸姉樣其後は何のお障りも御座いませんか、東京の誌友會實に羨しいではありませんか、何と皆樣大阪でも誌友會を開て盛んにしようぢやありませんか、けれど一人では何にかにつけて不自由ですからお心のあるお方は一しよに盡力して頂戴な。（大阪市南區瓦屋町五番丁百十一番屋敷　攺野たけ子）

○千住より　皆樣に御禮申上ます先達て本誌上にて御交際を願ひましたところいろ〳〵と有難い御玉章下さいましたほんとにうれしう存じます皆樣私宅は隅田川荒川などの近くでございます又南千住停車場前ですから御出での節は御立より下さいまし御待ち申して居ります夏の夕涼みなどにはよきところもございます私が御案内致します。（府下南千住　吉田幸子）

○不自由な身　誌友の姉樣方私も此度愛讀者となりました、ふつゝかものですが何卒御交り下さいまし實は私腦を患つてつんぼになつてしまひましたですから學校にも參りません故何事も存じません御友達もありませんし毎日〳〵不具の身を恨んで泣いてばかり居りますの。あはれと思し召してレターおめぐみ下さいな。（東京市四谷新堀江町一高林方　荒木すゞ子）

○カリホルニヤより　誌友の姉樣皆御友達よ何卒末長く御交際をそうしてねー妾し母國の名所舊跡の寫して在ります繪葉書きを何よりなつかしく存じますのよ誰樣に拘らず送つて頂戴な當國の繪葉書きで屹度御禮します若しもねー諸姉の内御好みの御本がありますなら當地發行の新聞を御申越しあれば早速送ります。左樣なら（木村久子　Miss. H. Kimura 1287. San Pedro ST. Losangeles Cal）

○ロンドンにて　皆さまお手紙及び繪はがきありがたう、充分なるお返事が書けないで皆樣に相濟みませんでした、それから中には不足稅の郵便がありました、皆さま今後お送り下さいますやうなら御注意をねがひます。（在英　小野米子、Yone ono 21. Hampstead. Way Garden Suburo V. W. London England

○名古屋の方に　私はまだ當地へ參つて間がないものですから、一人法師で淋しくつてなりません、當地お在住の方で末永くお交り下さらうと云ふお方がございましたらどうぞお遊びに被入て下さい。又文通でもかまひません、さうして折がありましたら、小さな集りでも催したら、樂しみだらうと存じます。（名古屋市東區關鍛治町四丁目四番地田中方　鷹野月盈子、鶴岸つぎ子）

○自筆百人一首を望む　愛讀者の諸姉樣方へ御願ひです、妾は何より百人一首の歌かるたが好ですので妾しが一寸考へましたの・御賛成し

て頂戴、それは御思召の御方々樣は 思々の紙に百人一首の下の句を御書なすつて、妾に御惠み下さいませんか、そして、廣く天下の 諸姉孃樣方の御筆蹟を集めたならば、どのくらゐ趣味が有るか知れないと思ますの、御禮には當地の繪葉書又は雜誌で 致しますからねー、それとも又皆々樣の御望みなればつたない 妾の書たのと、交換でもよろしう 御座いますからね、なにとぞ御實行して頂戴。(上野長野原局下　茂木よしえ子)

○濱松の方に　濱松町に住んで居らるゝ本誌愛讀者、文藝に趣味をもたるゝ柔しい二三のお孃樣、又は若い奥樣に お願ひ致します、私も同町に寄留する者ですが異鄕に知人もなく 誠に淋しく故鄕の事のみ 思ひつゞけて居ます、お互にゆきき致しまして樂しく お交りしたいと存じます、けれど私は人の妻として幼い 一家の主婦ですから餘りとび離れた事は出來ません 只おとなしくしんみりしたお交りを願ひたいと思ひ ます其おつもりでお交り下さる方は 誌上ですぐに町名番地をお知らせ下さいませ、男子の方々のいたづらにこりてますから 私住所はこゝでは失禮致します。(はぎの花)

○裁縫　皆さん私は裁縫が 學びたいのですが田舍の事とてよい師も御座いません 心ある御姉上樣方何卒御導き下さいませそして 姉樣方の內御不用の肘付及び胸あての形紙かひな形が 御座いましたらそれへ裁方と縫ひ方の 說明書を添へて御送り下さいませ 御禮は絹ハンカチーフか郵劵かでいたしますそれから子供の西洋前掛のかくかうのよい樣なのを御敎へ下さい 其他裁縫に關した事なら何んでも敎へて下さい きつと御禮はいたします。(山口縣熊毛郡三輪村　林朝子)

○避暑の時　皆々樣お久しぶりで お座います私は永らく病氣の爲めに皆さんと 樂しい交りも出來ませんで隨分殘念でしたわ、これからは 最う暑くもなりますから それ〴〵方々へ御避暑にお出掛になりませう妾も今年は 是非避暑に行きたいと思つて居りますの、御避暑に お出になる方はどうぞ御一處にネ、又前々相變らず 御手紙の御交換また色々の御交換を致しませうヨ 左樣なら。(東京市麴町區山本町二丁目八增田方　佐藤いつ子)

○生花を愛す　私は東美の山間に 住む者なれば何を樂みとする物もなき故たゞ 生花にのみ心を入れて居ますから皆樣の內で 生花の好の御方はよろしく交りを願ひます。(東濃加茂郡和知村下牧野　日置桃花)

○草花　園藝に深く趣味を御もちの方と 永久御交際(男女にかゝはらず) 尙又當方より西洋草花(主として温室培養もの) の種苗差し上げます から內地ものと御交換も 願ひ度く御座います。左の種類たくさん繁殖してゐますから 御望の方に差し上げます。ベコニヤ(十數種) ゼラニヤム。フクシヤ。カーネーション トラジスカンシヤ。アマリヽス エキシミヤ。オギサリス。プリムラシネンシス。同オブコニカ。ナスターチユーム其他いづれも誌上にて住所氏名御もらし 下さいませさすれば早速御手紙差し上げます。(東京花子)

○長岡市の方に　有志の方、長岡でも 誌友會を開いたら何うです。(長岡市　すゞ子)

○お初に　わたくしも淸子樣のすゝめにて 先月から愛讀者になりました、至て不調法者ですが淸き御交りをして頂戴そしてどし〳〵と 御手紙を被下ませ早速に御返事致します。(山城國向日町驛前　大橋よね子)

○會　靜岡縣の皆々樣方すみれ 會のやうなものを設けては如何です、私は是非とも設けたいと思ひます、鈴木小菊樣こずもす樣 濵邊とよを樣方を始め諸姉上樣是非御贊成を ねがひ度う御ざいます。(濱松　平岩白菊)

○舞子濱より　諸姉上樣私は 播磨舞子の濱に住んで居る一少女ですがいつも 女子文壇が來るを待ち焦れて居るものですが 來ると嬉んで讀んで諸姉上樣の御樣子を知り樂んで居ります 御手紙なり繪はがきなりで御樣子を知らせて 頂戴又寫眞の交換もたのみます。(播磨舞子の濱　常次ちとせ)

○薔薇を愛す　妾は花の內で薔薇の花が 一番好きです皆さんの內で 栽培法御存じの方は敎へて頂戴又俳句や繪葉書や玉章の 御交換を願ひますキット御返事差上げますから。(熊本縣山鹿下町中原二三郎方　香村薫子)

○東京の方に　御なつかしき姉樣方に 御願申上げます私は只今勉强致して居りますが 東京の御方は淸き御交際を御願申上升只今の 學校卒業なせば東京へ行き勉强致すのですから 學校の方なども少も存じません 兄二人と弟一人と東京に居りますが一人の兄と弟とは勉强中です。(仙臺市東四番町十一平岡方　佐藤きみ子)

○ヴアイオリン求む　御同情あつき皆樣私の母は去る一月重い病氣におかされて今によくなりません本もみなあきたとかさぞ淋しい事だらうとは存じますが毎日の事故、私の話のたねもつきはてゝ此頃ではじれて實にこまつて居ります折柄近頃御近所へ御こしになつた御方がいつも夕方になると面白さうにヴアイオリンをおひきになります私も是非一つ欲つたなぐさめはないかと思つた時故、それを得たいと思ますが新しいのより中古の方がよろしいとの事もしも皆樣の御内で御不用の方が御座いましたら御ゆづり下さる事は出來ませんか。（芝區愛宕町三ノ五樋口みよ子）

○欣羨　田舎より本誌愛讀者の姉樣諸子よ妾は本年四月號より兄樣に買うて頂て讀んで居る者ですが姉樣方の淸いやさしい交際して居るのを見ますとうらやましくて見て居られませんわ妾も本誌を永く愛讀するつもりですから不束な妾にも玉章なりとも送つて下さいな返事はきつといたしますし又其の御禮には銚子海岸の名所の繪葉書を送りますわ。是非願ひですよ。（千葉縣海上郡鷄谷村蛇園　川名千代子）

○中古寫眞器　私の手元に二枚掛組立中古寫眞器一臺ございます　この度不用になりましたから附屬品一切付にてお望みの方にお讓り渡したうございますの、又外の珍らしい品物と交換してよろしいとにかく詳しくは返信料を付してお照會下さいませ。（越後關川町　大石孟子）

○不都合　私もある人に寫眞お送り致してもお返事きませんので再びお手紙上げても何とも仰つしやらないのよ　その方はね呉の楠木政子樣って方よ。（讃岐　白萩）

○俳句　德義を重んぜらるゝ御方と交際を致し度うございます、寫眞の交換も宜しいです、繪葉書の交換も希望致します、而し葉書には俳句を一句なりとも御認め下さい、私も拙い句でも書いて御返しは致します大分縣下の御方は特別に御交を御願ひ致します。（大分縣大分郡戸次村八〇五首藤方　鏑木志津子）

○中國の或る御方に　妾何もそんな事云たおぼえはありませんよ　妾の不束な事は知れてますけれどあれはあんまりだわ　妾本當に悲しかつたわ　妾の不束は幾重にもお詫いたしますからあれはお取消し下さいませんかえどふかそうして頂戴ね　お願ひ申ずんだわこと御許しがなかつても決して妾忘るゝ樣な事はありませんわ　永久に妾の胸に殘つてますわねどうか御手紙を頂戴ね妾一日千秋の思ひで待つてますわ。（熊本　香村）

○男子　三月の本誌に詩集や歌集の交換及交際を乞ふ旨を出しました夫は婦人の方で私と同趣味の方にお交りを乞ひ、いさゝかなりとも我プーアな詩想を養ひたいと思つたからです、處が來る葉書や手紙の中で眞實女の方は幾人でしたらう、大半は男子の方、夫も一寸戯れに手紙でもやつて見ようと云つた調子のものばかり、私は呆れて仕舞ひました。夫からお手紙が參つても見る氣に成りません家の人にも恥しい位ゐですから、交際を暫く中止しようと思ひますわざく お手紙を下さつた方に御禮申上ます（大阪市　草村君子）

○再び　昨年御交際申して居た御方には事情あつて一時御手紙も差上げませんでしたがどうぞ惡しからず御赦しの上更めて御交際遊して下さい他の御方もどうか宜しく私は今年某女學校を終へて唯今は我家に居ります。（鹿島縣高田郡可愛村　秋田國枝）

左の皆さんは例に依つて高潔な友誼に於て、一度限りでなく、親しい交際を望まれるとのことです、健全なる方法に於て、思想上の交誼を温められるやう記者に於ても希望します。（記者）

豐後竹田町二〇六	大和　はる
和歌山縣海草郡宮村大字有家 園村楠太郎方	增田　美子
東京深川區富川町三番地	大村　豐子
和歌山縣伊都郡九度山村	木澤　てる子
京都市二條通麩屋町西	町田　てる子
山城乙訓郡久世村	永岡　靜子
同	長岡　清子
同中久世村	大橋　八重子
愛知縣龜崎町	河合　清子
栃木縣下都賀郡寺尾村尻内	石川　たつ子
山梨縣中巨摩郡大井村	大矢　はるゑ
京都市諏訪町通松原下る橋本内	松田　小夜子
京都市出水通土屋町	松木　絹子
東京本所區柳島梅森町	橋本　壽哌女
東京日本橋區本町一ノ十四莊司方	高橋　照子
秋田縣山本郡浦内村	野呂田　とみ子
備中小田郡小田	淺野　俊惠
長野縣北佐久郡北御牧村	黑澤　春子
靜岡縣磐田郡上阿多古村長澤	大城　せい子
香川縣善通寺中通笹崎方裏	大西　彰子

安藝國賀茂郡莊野村　谷川　松枝
千葉日本赤十字千葉支部救護員養成所内　石川　佐久
東京麹町區内幸町一丁目四番地
龜井鏑四郎方　澤村　君子
三重縣一志郡八幡村奥津　小芝かほる

記者と讀者

○下野すみれ、大阪黒浪さんに、一人につき各欄一篇づゝの投稿は差支ありません（記者）○會津、伊勢子さんに、投書家番附は皆さんの手でこしらへて下さいましたら採用するかも知れません、面白ければ——（記者）○安房、伊丹さんに、封書でも結構（記者）○黒澤春子さん、南枝さん、御挨拶は能く拜見しました（記者）○伊豫たけこさんに、和歌だけでも半紙を用ゐて下さい（記者）○千代女さんに、書式はよろしい（記者）○久榮子、ともゑ、たつ子、星華、白浪、澤田はつ子、の皆さんのおはがきは拜見いたしました（記者）○四谷大場百合子さんに、詩のお好きなは結構なことです、お好きなら必ず能くお分りになる時が參ります、努めて多くの人の詩を御らんなさい（記者）

廻狀贊成

忘れな草さんの廻狀說一度紙上にあらはれてからだいぶん贊成者があつたやうですが、本月も亦左の通り贊成者がありました、既に御實行ならお加へ下さいな此の通り贊成者の多い廻狀は既に御實行になつてゐるのでせうか、其經過は本紙上で發表なされては如何でせう、忘れな草さんに注意します。（記者）

熊本縣山鹿下町中原仁三郎樣方　香村　薫子
愛知縣織崎町　河合　清子
大阪市南區瓦屋町五番町百十一番邸　畋野　夢垣
四日市海岸　平尾　鈴子
福岡市　井上　夏子
岡山縣　曉　花子

誌友會餘談

△きのふの星が岡の誌友會に末席をけがしましたひとりでございます、諸先生がたの御かげを拜しかつはさまぐの御催しに心ゆくばかりうれしう存じましたこゝに記者さま始め幹事の勞にあたられました諸姉にあつく御禮申上げます（春子）

△十日には、皆さまに御目にかゝれてほんとにうれしうお座いました、幹事の皆樣にこゝで御禮申し上げます。（京橋　臼井花子）

△誌友會の日には意外の失禮をいたしました、お驚きなさいましたらう私のおてんばには、あとで考へれば考へるほど恥しくなります、小さい胸を苦めて居ります、又開かれる會の時まではお作法でも習つて置きませう、幹事の皆樣方十六日には失禮いたしました、私病氣のため參れませんでしたの、何うぞお暇にはお遊びにいらつして下さいませ、築地下でお降りになれば一町程でございます。（麻布　美子）

△誌友會は初めてと申せも、萬事萬端の不行屆きは何とも申譯が御座いません、全たく經驗が無ので御座いますからどうぞ御許し下さいまし

折角お出で下さつた來賓の先生方には勿論御出席の皆樣にも、面白はなくかへつて失禮のかずかずは申樣もありませんが、惡からず廣い御胸で御見逃し下さいませ中にも對話の不仕末は御侘びの仕方わ御座ひません全たく私共掛りが經驗のたりないので御座いましたから、大勢の幹事の皆樣にまで此の責めをお掛けするのが苦痛でなりません故、恥しさを忍んで遲まきながら申出たので御座います。

御心配は先生方にも幹事の皆樣にもかけましていざとなる迄で都合が惡く唯一回も集りません故、當日迄で下稽古は一度もいたさぬわけなんで御座います。見て堪へられぬ可笑しさは全たくの餘興として笑うて頂きました。恥しうは御座いますが、今は夫れがせめての心やりで御座います、今になりまして何と申しましてもいたし方はありませんが、御目を汚した罪は幾重にも私共が御侘びいたします、どうぞ御許し下さいませ。（早川花子、池田君子、江森美子）

△私はお詫びをいたさねば成りません、四月十日星が岡の誌友會に付き、參ります筈でしたのに思ひがけぬ用事がありましたので、折角樂のしみにしてゐました、誌友會へ參れませんでした。この日誌友の古屋近代樣もお誘ひ下さいましたが、殘念ながらおことわり申ました、あゝ四月十日私はどれほど憧憬てをりましたらう。右の理由で參れませんでした、何卒おゆるし下さいませ、河井先生及び、幹事のみな樣一寸誌上を拜借いたしまして、お詫を申上ます。（淺草向柳原　金田瀞香）

△待ちに待つた誌友會の記事おもしろく拜見、

幹事の皆様お禮申します。山田邦枝様、長曾我部様御遠方をよくこそ、平塚様朝井様、細谷様、其外皆おしたひ申して居る方ばかりどうか御交際下さいな。夜雨先生御病氣をもおして常陸からお見えになられたのほんとにうれしく思ひました御身御大切に祈つて居ります、醉茗先生、與謝野先生、竹久先生其外記者の先生方にあつく御禮致します。(千代香)

△諸先生並に誌友の幹事諸孃星ケ岡にて開會の當日は種々御厄介さまになりました親しく御挨拶申上るつもりでしたれ共々來會いたしました友人が用事の爲歸宅を急ぎましたので失禮いたしました紙上で厚く御禮申上ます。(武州高尾山の麓にて　串田直子)

△東京の皆様誌友會面白かつたでせうねうらやましかつたわ私四月十日はうつ〳〵すんでしまつたの今頃は樂しくなすつて入らつしやるだらうと思つてね遠方なのをうらみましたわけれど誌上で色々の御話をうけたまはつて嬉しう御座ました。(伊豫操子)

夢二様に

如何にのろき舊都の女學生とても現代の空氣を吸うて居る限りは幾らか現代にふれずには居られなかつたのでした。私共は又文學を愛好せずには居られないのです、そしてイムプレッションだのチャームなどの語をいつのまにか好き、いつのまにか口にするやうなりました。それと共に私共はいつも自分等の若きをひそかに誇りました、從つて私共はどんなに夢二式の畫を愛しましたらう、意味深長な若き畫はみんな詩となつてあらはれて居るのですもの、私等は春の巻の序文の「白壁青き銀座の……運命、自由深淵等の……歌を低唱してゐた」といふところをよんで私の小さな心はどんなにをどつたでせう、私の敬愛する一人の友はそのあたりを毎日よむのだと仰る程好きなのです。そして夢二式の女は私共の間に評判になつてやかましい事です、そして「眼の人」とは如何なる人かと語りあはずに居られなかつたのでした、ところがある日夢二様が近日洛陽教會にいらつしやるかもしれないときゝまして、どうかしてお目にかゝりたい、あの意味深長なチャーミングなスケッチをかく若き畫家を見たいものだと皆いつて居りました、此月の女子文壇で夢二様の御寫眞を見る事ができて大喜びでした。然し實をいへばてんな人かと悲觀した(失禮は御ゆるし下さい實際をかくのですから)といふた人もございました。そのあくる日私の親友が昨夜夢二様にあつたといふではありませんか「え!それほんとうの」思はず問ひかへしました、實は其人もあらまし御寫眞によつて知り、其上堀内の清様と歩いてらつしやたからたしかにそれとわかつたのです、そして顏は寫眞のやう悲觀しなくともよいとの事です、ところが又今日私がある友二人比叡山を一室の椽からながめて居りますと、あちらのやぶの道から三四人の友がしきりに私達をよぶのです、で急いで下りて行きますと、友が夢二さんが相國寺で寫生してらつしやるとの事、びつくりしてうら門から飛んで出まして、相國寺へ參りました、前の友は餘り見に行くのがはづかしいからとこちらの方に待つて居て下さいました、で私等二人は路傍の人のやうな顏をして夢二様等のおらしやる側を通りすぎました、夢二様は相國寺で二人の女學生が通つていつたのを御存じでせう、じつとそちらを見て居た一人は實に今この手紙をかきつゝある私でした、私共は夢二様を見たいがために相國寺畔に行つたのでした、然し運命といふものはふしぎでございますね、私はまさか夢二畫集の著者に現在お目にかゝるとは思ひよらなかつたのです、まことに幸ひでございました、おめにかゝる前までは「もしあつたらお辭儀をする」だの「花の巻」を早くだして下さいだというてみようなどと話して笑つて居ました、そしてあつた時思はず「あらつ夢二さんだ!」といつたらどうだらう。そしたらきつと、ふとき京女の印象といふスケッチがでるかも知れないなどと大笑ひでした、それから教室にかへつて夢二さん〳〵と實にやかましうございました、旅の巻は面白いでせうと今から待遠くなりました、それにつけても夢二様はどうして堀内様を御存じでせうかと皆いつて居ました、そして私は何故女生徒があんな時分散歩に來たかとあやしくお思ひになると困ると思ひまして、こゝにその理由をのべるべく拙きペンをとりあげたのでございます(五月五日夜　千夜子)

選評

△例に依て盲評御ゆるし下さいまし、あゝ此女子文壇を手にした時私はほんとにどんな思に誌友會の記事と紀念撮影とを見比べたでせう、時は胸の血潮も湧き返る様な春の日、心をそゝる

樣な柔い温い風吹く日、花咲く日集まつた人等は藝術を愛する燃ゆる樣な青春の女性まあどんなにか華やかだつたでせう、幹事方の御筆に成つた其時の若い華やかな美しい情の脈打つて流れてゐる記事をくりかへして私も紫に燃えてる樣な其時の空氣にふれた樣な心地がいたしました、委しい記事で矢張り私も華やかな多くの方にお目にかゝつた樣な心地がいたしました、遠く離れてゐましてはもう これで澤山です、又次會、空高く澄んで紅葉散りしく秋の日に再び開かれんことを熱望いたします。

本欄——產、大野と云ひ富子、藤子と云ひよくスバルで拜見するお作と同じ系統——と申すも可笑しうございますが——の樣に思はれます、私はいつでも此方のお作を拜見する度に奧樣御自身の事を其まゝ御筆にあそばしておいでの樣な氣がいたします、こんな事申すは失禮ですが恐る〳〵引いた長い線にみえるチリ〳〵としたゆがみ丁度あれのやうな物が御作の何處かに幽に顯ゐてる樣な心地がいたします、強い力のあるお作では無い、優しい女らしいお作だと思ひます、此產では私は富子の苦しむ樣が忘れられない樣に胸に殘つてゐます。女の中へ——其中に戀しい女もゐるのにねえ、が利いてる樣に思ひます。

投書欄——短篇小說、反抗——つかまへ處がなかく氣が利いてると思ひます、足の指——ほんとにすら〳〵と、でも欲つてる樣な御作と思ひます、讀んで淡いけれど二度と讀まうとも思はず後へ殘らないスーと讀んでスーと拔ける樣に思ひます、冷い女自分では書きなれない幼稚な書く態度を知らないで、立つたり座つたりイラ〳〵して書いた樣な物だと思ひます、實際そうですけれど、詩——氷の上、初めと中頃が好きです、云ふに云はれぬ引きつける樣な情が籠つてゐると思ひます、散文——電車まで——思つたまゝ其まゝを表はした、確な健全な御筆と思ひます、日記——內藤千代子さんの日記のうち此方は始終女學世界で御目にかゝる振つてる方です、華やかな、パッとした御作が御得意の樣ですね、私はもつと三月の樣な、軟かな淡い情緒の搖いてゐる作が好きです、最後の音——短文——淡い哀愁の籠つた「おさよさんの最後の音でした」でキチンと引しまつてみえます、春宵——別れた春がなつかしうございますね、終りですが今月矢野きみ子樣の御作がみえませんのね何樣遊ばしたでせう、私はきみ子樣が何となくお懷しうございます、きみ子樣はきつと御作に表れる性格の樣な優しい瞹昧のある方の樣に私は想はれます、短評なさる態度も私はきみ子樣が一番好きです、お年は廿年以上の方ぢやあないかしら、私が藤村先生のお作を拜見して起るなつかしみといふやうな心が、幽かですがきみ子樣のお作を拜見した時起ります、再びお尋ねいたします。

若しや御病氣ではありませんか！短篇欄でもどうかお振ひ下さいまし、さよなら。盲評多謝

（土佐にて　桃の花）

讀みたい書物
持つてゐる書物

○和歌入門其他　皆樣方のうちに藤村氏の春藤村集。葉舟氏の微温、響。花袋氏の田舍教師妻。荷風氏のあめりか物語。中村氏の星湖集。二葉亭氏の血笑記。ゴーリキイ集。露風氏の淋しき曙、廢園。白秋氏の邪宗門等其他新らしいものゝ御不用がございますれば私方の薰園氏の和歌入門、我おもひ。桂月氏の花もみぢ、黃菊白菊。晩翠氏の天地有情。大和田氏の雪月花、袖珍實用作文寶典。花袋氏の美文作法。天隨氏の檜木笠。醉夢氏の美辭寶典。落合氏の中等教育日本文典。其他俳家成美集、作文資料、雨絲風片、近松淨瑠璃三種、硯の海、女子文のはやし、婦人消息文、昨年八九月頃より本年三月までの女學世界などと御交換して下さいませんかもし御交換下さいますれば何卒御一報下さいませ。（愛媛縣南宇和郡城邊村　山口たけ）

○紅葉全集其他　紅葉全集一の卷あり、三四と交換を乞ふ、一九全集、奇拔、仇と仇（前）、英文小說三千里、愛らしき妻、新婚旅行、その前夜など交換したし、俗語字海の不用もあり。（長野縣上高井郡須坂勝長寺內　市川由光）

○新作家其他　私の手元に本誌增刊、新作家文壇の光、新美文及本年一月號あり、文藝倶樂部又は面白き新小說と交換致して下さい、必ず御送りします。（加賀國能美郡遊泉寺銅山社宅田中德子）

○不言不語其他　諸孃樣の中で源氏物語梗概寄生木、妻、自ら欺かざる記、青春、歌集や詩

集など御座いましたなら私の濱子、初姿、不言不語、其他新聞切りぬきの心の波、空中の八、霧がくれの舟、牧師の家、田園の巻など澤山ありますがどうか御交換下さいませんか、それに女學世界增刊のマダム振り、嫁に行く人御送り下さる方には私の雜誌五十六冊の中お望のもの何冊なりともお送りいたします。(常陸國筑波郡北條町　花香)

○曲譜拜見　離れ小島の曲譜持ち合せの方は御座いますまいか暫く拜借致し度く御座いますの寫しますれば繪葉書を添へてすぐお返しいたしますまた趣味ある繪葉がきの御交換も遊して下さいませ。(神田佐柄水町荒井方　雪野ますゐ)

○みだれ髮其他　皆樣の御内に魔風戀風、思出の記强き戀慝無情、はんもん、少女の戀、わがおもひ、女夫波、その他いゝ詩集御もちの方は何卒御かし下さいませんか。私の方には悲ゲキ詩パリシナ及びみだれがみ、まひめ其他女學世界婦人世界の御本が澤山ございます。(兵庫縣武庫郡住吉村濱新田　森田きよ子)

○本誌　讀者諸孃の内に、本誌二巻の二號 三巻の九號、四巻の三號、御不用の方は失禮ですが、あまり破れぬ汚れぬのを、至急御送り下さいな然しお悪ぐみ下さる方は一應下名迄御手紙下さい、御禮は雜誌エハガキ、其相他當の物に必らず〱致します。(新潟縣南蒲原井戸場村山田萩野子)

○紅葉全集其他　誌友の諸の姉樣 妾の手許に紅葉全書四金色夜叉不如歸 青春全春潮寒潮夏子畫子全魔風戀風三コブシ 乳姉妹良人自白夫人自白戀と戀みだれ髮ハイカラ令孃 外澤山不用ですから此小說皆樣の手製のシヲリヒヂツキハンカチなどと御交換致します申てみ下されば貸しましよう三錢切手を送り下さい。(大和山邊朝和奈賀柄二百十一番地　山崎野菊子)

○皆樣のおうちに島野樣禮法折物御持ちの方は御送り下さいまし。御禮はきつと致します。(福岡縣鞍手郡君宮村八幡神社側 七百三十二番地古田)○只今手許に「家庭百話」「獨笑珍話」「家庭布教其他」「女學世界」「婦人世界」「少年界」「少女界」「少女世界」「女子文壇」澤山有りますから皆樣の内に此外の小說雜誌ならなんぼ古くてもかまいませんから御送り下さい。(山城國乙訓郡久世村向日町郵便局下　長岡せい子) ○私の宅に少女世界、女學世界、女子文壇、婦人界、婦人世界、少女の友等澤山有ります家庭小說品子、後の不如歸等にも有ります御聲がかゝつた方に御送り申します。(備前國八濱町大字片原町板崎好枝) ○いとしき誌友の皆樣妾は女學校二年に通學致し居りますが寫眞や御手紙の御交際を願ひます下野の方御手紙下さいまし、又小說には種々面白いのが御座いますが何卒御交換を御願ひ申ます。(栃木縣下都賀郡寺尾村尻内　福富きん子) ○諸姉樣ハンカチーフ、繪葉書、日本歷史畫譚アミモノ、御送り下さいました方には必ず持ち合せのもので、相當の御禮致します。(備後神石郡木津和村、近藤たつ子) ○誌友の皆樣どうか今年の女學世界の增刊か面白い小說を送つて頂戴な御禮として少女世界昨年の九月から今年四月增刊までございますから其中お好みのを幾冊でも差上げます、(山城國乙訓郡久世村上久世風間榮子) ○誌友の皆樣内で近刊の秀才文壇お持の方はおゆづり下さいませんか 此度御禮は致ますわ 又少女の友女學世界婦人世界繪葉書等と交換しても宜敷御座います、(羽前西置賜郡十王村 平眞津子) ○誌友の諸姉樣の内にハイカラ令孃青山全集一葉全集お持ちの方が御座いませんでせうか有りましたら私にゆづつて下さいますか、またはしばらく拜借は出來ますまいか御一報下さいませ。(三重縣安濃郡雲林院村法藏寺方　池田あや子) ○私は不用の書籍が貳百部と新小說が百部餘りがありますから皆樣の内に御持合の書籍と交換して頂戴な成可く上等のを送つて下さつたら相當の書籍を送つてあげます、(兵庫縣津名郡廣石驛林文社内　林光枝子) ○私の手許に女學世界婦人世界 婦女界婦人界文藝俱樂部演藝畫報が有りますから御入用の御方は美くしい繪葉書で申込被下其外兄樣に頂いた文章世界ハガキ文學少年世界なんか有りますから御入用の雜誌を指名して頂戴な、(姫路市西宮田町廿六　大野つき子) ○私の手許に少女世界數冊と冒險世界探檢世界成功等の本がありますから皆樣の魔風戀風乳姉妹寄生木等の本と御とりかへ下さいませんか又左の本の他浩花やヒヂツキ等で御禮致しますから何卒諸姉樣方御願申ます(栃木縣眞岡町荒町四三　中野白葉子) ○皆樣の中に乳姉妹(前後)やどり木、己が罪、美容のしほり、花の姿(婦人畫報臨時)等御持ちの方は誠に恐れ入り舛けれども 暫時拜借さして下さいまし御禮は必ず致し舛 (韓國學梁鐵道官舍山川内 河内たか) ○妾の手許に新文林、ムラサキ、女學世界、日本少年、秀才文壇、文藝俱樂部

中學世界、洋畫々習書、(水彩、サツ筆油畫、ペン畫)ありきす、又、洋畫講義錄の後期半年もありますが皆不用になつて居ります、其他懷中電氣燈、活動寫眞、寫眞器、ラケツト、油畫道具、兩眼鏡、等も不用になつて居りますゆゑ御ゆづり申します私は一日、十五日の休みに畵伯方より實家に歸るのです故、來る十五日までに返信料を添へ御尋ね下さい、又御寫眞は、頂いた御方には商法のリボン、又は雜誌で御かへし申します又右の物品でも交際をも致しますよ(大阪東區空堀通り一丁目七三　田中馨子)

繪葉書を好む

○誌友の諸孃樣、不足な私ながら、名所の繪葉書で御交際して頂戴ね(岡山縣邑久郡朝日村大字東片岡字高野谷光本古美野)。美しい繪端書お持ちの方はどうぞ下名へお送り下さい箱根名所エハガキで必ずお禮を致します(相模湯本須雲川小學校内福島白百合子)○御地の名所繪はがきお惠み下さい御禮は當地の名所にて(兵庫縣淡路高等女學校寄宿舍　濟水波留子)○今回妾等十二名の者にてエハガキ交換會と云ふのを造りましたで皆樣方の御持らの繪ハガキに細かに說明を加へて送つて下さい五枚の方にムラサキ一部宛つ進呈いたします(岐阜縣加茂郡黑川村繪ハガキ交換會内　栖すゑ子)○名所、紀念、繪葉書又自筆繪葉書の交換して頂戴よそのお禮には當地にある本居宣長翁の肖ざう及び本居翁を祭りある山室山神社又伊勢神宮等の繪葉書を(三重縣伊勢國松坂町新座町　村田吉太郎方英子)○各地の繪はがき交換を願ひます全部を願ひますさずれば東京名所を送りなつた數丈は必ず送り致します他の人と異つてうそはつきませんあなたから請求次第送りますが取放をなさいます(赤坂檜町六　清岡龍子)○妾は繪葉書寫眞は大好きなのです妾と同じ趣味の姉上樣御交りを願ます、そしてね男の御方にも淸き美しき御交換なら御願致します(京都市東中筋通り魚棚上ル今井内川田富美代)○誌友の諸姉樣の御許に紀念スタンプ付繪葉書及名所繪葉書がありましたら御交換を願ひます返禮には神戶名所葉書でいたします(神戶市御幸通四丁目九三　難波月の女)○誌友の皆樣繪葉書の交換を賴みます(岡山縣兒島郡興除村下字中疇　森脇才吉方　森脇久野)○諸姉上樣方よ私は女子文壇を愛讀する者ですが有る事情の爲め今はなつかしき故鄕を隔てたる韓國にて誠に淋しく暮して居る者ですが繪はがきの御交換も願ひます妾は韓人の服を着たのをもつて居ります(韓國釜山寳水町二丁目六六　岩崎みな子方　和田ゆき子)

個人消息

○四月號に短評をお出し遊ばしたＨＴ樣に申上升。皆樣も御承知の通り女の着物着て人をだます男子の變名と仰しやいましたけれど私女で御座升。慥に女子で御在升。私そんな卑劣な事は致しませぬ。十日の誌友會の日夜雨先生が貴女の事男だと書いた人がありましたね。又出して讀んで見たけれど何にもそんな所はないと仰しやつて下さいました時、知つて下さる方は知つてて下さるのだ自分さへやましく成ければとさう思つて別に御斷も出しませんでしたが、あの所を拜見すると矢張嫌な氣が致し升から一言申上升。私人をだましもなんにも致しません正直な女で御座升からさう思召して下さいまし(つゆ草)○常陸の鈴木花香樣、お作の樣子で何うも私の町の近所……の町が在の如うに思はれます。何町ですか誌上でお知らせ下さいまし、又不束者ですがお手紙下されば猶嬉しう御ざいます(常陸下館田郡　木村那賀子)○內藤千代子樣ようこそ本誌の投稿家にお成り遊ばしたね私うれしくてなりません定めし皆樣も御同感でせうね千代子樣私ほんとに御交際をお願ひするのもはづかしい程不束者ですがお見捨なくお交りを、お願ひ致します女學世界も本誌も四十一年から愛讀者となつて居りますの、其間にどれだけ慰められたか分りません御芳名は承つて居りましたが千代子樣などがとても私のやうなものとは御交際下さるまいと思つてひかへて居りましたが此度はどうしてもお願ひせずにはおられませんでしたの、失禮ですがおひまにお玉章下さいな。(兵庫縣津名郡室津郵便局內　千代香)○あの故鄕と奇拔の小說を送り下さいました御方一寸御知らせ頂戴妾つひ御住所を失念致したものですから至急御知らせ下さいませ。(東京深川東森元町一　鈴木美紀子)○諸姉樣御無事ですか牛込の平塚白百合樣あなたの御文を拜見致して人知れず御慕ひ申して居ります どうぞ御みちびき下さい(愛媛縣川ノ江町　河知あぢさい子)

紹介

注意◎◎ ▲紹介欄に關する問合せは往復ハガキに限ります ▲應ずる方、求める方の申込は普通のハガキにてよろし ▲住所姓名等明言して下さい ▲掲載も問合せも凡て無手數料です ▲女中に行きたき人、職業を探す人、又女中を求める人、女子の書生を置きたき人などには便宜本欄にお出しなさい（係り）

應ずる方

一　越後　白梅女
年齢　十九歳
略歴　病氣の爲め高等小學三年にて中止、其後ち裁縫を習ふ
希望　苦學の爲め上京したし、名ある先生若くは良家に置て頂きたし、但し餘り雜踏せざる場所を好む、國語又は英語を學びたし

二　長崎　あやめ
年齢　十九歳
略歴　高等女學校二年修業、後小學校教職一ケ年、現在は家に在り
希望　華族樣のお邸へ行儀見習の爲め小間使として雇はれたし夜間二時間勉學の時間を與へられたし

三　福岡縣　白露
年齢　十八歳
略歴　高等女學校二年修業、其後當地郵便局に奉職す
希望　小人數の良家に行儀見習の小間使として月々少々の小遣頂きたし、夜三時間勉學の自由を許されたし思召ある家には本人參上いたします

四　宇都宮　たみ代
年齢　十九歳
略歴　高等女學校一年修業
希望　自活し得る職業を求む

五　中國　青葉女
年齢　十九歳
學歴　高等小學及び裁縫專修學校卒業
希望　女醫の内に雇はれたし、苦學したし御教導下さらば本人悦んで參上す

六　山口　二知
年齢　十八歳
學歴　高等女學校二年卒業
希望　小人數の家に小間使として雇はれたし、夜間三時間だけ獨學の自由を許されたし、思召のある家へ本人參上

七　德島　白顏女　黑目女
年齢　二人とも十八歳
學歴　小學卒業、目下裁縫通學
希望　白顏の方はハイカラ好き、黑目女の方はバンカラ好き、共に小間使になりたし

八　淡路　一少女
年齢　十八歳
學歴　高等小學卒業、女學校技藝專修科卒業
希望　東京の女流音樂家に雇はれたし、小間使ひとして、但し二三人位の家族にて暇に音樂を教へて下さる家

求むる方

一　日本橋　熊井商店奥
年齢　十五六歳
仕事　小兒好きの者を求む、雜用追廻しとして入用
當方　家族三名（内幼兒一名）外に下女一名店員數名

雜報

愛國婦人會總會

五月九日午前十時半より日比谷公園に於て、愛國婦人會總會が開かれた。公園は早夏の景色であつた、時刻までに陸續として參集し來る婦人、さしもに廣き公園內も到る處婦人の姿に埋まつた、斯くて理事濱尾夫人は會長に代つて開會の辭を述べ、次で會長岡部夫人は皇后陛下の令旨を捧讀し、副會長阿部夫人は此が奉答文を朗讀し、三輪田理事は會の報告を爲し、斯くて當日の儀式は終つた。參集者は配附されたる紀念日と、遊覽割引切符とを持つて思ひ〳〵に散會した。當日は英國皇帝陛下、崩御の爲め皇后陛下の行啓、東宮妃殿下の臺臨、總裁閑院宮妃殿下の御臨場は御見合せとなつた。

翌十日には九段偕行社樓上に於て、愛國婦人會の茶話會が催うされた。

不思議なる婦人

普通の人の見えない場所を見得ると云ふ不思議なる能力を持つた婦人が現れた、名は清原千鶴子、九州熊本の人で、當年二十五歲、感情は鋭い方、千里眼といふ樣な事を言出した始は此婦人の兄の猛雄といふ人が催眠術をやるので或時千鶴子も掛けて貰つたすると非常に暗示に感じ易い、感覺脫出といつて催眠中針で掌を突いて術者が「血は出ない」といへは少しも出血せぬ「血が出る」といへば直ぐ出て來る。丁度日露戰爭最中例の常陸丸遭難の噂のあつた時分で試に第六師團の兵士の安否をきくと兵士は一度長崎を出發したが途中故障が起つて引返したといつた其後二三日して公報が出たら果して其言に違はなかつた斯う云ふ事が動機になつて四十一年の七月、初めて淸原氏は妹に勸めて醒覺の狀態の時深呼吸をやつて、無我の狀態に入れば常人の眼に見えぬ物まで見えて來るといつた、婦人は之を信じて每日一時間宛熱心に深呼吸をやつた、十日程すると果して千里眼の精神狀態の第一現象は現はれた。夫は或時偶然庭の梅樹を眺めてゐる中、二分程の蟲の居るを發見したので家人にいふと他の人がいくら見ても見えない、併し婦人はどうしても居るといつて肯かないので、いはれた場所へ行つて、樹の皮を剝て見ると、果して蟲が居た。其後又婦人は海に泳ぎに行つておて、金の指環を海中に落した、皆で探したが分らない、其中に汐が干た、干潟の上で石に腰を掛けて深呼吸をして目を明くと、十間程彼方にあり〳〵と其指環が見えた、傍へ寄つて見ると果して半分砂の中に埋れた上に、貝殼が冠さつた、指環を發見した、婦人には見ようとする當の品物は見えるが、砂とか貝殼とか外の餘計な者は見えない、視覺ではない飽迄精神能力の働たる事を證する、第二の現象である。其後淸原氏は姊妹の能力に興味を持ち、いろいろな實驗を行つた、第一に文字を書いた紙を折つて、厚い狀袋に封じて讀せる實驗をやつて略成功した。

右のことを人傳に聞いて、文學博士福來友吉氏は豫て人間の心理現象を研究中であつたから試に通信の方法で、右の婦人の千里眼を實驗してみた、十中八九は適中するので、遂に博士は自ら熊本に出張して、千鶴子に面した。京都からも今村醫學博士が行き合せ、兩氏は協力して實驗した、何分對手が婦人でもあり、博士達が實驗するといふので、少おくれ氣味があつて第一日は餘り好結果を得なかつたが、第二日には鐵瓶の中に名刺を入れて讀ませたが成功した蛇紋石の捲莨入に名刺を入れたのは七分四十七秒で言ひ當てた。第三日目にもいろ〳〵試してみたが大槪言當てた、斯くて十一日から十五日まで四日間實驗の結果、此婦人は普通人の五官以外則ち第六官の直觀作用(古人の所謂心眼)で物を視得るといふことが先づ證明された。

福來博士は東京へ歸つてから、右の大要を大學で演說した、千鶴子は其家族の勸めもあつて遠からず東京に出で、學術界の爲に進んで研究の資料に當ると云ふ噂である。

文界消息

△脚本作家佐野天聲氏は、本誌本欄の日記にもある如く、新脚本を創作の爲め、遠州地方へ移つて潛心執筆中。

△前田夕暮氏は前月初旬結婚して、郊外西大久保に新しい家庭を持つた。

△北原白秋氏は三崎海岸に旅行中。

△與謝野寬氏は前月三日山岳會大會に臨んで、

我邦古代文學と山岳と云ふ題で一場の講演をした。

△新社會劇『牧師の家』は東京座を打上げて後大阪朝日座で興行した。

△白馬會展覽會は前月より上野公園に開いてゐる。

△烏合會繪畫展覽會も前月例の通り常盤木倶樂部で開催した。

△二葉亭四迷氏の追悼會は前月十日上野公園精養軒に開かれた、知名の文士數十名集つて、故人の追懷談に耽つた。

△長谷川天溪氏はいよ〳〵本月下旬歐洲漫遊の途に上る筈。

西洋の婦人

○大きな瘤　女優 Viole Loraine にうるさく附文をする奴があるので、或日樂屋の出口へ來いと返事をした。其男が來て待つてゐると、Viole は boxer の手袋をはめて出て來て、いきなり男をなぐつて、大きな瘤をこしらへた。

○女の腰　Parat が妻の腰に鎖鑰を卸したる件に就いて、Cabanès が歷史上の話をした。一八九二年にマドリットで、一八九九年に巴里で同じ事件があつた、どちらも妻が甘諾しないのに鎖鑰を卸した廉で罰せられた、今のは脅迫ではない、かういふ帶には Edoz one といふ石があるさうだ。

○除名　伯林大學で丸で講義を開かない學生二百六十三人を除名した、内女學生十四人。

○猫の形　米國に盜賊物乞ひのトラストのあるのが發見された、仲間のものは人家の門に符牒を附けて置く。

九に一　盜みに這入る價値がある。

螺線　入るべからず（警察官の家等）

鷄の形　電鈴がある。

三角に手が二本　銃がある。

猫の形　此家は女ばかりだ。

二重稻妻形　敏捷な犬がゐる。

瓜の苗

○年々聞く苗賣の聲だけれど、實に聞くたびに心が輕くなるやうに思ふ、きうりのなへ、なすびのなへと長く聲を曳いて苺を賣つてゆく青物の苗賣、之も都會の景物の一つであらう。

○日英博覽會紀念繪ハガキは三枚一組で遞信省から賣出された、意匠も印刷も凝つたものだいつもほど賣行が好くなかつたと云ふが、多分繪葉書熱のさめたからであらう。

○此頃市中に多くなつたのは和洋草花屋である、剪花も賣れば、根のあるのも賣る、未だ春の寒い頃から、溫室で育てた金蓮花や、シネラリヤが其店に美しく並べられてある、六月は雨の爲に花は少くなるけれど、七月からは又日本の草花の全盛時代になる、都會の人が花を愛する趣味は年々に博くなつてゆくやうである。

○金魚屋の金魚桶の上に龜をつりさげてあるのはかあいさうだ、つりさげずとも能く見えるではないか。

○釣慂はあを〳〵として、夏らしい感じのするものだが、あの色で塗つた硝子の球が氣に入らぬ。

○日英博覽會が開かれて、洋行する人が多い併し多いと云つても、まだ〳〵僅かの人數に過ぎない、殊に婦人の渡歐者は稀だ、早く日本の富が增加して、女でもどし〳〵洋行出來るやうにしたいものである。

彗星

七十五年目に地球に接近し來るといふハリー彗星の噂は、五月の新聞紙を賑はした、天文學上の觀測に據ると五月十九日午前十一時二十二分から、ハリー彗星は太陽面を通過し、同午後零時二十二分に終り、十九日より二十日に涉りて地球は、ハリー彗星の尾に包まれるといふことであつた、此驚異すべき宇宙の一大事實も、若し天文學者の報告が無かつたなら、吾等は何の心も附かずに過したであらうと思ふまでに、天象も地象も靜穩であつた。東京に於ては十九日午前九時頃より一天晴れ渡り、彗星の太陽面通過の時刻にも、隈なく蒼空を仰ぐことが出來た、併し人間の肉眼には何の影も認めなかつた夕方よりは曇つて了つた、翌夜も月朧に、冷氣襲ふが如き夜であつた、十九日夜半彗星は其姿を現はしたけれど、觀測に從ふ人々の外は之を見るの機會を失つた、更に今後四五日の中に於て西天の一方に、逃たる彗星を見ることが出來るかも知れぬ、或は雲多き東京地方の初夏のならひとて、此まゝ見えざる彗星となつて了うかも知れぬ。（五月二十一日）

編輯通信

○口繪の改良　毎號本誌の口繪に挿入してきました西洋の原色版は、此度愛讀者の請もあり、また趣味の多樣なるを計る爲に、石版色刷とし揮毫は水彩畫家として聲名ある大下藤次郎氏に依囑することにいたしました。本號の荒川の上流が其第一着です。

○賞品の發送　前月は增刊等の爲め記者多忙の際、例月上旬に發送する當品が下旬に發送することとなりました、問合せの方には一々お返事は差上ませんでしたけれど、既に發送濟になりましたから御入手のことと思ひます、一寸遲延のお斷りを申て置きます。

○地方の婦人　本誌の第二增刊「地方の婦人」の原稿締切は本月二十五日です、詳細は別項廣告欄にもあり「都會の婦人」にも揭げて置きましたから、締切を忘れないやうに盛んに面白い原稿を投寄して下さい。

○餘興の課題　前號の紙上に於て餘興の課題を發表する筈でしたが、紙面の都合で出ませんでした、已むを得ず一回だけ休みます、次の題は左の通りです。

婦人旅行談　（締切六月十五日）

△女は男のやうに旅行する機會は少いかも知れません、併し假令一日の旅行でも旅は旅ですから、何か材料があるでせう△旅行談ですから餘り紀行文めいたものや、案內記めいたものより、旅行の間に得た觀察寧ろ斷片的の興味あるお話の方がよろしいのです△例へば汽車に乘つた時のこととか、宿屋に泊つた時のこととか、然う云ふものが興味あらうと思ひます、△勿論山岳や河海の美しい風景又は山村漁村の珍しい風俗などを語るのも差支ありません△成るべく御自分の經驗したお話を書いて下さい△原稿は十六字詰十行乃至二十行まで

新刊

○西洋料理教科書　櫻井ちか著

西洋料理の書物は隨分澤山あるが、本書は其中でも最も新しく出ただけに進步してゐる、著者は西洋料理を多年研究し、實地の上に智識を有してゐる、だから本書は秩序的に實用的に編著してあつて、教科の名に背かない、西洋料理書のオーソリチーとも云ふべきものであらう、英文と對照して見ることも出來。西洋料理に附隨した家事日用の心得も添えてある、製本も頗る立派である（定價金一圓三十五錢、神田今川小路紫明社出版）

○星湖集　中村星湖著

中村星湖氏は近來頓に聲名を擧げた作家である此篇に收めてある「一切のこと」は氏が出世作とも謂ふべく、文壇の人々は口を揃へて、其佳作であることを稱した、其外本集には嘗て本誌に揭げた「敵地」を始め凡て十四篇の短篇小說が收めてある、表紙體裁甚だ氣が利いてゐる（定價六十五錢、京橋橋畔東雲堂出版）

○牧師の家　中村春雨著

中村春雨氏が歸朝以來の傑作として、既に上場もされた脚本「牧師の家」は畫入の美しい書物となつて出版された、此脚本の女主人公弼子の性格は所謂近代女性のタイプが表はれてゐるから新思想を持つた女は是非一讀すべきものであらう、靜に考へて味ふべき脚本で、此一冊からいろいろの新しい思想をたぐり出すことが出來る（定價一圓、京橋、新橋堂、神田、春秋社出版）

○夢二畫集（夏の卷）　竹久夢二著

春の卷は多大の歡迎を受けた、次であらはれた夏の卷も亦同じく歡迎せられてゐる、夢二の畫と云ふ言葉が若い婦人の間に流行してゐる如く夢二の畫は博くに愛されてゐる、夏の卷は春の卷と異つて新しい趣味が多い（定價金五十錢、麴町二丁目洛陽堂出版）

○兒童を謳へる文學　高島平三郎著

兒童心理學者として有名なる高島平三郎氏が、多年研究の資料に蒐めて置いたといふ兒童文學の著述である、和歌に現れたる兒童、俳句に――川柳に――俗謠に――俚諺に――隨筆に――の六に大別してある、元來日本の文學には可憐な兒童を題材としてある作は比較的少いが、今編者が此れだけ蒐集した勞は多謝せねばならぬ且本書は例の竹久夢二氏が插畫を描いて居るから、無邪氣な文字と合せ見て好個の家庭向の著書であらう（定價金一圓、同上出版）

○花袋集　田山花袋著

有名なる「蒲團」は本集に在り、今や第八版成る（定價七十錢、麴町飯田町易風社出版）

○耽溺　岩野泡鳴著

岩野泡鳴氏の小說集は此書が第一である、詩より散文に移つた氏の技倆は本書に於て窺ふことが出來る、氏の小說も自然派の方面に屬するもので、描寫は新しい、氏は能く論ずる人だが、創作も亦其議論以上の興味を以て讀まれるのである（定價金九十錢、同上出版）

○追懷　鮫島大浪著

鮫島大浪氏の名は博く文壇に知れてゐないけれど、小說を書くには好い筆を持つてゐる、文章は軟かい、描寫に徹底しない憾はあるけれど、少しの嫌味もない、內容と共に醇乎たるものである、表紙には此小說の女主人公の寫眞版が貼附してある（定價金九十錢、神田駿河臺文明堂出版）

○二宮尊德（脚本）　佐野天聲著

二宮尊德翁の一代を脚本に作つたものである、劇に上すと否とは兎に角、翁の一代を早分りさせるには好い書物だ、之を脚本にするについての作者の苦心は察するに足る（定價金三十錢、京橋尾張町警醒社出版）

○故人春夏秋冬　大須賀乙字編

俳句集である、元祿から天明頃までの俳句の中で、後世に傳ふるに足るべき名句ばかりを拔萃したもので、一々部門分をしてあるから、句を涉獵するのには甚だ都合が好い、先づ春の巻一冊が出來た、續いて夏秋冬と一冊づゝ出る筈である、印刷鮮明、携帶にも便（定價金二十五錢京橋區築地俳書堂出版）

○婦人の新修養　三津木春影譯

米國の閨秀作家ウィルコックス女史の原著である、青年小說家として名ある三津木春影氏の優雅なる筆致に譯し出されたもので、內容も普通の修養談的のものとは大いに相違してゐる、一つ二つ題目を擧げてみると心に及ぼす色彩の影響「生き甲斐ある生」「熱心なる人の受くる天惠「樂天主義の眞物と僞物」など自ら類型を脫してゐる、別に原著者の自傳が附いてある（定價金五十錢、京橋區實業の日本社出版）

○才媛と逸話　梶山彬著

日本と西洋との女子の逸話を澤山に集めたもので、一寸したお話の材料とか、例に引くとか云ふ場合には重寶である、これだけ集めた勞は容易でなからうと思はれる、（定價金四拾錢、日本橋區下槇町明文堂出版）

雜誌界

△五月にも創刊の雜誌が出た、一つは豫て評判のあつた『三田文學』である、體裁は『スバル』に似てゐる、內容も酷似してゐる、初號には鷗外氏の『棧橋』木下氏の脚本、其外詩歌散文も多く載つてゐるが、吾人が豫期したほど興味が無かつた、もすこし好い作物が欲しい

△今一つ創刊の雜誌は、文學とは深い關係もないが富山房から出た『學生』である、男女一般の學生向といふので、初號は博士學士の顏揃ひ、學術に關ずる記事の多いのが一つの特色であらう、編輯は西村醉夢氏。

△大下藤次郎氏が獨力經營の下に發行されてゐる水彩畫講習雜誌『みづゑ』は通巻六十二號を出した、巻頭の恋の下道の作は好きな畫だ、製版も好く出來てゐる。

△『婦人の友』は主筆羽仁氏夫妻、鎌倉より再び東京に歸つて例の通り健實な雜誌を編輯してゐる。

△一高短歌會の詠草を載せる目的で『橄欖』第一集が出た、歌の數も多く好い作もある。

△『新詩文』といふ雜誌が革新號と銘打つて出た、短歌と長詩が多い。

△『志賀の湖』といふ地方文學雜誌の初號が近江八幡から出た。

△『新文藝』五月號は發賣禁止。

△『創作』三號からは紙數を增加した。

△『はがき文學』は二十日に增刊『偉人號』を發行した。

△『新小說』『趣味』『スバル』『秀才文壇』『無名通信』等（以上寄贈）

○書簡文練習講義錄　書簡文の上手下手は其人の品性にも關係があるし、又一方に書簡文の出來る出來ないは日常の生活上、多大の利害が伴ふものである、日本書翰學會が出來て、滿十ケ月で書翰文を能く書けるやうに通信教授を初めたのは誠に好い（本鄕區根津宮永町日本書翰學會）

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小說と詩と短文には振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は同字詰三十行以內、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以內、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、野紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大さにて薄き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る▲定期號の投稿は毎月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

(甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す)

一特別賞金五圓

一甲種(短篇小說、散文)
天賞金參圓。 地賞金壹圓五拾錢。 人賞金七拾錢。

一乙種(家庭日記、論文、書簡文、詩)
天賞金貳圓。 地賞金七拾錢。 人賞金四拾錢。

一丙種(和歌、俳句、短文、餘興、圖畫)
天賞金壹圓。 地賞金五拾錢。 人賞金貳拾錢。

◎各種とも金壹圓以上の價格の當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す。
壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◎賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、(但他人の作物を剽竊したるものは無効とす)

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

○定期發行分
▲每月一回(一日定期發行)

一冊(一回分) 定價金拾五錢……郵稅一錢五厘 計金拾六錢五厘
三冊(三月分) 前金四拾三錢五厘……同四錢五厘 計金四拾八錢
六冊(半年分) 前金八拾四錢……同九錢 計金九拾三錢
十二冊(壹年分) 前金壹圓五拾六錢……同拾八錢 計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分
▲年四回(二月、五月、八月、十一月臨時增刊)

一冊(一回分) 定價金貳拾錢……郵稅一錢五厘 計金貳拾一錢五厘
二冊(半年分) 前金三拾八錢……同三錢 計金四拾壹錢
四冊(壹年分) 前金七拾二錢……同六錢 計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部―十六回

四冊(三月分) 定價金六拾三錢五厘……郵稅六錢 計金六拾九錢五厘
八冊(半年分) 前金壹圓二拾二錢……同拾貳錢 計金壹圓三拾四錢
十六冊(壹年分) 前金貳圓二拾八錢……同二拾四錢 計金貳圓五拾二錢

▲申込注意(振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增(收入印紙謝絕)、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……	部數多く有効に
上等	一頁廿五圓	半頁……	比し無類の割安
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢
〆切	每號十五日前		

特約取扱○日本電報通信社○明治廣告社○博報堂○弘報堂○東京勉强社

明治四十三年五月廿五日印刷
明治四十三年六月一日發行

定價金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區宗十郎町十五番地 松本國次郎
印刷所 東京市京橋區宗十郎町十五番地 國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話(本局六〇七番) 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、文明堂

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可